

大坂城跡発掘調査報告 I

— 大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

本 文 編

2 0 0 2

財団法人 大阪府文化財センター



1. 調査地と大阪城（2C調査区）



2. 調査地周辺航空写真



3. 江戸時代 礎石建物（5A調査区）



4. 江戸時代 土人形



5. 豊臣後期 屋敷2 (1A調査区)



6. 大坂夏の陣の焼土層と三の丸の盛土



7. 豊臣前期 屋敷6・7 (3A調査区)



8. 豊臣前期 屋敷1 (1A調査区)



9. 豊臣 扇に月丸紋軒丸瓦



10. 豊臣 家紋系瓦



11. 豊臣 陶磁器・将棋駒・慶長丁銀・小柄他



12. 豊臣 漆器 (左上: 現在の漆器)



13. 古代 新羅綠釉蓋 (2B調査区)



14. 古代 蔓草鳳麟鏡 (5B調査区 墓1)



15. 古代 海獣葡萄鏡 (6A調査区 墓2)



16. 古代 墓2 (6A調査区)

序 文

大阪は、明治の始めまでは“大坂”と表記される事が多かった。“阪”の字が広く使われるようになったのは、明治時代になってからである。江戸後期の歌舞伎狂言作家である浜松歌国の「摂陽奇観」の中に、土にかえる“坂”は縁起が悪いから、盛んを意味するごとと偏の“阪”を使用する旨の記載があるが、一般には普及しなかった。江戸時代の大坂は天下の台所として大いに繁栄しており、そうした縁起をかつぐ必要はなかったのであろう。

ところが、明治維新の際の新政府の政策が京阪富豪からの三百万両御用金調達、銀目廃止、蔵屋敷撤廃など大坂に不利なものが多く、大坂城の焼失も相まって大坂の経済があつという間に疲弊してしまった。そこで、縁起をかつがざるを得なくなったために、“阪”の使用が再意識されたのであろう。大阪府の設置が慶応4(1868)年5月であるが、同年8月に太政官から下付された大阪府印に“阪”の字が使用されており、公的には早い段階から“大阪”に変わっていたらしい。ただ、明治10年頃までは公文書にも両者が混用されており、徐々に“大阪”という表記が普及していったようである。本書は、豊臣・徳川大坂城を主な調査対象としているために、あえて“坂”を使用している。

“大坂”という地名が文献にはじめて登場するのは、本願寺8世蓮如の明応6(1497)年11月25日付け門徒あての書状である。この書状には、前年秋に“大坂”に一字の坊舎を営んだ事を記しているが、石山御坊とか大坂御坊と呼ばれるこの坊舎の建立が今日の大坂発展の礎となった。その後、天文元(1532)年～天正8(1580)年までの石山本願寺時代を経て、天下人となった豊臣秀吉の天正11(1583)年からの大坂城築城で、天下の中心としての大坂の地位が確立する。

大坂の地は、西に瀬戸内、東に淀川・大和川がひかえ、水運の拠点として非常に優れた立地条件を備えている。そのため、元和元(1615)年の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡し、政治的な実権を喪失した徳川時代においても、経済的には中心的地位を保っていた。8世紀末の延暦年間に難波宮が廃されて以来衰退していた大坂であるが、蓮如の坊舎建立をきっかけに再び繁栄の道をたどる事になる。

このように大阪の歴史を考える上で、石山本願寺と豊臣大坂城は重要な位置を占めているが、その実態となると不明な点だらけである。その原因は、それらの遺構が元和6(1620)年から寛永6(1629)年にかけて築城された徳川大坂城下に完全に埋没しており、その痕跡すら止めていないためである。近年、大阪城周辺で実施されている発掘調査により、ようやく地中深く残されたそれらの遺構が検出され始め、徐々にその様相が明らかになりつつあるというのが現状である。

今回の発掘調査は、大坂城三の丸跡地での府庁舎建替えによる庁舎周辺整備事業に伴うものであるが、豊臣大坂城の実態に触れる恰好の機会となった。三の丸築造前後の多数の遺構・遺物が検出されたが、中でも家紋瓦の出土から常陸の大名佐竹氏の屋敷地を特定できた事が大きな成果であった。また、古代の建物群や墓なども検出され、優れた立地条件を有するこの地域の豊かな歴史が明らかとなった。

これも、ひとえに大阪府教育委員会、大阪府総務部庁舎周辺整備室を始めとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成14年6月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

胎土・釉薬・漆器・金属分析：井上 巖（第四紀地質研究所株式会社）

金属分析：大澤正己（たたら研究会）

8、調査・整理の過程で多くの方々よりご教示をいただいた。記して謝意を表します（敬称略、いずれも所属は当時）。

既往の調査：佐久間貴士（大阪府教育委員会）、大手前女子学園、松尾信裕・鈴木秀典・積山洋・森 毅・南 秀雄・佐藤 隆をはじめとする勤大阪市文化財協会の方々

墨書・金箔瓦・家紋瓦および大坂城全般の文献史研究：渡辺 武・中村博司・北川 央・宮本裕次・跡部 信（大阪城天守閣）、内田九州男（愛媛大学）

木簡：大橋信弥（滋賀県立安土城考古博物館）、松下 浩（安土城郭調査研究所）

土器・陶磁器類：吉岡康暢・小野正敏・高橋照彦（国立歴史民俗博物館）、森村健一（堺市教育委員会）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、藤澤良祐（瀬戸市教育委員会）、前川 要（富山大学）、近藤義行（城陽市教育委員会）、江浦 洋（大阪府文化財調査研究センター）

漆器：四柳嘉章（石川県立工業高等学校）

平安時代以降の瓦：市本芳三（大阪府文化財調査研究センター）

石彫丁：彌宜田佳男（大阪府教育委員会）、若林邦彦（大阪府文化財調査研究センター）

韓式系土器：田中清美（大阪市文化財協会）

製塩土器と弥生土器：三好孝一（大阪府文化財調査研究センター）

鍛冶・製鉄関係：潮見 浩（広島大学）、河瀬正利・安間拓巳（広島大学）、村上恭通（愛媛大学）、穴澤義功（たたら研究会）

石塔：藤沢一夫、水野正好（奈良大学）、仁木 宏（大阪市立大学）

刻印石など：藤井重夫（古城友の会）

地震痕跡：寒川 旭（通産省）

硯・碁石・砥石の石材鑑定：佐藤隆春（大坂府立三国ヶ丘高等学校）

玩具と土人形：奥村寛純（伏俣舎郷土玩具資料館）

佐竹氏関係資料：小松正夫・日野 久（秋田市教育委員会）、阿久津 久（茨城県事業団）、高根信和（茨城県歴史館）、天徳寺、浅野晴樹（埼玉県教育委員会）

鏡と墓：勝部明生（五條市博物館）、久保智康（京都国立博物館）、黒崎 直・杉山 洋・巽淳一郎（奈良国立文化財研究所）、柴原永遠男（大阪市立大学）、藤原 学（吹田市立博物館）、中尾芳治（塚原山学院大学）、藤澤一夫、藤澤典彦（元興寺文化財研究所）、前園実知雄（奈良芸術短期大学）、今津節生・松田真一（奈良県立橿原考古学研究所）、前田洋子（大阪市立博物館）、水野正好（奈良大学）、森 浩一・松藤和人（同志社大学）、森田 稔（文化庁）、成瀬正和（正倉院事務所）

また、成瀬正和、森村健一、藤澤良祐、金子健一、寒川 旭の各氏にはご多忙の中、第4章 考察に玉稿をいただいた。重ねて謝意を表します。

なお鍛冶・製鉄関連遺物、金属製品他の実測とレイアウトは新海正博、古代の土師器・須恵器のレイアウトは後藤信義、古代瓦の実測・レイアウトは島崎久恵氏の手を煩わせた。記して謝意を申し上げます。

9、発掘調査参加者

三島良治・小松英雄・谷口博紀・堀田 智・堤 昌子・大喜多真季・井口友子・田中靖子・高木香織・新名 強・堺 弓子・水永貴丸・田村正智・斎藤梨佳・佐々木和重・東 徹志・藤原智勝・渡辺富彦・近澤 元・利川恭子・斉藤陽子・浅川永子・林田道子・佐藤陽子・川崎直子・江口慶子・吉見美貴子・大畑裕代・永野純子・内山暁子・宮川恵津子・吉武砂織・高橋あゆみ・石垣有紀・岡垣内美保・中尾昌美・福島由美・福添博美・中尾昌美・杉山真弓・田中美貴・山川かおり・吉田綾子・鶴山まり・久木真美・辻井こずえ・新井一江・浅井良子・奥村めぐみ・杵川真知・小寺 律・滝川重徳・清水妙香・河北洋子・山西徳美・林 千花・古川美砂・港屋海人・永井 宏・岡村寛子・松本みゆき・辻 信広・滝下由紀子・宮下祐子・清喜裕二・大川千賀・小川早月・高松昭江・信田美津・山下芽津子・吉武弘子・紙本淳子・山下優子・鹿島真由美・平田麻希

報告書作成参加者

福岡正春・森川 実・佐藤友美・木下知子・久木真美・木南アツ子・小泉陽子・斉藤梨佳・斉藤陽子・正司真理子・近澤 元・長尾 恵・信田美津・浜田保子・山下芽津子・吉武弘子

- 10、本書の執筆分担については第2章II-2 (P.32) に記したとおりである。編集は平成9年4月1日から平成11年3月31日までを勤柄がおこない、平成10年4月1日から平成13年3月31日までは小林和美がこれを助けた。なお平成11年3月31日で、文章・図表作成等の基礎作業を終了し、平成14年度に印刷製本作業を行った。
- 11、本調査に関わる遺物・写真・カラスライド・実測図等は勅大府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

- 1、本書で用いた北は国土座標第IV座標系の座標北であり、座標の記載は全てm単位である。
- 2、標高は東京湾平均海面 (T. P.) を基準としている。
- 3、土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準拠した。
- 4、本書では、本文中の挿図および写真図版の番号は、全体を通しての通し番号としていない。本文第1章～第3章・第5章までは通し番号を付与し、第4章のみ各論考ごとに「図4-I-1」というように表記している。これは写真図版についても同様である。
- 5、挿図における遺物番号は各時代内で完結する番号を付与している。
- 6、遺物実測図の縮尺は銭貨の2/3を除き、1/4を基本としている。ただ一部の遺物は必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、各スケールに縮尺率を明示しているので、そちらを参照されたい。
- 7、木簡の写真はいずれも赤外写真である。
- 8、土器類の断面については、須臾器を黒塗り、その他は白抜きとした。

目 次

巻頭図版

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. 調査地と大阪城 | 2. 調査地周辺航空写真 |
| 3. 江戸時代 礎石建物 (5 A調査区) | 4. 江戸時代 土人形 |
| 5. 豊臣後期 屋敷2 (1 A調査区) | 6. 大坂夏の陣の焼土層と三の丸の盛土 |
| 7. 豊臣前期 屋敷6・7 (3 A調査区) | 8. 豊臣前期 屋敷1 (1 A調査区) |
| 9. 豊臣 扇に月丸紋軒丸瓦 | 10. 豊臣 家紋系瓦 |
| 11. 豊臣 陶磁器・将棋駒・慶長丁銀・小柄他 | 12. 豊臣 漆器 |
| 13. 古代 新羅緑釉蓋 (2 B調査区) | 14. 古代 蔓草鳳麟鏡 (5 B調査区 墓1) |
| 15. 古代 海獣葡萄鏡 (6 A調査区 墓2) | 16. 古代 墓2 (6 A調査区) |

序 文 例 言 凡 例 目 次

本文編

第1章 位置と環境

- | | |
|-------------------|----|
| I 地理的環境 | 1 |
| II 歴史的環境 | 4 |
| III 大坂城跡の調査 | 10 |

第2章 調査に至る経緯と経過

- | | |
|----------------------------|----|
| I 調査に至る経緯 | 27 |
| II 調査の経過と成果の概要 | 28 |
| 1、調査の方法と経過 | 28 |
| 2、正報告書作成の方針とその仕様について | 29 |

第3章 調査成果

- | | |
|------------------------|----|
| I 考古学的調査 | 33 |
| 1、層序 | 33 |
| (1) 基本層序 | 33 |
| (2) 調査区毎の層序概要 | 34 |
| 2、遺構と遺物 | 45 |
| (1) 徳川氏による大坂城再築後 | 45 |

A-1、5A調査区以外の遺構	51
A-2、5A調査区の遺構	67
B、遺物	75
a、漆器・土器・陶磁器	75
b、焼塩壺	89
c、木製品	94
d、下駄	95
e、金属製品	97
f、羽口	100
g、埴埴類	102
h、土人形・土製品	102
i、銭貨	112
j、石製品	112
k、瓦	113
(2) 大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前	119
A、遺構	121
(3) 三の丸築造以降、大坂夏の陣直前	123
A-1、5A調査区以外の遺構	128
A-2、5A調査区の遺構（三の丸築造以前も含む）	159
B、遺物	170
a、漆器・土器・陶磁器	170
b、木製品	193
c、金属製品	197
d、羽口	199
e、埴埴類	202
f、土人形	202
g、銭貨	207
h、石製品	207
i、瓦	210
(4) 豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前	225
A、5A調査区以外の遺構	231
B、遺物	251
a、漆器・土器・陶磁器	252
b、木製品	273
c、金属製品	279
d、鋳型	283
e、羽口	284
f、埴埴類	289

g、土人形	292
h、銭貨	292
i、石器・石製品・石塔	292
j、瓦	295
(5) 豊臣大坂城築造以前	309
A-1、5 A 調査区以外の遺構	313
A-2、5 A 調査区の遺構	333
B、遺物	335
a、土器類	335
b、土製品	372
c、金属製品	372
d、羽口	374
e、銭貨	379
f、石器・石製品	379
g、瓦	380
(6) 遺物の出土位置と内容	387
A、徳川氏による大坂城再築後の漆器・土器・陶磁器	387
B、三の丸築造以降、大坂夏の陣直前の漆器・土器・陶磁器	394
C、豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前の漆器・土器・陶磁器	406
D、豊臣大坂城築造以前の土器類	415
E、漆器碗	422
F、下駄	446
G、焼塩壺	459
H、木製品	471
I、金属製品	476
J、羽口	487
K、埴塼類	490
L、土人形	491
M、銭貨	504
N、硯	512
O、石器・石製品	514
P、碁石	516
Q、石臼・刻印石・石鉢	517
R、石塔・石仏	518
S、徳川氏による大坂城再築後の瓦	519
T、大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前の瓦	530
U、三の丸築造以降、大坂夏の陣直前の瓦	531
V、豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前の瓦	541
W、豊臣大坂城築造以前の瓦	551

自然科学・考察編

II 自然科学的調査

1	放射性炭素年代測定	(山田 治)	1
2	大坂城跡(その2)出土土器内採集土壌の脂肪分析	(中野寛子・明瀬雅子・長田正宏・中野益男)	3
3	花粉分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	11
	(1) 大阪府庁舎建設に伴う自然科学調査1		11
	(2) 大阪府庁舎建設に伴う自然科学調査2		22
	(3) 大坂城跡から検出された豊臣期の縄溝状遺構の性格について		61
	(4) 大坂城跡の古植生と畑作の検討		65
4	胎土分析	(井上 巖)	71
5	釉薬の化学分析	(井上)	112
6	漆器の化学分析および薄片作成	(井上)	125
7	金属分析	(井上)	146
8	大坂城跡出土鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査	(大澤正己・鈴木瑞穂)	148
9	大坂城跡出土の植物遺体	(山口誠治)	286
10	大坂城跡出土の動物遺体	(山口)	290

第4章 考察

I	古代の鉄器生産遺構	(新海正博)	307
II	3A・5B調査区出土の子持ち勾玉について	(新海)	319
III	遺跡立地からみた古代の上町台地—台地北半部を中心として—	(小林和美)	327
IV	聖武朝難波京の構造と平安時代前期の上町台地	(鋤柄俊夫)	335
V	三の丸築造以前の基準資料	(鋤柄)	349
VI	大坂城跡6A調査区検出の地震痕跡について	(鋤柄・寒川 旭)	369
VII	大坂城跡府庁地点出土の瀬戸・美濃産陶磁器について	(藤澤良祐・金子健一)	379
VIII	福建省漳州窯系陶磁器(スフトウ・ウエア)について	(森村健一)	389
IX	大坂城跡出土の漆器について	(亀井 聡)	405
X	大坂城跡の電跡について	(合田幸美)	417
XI	大坂城三の丸地点出土の鏡と銭の金属材質調査	(成瀬正和)	435
XII	倉密局関連遺構について	(合田)	441
XIII	大阪陸軍幼年学校について	(小林)	449
XIV	旧大手前之町における明治～昭和時代の土地利用変遷	(小林)	455

第5章	総括	(鋤柄)	467
-----	----	------	-----

目 次

本文編図目次

図1	大阪城の位置	1	図66	木製品2	94
図2	地形分類図	2	図67	下駄	95
図3	等高線図	3	図68	金属製品1	96
図4	大阪城周辺の遺跡分布図	5	図69	金属製品2	96
図5	既往の調査地点	11	図70	羽口	97
図6	調査区的位置	30	図71	埴輪類	98
図7	トレンチ配置図	31	図72	土人形1	99
図8	基本層序模式図	33	図73	土人形2	100
図9	1 A調査区東西縦断面図	34	図74	銭1	101
図10	調査区南北縦断面図	41・42	図75	銭2	102
図11	遺構配置図(5 A調査区は除く)	45・46	図76	硯	103
図12	6 A調査区 炉1・2平面・断面図	52	図77	石製品	104
図13	6 A調査区 瓦敷き平面・断面図	53	図78	石塔1	104
図14	5 C調査区 石列平面図	54	図79	石塔2	105
図15	2 C調査区 石組1・6 A調査区 石垣1平面図	54	図80	軒丸瓦計測位置図	106
図16	1 A調査区 土坑4平面図	54	図81	巴紋様の数量化によるデンドログラム	106
図17	1 A調査区 土坑16平面図	54	図82	巴紋様属性数値の群別比較	106
図18	3 B調査区 土坑11平面図	56	図83	瓦1	106
図19	3 B調査区 土坑14平面図	56	図84	瓦2	107
図20	1 A調査区 石組1平面・立面図	56	図85	瓦3	108
図21	1 A調査区 石組2平面・立面図	56	図86	瓦4	109
図22	1 A調査区 石組4・5平面図	57	図87	瓦5	110
図23	1 A調査区 石組6平面・立面図	57	図88	瓦6	111
図24	1 A調査区 溝4平面・断面図	58	図89	瓦7	112
図25	3 B調査区 石列1・2・3平面図	59	図90	瓦(包含層)8	113
図26	2 C調査区 井戸12平面・立面図	60	図91	瓦(包含層)9	114
図27	1 A調査区 炉床平面・立面図	60	図92	瓦(包含層)10	115
図28	4 A調査区 溝11断面図	60	図93	瓦(包含層)11	115
図29	4 A調査区 溝39・47断面図	61	図94	瓦(包含層)12	116
図30	4 A調査区 溝49・61断面図	61	図95	遺構配置図	119
図31	4 A調査区 溝68・69断面図	61	図96	3 A調査区 竈22平面図	122
図32	5 C調査区 溝13断面図	62	図97	3 A調査区 竈23(24)平面図	122
図33	5 C調査区 土坑55断面図	62	図98	3 A調査区 竈25平面図	122
図34	6 A調査区 土坑165内石列平面・立面図	63	図99	3 A調査区 竈26平面図	122
図35	2 C調査区 土坑38平面図	63	図100	遺構配置図(5 A調査区を除く)	123・124
図36	遺構配置図(5 A調査区)	67	図101	3 A調査区 井戸2平面・立面図	130
図37	5 A調査区 土坑22・23平面・断面図	70	図102	5 C調査区 井戸2平面図	130
図38	5 A調査区 土坑190平面・断面図	70	図103	1 A調査区 溝14平面・断面図	130
図39	5 A調査区 礎石建物平面図	71	図104	3 A調査区 溝17平面図	131
図40	5 A調査区 建物1平面図	72	図105	1 A調査区 溝15・16断面図	131
図41	5 A調査区 建物2平面図	73	図106	1 A調査区 溝7断面図	132
図42	5 A調査区 炉3平面図	73	図107	3 B調査区 池1平面・立面図	132
図43	5 A調査区 炉5断面図	73	図108	池1断面図	132
図44	5 A調査区 炉4平面・断面図	73	図109	1 A調査区 土坑63平面・断面図	133
図45	5 A調査区 炉8・9平面・断面図	73	図110	1 A調査区 土坑64平面・断面図	133
図46	5 A調査区 胎衣壺1平面・立面図	74	図111	2 C調査区 土坑53断面図	134
図47	5 A調査区 胎衣壺2平面・立面図	74	図112	2 C調査区 土坑65平面・断面図	134
図48	漆器・陶磁器・土器1	77	図113	2 C調査区 羽釜周辺平面図	134
図49	漆器・陶磁器・土器2	78	図114	2 C調査区 土坑67断面図	134
図50	漆器・陶磁器・土器3	79	図115	2 D調査区 土坑27・28平面・断面図	135
図51	漆器・陶磁器・土器4	80	図116	2 D調査区 土坑29平面・断面図	135
図52	漆器・陶磁器・土器5	81	図117	3 A調査区 土坑185平面・断面図	136
図53	漆器・陶磁器・土器6	82	図118	3 A調査区 土坑208平面・断面図	137
図54	漆器・陶磁器・土器7	83	図119	3 B調査区 土坑38平面・断面図	137
図55	漆器・陶磁器・土器8	84	図120	1 A調査区 建物1平面・断面図	138
図56	漆器・陶磁器・土器9	85	図121	1 A調査区 建物2平面・断面図	138
図57	漆器・陶磁器・土器10	86	図122	1 A調査区 建物3平面・断面図	139
図58	漆器・陶磁器・土器(包含層)11	87	図123	1 A調査区 建物4平面・断面図	139
図59	漆器・陶磁器・土器(包含層)12	87	図124	1 A調査区 建物5平面・断面図	140
図60	焼灰壺1	89	図125	1 A調査区 建物6平面・断面図	140
図61	焼灰壺2	90	図126	1 A調査区 建物7平面・断面図	141
図62	焼灰壺3	91	図127	1 A調査区 建物8平面・断面図	141
図63	焼灰壺4	91	図128	1 A調査区 建物9平面・断面図	142
図64	特殊土製品	92	図129	1 A調査区 建物10平面・断面図	142
図65	木製品1	93	図130	1 A調査区 建物11平面・断面図	142

図131	1 A調査区	建物12平面・断面図	142	図203	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 12	184
図132	1 A調査区	建物13平面・断面図	143	図204	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 13	185
図133	1 A調査区	建物14平面・断面図	143	図205	焼塩壺	186
図134	1 A調査区	建物15平面・断面図	143	図206	木製品 1	187
図135	1 A調査区	建物16平面・断面図	143	図207	木製品 2	188
図136	1 A調査区	建物17平面・断面図	144	図208	木製品 3	189
図137	1 A調査区	建物18平面・断面図	144	図209	木製品 4	190
図138	1 A調査区	建物19平面・断面図	143	図210	木製品 5	191
図139	1 A調査区	櫛列 1 平面・断面図	145	図211	木製品 6	192
図140	1 A調査区	櫛列 2 平面図	145	図212	木製品 7	193
図141	1 A調査区	櫛列 3 平面・断面図	145	図213	下駄	194
図142	1 A調査区	櫛列 4 平面・断面図	145	図214	金属製品 1	195
図143	3 B調査区	建物11平面図	146	図215	金属製品 2	196
図144	3 B調査区	建物11埋戻平面図	146	図216	金属製品 3	199
図145	5 B調査区	ビット列平面・断面図	146	図217	羽口・埴塙類	200
図146	1 A調査区	屋敷 2 平面図	147	図218	土人形	200
図147	1 A調査区	屋敷 3 平面図	147	図219	銭 1	201
図148	1 A調査区	土坑288・道路 1・溝52平面・断面図	148	図220	銭 2	202
図149	6 A調査区	ビット133平面・断面図	148	図221	硯・石製品	203
図150	3 B調査区	瓦列 1 平面図	148	図222	石臼 (石鉢) 1	203
図151	6 A調査区	ビット412平面・断面図	149	図223	石臼 2	204
図152	6 A調査区	瓦溜まり 3 平面図	149	図224	石臼 3	205
図153	1 A調査区	石組 7 平面図	149	図225	石塔 (石仏)	206
図154	4 A調査区	建物 1・谷 1 平面図	150	図226	瓦 1	207
図155	2 D調査区	堀 2 平面図	151	図227	瓦 2	208
図156	2 D調査区	堀 2 横断面図	151	図228	瓦 3	209
図157	2 D調査区	堀 1 縦断面図	151	図229	瓦 4	210
図158	2 D調査区	景観復原	152	図230	瓦 5	211
図159	2 D調査区	堀 1・3 C調査区 堀 2 横断面図	153	図231	瓦 6	212
図160	遺構配置図	(5 A調査区)	155	図232	瓦 7	213
図161	5 A調査区	溝21断面図	159	図233	瓦 8	214
図162	5 A調査区	溝45断面図	159	図234	瓦 9	215
図163	5 A調査区	溝110平面図	159	図235	瓦10	216
図164	5 A調査区	瓦組導水管 2 平面図	160	図236	瓦11	217
図165	5 A調査区	土坑94・95平面図	160	図237	瓦 (包含層) 12	218
図166	5 A調査区	土坑154断面図	161	図238	瓦 (包含層) 13	219
図167	5 A調査区	土坑155平面・断面図	161	図239	瓦 (包含層) 14	220
図168	5 A調査区	土坑159断面図	161	図240	瓦 (包含層) 15	221
図169	5 A調査区	土坑209断面図	161	図241	瓦 (包含層) 16	222
図170	5 A調査区	土坑299断面図	161	図242	遺構配置図	225-226
図171	5 A調査区	土坑316断面図	162	図243	2 D調査区 井戸 1 断面図	232
図172	5 A調査区	土坑309平面・断面図	162	図244	2 D調査区 井戸 4 断面図	233
図173	5 A調査区	土坑393断面図	162	図245	3 A調査区 溝37・溝90断面図	234
図174	5 A調査区	土坑324断面図	162	図246	3 A調査区 溝36・溝37・溝90断面図	234
図175	5 A調査区	土坑404断面図	162	図247	3 A調査区 溝77内石組平面図	235
図176	5 A調査区	土坑423断面図	163	図248	5 B調査区 土坑73平面・立面図	235
図177	5 A調査区	土坑415断面図	163	図249	6 A調査区 土坑177平面・断面図	236
図178	5 A調査区	土坑426平面・断面図	163	図250	1 A調査区 屋敷 1 遺物出土状況図	236
図179	5 A調査区	建物12平面図	163	図251	1 A調査区 礎石群平面・断面図	237
図180	5 A調査区	建物10平面・断面図	164	図252	3 A調査区 屋敷 3 平面図	238
図181	5 A調査区	建物11平面・断面図	164	図253	3 A調査区 屋敷 4・5 平面図	239
図182	5 A調査区	建物11平面・断面図	165	図254	3 A調査区 屋敷 6・7 平面図	240
図183	5 A調査区	ビット群・溝109平面図	165	図255	3 A調査区 屋敷 8 ~ 11 平面図	241
図184	5 A調査区	礎石群平面図	166	図256	3 A調査区 屋敷 1 平面図	242
図185	5 A調査区	土師器群群平面図	166	図257	3 A調査区 屋敷 2 平面図	243
図186	5 A調査区	溝45・溝48・礎石平面・断面図	167	図258	3 A調査区 礎石建物平面図	244
図187	5 A調査区	櫛列平面・断面図	167	図259	3 A調査区 礎石建物平面図	244
図188	5 A調査区	櫛列平面・断面図	167	図260	1 A調査区 屋敷 4 ~ 6 平面図	245
図189	5 A調査区	石列 3 平面図	168	図261	1 A調査区 屋敷 5 平面図	246
図190	5 A調査区	外 1・2 平面・断面図	168	図262	1 A調査区 竈 1 ~ 3 平面図	246
図191	5 A調査区	瓦敷 3 平面図	169	図263	3 A調査区 竈15~18平面図	247
図192	漆器・陶磁器	・土器 1	171	図264	3 A調査区 竈15平面図	247
図193	漆器・陶磁器	・土器 2	171	図265	3 A調査区 竈16平面図	247
図194	漆器・陶磁器	・土器 3	172	図266	3 A調査区 竈17平面図	247
図195	漆器・陶磁器	・土器 4	172	図267	3 A調査区 鋳造関連遺構群配置図	248
図196	漆器・陶磁器	・土器 5	176	図268	3 A調査区 溶解炉 3 断面図	248
図197	漆器・陶磁器	・土器 6	177	図269	3 A調査区 溶解炉 4 断面図	248
図198	漆器・陶磁器	・土器 7	178	図270	3 A調査区 建物 5 平面・断面図・鈎型・炉壁	249
図199	漆器・陶磁器	・土器 8	180	図271	3 A調査区 土師皿出土状況図	250
図200	漆器・陶磁器	・土器 (包含層) 9	181	図272	3 A調査区 土坑310周辺土師器群出土状況図	250
図201	漆器・陶磁器	・土器 (包含層) 10	182	図273	3 B調査区 石列平面・断面図	250
図202	漆器・陶磁器	・土器 (包含層) 11	183	図274	漆器・陶磁器・土器 1	255
				図275	漆器・陶磁器・土器 2	256

図276	漆器・陶磁器・土器 3	257
図277	漆器・陶磁器・土器 4	258
図278	漆器・陶磁器・土器 5	259
図279	漆器・陶磁器・土器 6	260
図280	漆器・陶磁器・土器 7	261
図281	漆器・陶磁器・土器 8	262
図282	漆器・陶磁器・土器 9	263
図283	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 10	264
図284	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 11	265
図285	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 12	266
図286	漆器・陶磁器・土器 (包含層) 13	267
図287	5 A調査区出土土器器口径ヒストグラム	268
図288	木製品 1	269
図289	木製品 2	270
図290	木製品 3	271
図291	木製品 4	271
図292	木製品 5	273
図293	下駄 1	274
図294	下駄 2	275
図295	金属製品 1	276
図296	金属製品 2	277
図297	金属製品 3	278
図298	金属製品 4	281
図299	銅型 1	282
図300	銅型 2	283
図301	羽口	284
図302	埴輪類	285
図303	土人形	285
図304	銭 1	286
図305	銭 2	287
図306	銭 3	288
図307	銭 4	289
図308	硯・石製品	290
図309	石塔 1	291
図310	石鉢	291
図311	石塔 2	292
図312	石塔 3	293
図313	石塔 4	294
図314	瓦 1	295
図315	瓦 2	296
図316	瓦 3	297
図317	瓦 4	298
図318	瓦 5	299
図319	瓦 6	300
図320	瓦 7	301
図321	瓦 8	302
図322	瓦 (包含層) 9	303
図323	瓦 (包含層) 10	304
図324	瓦 (包含層) 11	305
図325	瓦 (包含層) 12	306
図326	遺構配置図 (5 A調査区を除く)	309・310
図327	6 A調査区 溝1・溝30断面図 (北端)	314
図328	6 A調査区 溝1・溝30断面図 (南端)	314
図329	2 C調査区 溝8平面・断面図	314
図330	1 A調査区 土坑170・土坑180平面・断面図	314
図331	2 B調査区 土坑8断面図	315
図332	2 C調査区 土坑1平面・断面図	315
図333	2 C調査区 土坑8平面・断面図	316
図334	6 A調査区 土坑107平面・断面図	316
図335	6 A調査区 土坑108平面・断面図	317
図336	6 A調査区 土坑152平面・断面図	317
図337	6 A調査区 建物2・3・5・6平面・断面図	318

図338	6 A調査区 建物4平面・断面図	319
図339	6 A調査区 建物8・9平面・断面図	319
図340	5 B調査区 建物1平面・断面図	320
図341	5 B調査区 遺構配置図	321
図342	5 B調査区 鍛冶炉平面・断面図	322
図343	3 A調査区 土器溜まり・鍛冶炉検出状況図・鍛冶炉6断面図・埴形埴土側面図	323
図344	3 A調査区 土器溜まり2出土状況図	324
図345	2 B調査区 谷1内遺構配置図	325
図346	2 B調査区 谷1断面図	325
図347	2 B調査区 谷1内土器群3・4出土状況図	326
図348	5 B調査区 基1 (土坑180) 平面・断面図	327
図349	6 A調査区 基2 (ピット308) 平面・断面図	328
図350	6 A調査区 基3 (土坑121) 平面・断面図	329
図351	6 A調査区 基4 (土坑188) 平面・断面図	330
図352	遺構配置図 (5 A調査区)	331
図353	5 A調査区 溝78平面・断面図	333
図354	5 A調査区 溝108平面・断面図	333
図355	5 A調査区 掘立柱建物1平面・断面図	334
図356	5 A調査区 掘立柱建物2平面・断面図	334
図357	5 A調査区 掘立柱建物3平面・断面図	334
図358	5 A調査区 掘立柱建物4平面・断面図	334
図359	須恵器・土師器など1	337
図360	須恵器・土師器など2	338
図361	須恵器・土師器など3	341
図362	須恵器・土師器など4	342
図363	須恵器・土師器など5	343
図364	須恵器・土師器など6	344
図365	須恵器・土師器など7	345
図366	須恵器・土師器など8	346
図367	須恵器・土師器など9	347
図368	須恵器・土師器など10	348
図369	須恵器・土師器など11	349
図370	須恵器・土師器など12	350
図371	須恵器・土師器など13	353
図372	須恵器・土師器など14	354
図373	須恵器・土師器など15	355
図374	須恵器・土師器など16	356
図375	須恵器・土師器など17	357
図376	須恵器・土師器など18	358
図377	須恵器・土師器など19	359
図378	須恵器・土師器など20	360
図379	須恵器・土師器など21	361
図380	須恵器・土師器など22	362
図381	須恵器・土師器など23	363
図382	須恵器・土師器など24	364
図383	須恵器・土師器など25	367
図384	須恵器・土師器など26	368
図385	須恵器・土師器など27	369
図386	土製品	370
図387	金属製品1	373
図388	金属製品2	374
図389	羽口	375
図390	銭	376
図391	石器・石製品1	377
図392	石器・石製品2	378
図393	瓦 1	381
図394	瓦 2	382
図395	瓦 3	383
図396	瓦 4	384
図397	瓦 5	385

自然科学・考察編目次

図398	土器群出土状況および試料採取地点	9
図399	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	9
図400	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	9
図401	試料中に残存する脂肪のステロール組成	9
図402	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	10
図403	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	10

図404	大坂城跡1 A⑧深掘り最下層花粉化石群集	19
図405	調査地点位置	34
図406	各地区の模式柱状図と珪藻・花粉分析試料採取位置	35
図407	2 D地区編1北壁セクション (基盤層11層)の模式柱状図と珪藻・花粉分析試料採取位置	36
図408	各地区の主要珪藻化石群集の層位分布	42

図409	2D地区堀1北壁セクション(基盤層11層)の主要珪酸塩系群集の層位分布	50	図4-V-2	3A溝9出土瀬戸・美濃窯陶器	352
図410	各地区の花粉化石群集の層位分布	52	図4-V-3	3A溝9出土土師器	352
図411	2D地区堀1北壁セクション(基盤層11層)の花粉化石群集の層位分布	54	図4-V-4	3A溝9出土土師器・瓦器製品	354
図412	各地区の珪酸塩系と花粉群の特徴	55	図4-V-5	3A溝9出土輸入磁器と丹波・信楽窯製品	354
図413	花粉化石組成	68	図4-V-6	3A溝9出土漆器碗	354
図414	三角ダイヤグラム位置分類図	85	図4-V-7	3A溝37(上)・3A溝36(下)出土土遺物	355
図415	菱形ダイヤグラム位置分類図	85	図4-V-8	3A溝9出土土遺物の定量グラフ	358
図416	平成3年度 胎土分析グラフ	102	図4-V-9	三の丸築造以前の遺構および包含層出土漆器	358
図417	平成3・4年度 胎土分析グラフ	103	図4-V-10	三の丸築造以前の漆器分類図	359
図418	平成4年度 胎土分析グラフ	104	図4-V-11	漆器碗の時期別法量グラフ	361
図419	平成5年度 胎土分析グラフ1	105	図4-V-12	京都・旧二条城跡堀A出土の漆器と木地碗	362
図420	平成6年度 胎土分析グラフ	107	図4-V-13	京都出土の16世紀後半〜17世紀初頭の陶磁器	364
図421	平成7年度 胎土分析グラフ1	108	図4-V-14	栗葉形細口出土土遺物	365
図422	平成6・7年度 胎土分析グラフ2	109	図4-V-1	調査区位置図	369
図423	平成7年度 胎土分析グラフ3	110	図4-V-2	遺構変遷図	370
図424	平成7年度 胎土分析グラフ4	111	図4-V-3	出土土遺物	371
図425	平成3年度 釉薬化学分析1	121	図4-V-4	中央部北北断面図	372
図426	平成3年度 釉薬化学分析2	122	図4-V-5	地階りに直交する2つのトレンチ	373
図427	平成4・5年度 釉薬化学分析	123	図4-V-6	トレンチA西側壁面断面図	373
図428	平成5年度 釉薬化学分析	124	図4-V-7	トレンチB西側壁面上部断面図	373
図429	漆器分析グラフ1	134	図4-V-8	トレンチA西側壁面上部断面図	374
図430	漆器分析グラフ2	135	図4-V-9	トレンチB西側壁面下部断面図	375
図431	跡継車(OKS-2) 錆化鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	190	図4-V-10	トレンチB西側壁面下部断面図	375
図432	円盤状鉄製品(OKS-3) 鉄中非金属介在物及び片状黒鉛のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	190	図4-V-11	L3層の粒度分析結果	376
図433	溝縁(OKS-4) 錆化鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	191	図4-V-12	L3層の粒度分析結果	376
図434	鏡(OKS-5) 錆化鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	191	図4-V-13	大阪平野周辺の活断層	376
図435	鏡(OKS-7-1) 鉱物相のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	192	図4-V-1	陶磁器の産地別組成	382
図436	鏡(OKS-7-2) 鉱物相のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	192	図4-V-2	大坂城跡の瀬戸・美濃焼時期別輸入状況	383
図437	鏡(OKS-8-1) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	193	図4-IX-1	漆器の観察概念	406
図438	鏡(OKS-8-2) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	193	図4-IX-2	時期別の口径・器高	409
図439	鏡(OKS-22) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	194	図4-IX-3	時期別の器厚・底部厚	410
図440	小柄(OKS-24-1) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	194	図4-IX-4	時期別の高台部傾き・高さ	411
図441	小柄(OKS-24-2) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	195	図4-IX-5	時期別の塗色塗比	412
図442	金舎(OKS-25) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	195	図4-IX-6	時期別の漆器土遺構の分布	414
図443	金舎(OKS-26) 鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高安定性分析結果	195	図4-X-1	豊臣前期 屋敷に伴う電	420
図444	袋状鉄斧(OKS-1) ビッカース断面硬度	196	図4-X-2	豊臣前期 等間隔で並ぶ電・瓦敷電・流し枘を伴う電	421
図4-1-1	6世紀後半〜7世紀初頭の地形景観	307	図4-X-3	豊臣前期 大型電・一般的な電	423
図4-1-2	畿内関連遺構群平面図	309	図4-X-4	周の時期 豊臣後期 近代の電	424
図4-1-3	出土鉄屑重量分布図	310	図4-X-5	周の大坂城跡調査における電	426
図4-1-4	鍛冶炉・灰窯平面規模分布図	312	図4-X-6	中世〜近世の電	430・431
図4-1-5	鍛冶実測図	313	図4-X-1	紫光X線スペクトル	436
図4-1-1	3A・5B地区出土土持ち勾玉	319	図4-X-1	倉密局建物	441
図4-1-2	大阪府出土土持ち勾玉(1)	320	図4-X-2	倉密局建物の位置	442
図4-1-3	大阪府出土土持ち勾玉(2)	321	図4-X-3	倉密局建物に関連する平面図	444
図4-1-4	大阪府出土土持ち勾玉(3)	322	図4-X-4	倉密局建物平面図	445
図4-1-5	子持ち勾玉出土遺跡	323	図4-X-5	近代遺構平面図と倉密局平面図とその位置	446
図4-1-1	上町台地とその周辺	327	図4-X-6	6A調査区平面図	447
図4-1-2	地山の傾斜と深度	328	図4-X-7	出土土遺物	448
図4-1-3	縄文・弥生時代の遺物出土地点	329	図4-X-1	調査地と大阪陸軍幼年学校	449
図4-1-4	古墳時代の遺物出土地点	330	図4-X-2	幼年学校関連地図	450
図4-1-5	飛鳥・奈良時代の遺物出土地点	331	図4-X-3	幼年学校校内配図と建物	451
図4-1-1	調査地の位置	335	図4-X-4	幼年学校関連遺物	452
図4-1-2	奈良時代〜平安時代前期における大阪府下の墓	339	図4-X-1	「大阪市中央区町名改正絵図」(明治5年)	456
図4-1-3	古代〜中世における上町台地北端の遺跡分布	341	図4-X-2	「新撰大阪府管内区別図」(明治8年)	456
図4-1-4	3A調査区三の丸築造以前の遺構変遷	350	図4-X-3	「実測大阪市街全図」(明治18年)	457
			図4-X-4	「内務省大阪実測図」(明治21年)	457
			図4-X-5	「大阪市街図」(大正3年)	458
			図4-X-6	「大阪市街図」(大正4年)	458
			図4-X-7	「大阪市東区図」(昭和6年)	460
			図4-X-8	「最新東区詳細図」(昭和22年)	461
			図4-X-9	4A調査区近代遺構平面図	464
			図4-X-10	近代遺構平面図と内務省大阪実測図	464
			図4-X-11	土地利用変遷概念図	465
図440	古代〜中世の遺構配置	472			

目 次

本文編表目次

表1	大板城とその周辺の歴史	7	表23	瓦観察表 1~2	512・513
表2	既往の調査成果 1~12	15~26	表24	石器・石製品観察表 1~2	514・515
表3	調査区南北縦断面土層 1~3	38~40	表25	礫石観察表	516
表4	遺構掲載番号表(5 A調査区を除く) 1~4	47~50	表26	石臼・刻印石・石鉢観察表	517
表5	遺構掲載番号表(5 A調査区) 1~3	68~70	表27	石塔観察表	518
表6	遺構掲載番号表	120	表28	瓦観察表 凡例 1~2	519・520
表7	遺構掲載番号表(5 A調査区を除く) 1~3	125~127	表28	瓦観察表 江戸掲載番号表 1~3	521~523
表8	遺構掲載番号表(5 A調査区) 1~3	156~158	表28	瓦観察表 江戸巴文軒先瓦 1~3	524~526
表9	遺構掲載番号表(5 A調査区を除く) 1~4	227~230	表28	瓦観察表 江戸軒平瓦 1~2	527・528
表10	遺構掲載番号表(5 A調査区を除く) 1~2	311・312	表28	瓦観察表 江戸その他瓦 1	529
表11	獨立建物表	320	表28	瓦観察表 江戸その他瓦 2・畑その他瓦 1・畑軒平瓦 1・畑軒先瓦 1	530
表12	遺構掲載番号表(5 A調査区) 1	332	表28	瓦観察表 豊臣後期陶磁器番号表 1~3	531~533
表13	陶磁器・土器観察表 1~35	387~421	表28	瓦観察表 豊臣後期巴文軒先瓦 1~3	534~536
表14	漆器観察表 凡例	422	表28	瓦観察表 豊臣後期軒平瓦 1~3	537~539
表15	漆器観察表 1~23	423~445	表28	瓦観察表 豊臣後期の他瓦 1	540
表15	下駄・焼埴壺観察表 凡例	446	表28	瓦観察表 豊臣前期陶磁器番号表 1~4	541~544
表15	下駄観察表 1~12	447~458	表28	瓦観察表 豊臣前期軒先瓦 1~2	545~546
表16	焼埴壺観察表 1~12	459~470	表28	瓦観察表 豊臣前期軒平瓦 1~3	547~549
表17	木製品観察表 1~5	471~475	表28	瓦観察表 豊臣前期その他瓦 1	550
表18	金属製品観察表 凡例	476	表28	瓦観察表 古代平瓦	551
表18	金属製品観察表 1~10	477~486	表28	瓦観察表 古代丸瓦・重圓文軒先瓦・重郭文軒平瓦	552
表19	羽川観察表 1~3	487~489	表28	瓦観察表 古代蓮華文軒先瓦・唐草文軒平瓦	553
表20	埴塙観察表	490			
表21	土人形観察表 1~13	491~503			
表22	銭観察表 1~8	504~511			

自然科学・考察編表目次

表29	測定結果表	2	表56	供試材の履歴と調査項目	180~183
表30	土壌試料の残存脂肪抽出量	8	表57	出土遺物の調査結果のまとめ	184
表31	土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合	8	表58	供試材の組成	185~187
表32	大坂城跡 1 A ③深掘り地点における微化石分析試料表	11	表59	弥生時代以降チタン系鉱物含有遺物一覧表	188・189
表33	珪藻の生息分類	14	表60	植物遺体同定結果一覧表	286~288
表34	淡水生種の各生息性に対する適応性	14	表61	ネコの出現頻度表	292
表35	大坂城跡 1 A ③深掘り最下層珪藻分析結果	15	表62	イヌの出現頻度表	292
表36	大坂城跡 1 A ③深掘り最下層花粉分析結果	18	表63	イノシシの出現頻度表	292
表37	各地区の珪藻・花粉分析試料表	37	表64	シカの出現頻度表	292
表38	珪藻の生息性説明	38	表65	ウシの出現頻度表	293
表39	各地区の珪藻分析結果	39~41	表66	ウマの出現頻度表	293
表40	2 D 地区層 1 北壁セクション(基盤層11層)の珪藻分析結果	43~49	表67	ネコの計測値	294
表41	各地区の花粉分析結果	51	表68	イヌの計測値	294
表42	2 D 地区層 1 北壁セクション(基盤層11層)の花粉分析結果	53	表69	イノシシの計測値	294
表43	動物遺構試料の花粉分析結果	62	表70	シカの計測値	295
表44	花粉分析結果	67	表71	ウシの計測値	295
表45	胎土分析資料	86~91	表72	ウマの計測値	296~298
表46	胎土性状表	91~96	表73	ウマの体高の推定値	299
表47	化学分析表	96~101	表74	動物遺体同定結果一覧表	300~303
表48	化学分析表(摘要)	117~120	表 4-1-1	鉄冶関連遺構表	309
表49	漆器分析資料	128~129	表 4-1-2	鉄押観察表	314
表50	平成3年度成果報告	129~130	表 4-II-1	大阪府下出土土子持ち勾玉一覧表	325
表51	平成4年度成果報告	130	表 4-III-1	遺構別土器・陶磁器組成表	380・381
表52	平成5年度成果報告	130・131	表 4-IX-1	塗膜分析汚漆器の一覧表	407
表53	化学分析表(漆-外側)	131・132	表 4-X-1	竈遺構一覧表	418・419
表54	化学分析表(漆-内側)	132・133	表 4-X-2	中世~近世の竈一覧表	429・433
表55	元素分析表	147	表 4-XI-1	鏡および鏡の定性分析結果	438
			表 4-XI-1	倉庫関連遺構表	442
			表 4-XII-1	幼年学校関連遺構表	450
			表 4-III-1	旧大手前之町関連遺構表	462・463

写真図版目次

写真図版編目次

写真図版 1	調査前風景	写真図版66	豊臣後期	竈・瓦組・瓦集積
写真図版 2	調査前風景	写真図版67	豊臣後期	瓦組・瓦集積
写真図版 3	深堀掘削風景・近代・江戸時代	写真図版68	豊臣後期	石組・石集積
写真図版 4	近代・江戸時代	写真図版69	豊臣後期	石組・石集積
写真図版 5	近代・江戸時代	写真図版70	豊臣後期	石組・石集積・堀
写真図版 6	近代・江戸時代	写真図版71	豊臣後期	堀
写真図版 7	近代・江戸時代	写真図版72	豊臣後期	堀
写真図版 8	近代・江戸時代	写真図版73	豊臣後期	堀
写真図版 9	近代・江戸時代	写真図版74	豊臣後期	その他・墓
写真図版10	近代・江戸時代	写真図版75	豊臣後期	墓・地滑り痕跡
写真図版11	近代・江戸時代	写真図版76	豊臣前期	遺構全景
写真図版12	近代・江戸時代	写真図版77	豊臣前期	遺構全景
写真図版13	近代・江戸時代	写真図版78	豊臣前期	遺構全景
写真図版14	近代・江戸時代	写真図版79	豊臣前期	遺構全景
写真図版15	江戸時代	写真図版80	豊臣前期	遺構全景
写真図版16	近代・江戸時代	写真図版81	豊臣前期	遺構全景
写真図版17	江戸時代	写真図版82	豊臣前期	遺構全景
写真図版18	江戸時代	写真図版83	豊臣前期	遺構全景
写真図版19	江戸時代	写真図版84	豊臣前期	遺構全景
写真図版20	近代・江戸時代	写真図版85	豊臣前期	遺構全景
写真図版21	近代・江戸時代	写真図版86	豊臣前期	遺構全景
写真図版22	近代・江戸時代	写真図版87	豊臣前期	遺構全景
写真図版23	江戸時代	写真図版88	豊臣前期	遺構全景
写真図版24	江戸時代	写真図版89	豊臣前期	遺構全景
写真図版25	近代・江戸時代	写真図版90	豊臣前期	井戸
写真図版26	江戸時代	写真図版91	豊臣前期	井戸
写真図版27	江戸時代	写真図版92	豊臣前期	溝
写真図版28	近代・江戸時代	写真図版93	豊臣前期	溝
写真図版29	豊臣後期	写真図版94	豊臣前期	溝
写真図版30	豊臣後期	写真図版95	豊臣前期	溝
写真図版31	豊臣後期	写真図版96	豊臣前期	溝
写真図版32	豊臣後期	写真図版97	豊臣前期	溝
写真図版33	豊臣後期	写真図版98	豊臣前期	溝・土坑
写真図版34	豊臣後期	写真図版99	豊臣前期	土坑
写真図版35	豊臣後期	写真図版100	豊臣前期	土坑
写真図版36	豊臣後期	写真図版101	豊臣前期	土坑
写真図版37	豊臣後期	写真図版102	豊臣前期	土坑・建物関連遺構
写真図版38	豊臣後期	写真図版103	豊臣前期	建物関連遺構
写真図版39	豊臣後期	写真図版104	豊臣前期	建物関連遺構
写真図版40	豊臣後期	写真図版105	豊臣前期	建物関連遺構
写真図版41	豊臣後期	写真図版106	豊臣前期	建物関連遺構・礎石
写真図版42	豊臣後期	写真図版107	豊臣前期	礎石・囲炉裏
写真図版43	豊臣後期	写真図版108	豊臣前期	竈
写真図版44	豊臣後期	写真図版109	豊臣前期	竈
写真図版45	豊臣後期	写真図版110	豊臣前期	竈
写真図版46	豊臣後期	写真図版111	豊臣前期	竈・構造溶解炉
写真図版47	豊臣後期	写真図版112	豊臣前期	構造溶解炉・瓦組・瓦集積
写真図版48	豊臣後期	写真図版113	豊臣前期	石列・石集積・埋蔵
写真図版49	豊臣後期	写真図版114	豊臣前期	埋蔵・その他・出土状況
写真図版50	豊臣後期	写真図版115	豊臣前期	埋蔵・その他・出土状況
写真図版51	豊臣後期	写真図版116	古代・中世	遺構全景
写真図版52	豊臣後期	写真図版117	古代・中世	遺構全景
写真図版53	豊臣後期	写真図版118	古代・中世	遺構全景
写真図版54	豊臣後期	写真図版119	古代・中世	遺構全景
写真図版55	豊臣後期	写真図版120	古代・中世	井戸・溝
写真図版56	豊臣後期	写真図版121	古代・中世	溝
写真図版57	豊臣後期	写真図版122	古代・中世	溝・土坑・建物関連遺構
写真図版58	豊臣後期	写真図版123	古代・中世	建物関連遺構
写真図版59	豊臣後期	写真図版124	古代・中世	建物関連遺構・ビット
写真図版60	豊臣後期	写真図版125	古代・中世	ビット・鍛冶関連遺構
写真図版61	豊臣後期	写真図版126	古代・中世	鍛冶関連遺構
写真図版62	豊臣後期	写真図版127	古代・中世	鍛冶関連遺構・石列
写真図版63	豊臣後期	写真図版128	古代・中世	谷
写真図版64	豊臣後期	写真図版129	古代・中世	谷・出土状況
写真図版65	豊臣後期	写真図版130	古代・中世	出土状況

写真図版275	豊臣前期	陶磁器	写真図版320	豊臣前期	金属生産関連
写真図版276	豊臣前期	陶磁器	写真図版321	豊臣前期	金属生産関連
写真図版277	豊臣前期	陶磁器	写真図版322	豊臣前期	金属生産関連
写真図版278	豊臣前期	陶磁器	写真図版323	豊臣前期	金属生産関連
写真図版279	豊臣前期	陶磁器	写真図版324	豊臣前期	金属生産関連
写真図版280	豊臣前期	陶磁器	写真図版325	豊臣前期	金属生産関連
写真図版281	豊臣前期	陶磁器	写真図版326	豊臣前期	金属生産関連・金属製品
写真図版282	豊臣前期	陶磁器	写真図版327	豊臣前期	金属製品
写真図版283	豊臣前期	陶磁器	写真図版328	豊臣前期	金属製品
写真図版284	豊臣前期	陶磁器	写真図版329	豊臣前期	金属製品
写真図版285	豊臣前期	陶磁器	写真図版330	豊臣前期	金属製品
写真図版286	豊臣前期	陶磁器	写真図版331	豊臣前期	金属製品
写真図版287	豊臣前期	陶磁器	写真図版332	豊臣前期	金属製品
写真図版288	豊臣前期	陶磁器	写真図版333	豊臣前期	金属製品
写真図版289	豊臣前期	陶磁器	写真図版334	豊臣前期	金属製品
写真図版290	豊臣前期	瓦	写真図版335	豊臣前期	金属製品
写真図版291	豊臣前期	瓦	写真図版336	豊臣前期	金属製品
写真図版292	豊臣前期	瓦	写真図版337	豊臣前期	金属製品
写真図版293	豊臣前期	瓦	写真図版338	豊臣前期	金属製品
写真図版294	豊臣前期	瓦	写真図版339	豊臣前期	金属製品
写真図版295	豊臣前期	瓦	写真図版340	豊臣前期	金属製品
写真図版296	豊臣前期	瓦	写真図版341	古代	須恵器・土師器など
写真図版297	豊臣前期	漆器	写真図版342	古代	須恵器・土師器など
写真図版298	豊臣前期	漆器	写真図版343	古代	須恵器・土師器など
写真図版299	豊臣前期	漆器・木製品	写真図版344	古代	須恵器・土師器など
写真図版300	豊臣前期	木製品	写真図版345	古代	須恵器・土師器など
写真図版301	豊臣前期	木製品	写真図版346	古代	須恵器・土師器など
写真図版302	豊臣前期	木製品	写真図版347	古代	須恵器・土師器など
写真図版303	豊臣前期	木製品	写真図版348	古代	須恵器・土師器など
写真図版304	豊臣前期	木製品	写真図版349	古代	須恵器・土師器など
写真図版305	豊臣前期	木製品	写真図版350	古代	瓦
写真図版306	豊臣前期	木製品	写真図版351	古代	瓦
写真図版307	豊臣前期	木製品	写真図版352	古代	石製品
写真図版308	豊臣前期	木製品	写真図版353	古代	石製品
写真図版309	豊臣前期	下駄	写真図版354	古代	石製品
写真図版310	豊臣前期	下駄	写真図版355	古代	石製品
写真図版311	豊臣前期	下駄	写真図版356	古代	石製品・金属生産関連
写真図版312	豊臣前期	下駄	写真図版357	古代	金属生産関連
写真図版313	豊臣前期	下駄・石製品	写真図版358	古代	金属製品
写真図版314	豊臣前期	石製品	写真図版359	古代	金属製品
写真図版315	豊臣前期	石製品	写真図版360	古代	金属製品
写真図版316	豊臣前期	石製品	写真図版361	古代	金属製品
写真図版317	豊臣前期	石製品・土人形	写真図版362	古代	金属製品
写真図版318	豊臣前期	金属生産関連	写真図版363	古代	金属製品
写真図版319	豊臣前期	金属生産関連	写真図版364	古代	金属製品

自然科学・考察編写真図版目次

写真図版365	珪藻化石の顕微鏡写真	写真図版388	鉄律の顕微鏡組織
写真図版366	花粉化石の顕微鏡写真	写真図版389	鉄律の顕微鏡組織
写真図版367	珪藻化石の顕微鏡写真1	写真図版390	鉄律の顕微鏡組織
写真図版368	珪藻化石の顕微鏡写真2	写真図版391	鉄律の顕微鏡組織
写真図版369	珪藻化石の顕微鏡写真3	写真図版392	鉄律の顕微鏡組織
写真図版370	花粉化石の顕微鏡写真1	写真図版393	硬度測定圧痕組織写真
写真図版371	花粉化石の顕微鏡写真2	写真図版394	鉄釘及び包丁の顕微鏡組織
写真図版372	花粉化石の顕微鏡写真3	写真図版395	鉄鍋の顕微鏡組織
写真図版373	プレパレート状況写真	写真図版396	鉄釘の顕微鏡組織
写真図版374	花粉化石の顕微鏡写真1	写真図版397	鉄釘の顕微鏡組織
写真図版375	花粉化石の顕微鏡写真2	写真図版398	鉄製品(金具)の顕微鏡組織
写真図版376	漆膜断面顕微鏡写真1	写真図版399	鉄製品(金具)の顕微鏡組織
写真図版377	漆膜断面顕微鏡写真2	写真図版400	包丁と小判(外装銅)の顕微鏡組織
写真図版378	漆膜断面顕微鏡写真3	写真図版401	埴埴内面溶融物の顕微鏡組織
写真図版379	漆膜断面顕微鏡写真4	写真図版402	埴埴内面溶融物の顕微鏡組織
写真図版380	漆膜断面顕微鏡写真5	写真図版403	埴埴内面溶融物と鉄塊(鉄鉄)の顕微鏡組織
写真図版381	漆膜断面顕微鏡写真6	写真図版404	鉄律(鍛冶律)と溶解炉が壁の顕微鏡組織
写真図版382	漆膜断面顕微鏡写真7	写真図版405	埴埴の顕微鏡組織
写真図版383	漆膜断面顕微鏡写真8	写真図版406	各供試材埋込み試料のマクロ組織
写真図版384	漆膜断面顕微鏡写真9	写真図版407	鉄釘(〇〇S-A-2)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値
写真図版385	漆膜断面顕微鏡写真10	写真図版408	鉄釘(〇〇S-A-3)鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値
写真図版386	鉄律の顕微鏡組織		
写真図版387	鉄律の顕微鏡組織		

- 写真図版409 鉄製品(金具)(OSA-4-1)鉄中非
金属介在物の特性X線像と定量分析値
- 写真図版410 鉄製品(金具)(OSA-4-2)鉄中非
金属介在物の特性X線像と定量分析値
- 写真図版411 包丁(OSA-5)鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値
- 写真図版412 小網(OSA-6)外装鋼部分の特性X線
像
- 写真図版413 増場(OSA-7)内面溶融ガラス質中
の微小析出物の特性X線像
- 写真図版414 増場(OSA-8-1)内面溶融ガラス質
層中に貫入する鋼索地の特性X線像
- 写真図版415 増場(OSA-8-2)内面溶融ガラス質
層中の微小析出物の特性X線像
- 写真図版416 増場(OSA-9)内面溶融ガラス質層中
に貫入する鋼及び微小析出物の特性X線像
- 写真図版417 増場(OSA-10)内面溶融ガラス質層中
に貫入する鋼索地の特性X線像
- 写真図版418 炉壁(OSA-11)内面溶融ガラス
質層中に凸出する微小鉄粒の特性X線像
- 写真図版419 炉壁(OSA-14)内面溶融ガラス
質層中に凸出する微小鉄粒の特性X線像
- 写真図版420 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版421 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版422 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版423 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版424 鉄片入り鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版425 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版426 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版427 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版428 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版429 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版430 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版431 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版432 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版433 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版434 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版435 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版436 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版437 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版438 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版439 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版440 鉄製品の顕微鏡組織
- 写真図版441 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版442 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版443 鉄洋の顕微鏡組織
- 写真図版444 鉄製品のマクロ組織
- 写真図版445 鉄製品のマクロ組織
- 写真図版446 鉄製品のマクロ組織
- 写真図版447 鉄製品のマクロ組織
- 写真図版448 紡錘車(OKS-2)鋳鉄中非金属介在物
の特性X線像と定量分析値
- 写真図版449 円盤状鉄製品(OKS-3)鉄中非金属介在物
の特性X線像と定量分析値及び片状黒鉛の
特性X線像
- 写真図版450 鋼線(OKS-4)鋳鉄中の鋼粒の特性
X線像と定量分析値
- 写真図版451 鋳(OKS-5)鋳鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値
- 写真図版452 碗形洋(OKS-7-1)鉱物相の特性X線
像と定量分析値
- 写真図版453 碗形洋(OKS-7-2)鉱物相の特性X線
像と定量分析値
- 写真図版454 碗形洋(OKS-8-1)鉄中非金属介在物
の特性X線像と定量分析値
- 写真図版455 碗形洋(OKS-8-2)鉱物相の特性X線
像と定量分析値
- 写真図版456 鋳(OKS-22)鉄中非金属介在物の特性
X線像と定量分析値
- 写真図版457 小網(OKS-24-1)鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値
- 写真図版458 小網(OKS-24-2)鉄中非金属介在物の
特性X線像と定量分析値
- 写真図版459 金箸(OKS-25)鉄中非金属介在物の特性
X線像と定量分析値
- 写真図版460 金箸(OKS-26)鉄中非金属介在物の特性
X線像と定量分析値
- 写真図版461 袋状鉄弁(OKS-1)外観写真
- 写真図版462 袋状鉄弁(OKS-1)側面マクロ組織写真
- 写真図版463 袋状鉄弁(OKS-1)刃先先端から
10 μ m断面ミクロ組織写真
- 写真図版464 非金属介在物写真
- 写真図版465 A部拡大ミクロ組織
- 写真図版466 B部拡大ミクロ組織
- 写真図版467 C部拡大ミクロ組織
- 写真図版468 D部拡大ミクロ組織
- 写真図版469 非金属介在物写真
- 写真図版470 鋳(OKS-23)顕微鏡組織
- 写真図版471 非金属介在物写真
- 写真図版472 植物遺体
- 写真図版473 動物遺体1
- 写真図版474 動物遺体2
- 写真図版475 動物遺体3
- 写真図版4-VI-1 5A調査区出土美濃窯製品
- 写真図版4-VI-2 5A・5B調査区出土瀬戸・
美濃窯製品
- 写真図版4-VI-3 5A調査区出土瀬戸・美濃窯製品
- 写真図版4-VI-4 5A・5B・1B調査区出土瀬戸・
美濃窯製品
- 写真図版4-VI-5 5A・1B調査区出土瀬戸・
美濃窯製品
- 写真図版4-VII-1 2D・1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-2 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-3 1A・3B調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-4 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-5 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-6 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-7 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-8 1A・3B調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-9 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-10 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-11 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-VII-12 1A調査区出土陶磁器
- 写真図版4-IX-1 出土漆器の塗膜断面
- 写真図版4-XI-1 海歌前衛鏡・豊草鳳凰鏡・隆平永宝
陸軍標柱
- 写真図版4-III-1 航空写真(昭和3年)
- 写真図版4-III-2 航空写真(昭和23年)

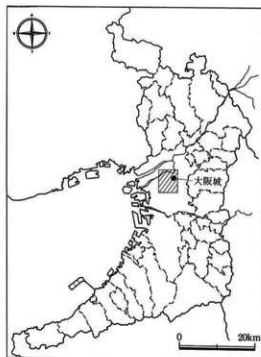
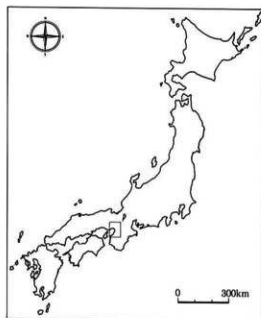
第1章 位置と環境

I 地理的環境

大阪城の立地を巨視的にみると、南の和泉山地から泉北丘陵へと徐々に北に向かって高度を減じ、さらに大和川をこえて大阪平野に突き出た上町台地の先端に大阪城は立地する。台地の北は淀川低地帯に切れ大川に面しているが、東は縄文海進以降、淀川と旧大和川の著しい沖積作用によって形成された大阪平野が広がり、西には沿岸流が運んできた砂によってできた幅2kmの天満砂堆を主とする低地が上町台地に沿った形で北へとのびている。つまり台地の東西には標高5mに満たない低地部が広がっており、南北長20km、東西幅約2km、標高10~25mを測る細長い上町台地はまさに大阪市域を南北に貫く脊梁ともいべき姿を示す(図2)。

上町台地の地質は大阪層群の上に不整合を覆う形で段丘礫層である上町累層が堆積しており、大阪層群には台地の西縁を走る上町断層のズレが残されている。上町断層は、北は千里丘陵の仏念寺山断層に南は泉佐野方面にのびる一続きの断層であり、東から西に向かって突き上げる高角度の逆断層である。したがって断層より東側は隆起帯となっているため、台地の西側は比高5~10mの急崖によって画されるが、東側はなだらかな緩斜面となって低地部へ移行する傾動地塊の形を呈す。台地北端が最も高く、南に向かって低くなる点も地塊としての地盤運動の影響である。上町台地の大阪層群は隆起によって陸化した後、海食崖・海食台が形成される。さらに最終間氷期に海面が上昇し、大阪層群の上に上町累層が堆積したが、つづく最終氷期には再び海水準が低下し、空堀や細工谷にみられるような大規模な浸食谷が発達した。こうして大阪城の舞台となる上町台地は海水準変動と隆起運動が重なり合った結果、現在みられるような複雑な地形が形成され、人々の生活に大きな影響を及ぼすこととなった。

図3は昭和36年測図の大阪市地形図(1:3000)より作成した上町台地の1m間隔の等高線図である(註1)。



(斜線部は図4の範囲に相当)

図1 大阪城の位置

昭和36年には上町台地はすでに市街地化されているが、高度成長期の大規模開発が及ぶ以前の上町台地の全体像を細部まで読みとることが可能である。言うまでもなく、上町台地は古代より難波宮高営や大坂城築城など幾度も地形変化がなされており、各時期の地形環境復原が必要であるが、大阪城が立地する上町台地の歴史的環境を理解する手がかりとして、以下図3より上町台地全体の地形を概観する。

北は比高7m程の急崖をもって大川に接しており、おそらく大阪城もこのような急崖を利用して台地の先端に立地しているものと思われる。大阪城の西側には標高約15m前後の平坦地が広がっているが、後述するようにこの付近一帯は文献史料から古代の難波館などの公的施設の立地が想定され、発掘調査においても奈良三彩や和同開珎・隆平通宝などが出土している。また台地先端の「石町」という地名は摂津国府の書き誤りが由来とされるなど大阪城と並んで、歴史上重要な施設が立ち並んでいた可能性がある。

大阪城南接した法円坂一帯は上町台地で最も標高が高い地域であり、標高25mの最高所では難波宮大極殿跡が地下から発見されるなど難波宮がかつて営まれた地域である。その東西は傾斜地となっており、特に東側では緩やかに下降する斜面に空堀などの大規模な浸食谷が上町台地の奥深くまで達している。西側斜面では方位に合わせた直線的な等高線が顕著であるが、これは近世の絵図に記されている瓦土取りなどの著しい人工改変の痕跡と思われる。

法円坂の難波宮大極殿跡付近を起点とする上町台地の分水界は、南へいくに従い高度を下げながら台

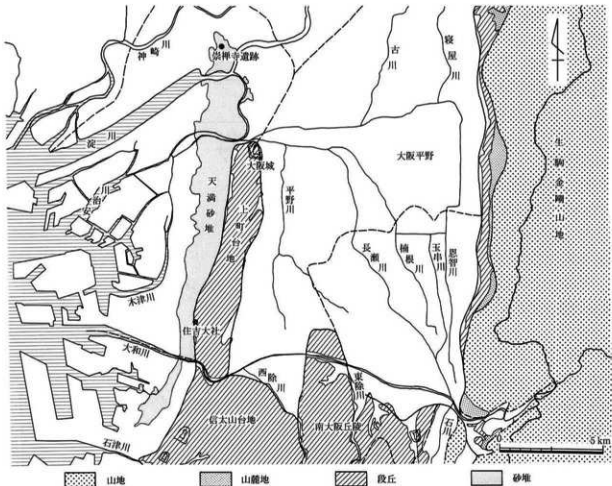


図2 地形分類図

地西縁へと寄り、上本町以南では先述した東へ傾く傾動地塊の様相を呈す。上本町以南の台地西縁は石段や愛染坂や口縄坂といった急坂がみられるように、比高10mの急崖が迫っている。また複数の小規模な浸食谷が急崖を刻んでいる。南へいくに従い標高が下がるため、台地西縁の崖もしだいに低くなり、南端の住吉大社付近では穏やかな傾斜で低地へ移行する。一方、上本町以南の東側斜面は北東部と同様に細い谷など大規模な浸食谷がみられるが、南東部ではJR阪和線沿いにみられる桃ヶ池や長池を痕跡とする南北方向の谷によって狭義の上町台地（東）と我孫子台地（西）に分かれ、南の信太山台地に続く。

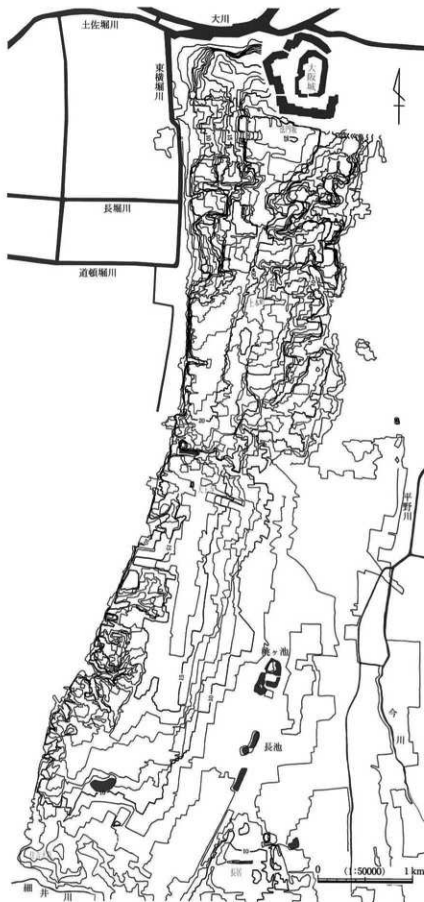


図3 等高線図

II 歴史的環境

縄文海進によって再度海水準が上昇し、汀線が生駒山西麓まで及び河内湾の時代を迎えた縄文時代中期に、上町台地では森の宮遺跡において人々の暮らしが本格的に開始される。台地の東斜面に位置する森の宮遺跡に形成された大規模な貝塚は、貝層の堆積がマガキからセタシジミへと変化しており、縄文時代後期から弥生時代中期にかけておこった河内湾から河内湾への変遷を如実に示す(5-22: 図5・表2の22に対応、以下同様)。森の宮遺跡から約1km南にある宰相山遺跡では、開析谷の埋積土から大阪市内最古とされる縄文早期の高山寺式から前期、中期の土器や晩期の長原式と木葉文をもつ弥生前期の土器が出土している(5-286)。また上町台地の西側縁辺部の船場地域でも弥生土器が若干出土しており(5-287・338)、上町台地縁辺部では縄文海進以後、陸化した低地において集落が営まれていたと思われる。しかし、縄文・弥生時代を通じて上町台地上では検出される遺構・遺物が稀少であり、実態は不明である。

古墳時代初頭も同様に台地上の情報は少ないが、天満砂堆の先端に位置する崇禪寺遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて東海や近江、吉備、山陰系など多量の各地の土器や舶載品と考えられる鉄製の素環刀が出土しており、立地条件を反映した遺跡の性格が看取できる。また上町台地にも古墳が築かれるが、御膳山古墳などを除き難波宮造営や大坂城築城にあたって大半が消滅してしまい、地名や埴輪片などから存在を想定するのみである。『記紀』によれば前期難波宮建設に際して「宮の地に入れむが為に、丘墓を壊られたる」とあり、また四天王寺創建に際しても『日本書紀』に推古元年(593)のこととして、「始めて四天王寺を難波の荒陵に造る」と記され、境内には現在も長持形石棺の蓋が保存されている。考古学的にも難波宮下層遺跡や当遺跡などから水晶製の三輪玉や滑石製の白玉、ガラス製小玉、金環など古墳の副葬品と思われる遺物や円筒埴輪、家形埴輪片が出土する例が増加しており、消滅した古墳の存在が明らかになりつつある(5-7・225・232など)。

古墳時代中期以降、上町台地には古市古墳群や百舌鳥古墳群の巨大古墳の被葬者とされる応神天皇の大隅宮や仁徳天皇の高津宮があったと推定されている。これらはあくまでも推定の域をでないが、台地北端に難波の堀江が掘削され、難波津を中心に政権の重要拠点として発展していったことは確かであろう。難波の堀江は現在の大川と考えられているが、難波津の位置については千田稔氏の三津寺町説と日下雅義氏の高麗橋説にわかれ、論争が繰り返されてきたが定説をみるに至っていない。また上町台地南端では、海の神としてひろく信仰を集めていた住吉大社のもと住吉津が政権の保護を受けて栄えていた。これに対して難波津には住吉大社のような神社はなかったが、難波の堀江の開削によって淀川、旧大和川の水運を利用して河内だけでなく山城・近江・大和などと結びつき、住吉津にかわって畿内の玄関口として発展していく。周辺には集散する物資を収納、管理、輸送する難波屯倉が設置されていたと推定されるが、難波宮下層遺跡で発見された5世紀代の大型倉庫群は難波津の繁栄を具体的に示すものといえる。

難波津は経済面だけでなく外交面でも重要な役割を果たし、外交をつかさどる役所の大郡や宿泊設備の難波館が設けられていた。そこには百済、新羅、隋など諸外国の使節が迎えられ、儀式や宴会が執りおこなわれ渡来人たちで賑わっていたであろう。『日本書紀』によれば、上町台地において新羅系氏族である難波吉士の活躍が記されており、上町台地上で比較的多く出土する韓式系土器からもそのような外交の一端がうかがえる(5-217・230など)。また西国支配のための役所である小郡も難波にあったと



- 1.大坂城跡 2.大坂城下町跡 3.難波宮跡 4.難波京朱雀大路跡 5.森の宮遺跡 6.宰相山遺跡
 7.上本町4丁目所在遺跡 8.天満本願寺跡 9.天神橋遺跡 10.安養寺跡推定地 11.佐賀藩蔵屋敷跡 12.中ノ島2丁目所在遺跡
 13.北浜4丁目所在遺跡 14.今橋4丁目所在遺跡 15.高麗橋4丁目所在遺跡 16.平野町3丁目所在遺跡 17.大坂魚市場跡
 18.備後町2丁目所在遺跡 19.馬喰町遺跡 20.住友興業跡 21.難波貝層遺跡 22.船出遺跡 23.敷津遺跡 24.上之宮遺跡
 25.小宮町遺跡 26.真法院遺跡 27.上本町9丁目所在遺跡 28.四天王寺旧境内遺跡 29.拾人町遺跡 30.茶白山古墳
 31.河内川瀬江推定地 32.天王寺公園遺跡 33.摂津園分寺跡 34.堂ノ芝高寺 35.勝山南遺跡 36.御勝山古墳 37.勝山遺跡
 a.京街道 b.三島街道 c.能勢街道 d.暗越奈良街道 e.奈良街道 f.熊野街道 g.紀州街道 h.5世紀の海岸線

図4 大坂城周辺の遺跡分布図

され、難波の地には集中して公的諸施設が整備されていたのだ。さらには6世紀中葉以降の有力氏族であった物部氏や蘇我氏が宅を設け、難波津を利用して経済活動を行っていた。折しも難波の堀江を舞台とした崇仏・廩仏抗争を経て、上町台地の一角では四天王寺の造営が始まっており、仏教文化の花が開こうとしていた。四天王寺は聖徳太子によって建立され、大和の飛鳥寺などと並んで最古級の寺院であり、四天王寺以外にも堂々芝廩寺、阿部寺廩寺、安曇寺跡などで白鳳期の瓦が出土し、上町台地には古代寺院が密集していた。まさに上町台地は外交、経済、文化の中心として繁栄し、この繁栄がこの地に遷都を実現した要因であったであろう。

皇極4年(645)、中大兄皇子らによって蘇我氏が滅ぼされた乙巳の変を発端として数々の政策が打ち出されるが、そのひとつが飛鳥から難波長柄豊碕宮への遷都であった。孝徳天皇はすでにあった大郡や小郡などを利用してながら白雉元年(650)から新宮の建設に着手し、白雉3年(652)に完成した宮は言葉に尽くしがたいほど壮麗であったという。難波長柄豊碕宮の所在地については江戸時代以来、上町説と下町説があり長年にわたって論争が繰り広げられてきたが、山根徳太郎氏を中心とする発掘調査の結果、上町台地上の法円坂町一帯に中軸線を同じくする前期、後期二時期の宮殿跡が発見され、論争に終止符を打った。発掘調査によって明らかにされた前期難波宮の構造は曲折して南北にのびる回廊の内側は、内裏南門によって北の内裏と南の朝堂院に二分され、中軸線上には正殿や門が並び、その左右には東西棟、南北棟が左右対称に整然と配置されていた。前期難波宮は朱鳥元年(686)の火災によって焼失したと『日本書紀』に記されているが、前期難波宮の遺構は火災で焼けた痕跡を残しており、文献の記述を裏付けている(5-69・300など)。

孝徳天皇の死後、都は飛鳥に戻るが、難波の地は難波津を中心とした外交機能は有しており、神亀3年(726)、再び聖武天皇によって難波宮が造営される。後期難波宮は平城宮の内裏・第2次大極殿院と酷似し、屋根には重圓文軒瓦が葺かれていた。前期難波宮と同じく内裏、朝堂院の東西には掘立柱建物群が検出され、官衙域と推定されている(5-303など)。

これらの宮に伴う京域であるが、前期難波宮に関しては京域の存在について否定的な見解が多いが、後期難波宮に関しては、文献から存在した可能性が高いとされている。条坊の復原には遺存地割や小字による復原と発掘調査による復原を重ねる必要があるが、上町台地は古代以降の開発と近代の著しい都市化によって復原を困難なものとし、条坊については不明な点が多い。

このように奈良時代の上町台地上には難波宮が営まれ、台地北端の難波の堀江一帯には、東大寺の新羅江荘や勅旨省の新羅荘など皇族・貴族・寺院が荘や宅を設け、経済活動の拠点としていた。とりわけ難波館に滞在した各国使節の中で最も多かった新羅使との交易は盛んであったと思われ、当遺跡から出土した新羅緑釉蓋は示唆的である(5-222)。

交通の要所としてその隆盛を極めた難波津であるが、8世紀には淀川・旧大和川の堆積作用によってその港湾機能が衰える。さらに緊縮財政による複都制の廃止や皇統の変化など政治情勢も拍車をかけ、延暦3年(784)に「水陸の便を以て」長岡京へ遷都されると難波宮も解体され移築される。翌年、淀川と三國川(神崎川)をつなぐため、摂津国の神下・梓江・鯉生野に水路が開削されると難波津の繁栄も三國川の河尻や淀川と三國川の接点の江口に移り、難波の地は歴史的地位の低下を招くこととなる。

平安時代以降、台地北端の渡辺(現在の天満橋付近)は平安京から淀川を下る航路の船着き場であり、平安末期に流行した熊野・高野山・四天王寺・住吉大社などの寺社参詣ルートの起点として藤原道長や源頼朝ら多くの皇族、貴族が立ち寄っている。中世に盛行する熊野参詣では、京を出発して淀川から上

表1 大坂城とその周辺の歴史

西暦	年号	事項	西暦	年号	事項
593		四天王寺建立	1583	天正11	羽柴秀吉、大坂城(本丸)築造に着手
600		第1回遣隋使派遣			平野郷の移転、中島の開発
607		聖徳太子、小野妹子を隋に派遣	1585	天正13	初代天守竣工。秀吉関白となる。天満本願寺の建立
608		隋の使者裴世清、小野妹子とともに難波に上陸	1586	天正14	二の丸築造・聚楽第造営工事に着手。秀吉、太政大臣となる
630		第1回遣唐使派遣	1589	天正17	内裏の造営を始める
645		乙巳の宴	1590	天正18	全国統一完成、京都の町割りの改変
650	白雉元	難波長柄豊碓宮の造営開始	1591	天正19	秀吉、関白職を秀次に譲り、太閤となる
660	斉明6	百濟救済軍発進のため、難波宮へ行幸	1592	文禄元	本願寺、京都へ移転。御土居の築造
679	天武8	難波に羅城を築く(天武朝難波宮)	1594	文禄3	朝鮮出兵(文禄の役)
683	天武12	複都制の詔、難波を副都とする	1596	文禄4	惣構築造・伏見城築城に着手
686	朱鳥元	難波宮大蔵省から失火、宮室全焼	1596	慶長元	関白秀次、自害。聚楽第破壊
710	和銅3	平城京遷都	1597	慶長2	朝鮮出兵(慶長の役)
726	神亀3	難波宮再建に着手(聖武朝難波宮)	1598	慶長3	三の丸築造に着手
741	天平13	行基、難波に堀川、橋、布施屋等を造る			船場の開発、天満堀川の開削
754	天平勝宝6	鑑真、唐より難波津に到着			秀吉、伏見城で死去
762	天平宝字6	新遣唐使船、難波江口で浅瀬にのり上げ破損	1600	慶長5	関ヶ原の合戦で豊臣力散れる
784	延暦3	長岡京遷都	1603	慶長8	徳川家康が江戸幕府を開く
785	延暦4	摂津国神下等に堀を通し、三國川と結ぶ	1611	慶長16	大坂冬の陣起こる。和議を結び惣構・外堀を埋める
793	延暦12	難波宮を廃す	1612	慶長17	大坂夏の陣起こる
794	延暦13	摂津職の廃止	1615	元和元	大坂城落城、全城焼亡し、豊臣氏滅ぶ
805	延暦24	摂津国府が渡辺に移される			松平忠明、大坂城主となり、焼跡整理と市街地復興につとめる。道頓堀の開削
806	大同元	難波津の酒麩を封印	1619	元和5	幕府、大坂を直轄地化
			1620	元和6	幕府、大坂城再築に着手(二の丸の西・北・東部)
935	承平5	紀貫之、難波津に停泊	1624	寛永元	本丸再築に着手
1023	治安3	藤原道長一行、渡辺より乗船して帰京	1628	寛永4	二の丸南面再築に着手
1025	万寿2	渡辺綱、没す	1629	寛永6	大坂城再築完成
1185	文治元	渡辺香、西国へ行く源義経を送る	1837	天保8	大塩平八郎の乱
1192	建久3	源頼朝が鎌倉幕府を開く	1867	慶応3	大政奉還
1201	建仁元	重源、渡辺浄土寺で造講を行う	1868	明治元	明治維新の城中大火で大坂城はほぼ焼失
1335	延元3・暦元元	足利尊氏が室町幕府を開く	1871	明治4	政府、大坂城に鎮台を設置
1467	応仁元	応仁の乱が起こる	1877	明治11	大坂鎮台を第四師団とする
1496	明応5	本願寺第8世蓮如、大坂に坊舎を建立	1931	昭和6	市民の浄財によって天守閣復興
1532	天文元	山科本願寺が焼かれ本山を石山に移す	1941	昭和16	太平洋戦争が始まる
1570	元亀元	石山合戦が始まる	1945	昭和20	太平洋戦争により大坂城古建造物焼失
1580	天正8	本願寺、信長と和睦し、紀州へ退去	1948	昭和23	終戦後、大坂城は米軍に接収
1582	天正10	本能寺の戦いで信長死す	1954	昭和29	米軍撤収、大坂城は大坂市に返還される
			1954	昭和30	難波宮の発掘調査が始まる
			1955	昭和30	大坂城地帯、特別史跡に指定される
			1959	昭和34	大坂城総合学術調査を実施

陸し最初に拝する窪津王子の置かれた場所であり信仰の上で重要な地であった。王子とは沿道に設置された熊野神の分霊を勧請した社のごとで、熊野街道には多くの王子が設置され熊野九十九王子といわれるほどであった。また渡辺は源平合戦で源義経の屋島急襲部隊を運んだ船団として知られる渡辺党が本拠を置いていた。12世紀末には東大寺再建のため重頼が渡辺浄土堂と木材倉庫である「木屋敷地」を設け、東大寺の知行国である周防国から海路運ばれてきた木材を川舟に積み替えていたことから、渡辺津が中継基地として機能していたことがうかがえる。

この地が再び歴史の表舞台となるのは、明応5年(1496)の本願寺第8世宗主蓮如による大坂御坊の建立、翌明応6年(1497)の御坊を核とした寺内町の建設まで待たなければならない。大坂御坊が建立された地は「摂津東成郡生玉庄内大坂」(『御文章』)と記され、ここに初めて「大坂」の名が文献に登場する。大坂御坊と寺内町の位置をめぐっては山根氏の法円坂説、岡本良一氏、伊藤毅氏の二の丸説、仁木氏の上町台地説が提示されているが、いずれも文献史料を中心に論が展開された概念的なものであった。近年、文献だけでなく地籍図や絵図、旧地形、考古学的成果を総合的に検討した天野太郎氏によって具体的に地形図上に清水谷町を中心とする復原プランが提示され、大坂寺内町研究に新たな展開をみせている。天野氏も着目した考古学的成果は、秀吉の大坂城下町建設の大規模な土木工事によって削平された可能性があり、現状で確実に大坂本願寺期の遺構といえるものは追手門学院小学校の敷地で検出された天正8年(1580)焼失の瓦葺き建物など限られているが(5-105)、三の丸各所で検出される幅6m、深さ2.5m以上の断面V字形の葉研堀遺構も多くは大坂本願寺期と考えられている。

天文元年(1532)の山科本願寺の焼き討ち以後、大坂石山に本願寺が移されると寺内町は城塞化が進められ、一向宗の本拠として強大な勢力を保持した。この動きは、天下統一を目指す織田信長との対立を余儀なくし、武力対決へと突入していく。10年にわたる石山合戦は第11世宗主顯如が大坂を明け渡し紀州へ移ることで終結するが、顯如の長男である教如は徹底抗戦を主張し、大坂にとどまって戦い続けた。このときの対立が東西本願寺の分立を招くのだが、やがて教如も大坂を退去する際に寺内町から出火し、大坂本願寺のみならず一向宗の本拠として繁栄した寺内町も全て焦土と化したのだった。こうして大坂寺内町は壊滅するが、その自治的運営方法は近世へと受け継がれ、商業都市大坂の基盤となってゆく。

一向宗をようやく制圧し、天下統一を目前にした織田信長も本能寺の変によって倒れ、信長の天下統一の夢を引き継いだのが羽柴秀吉であった。秀吉は天下統一事業を様々な政策でもって押し進めていくが、最もビジュアル的にそれを示すものは、全国支配の自らの拠点とした京都・大坂の大改造であり、その膨大な土木工事はまさに秀吉の「天下人」としての象徴であった。天正11年(1583)9月、秀吉は大坂城築城に着手し、まず本丸が竣工された。ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスによると工事に従事する数は月に2、3万人、後には5万人にも達したという。そして天正13年(1585)4月、着工からわずか2年足らずで完成した本丸はいくつもの曲輪からなり、5層からなる天守閣は本瓦葺きで鯉瓦や軒瓦、飾り瓦には金箔が貼られた壮麗なものであった。同年7月、関白の地位に上り詰めた秀吉は、本丸を囲む二の丸工事に着手する。この工事は本丸のおよそ5倍ほどに大坂城の規模を拡張する大規模なものであったが、同時に京都では旧内裏跡の内野に聚楽第の建設が並行して進められており、さらには九州平定の大軍をも動かしていた。天正15年(1587)9月大坂城から聚楽第に移った秀吉は、翌年陽成天皇の行幸を仰ぎ、天下に秀吉の世であることを誇示したのであった。

一方大坂では、本丸・二の丸の築城と並行して城下町の建設も着々と進められていった。天正11年

(1583)には、熊野街道で結ばれた四天王寺・住吉・堺を城下町と直結させるため、大坂城と四天王寺を結ぶライン上に平野郷の住民を強制的に移住させた。これによって天王寺付近まで町屋が建ち並び、堺は大坂の外港として機能することとなる。秀吉の大坂城下町建設は当初、遷都を視野に入れた壮大な構想ものであり、内裏と五山並びに都の主要寺院の移転が計画されていた。その用地として新たに中島(現在の天満)の開発をはじめ城下の北端と南端には、それぞれ天満東寺町、八丁目口の寺町が建設され、大坂の大改造が次々と行われていった。結果的に大坂遷都は実現しなかったが、大坂寺内町を越える規模の都市基盤が整備されつつあった。

京都では秀吉が皇居の大修理を天正19年(1591)には完成させ、さらに公家・武家・寺院の移転、屋敷替えに伴い新たに短冊型の町割も行われた。そしてこれら全てを包括する御土居が同年4月に完成したことによって、秀吉の首都としての京都大改造は終了し、新たな都として甦ったのだった。

京都大改造を終え、関東・東北を平定した秀吉は、名実ともに天下統一を成し遂げ、天正19年(1591)には関白職を秀次に譲り太閤となる。文禄3年(1594)、秀吉は伏見城の築城と並行して、大坂城の城郭を強化するため惣構の建設を命じた。これによって北は大川、南は空堀、東は猫間川、西は新たに掘削した東横堀によって画された広大な大坂城下町が完成する。惣構に囲まれた内町は商工業者で賑わい、大きく繁栄するのだった。

こうして完成した大坂城下町は、都市として順調に発展していたが、慶長3年(1598)、病床の秀吉は新たに三の丸の築造を命じたのだった。この工事は惣構内に三の丸を築いて大名屋敷を伏見から移転させるため、すでにあった町屋を新たに惣構の外に整備した船場へ移すという大規模なものであった。船場には現在も「太閤下水」として残る下水網が整備されており、船場の開発の計画性の高さを伺うことができる。同時に天満も新たに天満堀川が掘削されるなど城下町の整備、拡張が行われ、船場、天満は城下町として発展し、内町と合わせて後の大坂三郷の繁栄の下地を形成する。

同年8月、秀吉は伏見城にて62年の生涯を閉じ、慶長19年(1614)の大坂冬の陣では、徳川家康の知略によって本丸を除く堀は全て埋められ、翌年の大坂夏の陣でついに難攻不落を誇った大坂城も、豊臣氏の命運とともに灰燼に帰したのだった。

廃墟と化した大坂だったが、元和6年(1620)から10年の歳月をかけて松平忠明が徳川幕府の畿内および西国支配の拠点として本丸と二の丸を復興する。しかし、それは膨大な盛土に象徴されるように豊臣期の面影を完全に払拭したものであり、豊臣期の遺構は地下深くに眠ることとなる。復興は旧市街地の再興にとどまらず、新たに船場の西側は木津川沿岸まで、南は道頓堀沿岸まで開発され、大坂は幕府の直轄都市として拡張整備される。道頓堀が元和元年(1615)に完成したのははじめ、元和～寛永年間(1615～1644)に集中して江戸堀川、京町堀川、海部堀川、長堀川、立売堀川、薩摩堀川など次々と開削され、さらに貞享元～3年(1684～1686)淀川河口の直流を妨げていた九条島を幕府主導によって開削して新川(安治川)を通したことによって市中の洪水を緩和し、水運の発達と町場の拡張を促し、水の都が成立したのだった。諸大名は中之島や堂島の川辺に蔵屋敷を設け経済活動の拠点とした。また寛永11(1634)年には三代将軍家光が大坂に入り、市中の地子免除を打ち出し、商工業者の集住を促した。その結果市街地は北組、南組、天満組に組織された大坂三郷と呼ばれ、18世紀中頃の最盛期には人口40万人を誇る商都として繁栄する。

一方、大坂の統治体制は大坂城主である徳川将軍にかわって有力な譜代大名が大坂城代として派遣され、その配下に二名の定番、二名の大番頭、四名の加番が大坂城警備役人として常駐し、二名の町奉行

が町政を取り仕切った。定番や町奉行の下にはその家来達のほか、下級役人として多数の与力と同心が組織され、大坂城付近の旧三の丸跡などに居住した。貞享4年(1687)の古地図によると、現在の大阪府警本部や府庁一帯は、京橋口定番松平縫殿頭乗次家中屋敷および同与力屋敷などに占められている。また古地図にみえる谷町筋以西、東横堀川以東の内淡路町、内本町などは、かつての豊臣期の惣構の内側といういわゆる「内町」意識の名残で今日まで町名に残っている。

寛文5年(1665)、落雷によって大坂城天守閣は焼失し、慶応4年(明治元)幕末の動乱の中、本丸から出火した火は城中大火となり再び大坂城は落城する。その後大坂城域とその一帯は、古代より重視されてきた立地条件から大阪鎮台や大阪砲兵工場など軍施設が立ち並び官有地となり、三の丸跡にも第三高等学校(後の京都大学)の前身である舎密局が設置される。大阪鎮台は明治21年(1888)、第四師団と改称され、大阪は軍都として色合いを強めていった。昭和6年(1931)には軍用地の中心に全額市民の浄財によって大阪城天守閣が再建されるが、日増しに不安が募る時代に秀吉期の繁栄の再来を願ったものであった。やがて太平洋戦争も終戦を目前にして、東洋一の軍事工場とうたわれた大阪城一帯は激しい爆撃を受け、徳川期の建築物も多くが焼失した。終戦後、辛くも戦火をくぐり抜けた天守閣と中部軍区司令部は、新たに大阪城天守閣博物館と大阪市立博物館に生まれ変わり、大阪城一帯は史跡公園として整備され都心のオアシスとなって今に至る。

III 大坂城跡の調査

先述したように、戦前大坂城とその一帯は軍施設が立ち並び、終戦直後は昭和23年(1948)まで米軍に接収されていたため、発掘調査が実施されるようになったのは昭和34年(1959)以降のことである。それ以後、今日まで城郭および城下町において数多くの調査が行われ、ビルが林立する市街地の地下からそれらの規模や構造だけでなく城下町を支えた人々の様々な暮らしが明らかになりつつある(図5・表2)。

昭和34年(1959)に実施された調査は、歴史学・考古学・建築史学・土木工学・地質学などの専門家によって組織された大坂城総合学術調査団によるものであった(5-214)。この調査では地下約7.3mを上場とする高さ4m以上の石垣が発見された。当初、この石垣は野面積で貧弱なものであったため、大坂石山本願寺期のものも考えられたが、その後のボーリング調査と合わせてこの石垣が豊臣期大坂城本丸の石垣であることが確実となり、現在の大阪城の地下深くに豊臣期の遺構が眠っていることが明らかになった。1984年から実施された城内配水場改良工事に伴う調査では、大坂夏の陣の焼土層に覆われた本丸跡の丸、中の段地表面のほか、高さ6mにも及ぶ詰の丸外郭廻り石垣などが検出されている(5-213)。豊臣期本丸に関しては、このような発掘調査以外にも絵図や文献史料が豊富でその規模や構造はおおよそ解明されつつある。

しかし、二の丸は平和資料館建設に伴う調査で南面する石垣が検出されたのみで不明な点が多い(5-77)。さらに三の丸となると文献史料も少なく、かつては二の丸や惣構と混同されることもあった。しかし、1980年渡辺武氏によって大坂冬の陣における大坂城の構造と東西両軍の配陣の概略を描いた『偃台武鑑』が発見され、二の丸、惣構とは別に独立して三の丸が存在していたことが明らかになった。発掘調査においても『偃台武鑑』の記載とほぼ一致する位置で石垣が検出され(5-97・105・198・218)、『偃台武鑑』の信頼性を高めている。また三の丸内部の調査も進展し、府立大手前高校校舎新築に伴う

調査では、三の丸築造前後の二時期の地表面が検出され、三の丸築造を境にした土地利用の差が判明した(5-215)。

惣構内部においても大坂夏の陣で焼け落ちた土蔵や武家屋敷が発見され、町屋や武家の日常生活の一端をかいま見ることができた(5-106・125)。労働センター建て替えに伴う調査では、夏の陣で焼失した武家屋敷の遺構だけでなく桔梗文鬼瓦が出土し、加藤清正もしくは清正ゆかりの屋敷と推定されている(5-129)。

城下町にあたる船場地域で発見された約330点を数える魚市場に関連する荷札木簡は、商都「船場」の実態に迫る発見であり、大きな注目を集めている(5-284)。近年では天満地区においても造幣局を中心に調査が進展しており、秀吉が招いた天満本願寺の実態や、天満地区の開発の状況が明らかになりつつある。

註

- 1 大阪城本丸南端ライン以北は、1:10000地形図(平成3年発行)より作成し合成した。上本町以南の台地西縁は急傾斜地であるため、部分的に等高線は2m間隔である。なお今回使用した大阪地形図には標高5m以下の等高線は記載されていなかったが、標高点の数値をみる限り、図中の上町台地の東西には標高3~5mの平地が広がっていることがうかがえる。



図5 既往の調査地点

参考文献

- 1 『難波宮址の研究』(研究予察報告第1) 1956 難波宮址研究会
- 2 『難波宮址の研究』(研究予察報告第2) 1958 難波宮址研究会
- 3 『難波宮址の研究』(研究予察報告第3) 1960 難波宮址研究会
- 4 『難波宮址の研究』(研究予察報告第4) 1961 難波宮址研究会
- 5 『難波宮址の研究』(研究予察報告第6) 1970 難波宮址研究会
- 6 『森の宮遺跡第1・2次調査報告』1972 森の宮遺跡発掘調査団
- 7 『難波宮跡研究調査年報』(1971) 1972 難波宮址顕彰会
- 8 『難波宮跡研究調査年報』(1972) 1973 難波宮址顕彰会
- 9 『難波宮址研究調査年報』(1973) 1974 難波宮址顕彰会
- 10 『難波宮跡第75次調査説明会資料』1976 高連大阪東大阪線難波宮跡調査会
- 11 『難波宮跡第93次調査説明会資料』1976 高連大阪東大阪線難波宮跡調査会
- 12 『森の宮遺跡第3次調査概報』1976 大阪市教育委員会
- 13 『難波宮跡研究調査年報』(1974) 1976 難波宮址顕彰会
- 14 『難波宮跡第100次調査説明会資料』1977 高連大阪東大阪線難波宮跡調査会
- 15 『難波宮跡発掘調査概報』高連大阪東大阪線難波宮跡調査会
- 16 『昭和53年度難波宮跡緊急発掘調査報告書』1980 大阪市文化財協会
- 17 『難波宮址の研究』(第7) 1981 大阪市文化財協会
- 18 『昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1981 大阪市文化財協会
- 19 『難波宮跡研究調査年報』(1975~1979.6) 1981 難波宮址顕彰会
- 20 『大坂城三の丸跡』1 1982 大手前女子大学
- 21 『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983 大阪市文化財協会
- 22 『大坂城三の丸跡』2 1983 大手前女子大学史学研究所
- 23 『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1984 大阪市文化財協会
- 24 『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1984 大阪市文化財協会
- 25 『難波宮址の研究』(第8) 1984 大阪市文化財協会
- 26 『特別史跡大坂城跡』1985 大阪市文化財協会
- 27 森毅「[船場]道修町の発掘調査」『葦火』5 1986 大阪市文化財協会
- 28 『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1986 大阪市文化財協会
- 29 『大坂城惣構・西町奉行所跡発掘調査概要』1986 大阪府教育委員会
- 30 松尾信裕「玉造小学校内で発見された酒造遺構」『葦火』9 1987 大阪市文化財協会
- 31 鈴木秀典「発掘された豊臣期大名屋敷」『葦火』11 1987 大阪市文化財協会
- 32 松尾信裕「豊臣氏大坂城発見の孔児棺」『葦火』8 1987 大阪市文化財協会
- 33 『大坂城跡(OS87-40)発掘調査現地説明会資料』1987 大阪市文化財協会
- 34 『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1987 大阪市文化財協会
- 35 『豊田日生ビル新築に伴う近世魚市場跡発掘調査現地説明会資料(AZ87-5)』1987 大阪市文化財協会
- 36 『中央館(仮称)新築工事に伴う大坂城跡発掘調査現地説明会資料(OS87-78)』1987 大阪市文化財協会
- 37 『特別史跡一、大坂城跡2』1987 大阪市文化財協会
- 38 八木久栄「[永禄五天]のへら描きのある丸瓦」『葦火』16 1988 大阪市文化財協会
- 39 森毅「[船場]出土の木製人形など」『葦火』12 1988 大阪市文化財協会
- 40 松尾信裕「大坂城三の丸に見つかった防衛施設」『葦火』15 1988 大阪市文化財協会
- 41 森毅「大坂城三の丸出土の金箔瓦」『葦火』13 1988 大阪市文化財協会
- 42 宮本佐知子「大坂城跡出土の秤と鏝」『葦火』12 1988 大阪市文化財協会
- 43 森毅「大阪府大坂城跡一、大阪市道修町の町屋の調査」『日本考古学年報』39 1988
- 44 植木久「発掘された豊臣時代大坂城二の丸の堀」『葦火』17 1988 大阪市文化財協会
- 45 『大坂城跡3』1988 大阪市文化財協会
- 46 『平和資料館(仮称)建設に伴う大坂城跡発掘調査現地説明会資料』1988 大阪市文化財協会
- 47 『追手門学院小学校校舎建替に伴う大坂城跡(OS88-78)現地説明会資料』1988 大阪市文化財協会
- 48 『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1988 大阪市文化財協会
- 49 『第4合同庁舎建設計画に伴う大坂城跡発掘調査(OS87-112)現地説明会資料』1988 大阪市文化財協会
- 50 『大坂城三の丸跡』3 1988 大手前女子大学史学研究所
- 51 田中清美「豊臣期武家屋敷出土の桔梗紋鬼瓦」『葦火』18 1989 大阪市文化財協会
- 52 藤田幸夫「豊臣氏大坂城三の丸から出土した桃山時代の刀」『葦火』22 1989 大阪市文化財協会

- 53 森毅「豊臣時代の犬の土人形」『葦火』23 1989 大阪市文化財協会
- 54 『難波宮跡大坂城跡発掘調査中間報告』1989 大阪市文化財協会
- 55 『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1989 大阪市文化財協会
- 56 『大阪市中央体育館地域における難波宮跡・大坂城跡発掘調査第3期(NW89-1)1次調査現地説明会資料』1989
大阪市文化財協会
- 57 『よみがえる中世』2 1989 平凡社
- 58 清水ひかる「豊臣時代の板留め溝」『葦火』28 1990 大阪市文化財協会
- 59 森毅「上町にあった豊臣前期の大名屋敷」『葦火』27 1990 大阪市文化財協会
- 60 伊藤純「大坂夏の陣の証人」『葦火』23 1990 大阪市文化財協会
- 61 『住友銅吹所跡発掘調査(DB90-1)現地説明会資料』1990 大阪市文化財協会
- 62 『住友銅吹所跡発掘調査(DB90-1)第2回現地説明会資料』1990 大阪市文化財協会
- 63 『難波宮跡大坂城跡発掘調査中間報告』2 1990 大阪市文化財協会
- 64 『佐賀藩大坂蔵屋敷船入り石垣発掘調査現地説明会資料(OS90-75)』1990 大阪市文化財協会
- 65 『大阪市中央体育館地域における難波宮跡・大坂城跡発掘調査第3期(NW89-1)2次調査現地説明会資料』1990
大阪市文化財協会
- 66 『大阪市中央体育館地域における難波宮跡・大坂城跡発掘調査第3期(NW89-1)3次調査現地説明会資料』1990
大阪市文化財協会
- 67 『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1990 大阪市文化財協会
- 68 『大坂城跡発掘調査概要』2 1990 大阪府教育委員会
- 69 『中世末から近世のまち・むらと都市』1990 埋蔵文化財研究会
- 70 黒田慶一「球状の銚型」『葦火』32 1991 大阪市文化財協会
- 71 南秀雄「大坂城下町出土の符櫛の駒」『葦火』30 1991 大阪市文化財協会
- 72 藤原里香「日本にきたポルトガル向けの青花大皿」『葦火』34 1991 大阪市文化財協会
- 73 宮本佐知子「梵字瓦からみた中世の大坂」『葦火』35 1991 大阪市文化財協会
- 74 『大阪市中央体育館地域における発掘調査(NW91-5)現地公開資料』1991 大阪市文化財協会
- 75 『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1991 大阪市文化財協会
- 76 『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1991 大阪市文化財協会
- 77 『旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告』1991 大阪市文化財協会
- 78 『第10回 大阪の歴史を掘る』1991 大阪市文化財協会
- 79 『大坂城跡発掘調査概要』1991 大阪府教育委員会
- 80 『大坂城跡の発掘調査』1 1991 大阪文化財センター
- 81 森毅「大坂で使われたベトナム製陶磁器」『葦火』41 1992 大阪市文化財協会
- 82 伊藤純「大坂の陣のころのうつわ」『葦火』41 1992 大阪市文化財協会
- 83 宮本佐知子「大坂城跡の分銅」『葦火』41 1992 大阪市文化財協会
- 84 松尾信裕「道修谷から道修町へ」『葦火』39 1992 大阪市文化財協会
- 85 『難波宮址の研究』9 1992 大阪市文化財協会
- 86 『大坂城下町跡発掘調査(OJ92-18)現地説明会資料』1992 大阪市文化財協会
- 87 『平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1992 大阪市文化財協会
- 88 『第11回 大阪の歴史を掘る』1992 大阪市文化財協会
- 89 『大坂城跡の発掘調査』2 1992 大阪文化財センター
- 90 森毅・豆谷浩之「船場商人の屋敷跡」『葦火』42 1993 大阪市文化財協会
- 91 伊藤純「大坂城下町のベネチアングラス」『葦火』42 1993 大阪市文化財協会
- 92 岡本良一『大坂城』1970 岩波書店
- 93 村川行弘『大坂城の謎』1970
- 94 松尾信裕「船場成立以前」『ヒストリア』139 1993
- 95 森毅「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」『ヒストリア』139 1993
- 96 『大坂城跡の発掘調査』3 1993 大阪文化財センター
- 97 『大坂城跡の発掘調査』4 1994 大阪文化財センター
- 98 『天満本願寺跡発掘調査報告』1 1995 大阪市文化財協会
- 99 渡辺武「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について」『大坂城の諸研究』1982 名著出版
- 100 松尾信裕「豊臣期大坂城の規模と構造」『大阪市文化財論集』1994 大阪市文化財協会
- 101 松本啓子「豪族の邸宅?—清水谷町の調査から—」『葦火』43 1993 大阪市文化財協会
- 102 松本啓子「大坂出土のオレンジ色絵壺」『葦火』45 1993 大阪市文化財協会

- 103 伊藤純・金村浩一「上町台地にあった焼物工房」『葦火』46 1993 大阪市文化財協会
- 104 佐藤隆「前期難波宮朱雀門? 跡の調査」『葦火』47 1993 大阪市文化財協会
- 105 『森の宮遺跡II』 1996 大阪市文化財協会
- 106 河村健史「大坂城出土の蒔絵の香道具」『葦火』49 1994 大阪市文化財協会
- 107 積山洋「古代難波の外来系土器」『葦火』50 1994 大阪市文化財協会
- 108 越智済「森の宮の地下にうもれた遺跡」『葦火』48 1994 大阪市文化財協会
- 109 平田洋司「弥生時代の森の宮遺跡」『葦火』48 1995 大阪市文化財協会
- 110 松尾信裕・積山洋「河内川の岸辺から一天王寺区宰相山遺跡出土の縄文土器一」『葦火』63 1996 大阪市文化財協会
- 111 『第12回 大坂の歴史を掘る』 1993 大阪市文化財協会
- 112 『近畿ブロック埋文情報』1
- 113 南秀雄「豊臣から江戸時代の町屋の発達—船場道修町の調査から」『葦火』48 1995 大阪市文化財協会
- 114 『近畿ブロック埋文情報』2
- 115 佐藤隆・宮本佐知子「前期難波宮朝堂院の調査」『葦火』60 1996 大阪市文化財協会
- 116 『大坂城跡の調査』6 1996 大阪府文化財調査研究センター
- 117 『近畿ブロック埋文情報』6
- 118 『近畿ブロック埋文情報』10
- 119 平田洋司「谷町筋にあった大坂城三の丸の西端」『葦火』71 1997 大阪市文化財協会
- 120 平田洋司「埋められた箱と台車」『葦火』73 1998 大阪市文化財協会
- 121 『近畿ブロック埋文情報』11
- 122 宮本佐知子「後期難波宮朝堂院東第2堂」『葦火』72 1998 大阪市文化財協会
- 123 『近畿ブロック埋文情報』12
- 124 佐藤隆・李陽浩「巨石を用いた前期難波宮の石組み溝」『葦火』73 1998 大阪市文化財協会
- 125 佐藤隆・李陽浩「池状水溜め、水溜め木枠」『葦火』74 1998 大阪市文化財協会
- 126 天野太郎「大坂石山本願寺寺内町プランの復原に関する研究」『人文地理』48-2 1996
- 127 積山洋「上町台地の北と南」『大阪市文化財論集』 1994 大阪市文化財協会
- 128 『熊野・紀州街道—論考篇—』 1987 大阪府教育委員会
- 129 『熊野・紀州街道—調査報告篇—』 1987 大阪府教育委員会
- 130 『新修大阪市史』第一巻 1988 大阪市
- 131 『新修大阪市史』第二巻 1988 大阪市
- 132 『新修大阪市史』第三巻 1989 大阪市
- 133 『天満本願寺跡発掘調査報告II』 1997 大阪市文化財協会
- 134 『天満本願寺跡発掘調査報告III』 1998 大阪市文化財協会
- 135 京嶋覚「難波地域出土の土師器とその地域色」『韓式系土器研究』II 1989
- 136 田中清美「上町台地北部出土の韓式系土器」『韓式系土器研究』II 1989
- 137 田中清美「上町台地北部地域出土の韓式系土器と異形須恵器」『韓式系土器研究』IV 1993
- 138 『古代を考える 難波』 1992 吉川弘文館
- 139 『大阪平野のおいたち』 1986 青木書店
- 140 『よみがえる中世』2 1989 平凡社
- 141 『まちに住まう 大阪都市住宅史』 1989 平凡社
- 142 『大阪府史』第一巻 1978 大阪府
- 143 『大坂城下町跡I』 1994 大阪市文化財協会
- 144 黒田慶一「大坂城跡の『てつほう』木簡」『葦火』58 1995 大阪市文化財協会
- 145 松本啓子「海を渡ってきた壺—いわゆるトラディスカント壺—」『葦火』58 1995 大阪市文化財協会
- 146 伊藤純「大坂城下町 北浜でみつかった茶屋」『葦火』70 1997 大阪市文化財協会
- 147 上田正昭「荒陵寺と難波吉士」『古代探求』 1998 中央公論社
- 148 『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1993 大阪市文化財協会
- 149 『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1995 大阪市文化財協会
- 150 『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1996 大阪市文化財協会
- 151 『難波宮址の研究』10 1995 大阪市文化財協会
- 152 『近畿ブロック埋文情報』8

表2 既往の調査成果1

番号	地区	地点名・記号	調査番号	田地表の高さ	古代以前	中世	豊臣前期	豊臣後期	豊臣	江戸前期	備考	文献番号
2	A	AZ	87-04	T.P. 1.1mで豊臣	6〜7世紀土器、成平永智10枚、奈良-平安土器・土師・製瓦土器、黒輪陶器	14世紀瓦器類、15世紀土師器類			羽口、滑蓋、スラダ			55
3	A	AZ	87-05			池、板組溝	礎石建物3、埋蔵、地下風 (2.0×4 m)			ブシ式、鳥居札、人形100、家口、備前瓦8		55
4	A	AZ	87-06	T.P. 1.5mで豊臣	奈良人面蓋土器	室野土器			羽口、滑蓋、スラダ			55
5	AZ	88-02							礎石、柱欠、瓦葺、溝3部、瀬戸穴壇瓦葺中出土			75
6	D	AZ	90-02						礎石建物、溝、井戸			78
7	D	MP	1		溝波宮下層建物・溝、子持石勾玉、白瓦				土埃、溝、井戸、粘壁文瓦、建物			11、14、17
8	D	MP	2		溝波宮下層建物、白瓦	瓦器			金箔瓦、溝			14、17
9	D	MP	4						粘壁文瓦、溝、柱瓦			17
10	E	MP	5		溝波宮下層建物	瓦器			井戸、瓦葺め、粘壁文瓦、溝、柱欠			11、14、17
11	E	MP	6		溝波宮下層建物、須知器、土師器	瓦器類13〜14世紀、13世紀土師器土師、瓦葺瓦葺、中世溝・溝列			大和瓦、火鉢、V字溝 (幅2.0m)、人形首	折敷三の字文瓦		11、14、17
12	E	MP	8	O.P. 14.5m			水瓦礎石建物、板溝、石列		備前大瓦			11、14、15、17
13	D	MP	9						礎石、1.2m幅蓋溝、瓦排水施設			11、14、15、17
14	E	MP	中央墓土D区		白瓦				黒瓦葺、三つ巴文瓦、葺掛物、井戸、溝、柱欠			17
17	E	MR	82-04	T.P. 1.4mで豊臣山、T.P. 2.0m付近で古墳	弥生中期土坑、須知器				砂層			24、100
20	E	MR	86-03	G.L. -0.5mで豊臣					溝?		南東から北西へ下降 (人為的)	48
21	E	MR	86-06						東田溝		北へ傾斜	48
22	E	MR	94-08		彌生土器・溝波り器類・板石遺構・灰土器・瓦、前期弥波宮周溝付遺構	彌生土器・板石遺構・天目溝、土師器類、大瓦土器品			金箔瓦	古瓦水遺構 (1556年以降)	河内溝から河内溝への変遷	105
23	E	MR	001		奈良瓦				金箔瓦 (銅)、天下一段銅衝粘壁文器、葺掛、更西溝 (刀掛部付、加工面付板瓦)		分鏡合館	12
24	E	MR	002・003		彌生土器、弥生土器、奈良瓦	室野井戸・瓦葺羽蓋			金箔瓦 (銅・粉)		分鏡合館	6
25	E	MR	141		瓦器	瓦器						16

表2 既住の調査成果2

番号	地区・区号	地名 調査番号	田地表の高さ	古代以前	中世	豊臣前期	豊臣後期	費臣	江戸前期	備考	文献番号
27	B NW	80-13		奈良瓦							100
29	D NW	81-02	T.P.13.7mで豊臣、 12.7mで地山	6世紀須磨郡、7世紀土器・瓦 奈良瓦	魚住跡跡					開析否	21
30	NW	81-04		6世紀埴輪、奈良瓦・瓦・甍 瓦土器・土器土器「木家」						南側人工的に 掘り下げ(比 高1~2m)	21
31	D NW	81-12	G.L.-0.5~-0.6mで地山							期印石	21
32	E NW	81-18		奈良瓦						北へ傾斜	21
34	D NW	81-31		奈良瓦・須磨郡 前期須磨宮御所院門東半部						西へ傾斜	23
35	D NW	81-05		須磨郡、埴輪	13世紀瓦住跡跡					柱次、土坑	23
36	D NW	81-20	T.P.18mで地山							江戸初期の埴輪 層	23
37	C NW	81-06、 27・34									23
38	D NW	81-10	T.P.19.5mで地山	難波宮建物	室町土器						28
41	D NW	81-48	G.L.-0.6mで地山	弥生石溝、奈良瓦							28
42	E NW	81-55									28
43	E NW	81-17		奈良瓦							34
44	D NW	81-19	T.P.20mで地山								34
45	D NW	81-33		須磨郡	瓦器						34
46	D NW	81-02	北部T.P.21mで地山	難波宮関係瓦列、須磨郡に奈良瓦 層込み						東面する石垣	76、100
47	D NW	81-12		前期難波宮建物							48
51	D NW	87-18	T.P.17mで地山	古須磨郡							55
52	D NW	87-45	T.P.17.5mで地山	須磨郡、瓦							55
53	D NW	88-02									57
54	D NW	88-04	G.L.-1.6mで豊臣								57
55	D NW	88-10		奈良瓦・土器	室町瓦						57
56	D NW	88-18	T.P.20.5mで地山	前期難波宮御所院回廊							57
57	D NW	89-03	G.L.-0.9mで豊臣	難波宮建物							75
58	D NW	90-02	T.P.14.5mで地山	前期難波宮建物							76
59	NW	90-07		特式系土器							78
60	D NW	90-20	G.L.-0.65mで豊臣	古代建物	前北溝、金箔瓦						78
61	D NW	90-29	T.P.17.1mで豊臣、 16mで地山	難波系土器、初期須磨郡、7世 紀成土1m	畿土、北に谷					前北溝列(N-5-B) 製鉄、磨治	76
										北へ傾斜	
										石切り層	

表2 既往の調査成果3

番号	地区	地名 ・記号	調査番号	田舎表の高さ	古代以前	中世	鎌倉前期	鎌倉後期	豊臣	江戸前期	備考	文献番号	
62	D	NW	91-03	G.L.-0.4mで地山	懸崖石建物							87	
63	D	NW	97-03		前部懸崖石礎み溝、水溜み、水堀、舟形木製店、重層瓦葺瓦				井戸、建物、瓦葺、五輪塔、石造石列			122-125	
64	D	NW	97-12		後部懸崖石礎み溝、重層瓦葺瓦							121、122	
65	NW	金谷塚				室町瓦						8	
66	NW	森の宮ラ ンプ				室町瓦	東西石垣			『室町藩中守墓 圖』木版		7	
67	D	NW	003		14世紀瓦器群			大和瓦土釜				1	
68	D	NW	007		奈良建物	室町瓦、焼土、宋鉄、石版、中世溝	陶磁器検定埋め穴					2	
69	D	NW	010-011		飛鳥瓦、懸崖石建物、7世紀土器、建物遺構							4	
70	D	NW	010		懸崖石建物							3	
71	D	NW	009-010 021-031		前期・後部懸崖石建物、7世紀土器、灰芥				漆溝			5	
72	NW	043				瓦葺、中世溝					越中町570	8	
73	NW	055						東西2段石垣?				9	
74	E	NW	056			瓦葺						9	
76	D	NW	067	G.L.-2mで地山	奈良瓦	瓦葺						25	
77	E	NW	071			瓦葺、溝				石組溝		19	
78	E	NW	077									19	
79	D	NW	081-1									25	
80	D	NW	082-34									25	
81	C	NW	087-111		後部懸崖石礎							25	
82	D	NW	090									19	
83	D	NW	094									19	
84	D	NW	097		幼層赤土、白土、焼土系土器、5世紀土器、白鳳瓦、後部懸崖石建物	瓦葺				羽口など		西へ傾斜、各19、25	
85	E	NW	115									19	
86	D	NW	116-2									19	
88	D	NW	122	G.L.-1.5~3.4mで地山	焼土系土器、6~7世紀遺跡、奈良瓦	瓦葺						南西へ傾斜 (北高1.2m)	19、25
90	D	NW	124-2			瓦葺						19	
91	E	NW	124-8	G.L.-1mで地山								19	

表2 既任の調査成果 4

番号	地区・記号	地点名・記号	調査番号	田地表の高さ	古代以前	中世	豊臣前期	豊臣後期	豊臣	江戸前期	備考	文献番号
92	E NW	127								徳川初期盛土2m		19
93	D NW	137			奈良寺・瓦							19, 16
95	E NW	141			弥生土器、土師器、須恵器	瓦器						19, 16
97	E NW	153			奈良瓦							19, 16
98	D NW	155		G.L.-1.6mで地山	後期弥生宮造物・溝・井戸							25
99	E NW	158-8		G.L.-2.8mで地山		室町瓦						28
100	D OJ	所警塚									1850年調査	8
101	A OS	52-18			7～9世紀土器	13～15世紀土器、中層井戸				ペネタアンガラ	東から西へ傾斜	86, 143
102	C OS	81-03								石瓦		21
105	C OS	83-15		T.P.5mで豊臣		本朝寺原礎石造物・溝				瓦器遺構、建物、備前大甍、羽口	遊手門小	38, 45, 69
106	B OS	85-28					町屋(東西南北の裏側、竪立建物、甍、埋蔵3列、前)			石瓦で覆われた土蔵、井戸ゴミ穴、西入り口		69
109	B OS	86-06		T.P.11mで地山			幅7m厚さ3mの瓦西縁					100
110	B OS	86-17		G.L.-2.3mで豊臣								48
111	A OS	86-20			14～15世紀表瓦、南北溝		竪立柱建物1棟油濁造戸、工所			礎石造物2、ゴミ穴、糸巻柱300		27, 43, 69
113	C OS	86-34					竪立柱建物、溝					69
114	B OS	86-35			奈良瓦	14世紀瓦器甍、羽葺、土成				金箔瓦		48
115	B OS	86-70		T.P.14mで地山、14.5mで礎石	7世紀土器		南北溝				北縁87-39	55
116	B OS	87-013		T.P.13.2mで礎石、12.7mで地山	6世紀須恵器	瓦器片						55
118	B OS	87-018		T.P.9.5mで地山	奈良井戸							55
120	B OS	87-026		T.P.11.8mで豊臣								55
121	B OS	87-029		T.P.12.5mで地山	奈良井戸・製塩土器・瀬部土器							55
122	B OS	87-033		T.P.5.6mで地山	焼輪、7世紀土器、埴輪、下駄	室町棟、白磁四耳壺、瓦器羽葺					119と同一	55
123	B OS	87-037		G.L.-1.5mで地山	7～9世紀瓦						井戸出土金箔瓦	55

表2 既往の調査成果 5

番号	地区・地点名	調査番号	旧地元の成さ	古代以前	中世	鎌倉前期	鎌倉後期	幕臣	江戸前期	備考	文献番号
124	B O S	87-089						東へ傾ける溝、建物			69
125	B O S	87-040						商家別荘 (40×50m以上)、10~11遺構、建物7			33
126	B O S	87-056		須野部、瓦	瓦器					北から南への段	55
127	B O S	87-066	T.P.11.5mで地山	6世紀末須野部						北東から南西へ下溝	55
129	B O S	87-078						南北築地基礎、瓦葺礎石建物、灰室、刀ケマスタ、門、竈戸、相模瓦葺瓦			36、51、69
132	C O S	87-112	T.P.18.5mで豊臣					溝、木を埋め敷			40、69、100
133	C O S	87-120						井戸、溝、耕作地	燻		69
134	D O S	87-124		7世紀土器、建物							55
137	B O S	87-132		須野部、土器器				石籠東西溝			67
138	A O S	87-153						礎石建物、溝跡 (0.8m)、小溝			69
139	C O S	87-155	T.P.15mで地山	須輪、須野部、土器器	瓦器					西へ下溝	67
141	B O S	88-002									67
142	B O S	88-008							木溝		76
143	E O S	88-012	T.P.3.9mで豊臣	T.K33須野部							67
145	D O S	88-029	G.L.-0.8mで地山	須野部							67
146	B O S	88-031	G.L.-1.2mで豊臣	7~9世紀土器、和同開珎、開元通寶、藤平瓦葺	14世紀瓦器硝、溝、耕作溝						67
147	B O S	88-056	T.P.3.5~4 mで大塚瓦の溝、2.7mで豊臣					大塚瓦			69、69、100
148	B O S	88-073						須野部瓦			67
150	B O S	88-083	T.P.14.7mで豊臣	奈良瓦・溝				幅4.5m東西溝			67
152	B O S	88-113						陶磁器			76
155	B O S	89-007	T.P.8mで地山	7世紀土器、黒色土器	中世耕作地幅45m、瓦器			グミ穴多数径1m、交互築、赤白水、溝幅1m、築土境		溝	75
156	C O S	89-008								溝	58、69
159	B O S	89-024								溝へ下溝	75

表2 既住の調査成果6

番号	地区・区号	地名・町名・番地	田舎表の高さ	古代以前	中世	幕末前期	幕末後期	遺 跡	江戸前期	備考	文献番号
161	B OS	89-041	T.P.4.5mで遺臣		13世紀山茶樹、斜面地砂	盛土、石垣、東の平 形向と西の丘陵に築 堀と瓦葺み	三の丸盛土1m、礎 石建物、巴形瓦		観音、橋		75
162	B OS	89-068	T.P.13.5mで遺臣、 12.5mで堀山						2層小室遺 礎 立柱建物		75
164	B OS	89-068	G.L.-1.7mで遺臣						大聖土坑、井戸		75
165	C OS	89-074							柱列		69
169	C OS	89-062	G.L.-2mで遺臣		土塁状	瓦多量、御膳所跡、 土垣跡石、井戸、6 溝溝、大聖ゴミ穴	南北柱列、西側にゴ ミ穴、東西側 御膳 所跡、居坪、芝野、 礎石				75
170	OS	89-148							礎土、礎石建物、礎 石跡型		78
171	OS	89-149			本願寺附礎石						78
173	D OS	90-007	T.P.16m付近で遺臣			用北溝					100
174	OS	90-015									78
175	B OS	90-060	T.P.4mで遺臣								76
176	OS	90-027									78
177	OS	90-031			中世土室井戸、溝						78
178	OS	90-047			中世礎石建物						78
179	B OS	90-059		7~9世紀建物、礎石、井戸							69、78
180	OS	90-051		奈良建物跡、溝、土坑							78
182	OS	90-064									78
183	OS	90-066									78
185	OS	90-063	G.L.-1mで遺臣								78
186	OS	90-108									78
187	B OS	90-109	G.L.-2.6mで中世								76、78
189	OS	90-112		5世紀埋輪 埴輪、7~8世紀土器、奈良遺・ 奈良三彩	本願寺附溝						78
190	B OS	90-142	T.P.5.8mで遺臣			配石					87
191	B OS	91-016	T.P.12mで堀山	須藤邸、土御邸、古代瓦、礎石、 礎骨							87

表2 既往の調査成果 7

番号	地区	地名・記号	調査番号	田舎者の高さ	古代以前	中世	奈良前期	奈良後期	奈良	江戸前期	備考	文献番号
192	B	OS	91-020	G.L.-2mで墓区	土器			南北溝、井戸、土坑				87
193		OS	92-006・012	T.P.9.5mで墓区、8.5~6mで地山	中世包合層		金箔瓦、土埴、礎石遺物、竊盜石遺物、瓦					88
194	B	OS	93-025		弥生中期木製品				滑石敷、瓦			111
195	E	OS	94-020									109
196	E	OS	94-074					ゴミズ、箸、漆器、陶磁器、陶土製品片	石瓦		河内舟から河内郡への交通	106, 108
197	C	OS	96-002					礎石遺物、木積、刀の鞘群				117
198	C	OS	97-001					箸、鏝、滑石瓦、茶碗瓦、金箔瓦	銅銭、分銅、箸、台車		三の丸外郭溝	123~125
199	A	OS						高級陶磁器	分銅			82, 88, 90
200	A	OS			本田、谷?							82
201	A	OS										83
202	B	OS	92					地神銅型				70
205		OS	92	04地点	古代瓦	中世井戸						88
206		OS	92	05地点								89
207		OS	92	07地点		木田?		武家屋敷			墨屋	88
208		OS	92	08地点								88
209		OS	92	10地点								88
210	B	マ/ド A			溝?	町屋、道路、側溝、 屋地		魚名木簡大量				88
211	C	大塚城 堀口		G.L.-6mで墓区				銅、鉄、釘、魚骨木製品、金箔瓦、木簡			遊手門付院	20
212	C	大塚城 堀		G.L.-5mで墓区	古墳部跡					石瓦		37
213	C	大塚城 本丸		G.L.-7.1~7.3mで墓区	須磨部、土器	瓦器	石瓦	金箔瓦、石積層			徳川墓土6m	26
214	C	大塚城 高院										52, 53
215	C	大塚城 女子					町屋、道路、跡方溝、 石瓦、瓦葺、ゴミ穴					57
216	C	大塚城 手口		G.L.-4mで墓区	古墳-奈良前期部	室町石敷・木積・柱列	町屋、道路、遺物	武家屋敷				22, 50
217	C	中央体 西			神式土器、5世紀大型埴物、 5世紀米型炊込器、前期・中期 彌生土器、火葬器、築基土器	溝、畑	大名屋敷、金箔瓦				附へ板付	54, 63, 65
218		婦人セ ンター			礎石遺物?							57

表2 既任の調査成果8

番号	地区・記号	地名・記号	調査番号	田楽表の高さ	古代以前	中世	鎌倉前期	鎌倉後期	豊臣	江戸前期	備考	文庫番号
219	C	新庁舎	新庁舎								20%以上	79
220	C	新庁 1 A	鎌倉末土器、5~7世紀須恵器、埴輪、古代瓦	T.P.15mで地山				大名屋敷、武家屋敷		3~4m盛土	北へ傾斜	80
221	C	新庁 1 B				井戸		堀				80
222	C	新庁 2 B	7世紀包含層、埴口、スラグ、新羅磁磁器	T.P.15.5mで地山		青磁、瓦器		礎石群				89
223	C	新庁 2 C	土坑、柱穴、溝、須恵器、奈良瓦			溝、青磁		武家屋敷				89
224	C	新庁 2 D	奈良瓦			井戸		堀				89
225	C	新庁 3 A	弥生土器、若宮丁、子持丸瓦、銅輪、切縁瓦、埴口、スラグ、緑釉土器	T.P.11.5mで地山		瓦器類		大名屋敷		堀		96
226	C	新庁 3 B	緑釉陶器、奈良瓦	T.P.12.5mで地山		井戸、瓦器類、土釜		埋没層、池		堀	北へ傾斜	96
227	C	新庁 3 C						堀				97
228	C	新庁 4 A		T.P.18mで地山								97
229	C	新庁 5 A	6世紀埴輪、7~8世紀建物、古代建物	T.P.20.8mで地山		15~16世紀陶器・青磁類・瓦器類		武家屋敷・金箔・茶	四重石仏			本書
230	C	新庁 5 B	神式瓦土器、製磁土器、葦、葦草風陶器、数珠玉、奈良瓦	T.P.17.2mで地山				碓瓦				116
231	C	新庁 5 C										本書
232	C	新庁 6 A	弥生土器、子持丸瓦、白玉、銅輪土器、埴口、葦、陶器、火葬具、須恵器磁器	T.P.19.3mで地山								116
279	CD			T.P.20m以上で地山		T.P.10mで中世末のV字溝(幅9m、深さ4.1m)					9地点あり	100
280	D		7世紀建物、堀									101
281	B									オランダ魚松屋		102, 111
282	B									京都文徳本街		103
283	D		前朝時代宮内門?							東照宮、米屋店、薬店		104
284	A		神式瓦土器							魚市場本置		107, 111
285	B		神式瓦土器									107
286	E		備文土器(須賀・前朝・晩期)、弥生前期土器、丸瓦、埴輪、7世紀末礎石建物									110
287	A		弥生後期土器、7~8世紀須恵器・土師器		15~16世紀新牛溝				礎石、コシ穴、井戸			112, 113

表2 既住の調査成果9

番号	地区・記号	地名 ・記号	調査番号	旧地表の高さ	古代以前	中世	豊臣前期	豊臣後期	豊臣	江戸前期	備考	文献番号
288	D	大塚女 学院			前醍醐宮御院西第6室							114, 115
289		瀬田町 1丁目					「てはう」木構					144
290		北浜							トラヴィスカント壁 茶屋			145 146
291	E	MP			弥生土層、奈良時代片戸							111
292	E	MP	121		豊政宮下層建物、溝							
293		MP	7						井戸、溝			
294		MP										
295	MP	756地区 中央トレ			豊政宮下層建物、土層層							
296	MP	中央盛土 A							建物			
297	MP	中央盛土 B・E							溝			
298	NS	中央盛土 C							溝、柱穴			
299	D	NW	50-14		奈良瓦、7～8世紀土層、12世 紀土層層							76
300	D	NW	03・04		5世紀後半土層或土坑、ON 必須土層、前期・後期豊政宮重 物、新羅土層							151
301	D	NW	035		豊政宮下層建物・溝、前期・後 期豊政宮建物							151
302	D	NW	036		前期・後期豊政宮建物							151
303	D	NW	037		前期・後期豊政宮建物（後期大 規模）				軒文・巴文垂瓦			151
304	D	NW	039		四天王寺御間戸瓦、後醍醐法 名建物							151
305	D	NW	132		土層層、須知層							16
307	D	NW	134		土層層、須知層							16
308	D	NW	135	G.L.-1.2~1.9mで埋山	土層層、須知層							16
309	E	NW	136		6世紀瓦輪、8世紀羽釜、奈良 瓦						奈良への傾斜、 6世紀以降埋 積	16
311	D	NW	148		隅文陶研土層、弥生土層、7世 紀須知層・土層層						階へ下降	16
312	D	NW	150		豊政宮建物							16
313	D	NW	156		豊政宮下層土坑、豊政宮建物							16

表2 既往の調査成果10

番号	地区・記号	地名・記号	調査番号	田地表の高さ	古代以前	中世	幕臣新田	幕臣後継	幕臣	江戸編入	備考	文献番号
315	B	NW	158-1									18
318	D	NW	158-7	G.L.-1.5mで地山	難波石建物				瓦			18
330	D	NW	160		後継難波宮遺構、須置器							18
321	D	NW	163		新田難波宮瓦西溝、後継難波宮土坑					礎石跡		18
324	D	NW	169	T.P.15mで地山								18
325	D	NW	170	G.L.-0.5-1mで地山	後継難波宮遺構・溝				金箔瓦、木構、下駄			18
326	D	NW	171									18
327	D	NW	172		難波宮下層建物、須置器、土師器							25
328	NW	80-12			後継難波宮遺構・溝							25
329	D	NW	82-05		新田難波宮竪立柱跡、奈良瓦							24
330	D	NW	82-16		新田難波宮遺物							24
331	D	NW	82-41		難波宮建物							21
332	D	NW	82-11		難波宮建物、須置器、土師器							148
333	D	NW	80-08		難波宮建物				溝			149
334	D	NW	80-21		難波宮遺物、奈良瓦							149
335	D	O J	94-7	G.L.-1.5mで地山	難波宮溝							150
336	A	O J	92-19	G.L.-2.0-2.3mで欄干						区画溝(幅2.5m)、土坑		148
337	A	O J	92-22		区内家、7世紀須置器、平安朝期土坑・柱穴・藍色土器・防蝕陶器・「長平瓦葺」・瓦・瓦器					礎石、柱穴		148
338	A	O S	92-36		奈良瓦					柱穴、土坑		148
339	O S	90-130			飛鳥-奈良柱穴・溝					冪口、須置器		78
340	D	O S	92-07		6世紀末-7世紀遺物・大溝・礎石・溝・ゴニ穴・冪口							後継の礎石? 148
341	C	O S	92-41		轉式瓦土器				簡平			148
342	E	O S	90-07	T.P.10mで地山	奈良-奈良柱穴・土器、土瓦、奈良冪口・割瓦土器							149
343	B	90-20			須置器					土坑、遺物、溝		149

表2 既往の調査成果目録

番号	地区	地点名・記号	調査番号	目地表の高さ	備考	文獻番号
1	A	A.Z	87-03			100
15	E	MR	80-02	T.P.4m付近で黄色粘土の地山		100
16	E	MR	80-03	T.P.4m付近で石灰岩		100
18	E	MR	84-06	T.P.1m付近で17層配砂層		100
19	E	MR	85-03	T.P.1.5m付近で中世		100
25	E	NW	80-03	T.P.8m付近で地山	南へ傾斜	100
28	E	NW	80-25	T.P.8.3m付近で地山		100
33	D	NW	81-30	T.P.14.5m付近で地山		100
38	D	NW	84-11	T.P.19.5mで地山		28
40	D	NW	84-42	G.L.-0.8mで地山		28
48	E	NW	86-25	T.P.12.5m付近で地山		100
49	D	NW	87-02	T.P.14mで地山		58
50	D	NW	87-07	T.P.14m付近で地山		100
75	C	NW	022		北→テラス	13
87	D	NW	117		西へ傾斜	19
88	D	NW	119			19, 25
94	D	NW	138	G.L.-0.4mで地山		25, 16
96	D	NW	142	G.L.-1.5mで地山, T.P.11mで地山	北へ傾斜	19, 16
102	E	O.S	81-02	T.P.17.5mで地山		100
104	E	O.S	83-03			100
107	B	O.S	85-36			100
108	C	O.S	86-02			100
112	B	O.S	86-22	T.P.3.5mで大塚夏の間, 2.2mで崖 定石山崩		100
117	B	O.S	87-014	T.P.9m付近で地山	122と同ー	100
119	B	O.S	87-023			58
128	B	O.S	87-069			100
130	D	O.S	87-081	T.P.2.8~3.4mで地山		100
131	B	O.S	87-100	T.P.3.8m付近で大塚夏の間, 2.2~ 3.5mで地山		100
135	D	O.S	87-135	T.P.18m付近で地山		100
136	B	O.S	87-147	T.P.12.4m付近で地山		100
140	B	O.S	88-001	T.P.13.7m付近で豊田集落, 13.2m で豊田新崩		100
144	E	O.S	88-023	T.P.12m付近で地山		100
149	A	O.S	88-082	T.P.0.2mで大塚夏の間		100
151	D	O.S	88-097	T.P.18.5m付近で地山		100
153	C	O.S	88-121	T.P.15m付近で大塚夏の間, 13.8m付 近で地山		100
154	B	O.S	88-006			100
157	B	O.S	89-019			100
158	B	O.S	89-023			100
160	B	O.S	89-000	T.P.11~12mで地山		100
163	C	O.S	89-064			100
166	C	O.S	89-080			100
167	B	O.S	89-086			100
168	C	O.S	89-090	東T.P.12.4m, 西11.5mで地山		100
172	O.S	89-001			谷斜面	78
181	C	O.S	90-008		田代集落	100
184	O.S	90-075				77
188	B	O.S	90-110	T.P.14.9mで地山		69, 76
203	B	O.S				
204	O.S					
223	C	101-1		全額T.P.8.5mで地山, 南部ではT.P. 6mでも確認できます	地山が急激に南に 低くなる	100
224	E	101-2		T.P.3.5m付近で地山		100
225	E	105		北端T.P.12~13m付近で地山, 南部 は6m低い	南へ傾斜	100
226	E	110		T.P.16m付近で地山		100
227	E	114-5		T.P.12.3mで近世, 地山はT.P.10m より低い		100
228	E	120		T.P.7~8m付近で地山		100
229	E	123		T.P.13.5m付近で地山	現状は北に低くなる 急斜面	100
240	E	124-11		T.P.12~13m付近で地山		100
241	E	124-3		T.P.6mでも地山確認できます		100
242	E	124-4		T.P.5m付近で地山		100
243	E	124-7				100
244	E	133		T.P.3.5m付近で地山		100
245	E	140		T.P.4.5m付近で地山		100
246	E	141		T.P.19.5m付近で地山		100
247	D	NW	152	G.L.-0.6mで地山		100, 16
248	E	154-2				100
249	E	154-3		T.P.10m付近で地山		100
250	E	158-1		T.P.2mより下位にも近世		100
251	E	158-2		T.P.11m付近で地山		100
252	D	159		G.L.-0.5mで地山		100
253	E	2 L.M.R 3-4		T.P.3.2m付近で豊田, 西端ではT.P. 4.2mで地山		100

表2 既往の調査成果12

番号	地区	地名 ・記号	調査番号	旧地表の高さ	備考	文献番号
254	E		43・47・56		東へ急傾に低くなる	100
255	E		55			100
256	E		55			100
257	D		57	T. P. 17.3m付近で断崖谷地帯		100
258	E		70	T. P. 14m付近で地山	北へ傾斜	100
259	E		77			100
260	E		81	T. P. 7 m付近で地山		100
261	E		83	T. P. 2.7m付近で観文一秀生の瓦礫		100
262	E		84	T. P. 12~13m付近で地山		100
263	D		85	前面T. P. 15mで地山		100
264	E		86	T. P. 2 m付近で地山	北へ傾斜	100
265	E		88	T. P. 12.5m付近で地山		100
266	E		91-1	T. P. 5 m付近で地山		100
267	E		91-2	T. P. 8 m付近で地山?		100
268	E		91-3		南へ傾斜	100
269	E		91-4	T. P. 2 m付近で地山		100
270	E		93・100・112	T. P. 18.8mで地山		100
271	E		93・100・112	T. P. 14mで地帯		100
272	E		93・100・112	T. P. 13m付近で大塚夏の間		100
273	E		93・100・112	T. P. 13m付近で大塚夏の間	北へ傾斜	100
274	D		96	G.L. -0.5mで地山		100
275	E		96	T. P. 12.5m付近で断崖な砂の地山		100
276	C		府高水調査地	T. P. 19m付近で地山	219と同一	100
277	C		府高水調査地			100
278	E			T. P. 10m付近で近巻初瀬、T. P. 8m付近に古式帯		100
305	D	NW	080	G.L. -2.6~-7.5mで地山	東へ傾斜	25
310	D	NW	140	G.L. -0.6mで地山		16
314	D	NW	137	G.L. -2~-0.5mで地山		18
316	D	NW	136-2	G.L. -0.65mで地山	南へ傾斜	18
317	E	NW	136-4	G.L. -1 mで地山		18
319	D	NW	159	T. P. 23.5mで地山	南へ傾斜	18
322	D	NW	165	G.L. -0.7~-1.2mで地山	南へ傾斜	18
323	E	NW	168	G.L. -1.7mで帯区	南へ傾斜	18

第2章 調査に至る経緯と経過

I 調査に至る経緯

大阪府が設置されたのは、慶応4年(1868)年5月2日(旧暦)である。同年9月8日(旧暦)に明治に改元されるが、この前後堺県や河内県、摂津県などの設置や統廃合が目まぐるしく繰り返され、最終的に現在の管轄地になったのは明治20年11月4日の奈良県の分離によってである。

最初の府庁舎は、旧東区内本町橋詰町にあった西町奉行所跡(跡地は現マイドームおおさか)を使用した。明治5年、新庁舎を官民共同費用で建築する事が決議され、明治7年7月7日、旧西区江ノ子島上之町に府下最初の西洋式建築と言われた府庁新庁舎(跡地は大阪府立産業技術総合研究所に利用されていたが、移転後は未利用)が落成し、同19日に開庁式が執り行われた。

江ノ子島の府庁舎は、大阪府の発展に伴って事務量が增大したため手狭になり、幾回か増築を行った。ところが、第1次世界大戦以降の大阪の急激な発展により事務量がさらに急増したため、新庁舎の建設が急務となった。そこで、旧東区大手前之町の大坂城三の丸跡地にある不要な陸軍用地を買収し、新府庁用地とする事になった。大正10(1921)年12月の通常府会で建設が決定し、同12(1923)年5月12日に着工、同15(1926)年10月31日に竣工し、同11月7日に開庁式が執り行われている。

この府庁本館は、大阪大空襲をくぐり抜け、今なお威容を誇っているが、建築後70余年を経て老朽化が著しい。また、第二次大戦後、本館も手狭になったため、別館や労働部庁舎など幾つかの建物を増築したが、庁舎の分散に伴う事務の非効率化が目立つ事になった。一方、政治・経済をはじめとする各分野のグローバル化やOAの進展に伴う高度情報化社会への対応など、府庁舎に新たな機能を付加しないと府民サービスに影響を及ぼす事態にもなってきた。

そこで、大阪府は、府庁舎の建て替えを計画し、昭和62(1987)年9月に「庁舎・周辺整備計画」を発表した。翌63(1988)年9月、基本計画提案競技要綱と参加者を発表し、平成元(1989)年4月に黒川紀章建築都市設計事務所作品を最優秀と決定、発表した。同10月、大阪府庁舎・周辺整備基本計画が策定され、大阪府庁舎周辺整備事業として府庁舎の建て替えが開始される事になった。この建て替えは、現在の府庁舎の機能を保持しながら、同じ敷地内に新庁舎を建築するという難工事であり、既存建物の撤去と仮移転、庁舎建築と入居を繰り返す計画になっている。最初に建築されるのは、新別館となった。

この府庁の敷地は、豊臣大坂城の三の丸跡地に当たる。新庁舎は、駐車場など大規模な地下施設の設置により地中深く掘削されるため、三の丸関連の遺構やその上に築城された徳川大坂城の遺構を大きく破壊する事になる。そこで、建て替え事業を遂行する大阪府総務部庁舎周辺整備室と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議が行われ、財団法人大阪文化財センターにより発掘調査を実施する事になった。平成2(1990)年4月1日、庁舎周辺整備室とセンターの間で同年度末までを工期とする第1次調査の委託契約が締結された。以降、平成8(1996)年3月29日まで5次の発掘調査が継続された。

ところが、府財政の悪化に伴い、新別館完成以降の庁舎建設スケジュールが見直され、行政棟や議会議場の建設が遅延された。発掘調査も中断されたため、平成9年度より3ヵ年の予定で1～5次分の遺物整理事業が行われる事になった。ただ、府財政のさらなる悪化により、平成11年度の遺物整理事業が中断される事態になり、脱稿直前の本報告の刊行も見送られた。その後、版下などの劣化を考慮し、平成12年度に印刷費用のみ予算化し、平成14年6月をもって本書を刊行した。

II 調査の経過と成果の概要

1、調査の方法と経過

調査は大阪府庁の業務を妨げない条件の下、建築計画にあわせて進められ、平成2年度からの6年間で14カ所の調査区が設けられた。なお調査区の名称は、(調査回次：平成2年度を第1回目の回次とした) + (同じ年度内でのトレンチ記号：A・B・C・・・) + (同じ調査区内で細分したトレンチの番号：1・2・3・・・) で表現される。

1 A調査区は整備地区の南西隅に位置する。面積は約4300㎡である。試掘により、豊臣期の遺構面が地表下約6メートルの深さにあることが判明したため、必要な土留め工法として、調査区を外周部と中央部に分けた二重矢板方式が採用された。調査は外周部の江戸時代面からおこなわれ、その後土留め作業と併行しながら、外周部の豊臣期面でおこなわれた。中央部の調査は外周部の埋め戻し工程にあわせて西側からおこなわれ、その成果の一部を2月16日の現地説明会で公開した。

1 B調査区は大手通りと上町通りの交差点南西に位置する。面積は約1800㎡である。1 A調査区と同様に豊臣期の遺構面までの深さが5mを越える状況が考えられ、二重矢板方式の土留めが採用された。

1 C調査区は大手通りの北側で、職員会館(当時)の建つ南側の広場の一部にあたる。江戸時代面のみの調査である。

2 B調査区は大阪府・庁舎周辺整備地区のほぼ中央に位置し、北は大手通りに面する。面積は782㎡である。本調査区は労働部庁舎として前年度まで使用されていた場所であり、地表下約2mまではその基礎で削平されていた。また調査の過程で、調査区の中央部以南で基盤層の浅くなる状況がわかり、土留め2段梁の設定は北部のみとなった。4～10月の調査である。

2 C調査区は大阪府庁別館の東にあたり、北は大手通りに面する。面積は1718㎡である。なお中央部の450㎡は地下室により削平されていた。調査は北側からすすめられ、近世以降で3面、中世以前で2面の遺構検出面を確認した。なお、中央部から南は基盤層が地表下2m未満で確認され、一方北端からは谷が確認された。5月～1月の調査である。

2 D調査区は周辺整備地区の東部中央に位置し、平成2年度調査の2 B地区に北接する。面積は1798㎡である。工程の調整により南北を2分し、それぞれについてさらに東西に2分したトレンチが設定された。前年度調査区と同様に、江戸時代面の下には層厚3～4mにおよぶ江戸時代初期の盛土が確認され、その下から豊臣期の堀などが検出された。11月～3月の調査である。

3 A調査区は整備地区の南西隅に位置し、南を1 A調査区に接する。面積は2781.3㎡である。前年度までの調査成果により、古代を含めた3 A調査区の最終掘削深度は地表面から11.5m下がるが予測されたため、必要な土留め工法としてアースアンカー方式と栈橋を用いた矢板切り梁工法が採用された。なお周辺整備事業全体の工程調整により3 A・3 B調査区は平成5年度6月までを工期とする債務事業となった。調査は建築工事との工程調整により南北の2分割でおこなわれ、南側のトレンチ(6・7)は4～12月、北側のトレンチは12～6月のスケジュールとなった。

3 B調査区は1 A調査区の西に位置する。面積は746.8㎡である。調査区の中央部分にビルが建てていたため江戸期の面は大半が失われていたが、豊臣期から下の遺構は、夏の陣の焼土層を含めてほとん

ど残されていた。12～6月の調査である。

3 C調査区は周辺整備地区の北東で、2 D調査区に東接する。アースアンカー工法で土留めをおこなった。面積は1392.4㎡である。調査区の西半部は基盤層が高く、土留め段数が減少した。4～10月の調査である。

4 A調査区は整備地区の北ほぼ中央部に位置し、西を2 C調査区、東を2 B調査区に接する。面積は3219.1㎡である。調査は掘削土の仮置き場を確保するために南北に分割した形でおこなわれ、調査地は北側のトレンチから順次移動していくこととなった。このうち1～10トレンチの東西面と11～15トレンチの東面については、2 B・C調査区で打設した鋼矢板をそのまま土留めに再利用した。一方11～15トレンチの西面については、隣接するトレンチの調査結果により基盤層までの深さが1 m程度であることがわかったため、斜面による土留めとなった。また16トレンチについては、隣接する地区の遺構検出面が深い位置にあることが予測できているため、鋼矢板による土留めをおこなった。

5 A調査区は整備地区の南中央に位置し、東は大阪市中央体育館、西は大阪市立東中学校にはさまれている。両者共に大阪市文化財協会による調査がおこなわれ、前者からは江戸時代の武家屋敷・豊臣前期の大名屋敷が発見されている。敷地の中央部は旧営林局舎の地下室および基礎で削平されており、またその周囲も同舎建築に際しておこなわれた掘削工事により削平されている。面積は3219.1㎡である。なお全体の地形は概ね平坦であるが、北東部に谷地形をもち、西部は上町台地の西斜面として緩やかに下降している。面積は2562.1㎡である。

5 B調査区は整備地区のほぼ中央に位置し、東は5 C、南は3 A調査区に接する。面積は2399.5㎡である。試掘により、調査区の北は11層までの深さが2 m程度、南は深さ8 m程の3 A調査区に接していることがわかったため、3 A調査区に近い幅約8 mの部分については切梁工法による土留めを、その北側については一方が自立、一方がアースアンカーによる土留め工法をとった。

6 A調査区は5 B調査区の北に位置し、東は4 A調査区、北は2 C調査区に接する。掘削土の仮置き場と調査前の調整により、北から分割してトレンチを設定した。地形は概ね平坦である。

なお紙数の関係で詳述することができなかったが、5 C調査区は面積は1758.3㎡である。

2、正報告書作成の方針とその仕様について

平成2年から6年間にわたり調査されてきた延べ調査面積は11万8261㎡、遺構数は1万以上、撮影枚数は6×7サイズで約2万枚、出土遺物の登録番号は19381であり、それより推定される遺物の総破片数は50万点を越える。これらの成果の一部についてはさきにあげた調査概要1～6と図録1～5で既に年度毎に公開してきたが、当然ながら遺構の総合化と、とくに木製品と三の丸築造以前の一括資料の整理が不足していた。

そこで本書では、限られた作業延べ時間の中、これらの膨大なデータに対し、現状の研究課題に対し、十分ではないが不足することのない事実報告の完了をめざし、1 A～6 Aの全ての調査区を大きく以下の5時期に分けて編集し、各時期の特徴を示す遺構を軸に、その説明をおこなうこととした。

第1期・・・徳川氏による大坂城再築後（基本的に後述の第4層上面）

第2期・・・大坂夏の陣集結後、徳川大坂城再築直前（第5層除去後に現れる畑などの耕作面）

第3期・・・三の丸築造以降、大坂夏の陣直前（いわゆる豊臣後期または三の丸期）

第4期・・・豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（いわゆる豊臣前期または惣構期など）

第5期・・・豊臣大坂城築造以前（古代を含む）

これまでの概要報告で述べてきたように、これらの時期区分は当該調査区を通じて確認できる膨大な盛土層を基準としている。ところが最も南に位置する5A調査区ではそれらの盛土層がみられず、厳密な層位関係において、それ以外の調査区と共通して扱うことができない状況にある。そこで本書では、5A調査区については調査区内での遺構の先後関係はあるものの、それをそのほかの調査区と連動させることは止め、便宜的には第3期に該当する節に属させてはいるが、それらと切り離して第2期～第4期を区分することなく説明することにした。さらにこれは5A調査区の遺物についても同様であるため、5A調査区の遺物は、本来三の丸築造以前の時期に属するものであったとしても、一部を除き便宜的に、

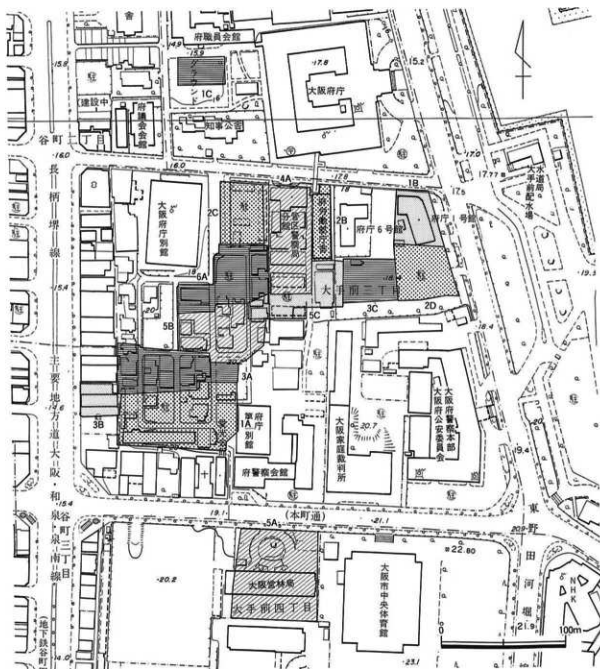


図6 調査区的位置

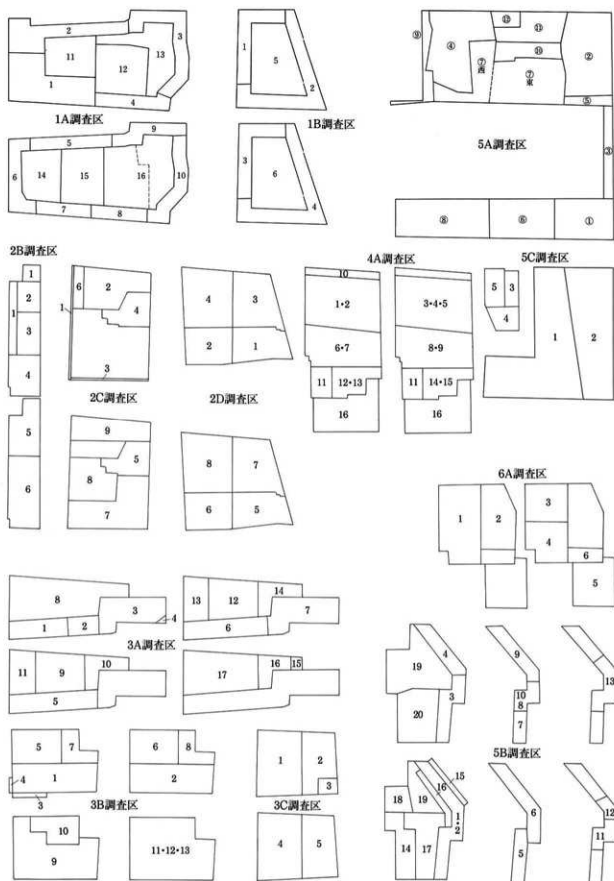


図7 トレンチ配置図

三の丸築造以後の説明の中で触れられることになっている。ご了承ください。

遺構の説明については、これらの条件を前提として、各時期の最初に全ての調査区を統合した遺構配置図をインデックスとして設け、この図に概要報告に掲載している遺構とその後の整理で報告されることになった遺物を出土した遺構を優先し、それらに通し番号を付与している。個々の遺構の名称・国土座標・深さについてはこの図に続く表を参照されたい。また遺構の説明は、おおむね井戸・溝・土坑・ピット・その他の順としているが、多少の前後はある。

さらに紙数の関係で概要報告に提示しながら非掲載となった遺構と、部分的な遺構配置の詳細図もある。その大部分は現時点での当該遺跡研究に支障となるものではないと考えるが、その一部が将来屋敷地の内部構造の解明に障害となる可能性も否定はできない。その意味で本書は、厳密にはこれまでの概要報告の全てを網羅し、それを更新したものとは言えず、研究者各自の問題意識において、必要に応じた概要報告との併用はおこなっていただきたい。

加えて概要報告にも本書にも掲載しきれないデータは、各種の図面として膨大に蓄積されている。本書の刊行によって遡及される問題に対して、これらのデータの活用方法が今後の課題として残されている。そしてもちろんこの問題が遺構図面だけに留まるものでないことは言うまでもない。

遺物については、これまでの概要報告の中で、とくに木製品と三の丸築造以前の一括資料が不足していたため、公開してきたデータの編集に加え、平成9年度の前半で漆器および木製品の実測（534点）を、後半では三の丸築造以前の一括資料（293点）の実測を集中的におこない、これを補った。

なおこれらの遺物の内、土器・陶磁器・漆器類の掲載は、共存関係と、とくに出土状況を重視する観点から、原則的に井戸・溝・土坑・建物関連などの順としている。

またそれと同じ視点により、大坂夏の陣の焼土の整地層と考える6 A層と、その上に堆積している徳川大坂城築造に際しての盛土（5層）の狭間で検出された遺物（5・6層）については、調査者による無意識の選別を避け、遺物に帰属する時期の厳密性を高めるために、全て5層の形成された1629年までに現位置を離れたものとして、豊臣期ではなく、それ以降の時期の出土状況あつかいとす。第1期として掲載している遺物に、豊臣期の遺物が多く含まれているのは、その理由による。

なお遺構の部分で述べたような公開できるデータ量の物理的な限界をできるだけ軽減するために、本書では原則的に遺物個々の煩雑な説明は避け、データリストとしての観察表を多く作成した。これにより図化できなかった遺物についても、写真または法量および分類の特徴などにより、最低限の情報は公開できたものとする。これらが第3章-2-(6)の各表にあたる。

文章については、第1章の位置と環境が小林和美、第2章Iの調査に至る経緯が赤木克規、第3章-2-(4)-B-aの内、基盤層直上で検出され、明らかに豊臣期でも古い段階あるいはそれ以前に遡る可能性も考えられる5 A土器群については福岡正春が、各時期の金属製品と羽口については新海正博が執筆し、下駄と焼塩壺の分類については佐藤友美が鋤柄を補助した。

そしてそれ以外の全ての文章の編集は鋤柄がおこなった。ただし概要報告での内容に異同の無い場合は、遺構・遺物共にできるだけそのデータを再録することに努めたため、本来の執筆分担についてはそれぞれの時点の概要報告に遡るのが望ましいだろう。

これにより、6年間におよぶ発掘調査すべてのデータを網羅できたわけではないが、本書は現時点で求められる当該時期の研究に対し、この時期最大量の情報を提供できたものとする。

第3章 調査成果

I 考古学的調査

1、層序

(1) 基本層序

大坂城跡の層序の特徴は盛土の繰り返しによる造成の歴史に表現される。そこで層序の整理においては、複数確認される遺構面および生活面を、その時代の基盤層とされた盛り土（b層）と、生活面上に堆積した層（a層）（ここでは、流水などで形成された二次的な包含層ではない当時の生活の過程で形成された、という意味で「生活包含層」という用語を用いた。）の二層一組で考えることにしている。

ただし、8層については造成の規模が小さく、上記2層の峻別が実際には不可能な場合が多いため、9層については当初規定した時代区分に対して、他地区の調査でそれを細分する層が確認されたため、これらの記号をそれぞれの層の細分についても用いている。

以下に述べる基本層序は、上記の条件をふまえた上で、平成2年度におこなわれた1A調査区の堆積状況をモデルに、時期的な属性を加えて編集したものである。

1層 現代の盛土。層厚は約0.5～1mである。

2層 明治後半から昭和初期の包含層と考える。層厚は約0.5mである。

3層 江戸時代後期から幕末期の包含層。層厚は約0.5mである。

4・5層 前述の整地層および盛土である。4層上面が江戸時代後期の遺構検出面である。このうち4層は生活基盤層として土質も安定しており、比較的遺物の包含も認められる。5層は無遺物状態に近く土質も軟弱な状況を目安とした。1・3A調査区などでは層厚は3～5mであるが、5A調査区では西端の谷肩部のみ明確に確認され、5C調査区では東部の傾斜面などで部分的に確認されたのみである。なお1A調査区の西端は、この盛土による段差がそのまま残され、現在もその一部は石垣として見ることができる。

6層 基本的に焼土（a層）と盛土（b層）を一組にした構成からなるが、全ての調査区で明瞭なa層が検出されるわけではない。ただし、5A調査区では3層を除去した段階で複数の焼土混じりの整地層および盛土層が確認され、これを当該層および7層に相当させた部分もある。いずれも層厚はおおむね0.1～0.2mである。

7層 基本的に生活包含層または焼土（a層）と盛土（b層）を一組にした構成からなる。いわゆる三の丸築造による盛土で層厚は

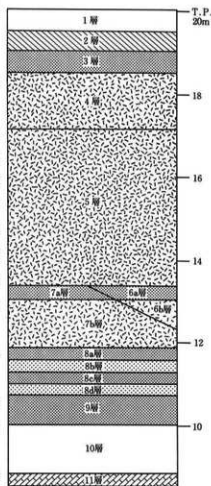


図8 基本層序模式図

1 m程である。5 A調査区では焼土混じりの盛土が相当すると考えられる。

8層 豊臣前期を構成する層として、3 A調査区ではa（新）または黄褐色砂層・a・b・c層（2 B調査区はd層まで）に分層した。ただし傾斜地形により、各層の全てが全体に認められるわけではなく、逆に谷底部にあたる3 B調査区では部分的により細分されることもあった。層厚は0.1~0.3 mである。

5 A調査区で複数の焼土混じりの整地層および盛土層として確認している。

9層 1・3 A調査区では谷の包含層として確認された。2 B調査区の堆積にならい、おおむねa（中世）、b（平安）c（7・8世紀）層の細分をおこなっている。5 A調査区では1・6・8トレンチを中心とした基盤層上面でa・c層が確認されている。

10層 6世紀後半を中心とした包含層としている。

11層 基盤層。

(2) 調査区毎の層序概要

A、1 A調査区

調査区西端に石積みが築かれているが、その掘り方には明治期の遺物が含まれており、その時期を知る手がかりになる。3層は18世紀後半から幕末の遺物を含む層であり、調査区西端には石垣などの施設をもたない。調査区全面に分布する。4層は江戸期の整地層である。場所により差はみられるが、層厚は1 m前後を測る。5層は層厚4.5 mの盛土である。

6層は焼土の整地層および生活包含層とその基盤層である。焼土の整地層は調査区の西北を中心に検出された。7層は調査区の北西部と10トレンチで、谷の埋土を基盤層として確認された。8層は10トレンチでその上面を検出し、礎石群とあわせて屋敷1とした。なお10・と6トレンチの谷斜面および、14・

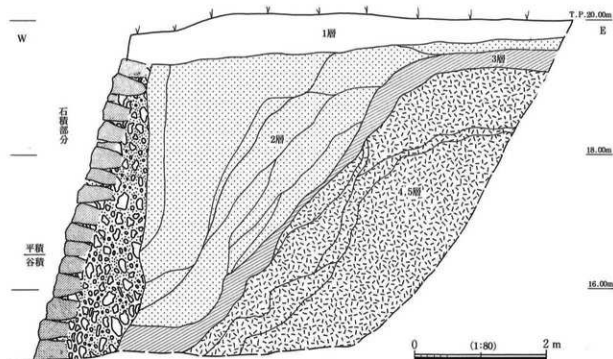


図9 1 A調査区東西縦断面図

15トレンチの谷に近い基盤層上面の窪み部分から9・10層も検出されている。

B、2D調査区

1・2層は明治期以降の層と考えられ、層厚は0.5～1m前後を測る。両層ともに軟弱な砂混じり粘土およびシルトであり、礫・材・瓦などを不均一に含んでいる。盛土または整地によるもので、遺構は検出されなかった。3層は江戸時代後期～明治初期と考えられる。層厚は0.5m前後である。やはり礫・材・瓦などを不均一に含む粘土およびシルト層である。砂混じりシルトを基調とした比較的安定した層（4層）を基盤層として、土坑・溝などが検出されている。4層は層厚が約1mほど、さらにその下にシルト、粘土のブロックがランダムに含まれる5層（層厚2～3m）が認められる。

5層除去後の状況は、調査区の東西で大きく二分される。

西半部は北側で砂層と11層のブロックを含む6b層、南側で比較的安定した11層のブロックを含む6b層がみられ、いずれもこれらが堀の埋土となっている。堀は11層を基盤とし、下層に黒色粘土と砂層からなる7層および暗灰色シルトの8層をもつ。堀埋土である6b層からの遺物の出土は僅少であり、遺物は主に7層上面および7層内から出土し、わずかに8層中からも確認されている。

東半部は北側で均一な砂層（層厚1m前後）が見られる部分、南側で複数堆積の砂層がみられる部分もあったが、大半は不整形な起伏を呈して直接11層に達している。

C、3A調査区

1～5層はこれまでの調査区と同様である。

6層は調査区の南西隅のみで確認された。溝17の埋土の一部であり、上面に焼土（a層）が堆積し、b層上面では礎石の抜取り痕跡がみられた。7層は全面で確認された。a層は北部で焼土を整地した層が広がり、南部は黒色シルトの生活包含層となっている。概ね平坦な地形である。なおb層の厚さは約2mである。

8層はa～cの3層に分けられる。ただし北から南へ下がる傾斜地形を呈するため、調査区の北側ではa層のみの確認となり、調査はa層上面およびa層掘削後の11層上面の2面となっている。また調査区の南半部ではa層の上に黄褐色砂層と黒色粘土が堆積しており、遺構は黄褐色砂層の上面からも確認されている。なお中世期に比定できる9層上面の段階で調査区の中央部に東西方向にはしる段があり、その南側の低地を埋め立てることにより平坦面を拡張していった状況が、c層～黄褐色砂層の堆積状況により観察される。

9層は大きく平安時代以降と奈良時代の層に分けられる。前者の遺構は確認されなかったが、後者は土器溜りとして生活面を調査することができた。

10層は特に調査区の東端で南東へ下降する斜面肩部で確認された。6世紀後半を中心として、鍛冶炉・土器溜りなどが検出されている。

D、3B調査区

1・2層は近代以降の盛土であり、地表面から約0.8mで3層に達する。江戸時代後期～幕末の遺物を含む3層は当該調査区で焼土層として検出された部分が多い。今後火災記録との対照が必要とされる。なお3層の層厚は約0.2mである。

基本層序で4・5層としたもののうち、本調査区では一括盛土である5層が大半を占め、江戸期の整地層である4層はほとんど確認されなかった。層厚は約1.5mである。

6層は火災整地層である6a層と盛土の6b層から構成される。6a層は調査区北東部に当たる池状

遺構（池1）の堆積部分以外はすべて確認された。6 b層は黄褐色のシルトを基調とし層厚0.5m程で池状遺構以外に堆積している。なお南端の部分は6 a層を除去した時点で奈良時代の包含層（10層）および11層がみえる。

7層は池1を形成する石垣の基盤層となっているもので、7 a層が褐色シルト、7 b層の大半は明褐色の細砂層、一部は粘土・シルトのブロックから構成される盛土となっている。ただし、7 a層は層厚が0.1m未満と薄く、確認された範囲も全面ではなかった。今回は調査区東部で検出された瓦組導水管、点在する礎石と柱痕跡によりその存在を知ることができた。なお7 b層の層厚は1.5mである。

8層はa～d層に細分され、一部はさらに細かな堆積を示す部分もあった。8 a層は、調査区北よりでは7 b層掘削後に現れる黒色粘土の下に、南よりでは7 b層除去直下にあられる。黒褐色シルトを基調とし、層厚は0.1～0.2m程である。8 b層以下は、各面の基盤層である盛土（いずれも層厚は0.1 m足らず）を除去することによって確認し、設定していった。

9・10層は青灰色シルトを基調として谷部の流路を含む。層厚は谷の中心に近い部分が最大で約1.4 mを測る。

E、4 A調査区

1～4・5層の状況は全トレンチにおいて共通する。1・2層は明治期以降の層と考えられ、層厚は0.5～0.8m前後を測る。両層ともに基本的に軟弱な砂混じりシルトであり、礫・材・瓦などを不均一に含む。2層の一部にはコークス殻が厚さ5 cm程度敷き詰められている。盛土または整地によるもので、2層上面で昭和初期の土坑が数基検出された。3層は幕末～明治初期と考えられる。層厚は0.1～0.2mを測る。堅く締まった青灰色の砂混じりシルト層である。砂混じりシルトを基調とした比較的安定した層（4層）を基盤として溝・土坑が多数検出された。4層は層厚が0.2～0.3mである。5層は明確に4層と分けることができなかったが、4層の下に粘土・シルトのブロックが含まれる層があり、これを5層とした。

6層は調査区の南側の一部のみ確認できた。炭を多量に含む青灰色粘土および砂混じりシルトである。6層特有の焼土層は見られない。この層は地山上の自然の窪みを埋めるかたちで堆積したものと考えられる。層厚は0.1～0.3m程度である。

9層は調査区の北側の一部で確認できた。検出された範囲も2×5 m程度であり明瞭な広がりには確認できなかった。層厚は0.2mを測る。

基盤層（11層）は西から東、北から南へと緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦である。

F、5 A調査区

北側調査区と南側調査区では堆積状況が大きく異なる。北側は後世の削平が著しく、全体的に基盤層までの堆積は薄い。一方、南側（特に南西側）では非常に厚い堆積が認められ、結果として多くの遺構面が確認されることとなった。

1～2層は全トレンチでみられる。近現代の整地層である。3層は江戸後期～幕末頃の焼土層で、北側の一部と南側の東部にのみ確認できる。4～5層は江戸時代の整地層である。ほぼ全トレンチで確認できるが、明瞭ではない。6～8層は豊臣期の整地及び包含層である。これらは南調査区を中心に検出され、北側では部分的に残る程度である。9層は中世～古代の包含層で南調査区を中心に検出された。北側にも僅かに分布する。なお基盤層は東から西・北から南に向け緩やかに傾斜する。

G、5B・6A調査区

谷部と丘陵部が確認され、6A調査区の全面と5B調査区の北半を占める丘陵部分では、後世の削平が著しく、全体に基盤層までの堆積は薄い。一方、5B調査区の南半にあたる谷部分では、3A～1A調査区につながる厚い堆積が認められた

1～2層は全域でみられた。近現代の整地層である。3層は江戸後期～幕末頃の焼土・炭を含む整地層である。丘陵部の中央から南側で確認できる。4～5層は江戸時代の整地層である。全域で確認でき、特に谷部では非常に厚い堆積をみせる。6～8層は豊臣期の整地及び包含層である。これらは丘陵部南側から谷部を中心に確認された。なお、丘陵部北側では4～8層の遺存状況は良好でない。9～10層は中世～古代の包含層でほぼ全トレンチで検出された。特に谷部での堆積は厚く遺物の包含量も多い。基盤層は丘陵部で東から西・北から南に向け緩やかに傾斜し、南側に広がる谷部の肩より急激に落ち込む。

表3 調査区南北縦断面土層1

1	2.5Y5/1 黄灰色 粗砂混じりシルト(礫多く含む)	61	10Y R/4/2 灰黄褐色 砂混じりシルト(須磨器・土師器・炭を多く含む)
2	10Y R/6/6 黄褐色 粗砂混じりシルト	62	10Y R/6/6 明黄褐色 砂混じりシルト・粗砂の互層
3	N5 灰色 粗砂混じりシルト(炭・焼土を多く含む)	63	10Y5/2 オリーブ灰色 粗砂混じりシルト
4	10Y R/6/3 にぶい黄褐色 シルト(炭を僅かに含む)	64	10Y5/1 灰色 砂混じりシルト(溝埋土)
5	N6 灰色 シルト	65	10Y3/1 オリーブ黒色 粗砂混じりシルト
6	10Y R/6/1 褐灰色 砂混じりシルト(須磨器・土師器を含む)	66	8 a層
7	2.5Y6/1 黄灰色 砂混じりシルト	67	5Y5/3 灰オリーブ色 砂混じりシルト(炭を僅かに含む、8 b層)
8	5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂混じりシルト	68	10Y6/1 灰色 粘土(炭含む)
9	10Y R5/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト(須磨器・土師器を含む)	69	7.5Y5/2 灰オリーブ色 粗砂混じり細砂(1~5 cm大の礫・シルトブロックを含む、下層に植物遺体あり)
10	10Y R5/2 灰黄褐色 粗砂混じりシルト	70	5Y4/1 灰色 粗砂混じり細砂(土器片を多く含む、pH埋土)
11	5Y5/1 灰色 粗砂	71	10Y7/1 灰白色 砂混じりシルト
12	10Y R5/2 灰黄褐色 粗砂混じりシルト(小礫を多量に含む)	72	7.5Y5/1 灰色 細砂・シルト(溝埋土)
13	7.5Y R/4/1 褐灰色 砂混じりシルト(焼土塊・小礫を含む)	73	2.5Y5/3 黄褐色 粗砂混じり細砂(土器片・炭を含む)
14	10Y R6/6 明黄褐色 砂混じり粘土	74	2.5Y5/4 黄褐色 中砂混じり細砂(1 cm大の礫・土器片・炭を含む)
15	10Y R5/2 灰黄褐色 粗砂混じりシルト(小礫・瓦を含む)	75	2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂混じり細砂(炭・土器片・鉄屑を含む)
16	7.5Y R/7/8 黄褐色 粗砂	76	7.5Y R5/8 明褐色 砂混じりシルト
17	10Y R5/1 褐灰色 シルト	77	10Y R5/2 灰黄褐色 砂混じりシルト
18	10Y R4/1 褐灰色 粗砂混じりシルト	78	2.5Y5/6 黄褐色 砂混じり粘土
19	10Y R5/1 褐灰色 砂混じりシルト	79	2.5Y7/6 明黄褐色 砂混じり粘土
20	7.5Y R4/3 褐色 シルト	80	10Y R5/6 黄褐色 砂混じりシルト
21	10Y R6/8 明黄褐色 砂混じり粘土	81	2.5Y6/6 明黄褐色 砂混じり粘土
22	10Y R5/1 褐灰色 砂混じりシルト(瓦・焼土・炭を含む)	82	10Y R7/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト
23	7.5Y R/7/8 黄褐色 粗砂	83	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂混じりシルト
24	10Y R7/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト	84	7.5Y R6/6 褐色 砂混じりシルト
25	10Y R5/6 黄褐色 砂混じり粘土	85	N5 灰色 粘土
26	7.5Y R6/8 褐色 砂混じり粘土	86	10Y5/2 オリーブ灰色 粘土
27	7.5Y R7/8 黄褐色 粘土	87	5Y5/1 灰色 粗砂(薄く粘土を含む)
28	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂混じり粘質シルト	88	5Y R5/6 明赤褐色 堅く締まった砂質土(細砂・粘土ブロックを多く含む)
29	5Y7/3 浅灰色 砂混じり粘質シルト(炭を僅かに含む)	89	2.5Y5/3 黄褐色 堅く締まった砂質土(3 cm大の礫を含む)
30	10Y R5/1 褐灰色 砂混じりシルト(10Y R8/2灰白色細砂ブロック・少量の炭を含む)	90	2.5Y8/6 黄色 シルト・細砂の互層(上層)、粗砂(下層)
31	2.5Y6/4~6/6 にぶい黄色~明黄褐色 砂混じりシルト	91	5Y8/6 黄色 堅く締まった砂質土
32	10Y R6/6 明黄褐色 堅く締まった砂混じりシルト	92	10Y R3/1 黒褐色 堅く締まった砂質土・粗砂
33	2.5Y5/4 黄褐色 細砂混じりシルト	93	2.5Y4/2 暗灰黄色 堅く締まった砂質土・粗砂
34	7.5Y R6/6 褐色 砂混じり粘質シルト	94	5Y3/1 オリーブ黒色 砂質土
35	10Y R5/1 褐灰色 砂混じりシルト	95	5Y3/2 オリーブ黒色 堅く締まった砂質土(粘性無)
36	2.5Y5/3 黄褐色 粗砂混じりシルト(細砂主体)	96	7.5Y3/2 オリーブ黒色 粘質土(大型の礫や瓦を多く含む)
37	10Y R4/3 にぶい黄褐色 シルト(焼土を含む)	97	7.5Y7/2 灰白色 砂質土(中粒砂が主体)
38	10Y R3/2 黒褐色 シルト	98	7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(上部で粗砂混じる)
39	10Y R6/8 明黄褐色粗砂・10Y R4/3/にぶい黄褐色シルト	99	7.5Y3/1 オリーブ黒色 粘質土(粘質弱、中粒砂を含む)
40	10Y R4/2 灰黄褐色 シルト	100	10Y4/1 灰色 中粒砂
41	2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト	101	7.5Y6/1 灰色 細砂(粘土薄く含む)
42	2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルト	102	5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(粘性弱、中粒砂を含む)
43	2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト	103	5Y4/3 暗オリーブ色 粘質土(大型礫・瓦を含む)
44	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	104	7.5Y5/2 灰オリーブ色 粘質土(粗砂を含む)
45	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	105	7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂質土
46	10Y R4/6 褐色 シルト	106	5Y4/3 暗オリーブ色 粘質土(細砂を含む)
47	10Y R5/2 灰黄褐色 中粒砂混じり細砂(小礫を含む)	107	10Y R4/4 褐色 粘質土(中粒砂を含む)
48	10Y R4/3 にぶい黄褐色 細砂(直径5 mm程度の小礫を含む)	108	10Y4/2 オリーブ灰色 粘質土(粗砂を含む)
49	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 中粒砂混じり細砂(径5.0~1 cm程度の小礫・土師器を含む)	109	2.5Y5/3 黄褐色 堅く締まった砂質土
50	10Y R8/8 黄褐色 シルト混じり細砂(10GY7/1明緑灰色シルトブロックを含む)	110	5Y4/3 暗オリーブ色 粘質土(粘性がやや強い)
51	5Y4/1 灰色 粗砂混じりシルト(10GY7/1明緑灰色粘土ブロックを含む)	111	10Y6/2 オリーブ灰色 細砂(粘性がある)
52	7.5Y R6/8 褐色 非常に堅く締まった粘土(小礫を多く含む)	112	N3 暗灰黄色 粘質土(大型礫・瓦を含む)
53	7.5Y R5/6 明褐色 粗砂混じりシルト(瓦を含む)	113	2.5Y5/3 黄褐色 砂質土(中粒砂が主体)
54	5Y5/3 灰オリーブ色 堅く締まったシルト	114	2.5Y7/6 明黄褐色 粗砂(部分的に粘土を含む)
55	10Y R5/6 黄褐色 粗砂混じり粘土	115	5B G3/1 暗青灰色 粘土
56	10Y R3/4 暗褐色 細砂混じりシルト(7.5Y R6/8褐色細砂混じりシルトブロックを含む)	116	5Y5/2 灰オリーブ色 粘質土(中粒砂を含む)
57	2.5Y R4/6 赤褐色 細砂混じりシルト	117	7.5Y4/1 灰色 粘質土(青灰色粘土ブロックを含む)
58	2.5Y5/3 黄褐色 砂混じりシルト(2.5Y7/4浅黄色粘土ブロックを多く含む、礫が多い)	118	5B G5/1 青灰色 粘土(上部に細砂がある)
59	N4 灰色 砂混じりシルト	119	2.5GY2/1 黒色 中粒砂(やや粘性あり)
60	10Y R6/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト(10Y R6/1褐灰色粗砂混じり粘土を含む)	120	5G4/1 暗緑灰色 細砂
		121	10G3/1 暗緑灰色 細砂(やや粘性あり)
		122	2.5Y8/6 黄色 堅く締まった砂質土・粗砂(木質を含む)

表3 調査区南北縦断面土層2

123	7.5Y R7/8 黄褐色 砂・シルト	191	10Y R5/3 にぶい黄褐色 シルト
124	10Y R6/3 にぶい黄褐色 粘質土(粗砂・小礫を含む)	192	10Y R4/2 灰黄褐色 シルト
125	2.5Y 6/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト	193	10Y R6/6 明黄褐色 粗砂
126	2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト(中粒砂を含む)	194	ゾラ
127	2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じり粘質土	195	5Y 8/4 淡黄色 粘質土(粗砂を多く含む)
128	5Y 7/3 浅黄色 砂層	196	5Y R7/6褐色細砂・7.5Y 7/1灰白色細砂の互層(部分的に中粒粗砂を含む)、上層はN5灰色シルト(粘性強い)
129	5Y 6/1 灰色 シルト(中粒砂を多く含む)	196	焼土層
130	10Y R4/1 褐灰色 砂混じりシルト・細砂	198	7.5Y R3/1 黒褐色 粘土(腐植物含む)
131	7.5Y 8/1 灰白色 砂層(中粒砂を含む)	199	水平堆積、粘土
132	2.5Y 8/2 灰白色 堆積層	200	粘土
133	砂と粘土の互層	201	粘土、7.5Y R4/6褐色砂混じりシルトを部分的に含む
134	10Y R4/1褐灰色シルト・10Y R6/3にぶい黄褐色細砂の互層	202	7.5Y 6/2 灰オリーブ色 シルトブロック・粗砂
135	10Y R6/4 にぶい黄褐色 粗砂(最下部に炭を含む)	203	粘土(細砂・礫砂を含む)
136	10Y R5/4 にぶい黄褐色 粗砂	204	7.5Y R4/5 褐色 砂混じりシルト
137	10Y R5/3 にぶい黄褐色 粗砂とシルトのブロック	205	10Y R4/1 褐灰色 砂混じりシルト(粘土ブロック・焼土・炭を含む)
138	10Y R6/3 にぶい黄褐色 粗砂と腐植物	206	N4 灰色 砂混じりシルト
139	10Y R3/1 黒褐色 腐植物	207	7.5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト
140	10Y R5/3 にぶい黄褐色 シルト	208	7.5Y 6/3 オリーブ黄色 粗砂混じりシルト(粗砂が主体)
141	10Y R5/6 黄褐色 粗砂・ブロック	209	7.5Y 6/1 緑灰色 細砂・シルト・中粒砂・粗砂の互層
142	10Y R4/2 灰黄褐色 シルト	210	N5 灰色 砂混じりシルト
143	10Y R4/2 灰黄褐色 シルト(瓦混じり)	211	7.5GY 4/1 暗緑灰色 木片・炭・焼土灰(粘土ブロックを含む)
144	10Y R5/2 灰黄褐色 シルト(土層層含む)	212	7.5Y 8/2 灰白色 灰下部に5mm程度の炭あり
145	10Y R4/1 褐灰色 シルト	213	5P B3/1 暗青灰色 砂混じりシルト
146	10Y R4/2 灰黄褐色 シルトブロック	214	5P B5/1青灰色シルト・5Y 8/2灰白色細砂の互層
147	N4 灰色 シルト(土層層含む)	215	N5 灰色 砂混じりシルト(腐植物含む)
148	10Y R5/1 褐灰色 砂混じりシルト(高坪含む)	216	5Y R7/6 褐色 細砂・粗砂・シルトの互層
149	10Y R5/1 褐灰色 シルト	217	10Y R8/2 灰白色 粗砂
150	10Y R6/3 にぶい黄褐色 粗砂	218	5P B6/1 青灰色 中粒砂・細砂の互層
151	10Y R6/1 褐灰色 粗砂・粗砂	219	5P B6/1 青灰色 砂混じりシルト(鉄分の影響により粘性あり)
152	2.5Y 5/4 黄褐色 粘土混じり粗砂	220	10Y 6/1 灰色 砂混じりシルト(下部に腐植物土を含む)
153	2.5Y 3/1 黒褐色 粘土混じり粗砂	221	5Y 4/1 灰色 堅く締まった砂混じりシルト(炭・小石を含む)
154	2.5Y 3/2 黒褐色 粘土混じり粗砂	222	2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混じりシルト
155	5Y 3/1 オリーブ黒色 粗砂混じり粘土	223	5Y 4/1 灰色 堅く締まった砂混じりシルト(炭・腐植物を含む、下半部は礫砂が見られる)
156	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粗砂混じり粘土	224	2.5Y 5/1 青灰色 砂混じりシルト(炭を含む)
157	2.5Y 8/4 淡黄色 細砂(7.5Y 3/1オリーブ黒色粘土を含む)	225	5Y 7/4 浅黄色 堅く締まった粗砂
158	7.5Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土	226	10GY 6/1 緑灰色 シルト・粗砂
159	7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘土(2.5Y 8/4淡黄色細砂を含む)	227	5Y 6/2 灰オリーブ色 堅く締まった砂混じりシルト
160	10Y R3/1 黒褐色 粘土混じり粗砂	228	10Y R3/1 黒褐色 堅く締まった砂混じりシルト
161	10Y R5/2 灰黄褐色 粘土混じり粗砂	229	N3 暗灰色 堅く締まったシルト
162	10Y R2/2 黒褐色 粗砂混じり粘土	230	10Y 6/1 灰色 堅く締まった中粒砂(シルトを含む)
163	10Y R5/1 褐灰色 粘土混じり粗砂	231	5Y 4/1 灰色 堅く締まったシルト
164	10Y R3/1 黒褐色 粗砂混じり粘土	232	2.5GY 8/1 灰白色 中粒砂・粗砂
165	5Y 4/1 灰色 粗砂混じり粘土	233	10GY 7/1明緑灰色シルト(上層)、5R7/1明赤灰色(下層)
166	10Y R7/3にぶい黄褐色粗砂・10Y R4/1褐灰色粗砂混じり粘土	234	5Y 6/1 灰色 粗砂混じりシルト
167	2.5Y 8/2 灰白色 細砂(5Y 4/1灰白色粘土混じり粗砂を含む)	235	5Y 5/1 灰色 堅く締まった砂混じりシルト(小石を多く含む)
168	10Y R4/1 褐灰色 粗砂混じり粘土	236	2.5Y 6/2 灰黄色 堅く締まった粗砂混じりシルト
169	10Y R2/1 黒色 粗砂混じり粘土	237	N3 暗灰色 砂混じりシルト(炭・木片を含む)
170	2.5Y 7/4 浅黄色 細砂	238	7.5Y 8/3 淡黄色 堅く締まった粗砂
171	7.5Y 5/1 灰色 粘土混じり粗砂	239	2.5Y 4/1 黄灰色 砂混じりシルト(炭・腐植物を含む)
172	2.5Y 7/2 灰黄色 粘土混じり粗砂	240	5P B4/1 暗青灰色 砂混じりシルト
173	10Y R4/1 褐灰色 粗砂混じり粘土(粘土ブロック含む)	241	2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂混じりシルト
174	2.5Y 4/1 灰色 粘土混じり粗砂	242	5Y 8/6 黄色 堅く締まった粗砂
175	7.5Y 4/1 灰色 粘土混じり粗砂	243	2.5Y 5/1 黄灰色 堅く締まった粗砂混じりシルト(木炭を含む)
176	5Y 4/1 灰色 粘土混じり粗砂	244	5GY 5/1 オリーブ灰色 砂混じりシルト
177	2.5Y 8/3 淡黄色 細砂	245	5Y 8/2 灰白色 中粒砂
178	2.5Y 6/3 にぶい黄色 粗砂	246	5Y 8/3 淡黄色 中粒砂(小石を含む)
179	10Y R3/2 黒褐色 粗砂混じり粘土	247	5Y 5/2 灰オリーブ色 砂混じりシルト(炭・粘土ブロックを含む)
180	10Y R7/2 にぶい黄褐色 粗砂	248	5Y 6/3 オリーブ黄色 砂混じりシルト(砂が主体、上面に5mm程度の腐植物層)
181	10Y R3/3 暗褐色 粘土混じり粗砂	249	5Y 5/1 灰色 砂混じりシルト
182	10Y R5/2 灰黄褐色 粗砂	250	5P 6/1 紫灰色 砂混じりシルト
183	10Y R2/2 黒褐色 粗砂		
184	10Y R2/2 黒褐色 粗砂		
185	5Y 7/2 灰白色 粗砂		
186	5Y 2/1 黒色 粘土(5Y 7/2灰白色粗砂を含む)		
187	10Y R7/3 にぶい黄褐色 粗砂		
188	5Y 6/1 灰色 粗砂		
189	2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘土混じり粗砂		
190	2.5Y 8/3 淡黄色 粗砂		

表3 調査区南北縦断面土層3

251	7.5Y4/1 灰色 砂質土(1cm程度の小礫・微量の炭を含む、やや粘性がある)	312	N6 灰色 砂混じりシルト(5G Y7/1明オリーブ灰色粘土ブロックを含む)
252	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘質土(中粒砂・微量の炭を含む)	313	10Y R6/1 褐灰色 細砂・中粒砂・シルトの互層
253	7.5Y6/1 灰色 砂質土(中粒砂が主、僅かに炭を含む)	314	5Y8/2 灰白色 細砂・中粒砂・シルトの互層(小礫・腐植物を含む)
254	5Y5/1 灰色 中粒砂(腐植物多い)	315	5GY6/1 オリーブ灰色 細砂
255	7.5Y8/2 灰白色 堅く締まった中粒砂	316	5Y5/1 灰色 砂混じりシルト(土器片を含む)
256	5GY8/1 灰白色 堅く締まった中粒砂(上面に1cm程度の腐植物層あり)	317	N5 灰色 砂混じりシルト(炭化物・小礫を含む)
257	2.5Y7/6 明黄褐色 中粒砂	318	5Y8/2 灰白色 細砂・中粒砂・シルトの互層
258	2.5Y6/4 にぶい黄色 砂混じりシルト(腐植物を含む)	319	10Y5/1 灰色 砂混じりシルト(微砂)
259	5R7/1 明赤灰色 灰(炭・腐植物を含む)	320	10B G6/1 青灰色 砂混じりシルト(粘性あり)
260	5Y3/1 オリーブ黒色 灰(多量の炭化物を含む)	321	7.5G Y7/1 明緑灰色 粘土
261	5Y7/6 黄色 粗砂混じりシルト	322	5Y8/1 灰白色 細砂・中粒砂・シルトの互層
262	10Y5/1 灰色 堅く締まった粗砂	323	10Y4/1 灰色 中粒砂混じりシルト(砂が主体)
263	5Y7/1 灰白色 粗砂・中粒砂	324	7.5Y7/1 灰白色 細砂・中粒砂の互層(腐植物含む)
264	2.5GY6/1 オリーブ灰色 堅く締まったシルト	325	2.5Y8/1 灰白色 細砂・中粒砂・粗砂・シルト・礫の互層(鉄滓・土器片を含む)
265	5Y8/4 淡黄色 堅く締まった中粒砂	326	2.5Y6/1 黄灰色 中粒砂混じりシルト(腐植物・炭化木を含む)
266	N4 灰色 シルト	327	7.5Y7/1 灰白色 細砂・中粒砂
267	5Y5/3 灰オリーブ色 シルト(炭を含む、粘性あり)		
268	5GY5/1 オリーブ灰色 シルト・細砂・中粒砂・粗砂の互層		
269	2.5Y8/4 淡黄色 中粒砂		
270	N6 灰色 砂混じりシルト		
271	7.5Y7/2 灰白色 粗砂・中粒砂		
272	5Y8/4 淡黄色 中粒砂		
273	10Y R6/4 にぶい黄褐色 砂混じり粘土		
274	5Y R5/4 にぶい赤褐色 砂混じりシルト		
275	2.5Y6/4 にぶい黄色 砂混じりシルト		
276	2.5Y5/2 暗黄褐色 中粒砂混じりシルト(腐植物多い)		
277	10GY6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(粘土ブロック含む、上面に厚1cm程度の腐植物層あり)		
278	5Y R7/6 褐色 粗砂		
279	5Y R7/6暗色・7.5G Y7/1明緑灰色粗砂		
280	5Y8/3 淡黄色 中粒砂		
281	5R7/1 明赤灰色 灰混じりの灰		
282	5GY6/1 オリーブ灰色 細砂		
283	N4 灰色 砂混じりシルト(炭を含む、粘性強い)		
284	2.5Y6/3 にぶい黄色 砂混じりシルト(木片を含む)		
285	2.5Y7/3 浅黄色 砂混じりシルト		
286	2.5Y6/1黄灰色～6/4にぶい黄色 砂混じりシルト(砂が主体、粘土ブロックを含む)		
287	2.5Y5/2 暗黄褐色 中粒砂		
288	2.5Y4/1 黄灰色 堅く締まった砂混じりシルト		
289	2.5Y6/4 にぶい黄色 砂混じりシルト		
290	2.5Y7/6 明黄褐色 中粒砂		
291	2.5Y8/6 黄色 中粒砂		
292	10Y2/1 黒色 砂混じりシルト(腐植物を含む、粘性あり)		
293	5P B4/1 暗青灰色 砂混じりシルト(粘性弱い)		
294	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂混じりシルト(砂が主体)		
295	5Y3/2 オリーブ黒色 粘土		
296	5Y4/1 灰色 中粒砂・粗砂		
297	2.5Y5/2 暗黄褐色 砂混じりシルト(上部は粘性強い、下部は弱く砂質)		
298	7.5Y2/1 黒色 粘土(腐植物含む)		
299	10Y3/1 オリーブ黒色 砂混じりシルト(粘性あり)		
300	5Y4/1 灰色 堅く締まった砂質土		
301	5B5/1 青灰色 砂混じりシルト(やや締まる)		
302	7.5Y6/3 オリーブ黄色 中粒砂混じりシルト(砂が主体)		
303	5GY7/1 明オリーブ灰色 砂混じりシルト		
304	5B7/1 明青灰色 細砂		
305	7.5Y7/1 灰白色 中粒砂		
306	5B7/1 明青灰色 粗砂混じりシルト		
307	5GY7/1 明オリーブ灰色 砂混じりシルト(粘性弱い)		
308	5GY7/1 明オリーブ灰色 砂混じりシルト(粘性あり)		
309	N5 灰色 粘質シルト・砂混じりシルトの互層		
310	N4 灰色 粘質シルト(炭化物含む)		
311	2.5Y5/1 黄灰色 粘質シルト		

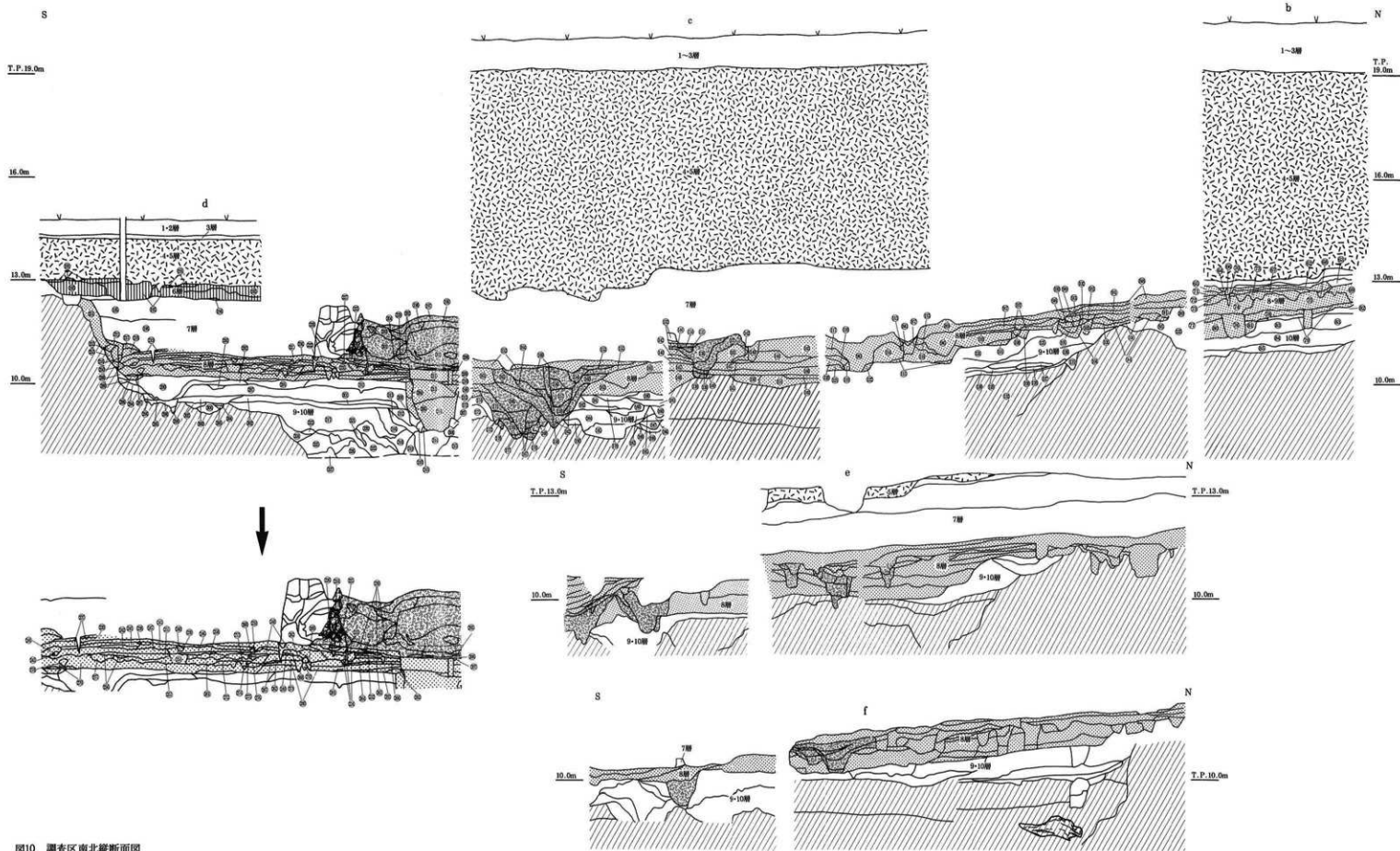
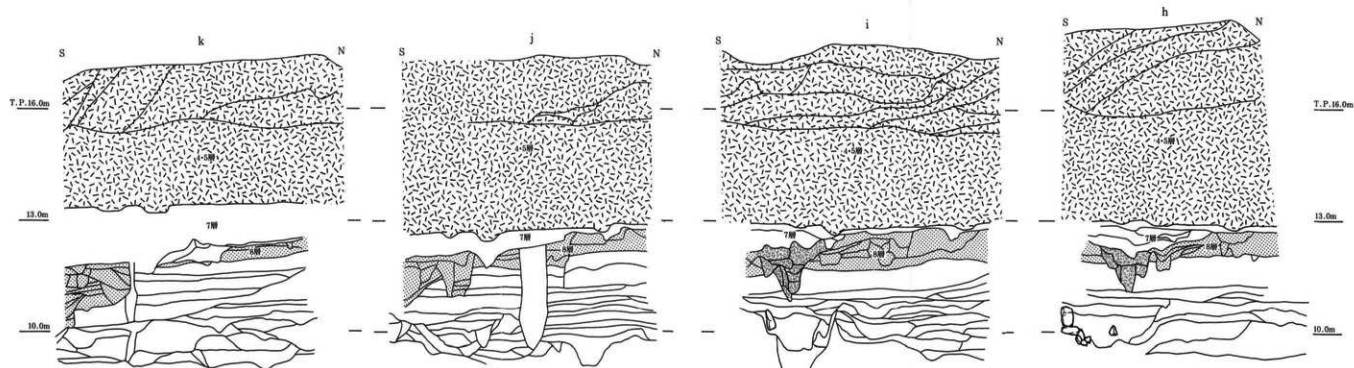


图10 调查区南北纵断面图



2、遺構と遺物

(1) 徳川氏による大坂城再築後

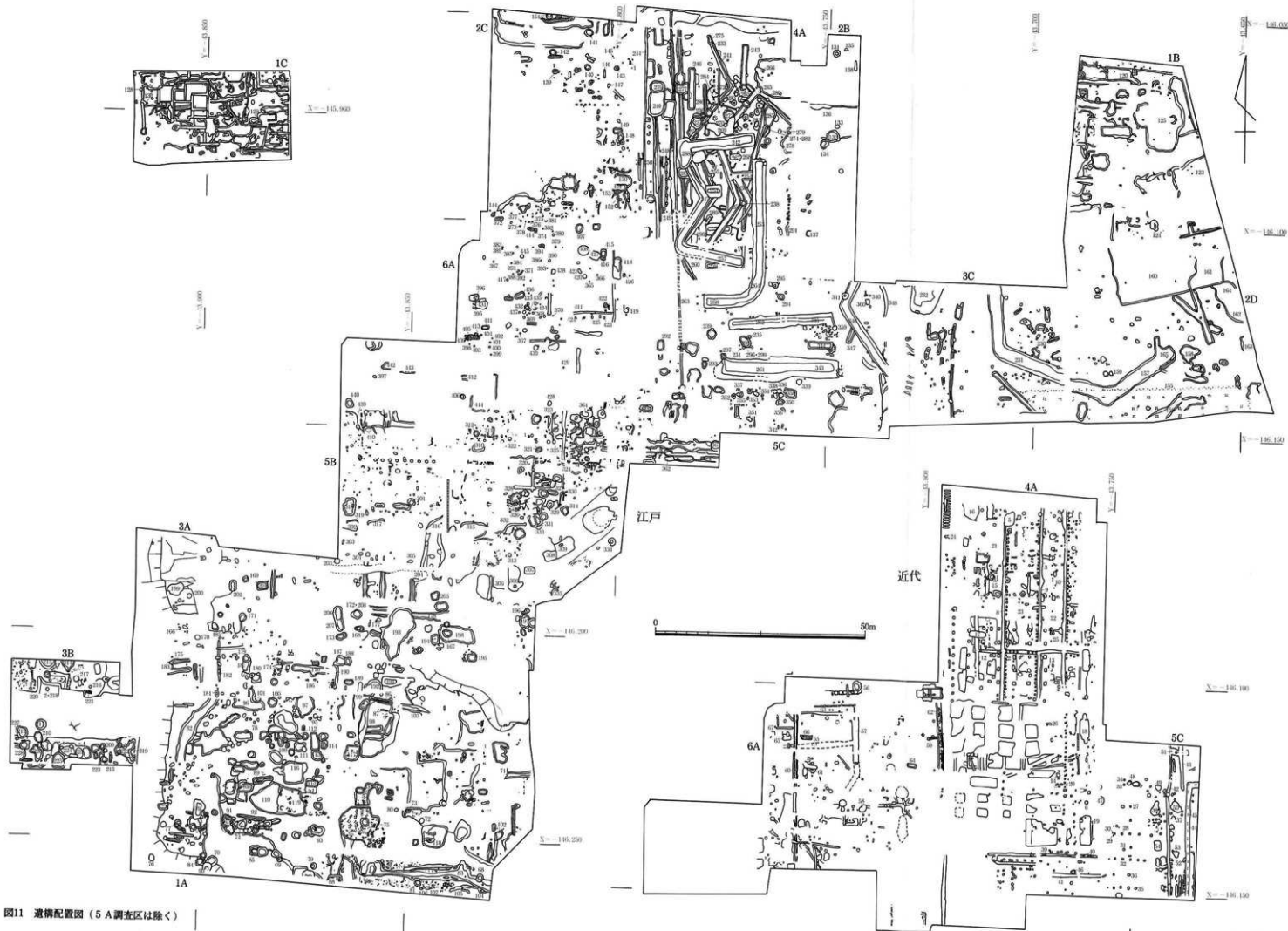


図11 遺構配置図（5A調査区は除く）

表4 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)1

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ			
1	2C石組	近代	-146061	-43798		68	1A井戸01	江戸 -146258 -43832
2	3B井戸19	近代	-146215	-43937		69	1A井戸02	江戸 -146256 -43872
3	4Aビット050	近代	-146069	-43773	0.12	70	1A井戸03(土坑9)	江戸 -146256 -43897
4	4Aビット188	近代	-146117	-43761	0.22	71	1A井戸04	江戸 -146233 -43826
5	4A井戸01	近代	-146060	-43780		72	1A井戸05	江戸 -146245 -43846
6	4A井戸09	近代	-146127	-43761		73	1A井戸06	江戸 -146243 -43849
7	4A溝02	近代	-146075	-43785	0.04	74	1A井戸07	江戸 -146247 -43890
8	4A溝03	近代	-146075	-43781	0.12	75	1A井戸09(土坑272)	江戸 -146246 -43860
9	4A溝04	近代	-146075	-43773	0.11	76	1A井戸16	江戸 -146255 -43911
10	4A溝05	近代	-146075	-43767	0.13	77	1A井戸17	江戸 -146247 -43905
11	4A溝08	近代	-146069	-43771	0.09	78	1A井戸18	江戸 -146222 -43886
12	4A溝36	近代	-146094	-43788	0.11	79	1A井戸19	江戸 -146256 -43872
13	4A溝38	近代	-146095	-43770	0.07	80	1A井戸20	江戸 -146243 -43852
14	4A焼土塊	近代	-146121	-43768		81	1A井戸21	江戸 -146260 -43847
15	4A土坑012	近代	-146074	-43784	0.31	82	1A溝01	江戸 -146224 -43903 1.06
16	4A土坑038	近代	-146058	-43789		83	1A溝04	江戸 -146258 -43846 1.08
17	4A土坑217	近代	-146088	-43787		84	1A石組1	江戸 -146255 -43869
18	4A土坑262	近代	-146111	-43762	1.25	85	1A石組2	江戸 -146253 -43886
19	4A土坑263	近代	-146132	-43759	0.20	86	1A石組4	江戸 -146217 -43856
20	4A土坑266	近代	-146123	-43767		87	1A石組5	江戸 -146219 -43855
21	4A道路1	近代	-146065	-43784		88	1A石組6	江戸 -146259 -43886
22	4A道路2	近代	-146080	-43770		89	1A石組8	江戸 -146236 -43886
23	4A道路3	近代	-146087	-43776		90	1A土坑002	江戸 -146258 -43888 1.17
24	4A炉1	近代	-146064	-43793		91	1A土坑004	江戸 -146246 -43883 0.06
25	4A炉2	近代	-146067	-43770		92	1A土坑010	江戸 -146246 -43886 0.20
26	4A炉3	近代	-146109	-43770		93	1A土坑016	江戸 -146248 -43871 0.70
27	5Cビット017	近代	-146129	-43750	0.19	94	1A土坑03	江戸 -146244 -43900 1.22
28	5Cビット020	近代	-146135	-43752		95	1A土坑038	江戸 -146221 -43873 0.11
29	5Cビット021	近代	-146135	-43755	0.19	96	1A土坑042	江戸 -146218 -43889 0.46
30	5Cビット022	近代	-146135	-43754	0.25	97	1A土坑043	江戸 -146218 -43874 0.27
31	5Cビット025	近代	-146138	-43753	0.21	98	1A土坑044(土坑45)	江戸 -146226 -43857
32	5Cビット026	近代	-146141	-43752		99	1A土坑046	江戸 -146215 -43859 0.24
33	5Cビット027	近代	-146124	-43753	0.13	100	1A土坑047	江戸 -146217 -43882 0.20
34	5Cビット028	近代	-146122	-43752		101	1A土坑048	江戸 -146216 -43886 0.81
35	5Cビット034	近代	-146148	-43749	0.49	102	1A土坑049	江戸 -146247 -43829 0.24
36	5Cビット035	近代	-146144	-43751	0.39	103	1A土坑051	江戸 -146219 -43848 0.41
37	5Cビット037	近代	-146130	-43741	0.12	104	1A土坑052	江戸 -146262 -43833 0.51
38	5C井戸4	近代	-146128	-43744		105	1A土坑053	江戸 -146262 -43837 0.72
39	5C溝01	近代	-146140	-43768	0.22	106	1A土坑055	江戸 -146261 -43846 0.38
40	5C溝02	近代	-146140	-43760	0.16	107	1A土坑056	江戸 -146261 -43844 1.64
41	5C溝04	近代	-146145	-43766	0.43	108	1A土坑254	江戸 -146238 -43889 1.18
42	5C溝10	近代	-146125	-43742	0.82	109	1A土坑257	江戸 -146230 -43878 0.18
43	5C溝11	近代	-146118	-43738	0.69	110	1A土坑258	江戸 -146240 -43884 0.37
44	5C溝12	近代	-146135	-43734	0.19	111	1A土坑259	江戸 -146238 -43876 0.45
45	5C石列	近代	-146143	-43735		112	1A土坑260	江戸 -146221 -43876 0.38
46	5C土坑04	近代	-146144	-43764	0.75	113	1A土坑262	江戸 -146229 -43872 0.14
47	5C土坑18	近代	-146127	-43757	0.38	114	1A土坑263	江戸 -146227 -43870 1.01
48	5C土坑24	近代	-146123	-43749	0.13	115	1A土坑265	江戸 -146237 -43873 0.18
49	5C土坑38	近代	-146124	-43744	0.31	116	1A土坑266	江戸 -146230 -43876 0.06
50	5C土坑41	近代	-146128	-43740	0.51	117	1A土坑268	江戸 -146229 -43863 1.16
51	5C土坑42	近代	-146115	-43740	0.33	118	1A土坑273	江戸 -146249 -43843 0.83
52	5C土坑45	近代	-146140	-43738	0.28	119	1A炉床	江戸 -146241 -43876
53	5C土坑47	近代	-146139	-43740	0.49	120	1B溝2	江戸 -146062 -43680 0.20
54	5C土坑48	近代	-146138	-43744	0.58	121	1B刷印石(丸)	江戸 -146079 -43676
55	6Aビット078(土坑078)	近代	-146115	-43827		122	1B刷印石(丸)	江戸 -146096 -43668
56	6A井戸5	近代	-146101	-43817		123	1B土坑1	江戸 -146085 -43663 0.35
57	6A瓦敷(瓦敷1)	近代	-146115	-43822		124	1B土坑2	江戸 -146098 -43671 0.46
58	6A瓦溜まり	近代	-146130	-43815		125	1B土坑3	江戸 -146074 -43670 0.56
59	6A溝17	近代	-146113	-43798	0.03	126	1C集石部	江戸 -146857 -43844
60	6A溝23	近代	-146111	-43831	0.27	127	1C土坑02	江戸 -146952 -43833 0.17
61	6A溝56	近代	-146121	-43827	0.09	128	1C土坑04	江戸 -146955 -43867
62	6A石垣1	近代	-146113	-43796		129	1C土坑05	江戸 -146962 -43840 0.20
63	6A石列	近代	-146106	-43822		130	1C土坑15	江戸 -146958 -43866 0.34
64	6A土坑029(土坑65)	近代	-146120	-43803	0.24	131	2B井戸1	江戸 -146059 -43748
65	6A炉1	近代	-146113	-43833		132	2B井戸3	江戸 -146079 -43749
66	6A炉2	近代	-146113	-43829		133	2B井戸4	江戸 -146076 -43748
67	6A炉3	近代	-146113	-43834		134	2B井戸5	江戸 -146080 -43751
						135	2B土坑1	江戸 -146057 -43746 0.14

表4 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)2

136	2B土坑2	江戸	-146074	-43750	1.18	204	3A土坑176	江戸	-146187	-43849	0.07
137	2B土坑4	江戸	-146102	-43754	0.41	205	3A土坑177	江戸	-146191	-43845	0.17
138	2B土坑5	江戸	-146062	-43744	0.71	206	3A土坑178	江戸	-146196	-43868	1.53
139	2C井戸03	江戸	-146064	-43816		207	3A土坑179	江戸	-146199	-43868	1.30
140	2C井戸05	江戸	-146063	-43808		208	3A土坑180(土坑213)	江戸	-146196	-43864	1.12
141	2C井戸10	江戸	-146054	-43806		209	3B井戸01(井戸13)	江戸	-146230	-43923	
142	2C井戸12	江戸	-146060	-43817		210	3B井戸02(井戸21)	江戸	-146227	-43939	
143	2C井戸13	江戸	-146063	-43801		211	3B井戸03(井戸10)	江戸	-146224	-43938	
144	2C土坑14	江戸	-146098	-43829	0.20	212	3B井戸04(井戸09)	江戸	-146226	-43943	
145	2C土坑28	江戸	-146060	-43802	0.08	213	3B井戸05(井戸14)	江戸	-146232	-43923	
146	2C土坑30	江戸	-146064	-43804		214	3B井戸06(井戸18)	江戸	-146209	-43932	
147	2C土坑38	江戸	-146067	-43804		215	3B井戸07	江戸	-146209	-43937	
148	2C土坑51	江戸	-146079	-43800	0.40	216	3B井戸16	江戸	-146215	-43926	
149	2C土坑54	江戸	-146078	-43801	0.53	217	3B井戸17	江戸	-146213	-43930	
150	2C土坑57	江戸	-146090	-43800	0.30	218	3B井戸24(井戸19)	江戸	-146215	-43937	
151	2C土坑58	江戸	-146091	-43800	0.24	219	3B石列1	江戸	-146230	-43916	
152	2C土坑59	江戸	-146095	-43802	0.15	220	3B石列2	江戸	-146213	-43940	
153	2C土坑69	江戸	-146093	-43801	0.07	221	3B石列3	江戸	-146216	-43927	
154	2C土坑74	江戸	-146051	-43818	0.48	222	3B土坑001	江戸	-146230	-43918	0.60
155	2D土坑1	江戸	-146138	-43670		223	3B土坑005	江戸	-146231	-43923	0.76
156	2D溝1	江戸	-146142	-43667	0.91	224	3B土坑006	江戸	-146230	-43932	1.18
157	2D溝2	江戸	-146135	-43675	0.69	225	3B土坑007	江戸	-146232	-43933	1.96
158	2D土坑03	江戸	-146129	-43663		226	3B土坑009	江戸	-146230	-43939	0.70
159	2D土坑12	江戸	-146134	-43681	0.04	227	3B土坑011	江戸	-146227	-43943	1.10
160	2D土坑13	江戸	-146115	-43678	0.17	228	3B土坑013	江戸	-146231	-43943	0.31
161	2D土坑14	江戸	-146110	-43658	0.13	229	3B土坑014	江戸	-146230	-43929	1.22
162	2D土坑15	江戸	-146118	-43652	0.19	230	3Cピット8	江戸	-146125	-43967	
163	2D土坑16	江戸	-146126	-43650	0.13	231	3C溝1	江戸	-146130	-43707	1.33
164	2D土坑17	江戸	-146113	-43654	0.10	232	3C土坑1	江戸	-146117	-43727	1.11
165	2D土坑19	江戸	-146128	-43667	0.27	233	4Aピット095	江戸	-146056	-43778	
166	3Aピット015	江戸	-146200	-43906		234	4Aピット208	江戸	-146130	-43770	0.28
167	3A井戸01(井戸04)	江戸	-146200	-43842		235	4Aピット529	江戸	-146127	-43769	
168	3A井戸07	江戸	-146199	-43862		236	4A井戸03	江戸	-146074	-43780	
169	3A井戸15(土坑172)	江戸	-146188	-43890		237	4A井戸04	江戸	-146075	-43782	
170	3A井戸33(土坑402)	江戸	-146202	-43901		238	4A井戸06	江戸	-146095	-43770	
171	3A井戸34(土坑450)	江戸	-146197	-43889		239	4A井戸10(土坑285)	江戸	-146126	-43778	
172	3A井戸35(土坑213)	江戸	-146196	-43864		240	4A井戸12	江戸	-146072	-43792	
173	3A井戸36(土坑181)	江戸	-146201	-43867		241	4A溝10	江戸	-146062	-43776	0.53
174	3A溝001	江戸	-146209	-43882		242	4A溝11	江戸	-146080	-43776	1.06
175	3A溝007	江戸	-146208	-43906	0.25	243	4A溝18	江戸	-146061	-43770	0.12
176	3A溝013	江戸	-146209	-43874	0.64	244	4A溝20	江戸	-146070	-43794	0.45
177	3A溝015	江戸	-146196	-43858	0.32	245	4A溝22	江戸	-146069	-43768	0.28
178	3A溝016	江戸	-146196	-43846	0.36	246	4A溝24	江戸	-146067	-43783	0.26
179	3A土坑004	江戸	-146206	-43892		247	4A溝39	江戸	-146090	-43782	1.15
180	3A土坑029	江戸	-146211	-43887		248	4A溝41	江戸	-146090	-43789	0.08
181	3A土坑038?	江戸	-146216	-43899		249	4A溝42	江戸	-146090	-43787	
182	3A土坑042	江戸	-146210	-43869		250	4A溝43	江戸	-146084	-43792	0.31
183	3A土坑055	江戸	-146209	-43908		251	4A溝46(土坑240)	江戸	-146092	-43778	0.67
184	3A土坑056	江戸	-146208	-43891	0.30	252	4A溝47	江戸	-146087	-43779	0.59
185	3A土坑058	江戸	-146201	-43893		253	4A溝49(溝61・71)	江戸	-146100	-43766	1.18
186	3A土坑079	江戸	-146212	-43875		254	4A溝50	江戸	-146088	-43770	0.30
187	3A土坑081	江戸	-146207	-43867	0.55	255	4A溝51	江戸	-146090	-43773	0.24
188	3A土坑083	江戸	-146207	-43865	0.34	256	4A溝52	江戸	-146094	-43768	0.32
189	3A土坑085	江戸	-146212	-43865	0.91	257	4A溝60	江戸	-146108	-43777	0.91
190	3A土坑088	江戸	-146211	-43869		258	4A溝61(溝49・71)	江戸	-146118	-43776	0.86
191	3A土坑097	江戸	-146212	-43855	1.21	259	4A溝62	江戸	-146110	-43778	0.05
192	3A土坑098	江戸	-146213	-43859	0.61	260	4A溝64	江戸	-146111	-43783	
193	3A土坑100	江戸	-146200	-43854	0.85	261	4A溝68	江戸	-146134	-43769	2.57
194	3A土坑106	江戸	-146202	-43845	0.72	262	4A溝69	江戸	-146123	-43767	1.88
195	3A土坑107	江戸	-146205	-43836	0.45	263	4A溝70	江戸	-146125	-43785	0.42
196	3A土坑111	江戸	-146194	-43823	0.53	264	4A溝71(溝49・61)	江戸	-146116	-43768	1.26
197	3A土坑114	江戸	-146197	-43824	0.63	265	4A土坑082	江戸	-146068	-43772	
198	3A土坑117	江戸	-146200	-43840	0.37	266	4A土坑096	江戸	-146063	-43769	
199	3A土坑166下層	江戸	-146191	-43807	0.82	267	4A土坑100	江戸	-146083	-43772	
200	3A土坑167	江戸	-146192	-43804	0.22	268	4A土坑104	江戸	-146082	-43770	0.47
201	3A土坑170	江戸	-146189	-43886	1.14	269	4A土坑105	江戸	-146076	-43774	
202	3A土坑173	江戸	-146189	-43894	0.83	270	4A土坑107	江戸	-146074	-43777	
203	3A土坑175	江戸	-146183	-43868	0.70	271	4A土坑108	江戸	-146078	-43783	0.21

表4 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)3

272	4A土坑109	江戸	-146069	-43777		340	5Cピット044	江戸	-146116	-43740	0.32
273	4A土坑115	江戸	-146074	-43774	0.45	341	5C井戸5	江戸	-146117	-43745	
274	4A土坑120	江戸	-146076	-43767		342	5C溝03	江戸	-146149	-43762	0.30
275	4A土坑130	江戸	-146055	-43778	0.26	343	5C溝08	江戸	-146134	-43753	2.09
276	4A土坑135	江戸	-146066	-43791	0.92	344	5C溝07	江戸	-146129	-43752	0.94
277	4A土坑137	江戸	-146068	-43786	0.36	345	5C溝06	江戸	-146123	-43753	1.06
278	4A土坑139	江戸	-146080	-43760	1.01	346	5C溝13	江戸	-146125	-43742	1.45
279	4A土坑140	江戸	-146077	-43762	0.25	347	5C溝14	江戸	-146126	-43744	1.09
280	4A土坑143	江戸	-146071	-43767	0.77	348	5C溝15	江戸	-146118	-43736	0.80
281	4A土坑144	江戸	-146074	-43768	0.40	349	5C溝16	江戸	-146139	-43742	0.60
282	4A土坑145	江戸	-146075	-43767	0.53	350	5C土坑02	江戸	-146142	-43760	0.65
283	4A土坑154	江戸	-146071	-43773	0.32	351	5C土坑05	江戸	-146147	-43768	0.21
284	4A土坑157	江戸	-146073	-43776		352	5C土坑06	江戸	-146141	-43772	0.18
285	4A土坑167	江戸	-146074	-43764	0.27	353	5C土坑07	江戸	-146141	-43767	0.24
286	4A土坑177	江戸	-146073	-43779	0.81	354	5C土坑08	江戸	-146140	-43762	0.12
287	4A土坑223	江戸	-146088	-43785	0.45	355	5C土坑09	江戸	-146141	-43770	0.53
288	4A土坑224	江戸	-146083	-43785	0.82	356	5C土坑11	江戸	-146144	-43760	0.21
289	4A土坑226 (土坑245)	江戸	-146098	-43776	0.06	357	5C土坑13	江戸	-146141	-43762	0.19
290	4A土坑230	江戸	-146101	-43780		358	5C土坑17	江戸	-146141	-43758	0.70
291	4A土坑234	江戸	-146101	-43758	0.74	359	5C土坑22	江戸	-146125	-43748	0.76
292	4A土坑264	江戸	-146129	-43790	0.51	360	5C土坑50	江戸	-146118	-43740	0.36
293	4A土坑270	江戸	-146134	-43779	0.45	361	5C土坑53	江戸	-146153	-43776	1.10
294	4A土坑272	江戸	-146117	-43761	0.11	362	5C土坑54	江戸	-146157	-43787	0.73
295	4A土坑273	江戸	-146114	-43763	0.62	363	5C土坑55	江戸	-146145	-43793	0.57
296	4A土坑276 (土坑280)	江戸	-146130	-43769		364	5C土坑58	江戸	-146146	-43807	0.87
297	4A土坑278	江戸	-146132	-43775	0.45	365	6Aピット038	江戸	-146114	-43807	0.11
298	4A土坑279	江戸	-146128	-43770	0.47	366	6Aピット093	江戸	-146113	-43805	0.11
299	4A土坑280 (土坑276)	江戸	-146129	-43769	0.33	367	6Aピット282	江戸	-146128	-43824	0.12
300	5B井戸1 (土坑11)	江戸	-146187	-43824		368	6Aピット285	江戸	-146121	-43821	0.77
301	5B井戸11	江戸	-146169	-43849		369	6Aピット286	江戸	-146122	-43822	0.66
302	5B土坑001	江戸	-146175	-43864	0.59	370	6Aピット287	江戸	-146122	-43821	0.29
303	5B土坑002	江戸	-146179	-43866	0.38	371	6Aピット291	江戸	-146112	-43823	0.23
304	5B土坑004	江戸	-146181	-43861	0.39	372	6Aピット294	江戸	-146100	-43829	0.51
305	5B土坑007	江戸	-146183	-43849	0.73	373	6Aピット296	江戸	-146102	-43824	0.10
306	5B土坑010	江戸	-146187	-43828	0.21	374	6Aピット299	江戸	-146102	-43821	0.17
307	5B土坑012	江戸	-146185	-43821	0.80	375	6Aピット301	江戸	-146100	-43821	0.19
308	5B土坑013	江戸	-146181	-43816	0.48	376	6Aピット303	江戸	-146100	-43822	0.14
309	5B土坑014	江戸	-146178	-43813	0.09	377	6Aピット304	江戸	-146100	-43824	0.12
310	5B土坑094 (土坑112)	江戸	-146156	-43834	0.19	378	6Aピット305	江戸	-146100	-43823	0.17
311	5B土坑095	江戸	-146152	-43831	0.45	379	6Aピット314	江戸	-146103	-43816	0.15
312	5B土坑096	江戸	-146152	-43834	0.25	380	6Aピット315	江戸	-146102	-43816	0.02
313	5B土坑098	江戸	-146181	-43826		381	6Aピット317	江戸	-146100	-43818	0.28
314	5B土坑099	江戸	-146170	-43812	0.63	382	6Aピット318	江戸	-146102	-43818	0.31
315	5B土坑101	江戸	-146175	-43834	0.86	383	6Aピット325	江戸	-146106	-43828	
316	5B土坑102	江戸	-146175	-43843	0.61	384	6Aピット333	江戸	-146110	-43826	0.19
317	5B土坑103	江戸	-146174	-43857	0.49	385	6Aピット338	江戸	-146108	-43826	0.20
318	5B土坑104	江戸	-146170	-43864	0.51	386	6Aピット342	江戸	-146109	-43819	0.05
319	5B土坑110	江戸	-146174	-43863	0.41	387	6Aピット361	江戸	-146110	-43830	
320	5B土坑114	江戸	-146159	-43823	0.81	388	6Aピット363	江戸	-146113	-43825	0.05
321	5B土坑115	江戸	-146155	-43819	0.75	389	6Aピット373	江戸	-146107	-43828	0.16
322	5B土坑117	江戸	-146153	-43826	0.04	390	6Aピット378	江戸	-146109	-43817	0.22
323	5B土坑119	江戸	-146149	-43811	0.19	391	6Aピット380	江戸	-146112	-43824	0.08
324	5B土坑129	江戸	-146156	-43811	0.26	392	6Aピット381	江戸	-146113	-43824	0.07
325	5B土坑130	江戸	-146154	-43811	0.11	393	6Aピット383	江戸	-146111	-43817	0.24
326	5B土坑135	江戸	-146169	-43824	0.15	394	6Aピット409	江戸	-146106	-43819	
327	5B土坑136	江戸	-146164	-43815	0.43	395	6Aピット521	江戸	-146121	-43835	0.36
328	5B土坑138	江戸	-146167	-43824	0.21	396	6Aピット523	江戸	-146118	-43834	0.25
329	5B土坑139	江戸	-146169	-43815	0.69	397	6Aピット549	江戸	-146138	-43858	0.43
330	5B土坑141	江戸	-146166	-43812	0.19	398	6Aピット566	江戸	-146130	-43855	0.17
331	5B土坑142	江戸	-146173	-43819	0.79	399	6Aピット567	江戸	-146132	-43831	0.05
332	5B土坑143	江戸	-146175	-43826	0.06	400	6Aピット568	江戸	-146130	-43831	0.11
333	5B土坑162	江戸	-146174	-43818	0.28	401	6Aピット569	江戸	-146129	-43831	0.33
334	5B土坑163	江戸	-146177	-43801	0.56	402	6Aピット572	江戸	-146128	-43830	
335	5B土坑164	江戸	-146189	-43814	0.45	403	6Aピット573	江戸	-146130	-43835	0.46
336	5Cピット001	江戸	-146140	-43761	0.15	404	6Aピット575	江戸	-146127	-43833	0.10
337	5Cピット003	江戸	-146140	-43771	0.16	405	6Aピット576	江戸	-146127	-43835	0.14
338	5Cピット006	江戸	-146140	-43762	0.25	406	6Aピット578	江戸	-146143	-43838	0.18
339	5Cピット024	江戸	-146138	-43756		407	6A井戸1	江戸	-146102	-438010	

表4 遺構掲載番号表(5A調査区を除く)4

408	6A井戸2	江戸	-146107	-43809	
409	6A瓦溜まり2	江戸	-146128	-43837	
410	6A瓦溜まり4	江戸	-146151	-43859	
411	6A溝26	江戸	-146122	-43807	0.13
412	6A溝77	江戸	-146138	-43837	0.15
413	6A溝92	江戸	-146127	-43834	0.20
414	6A土坑015	江戸	-146102	-43822	0.17
415	6A土坑023	江戸	-146108	-43804	0.42
416	6A土坑025	江戸	-146109	-43804	0.40
417	6A土坑027	江戸	-146114	-43827	
418	6A土坑028	江戸	-146111	-43801	
419	6A土坑038	江戸	-146121	-43798	0.04
420	6A土坑039	江戸	-146113	-43808	
421	6A土坑041	江戸	-146112	-43810	0.06
422	6A土坑044	江戸	-146118	-43804	0.08
423	6A土坑045	江戸	-146123	-43804	0.21
424	6A土坑048	江戸	-146123	-43810	0.02
425	6A土坑063	江戸	-146123	-43804	0.18
426	6A土坑069	江戸	-146113	-43799	0.42
427	6A土坑070	江戸	-146108	-43806	0.30
428	6A土坑088	江戸	-146144	-43816	0.53
429	6A土坑100	江戸	-146111	-43811	0.06
430	6A土坑139	江戸	-146130	-43820	0.11
431	6A土坑142	江戸	-146120	-43833	0.75
432	6A土坑144	江戸	-146121	-43822	0.16
433	6A土坑146	江戸	-146120	-43822	0.03
434	6A土坑147	江戸	-146121	-43820	0.23
435	6A土坑148	江戸	-146121	-43821	
436	6A土坑149	江戸	-146118	-43824	0.36
437	6A土坑151	江戸	-146122	-43824	0.07
438	6A土坑155	江戸	-146112	-43816	0.70
439	6A土坑165	江戸	-146148	-43863	
440	6A土坑166	江戸	-146146	-43865	0.43
441	6A土坑180	江戸	-146126	-43832	0.13
442	6A土坑182	江戸	-146136	-43856	0.66
443	6A土坑183	江戸	-146137	-43850	0.66
444	6A土坑190	江戸	-146143	-43835	0.27
445	6A土坑282	江戸	-146109	-43823	0.14

A-1、5A調査区以外の遺構

主に明治時代以降の再開発の違いにより、調査区毎で検出される遺構の内容は異なったものとなっている。南に位置する1A・3A・5B調査区と、東に位置する1B・2D・3C調査区はおおむね同様な状況を示し、江戸時代に形成された複数の整地層を基盤層として、その一部である廃棄土坑とその後の再開発でも削平されにくかった石組みなどの遺構が部分的に残存しているのみである。その点で言えば、概要報告当初、大形の溝として取り上げていたものの大半は整地の段階を示す層離面をとらえたものであり、廃棄土坑のいくつかについても、整地層の中で遺物の集中部を、そのように捉えていた部分もあったことが、その後の検討の中で確認された。

その結果地下構造を意識して構築し、その痕跡から当時の景観を復元できる遺構としては、2D・3C調査区にまたがる多角形溝および、1A・3A・5B調査区に点在する地下式貯蔵穴などの少数に限られるものとなっている。

これに対して北に位置する2B・2C・6A・5C調査区では、2B・2C調査区が、調査の直前まで建っていた庁舎の基礎によりほとんど削平されていた以外、基盤層までの深さが浅かったにも関わらず、以下に述べる種々の遺構を確認することができた。これは「京橋口御城番屋敷」とされた江戸時代以降におけるこの地区一帯の土地利用の違いを示すものであり、将来おこなわれるであろう近世以降の大坂城下町の復元に、大きな手がかりを与える可能性がある。なお調査区内におけるこの時期の地形景観は基本的に平坦である。

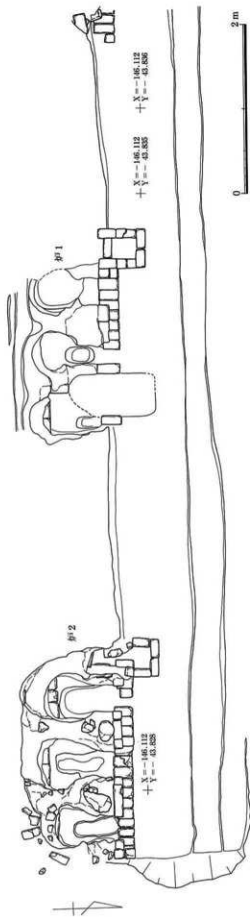
以下、図化された主な遺構を中心に説明をすすめる。

6A竈3・4（炉1・2）(65・66) 6A調査区の北西に位置する。北側に炊き口をもった3連の竈であり、2.2mを隔てて東西に3基並んで構築されていた。規模は、3連で東西が2.6m、南北1.6m、深さは検出面より0.6mを測る。また焚き口の外側には、3基の竈をつなぐかたちの前庭部が通路状に配されている。幅は0.9m、長さは10m以上でレンガ敷きである。竈はレンガとその外側を粘土で構築されており、燃焼室の南外側には、焚き口側右手前の通気坑(?)につながる空間をもつ(煤の付着は認められなかった)。

6A瓦敷(57) 6A調査区の北西部で検出された。幅1.3mで平瓦を縦並べにしたもので、東西軸と南北軸およびそれに続いて多角形を構成する平面形を呈する。断面の観察によれば、深さ0.2mの掘り方をつくり、半裁または破砕した平瓦を縦位に埋め込んでいることがわかる。また東西軸の西端で石列の排水溝に切れ、南北軸はその東辺が土管を切って平行する。上面は多少凹凸をもつが概ね平坦である。

5C石列(45) 5C調査区東端に位置する。溝内に配置された石列である。溝の規模は、幅0.8m、確認された長さは延長で13.6mを測る。石列は1辺0.5m程度の切り石で、途中数カ所の脱落はあるが、連続して置かれている。また石列の中に、徳川氏によって構築された時期の刻印石(「一〇」)が転用されて混在しており、それによってこの石列の構築時期の上限を知ることができる。なお石列の除去後、同じ位置関係でその下面から杭列が検出された。

6A石垣1(62) 6A調査区の東端に位置する南北の溝および石垣である。軸はN-E-Wであり、本調査区内で確認された長さは約20mを測るが、その北延長上に2C調査区の石組1が存在するため、



- ① 10YR 5/3 土色 砂状シリカト (非常に強く焼き締まる)
- ② 10YR 6/8 赤褐色 石炭矽化シリカト (4, 5層が焼けている)
- ③ 10YR 6/8 赤褐色 砂状シリカト (4, 5層が焼けている)
- ④ 10R 4/6 赤褐色 砂状シリカト (11層・焼けている)
- ⑤ 10R 3/4 赤褐色 砂状シリカト (焼けている)
- ⑥ 10YR 7/8 赤褐色 砂状シリカト
- ⑦ 10YR 2/2 赤褐色 細砂
- ⑧ 10YR 4/6 赤褐色 砂状シリカト (強く焼き締まる)
- ⑨ 10YR 4/4 褐色 粗砂状シリカト (10YR 5/8 赤褐色 灰質土をプロット状に含む)
- ⑩ 10YR 1/3 黒褐色 砂状シリカト (非常に強く焼き締まる)

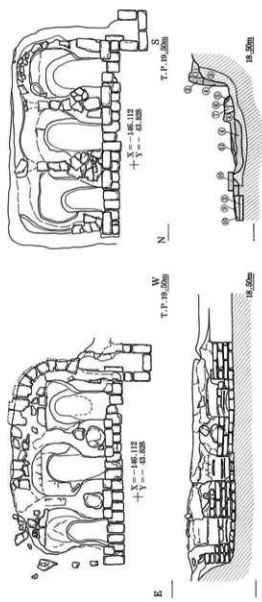


図12 6 A調査区 炉1・2平面・断面図

本来の長さはさらに延長される可能性が高い。石垣部分は面を東にもち、西側に裏込めを設けている。石垣は現状で2段まで確認でき、東の面から裏込め掘り方までの幅は1.3mである。また軸を平行して東西2列の石垣が構築されているが、その時期差は不明である。

1 A 土坑 4 (91) 1 A 調査区の南西に位置する。平面形は直径1.7m程の不整形な円形で、全面から礫が検出された。深さは15cmである。共存する遺物は認められない。出土状況からは、礫が廃棄されたというより、敷かれた可能性が指摘できる。近世の巴文軒瓦が出土している。

1 A 土坑16 (93) 1 A 調査区南中央に位置する。東西に長い長方形の土坑であり、その北西上面に集

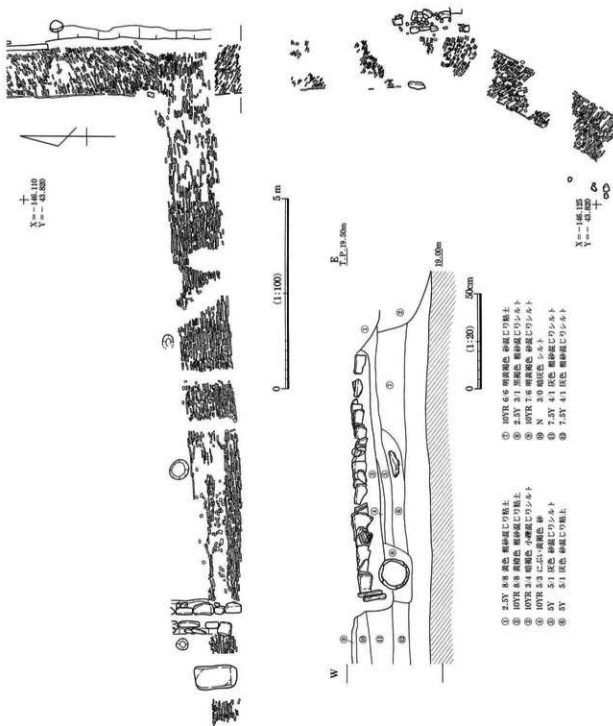


図13 6 A調査区 瓦敷き平面・断面図

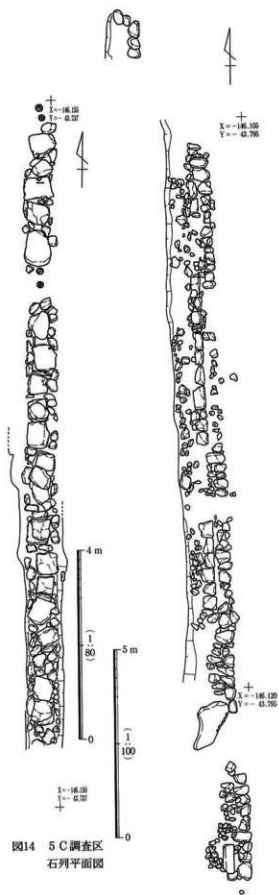


图14 5C调查区
石列平面图

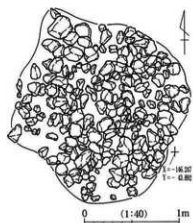


图16 1A调查区 土坑4平面图

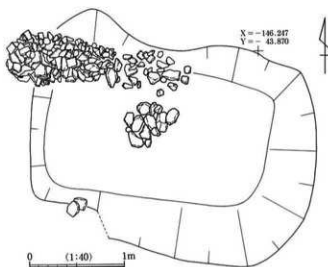


图17 1A调查区 土坑16平面图

图15 2C调查区 石组1·
6A调查区 石垣1平面图

石を伴う。軒丸瓦、18世紀代の肥前系磁器小鉢・青磁碗、煙管、京焼き系鉢、肥前系陶器碗、焼塩壺の蓋などが出土している。

3 B土坑11 (227) 3 B調査区の南西隅に位置する。平瓦を横積みにして壁を構築した貯蔵穴である。平面形は東西に長い長方形で、規模は東西0.9m、南北0.5m、深さ0.4mを測る。壁面には漆喰が塗られ、その痕跡がわずかに残る。底部には特別な床構造はみられない。なお土坑11の南辺の延長上に当たる東には東西方向の石列が約1m続いている。

3 B土坑14 (229) 3 B調査区の南中央に位置する。南北に長い方形の地下式貯蔵庫である。素掘りで作られており、灰色粘土を床として、壁を垂直に築いている。規模は南北2.5m、東西1.8m、深さ1.5mを測る。埋土には瓦片などが混濁した状態で含まれているが、底面から丹波窯の甕が押しつぶされた状態で出土した。破片は飛び散った状況ではなく、本遺構内に設置されていた甕が廃棄された可能性も考えられる。

1 A石組1 (84) 1 A調査区南西隅で、南側へ下降する平坦面の先端に位置する。遺構の南半分は斜面で崩壊しており、全体の規模は明らかにしない。現状で幅1.8m、深さ0.7mを測る。北側の壁面に1辺0.2~0.3mの礫を用いてつくられた4段以上の石積みが残る。巴文軒丸瓦が出土している。

1 A石組2 (85) 1 A調査区の南西部で、南側斜面より5m以上北側に位置する。東半部が削平されているが、平面形は楕円で、規模は東西約2m、南北約1.5mを測る。土坑掘り方の内部に1辺0.4m程の大形の礫を方形に並べている。1段のみの検出である。馬形の土人形が出土している。

1 A石組4・5 (86・87) 1 A調査区の北西中央に位置する。平行して並んだ石組みであり、北の列を石組4、南の列を石組5とした。共にほぼ東西を軸とし、南に面をもつ。また石組4の北側には、近接して平行する礎石列がみられる。

石組4の規模は長さが4.6m、幅0.25mで、このうちの西側1.6m部分には1辺0.15m程度の礫が密集し、東側には1辺0.3m程の礫が並べられている。石組5の規模は長さ1.6mであり、礫の大きさは1辺0.4m程である。周辺より巴文軒丸瓦が出土している。

なお、これらの石組は、大形の廃棄土坑である1 A土坑44を基盤層としている。

1 A石組6 (88) 1 A調査区の南中央東よりに位置する。遺構の南辺は調査区外にのびる。平面形は東西に長い長方形で、規模は東西2m、南北1m以上である。北面と東面に1辺0.1~0.2mの礫を用いた石積みが築かれ、東側の上面にはさらにその礫がひろがっている。狐形土人形、軒平瓦、菊文軒丸瓦、備前窯系挿鉢、瀬戸・美濃窯系天目茶碗および近世雑器と矢立が出土している。

1 A溝4 (83) 1 A調査区の南東に位置する。調査区の南東隅が掘乱れにより削平されており不明であるが、ほぼその位置から西へ軸をとって約25m西進し、北へ直角に折れる。ただし調査区中央部ではその痕跡は認められなかった。規模は幅1m、深さ1mである。底部には滞水性の粘土が堆積している。

また溝4の北側一部と南側全面に礫の散布がみられ、その分布は調査区の中央までひろがり、さらに溝4の北側延長上では西に面を揃えた南北軸の石列が複数検出された。なお溝4からは軒平瓦を少量出土したのみである。

3 B石列1・2・3 (219・220・221) 石列1は3 B調査区の南東隅に位置する。南北方向を軸として東に面を合わせている。長さは4m残存しており、石の大きさは長辺で0.15~0.20mである。

石列2は3 B調査区の北西隅に位置する。南北方向を軸とする3列の石列から構成され、北の列は東に面を合わせている。北列と南列を合わせた長さは5.5mである。各列の内、北の列が最も整っており

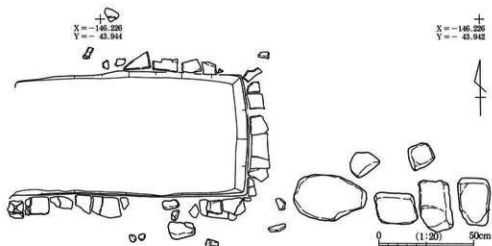


图18 3 B 调查区 土坑11平面图

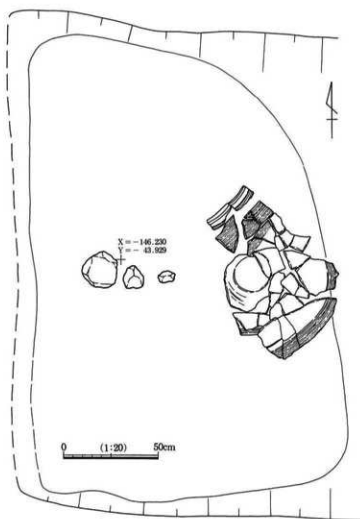


图19 3 B 调查区 土坑14平面图

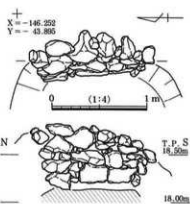


图20 1 A 调查区 石组1平面·立面图

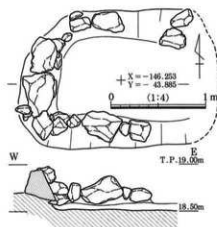


图21 1 A 调查区 石组2平面·立面图

石材も大形（長辺で0.4m）であるが、軸のずれた南の2列は西列が一部の石の並びにより面を西に合わせている可能性があり、東列は石材も不揃いで面もはっきりしていない。

石列3は3B調査区の中央北側に位置する。東西方向を軸として北に面をあわせている。2列並んで検出されたが、いずれも大形の石材を用いており、大きさは長辺で0.4~0.5mを測る。

2C井戸12(142) 2C調査区北端の中央やや南に位置する。検出時の平面形は直径2.2mを測る円であったが、上層の埋土を除去した結果円形の掘り方内から方形の木製枠とさらにその内側に据えられた桶形の井筒が検出された。近世磁器と下駄、曲物などの木製品が出土している。

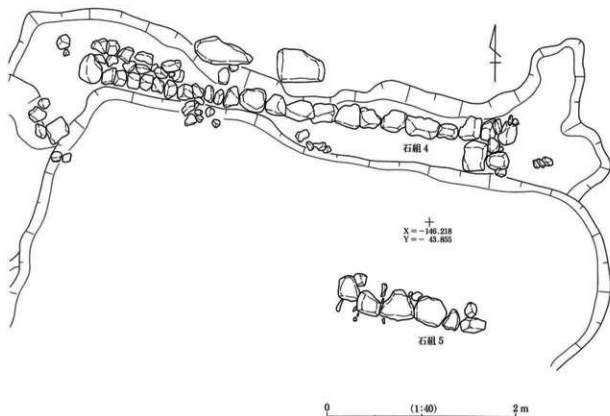


図22 1A調査区 石組4・5平面図

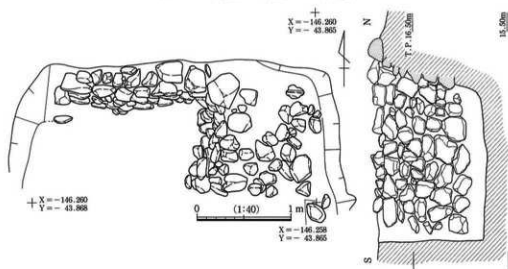


図23 1A調査区 石組6平面・立面図

1 A 炉床 (119) 1 A 調査区の中央南よりで検出された。南北0.8m、東西0.9mの楕円形の掘り方に、直径0.15m程度の礫を丁寧にならべ、壁面はさらに大形の礫を立てて作り出している。熱を受けた痕跡はみられない。上部は削平されており、残存している深さは約0.3mである。石組内より碗形滓・炭化物・輪羽口が出土した。

またこの炉床の周囲南北7m、東西13mの範囲には、不定形ではあるが、炭化物やスラグが散布しており(1 A 土坑258)、これらも炉床と関連付けて考えることが可能である。なお土坑258焼土域からは肥前系磁器染付蝸唐草、スラグ、羽口、肥前系陶器碗、土師器火鉢、丹波窯鉢、飾り瓦が、土坑258東石組周辺からは菊文軒丸瓦、肥前系陶器皿・碗、瀬戸・美濃窯志野鉢、肥前系青磁、スラグ、軒丸瓦、中国製染付碗、土坑258からは土師器皿、軒丸瓦、肥前系陶器碗・皿、丹波窯鉢、鉄匙・鉄鎌、羽口、肥前系磁器瓶などが出土している。

4 A 溝11 (242) 4 A 調査区の中央に位置する。上端幅3.2m、下端幅1.4m、深さ1.1mを測る。断面形は逆台形を呈する。北側の壁(傾斜角60度)に比べて南側の壁は緩やかな傾斜(傾斜角40度)になっている。またこの溝は調査区の中央やや西寄りから南に向かって屈曲する。底面には幅0.4m、深さ5cm

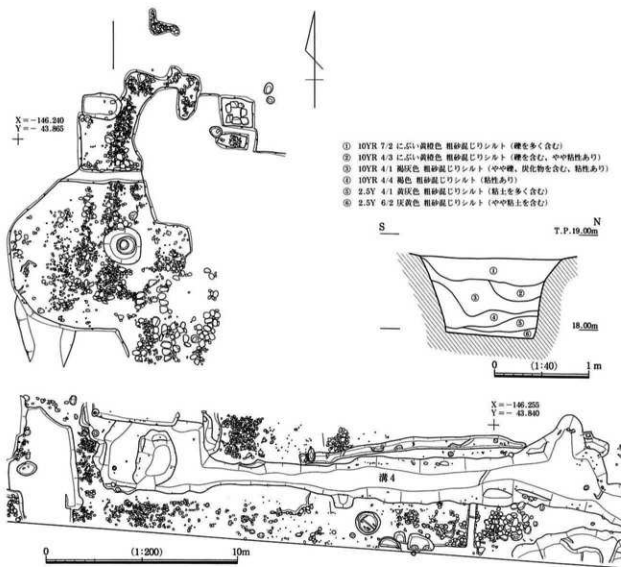


図24 1 A 調査区 溝4 平面・断面図

の浅い溝がある。埋土は他の溝と同様に黄褐色の砂混じりシルトである。底面には僅かに粘土が見られた。なお、埋土には瓦、肥前系などの陶磁器、小礫が多量に含まれている。陶磁器は18世紀前半の資料が主体である。

4 A 溝39・47 (247・252) 調査区の中央部では逆「く」の字状に曲がるものが4条(溝39・47・51・52)確認できた。溝47は上端幅1.1m、下端幅0.4~0.5m、深さ0.85mを測る。断面形は逆台形を呈する。調査区北端中央部からトレンチ中央部にかけては北西から南東に向かい、中央部で屈曲し南西に向かってはしる。北西から南東に向かう部分は長さ約9m、北東から南西にはしる部分の長さは約15mを測る。溝47の屈曲点は溝46(土坑240)と切り合い関係を持つ。また、南西に向かってはしる部分の西壁は溝39によって切られる。埋土は黄褐色の砂混じりシルトで肥前系などの陶磁器、小礫などを多く含

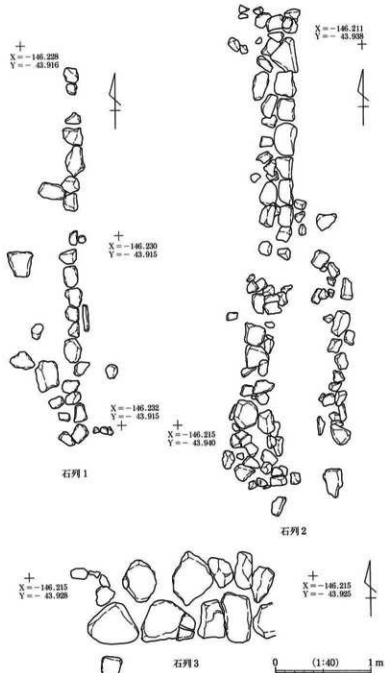


図25 3B調査区 石列1・2・3平面図

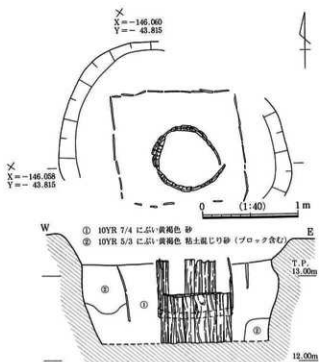


図26 2 C 調査区 井戸12平面・立面図

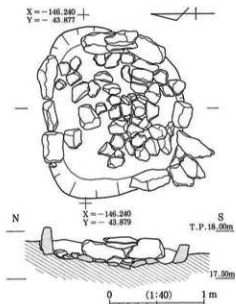
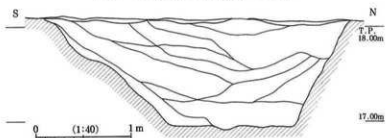


図27 1 A 調査区 炉床平面・立面図



壤土は10YR 3/1 黒褐色~10YR 5/3 に近い黄褐色 砂まじりシルト
(いづれも10YR 7/3 に近い黄褐色 シルトをプロッタ状に含む)

図28 4 A 調査区 溝11断面図

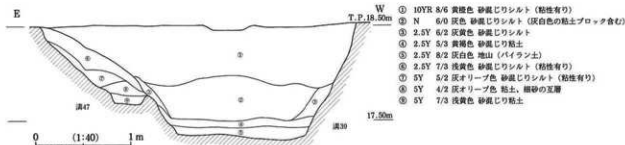


図29 4 A調査区 溝39・47断面図

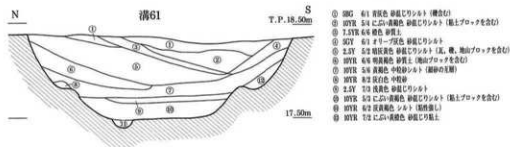
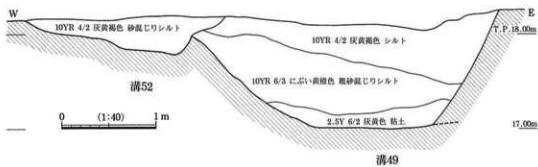
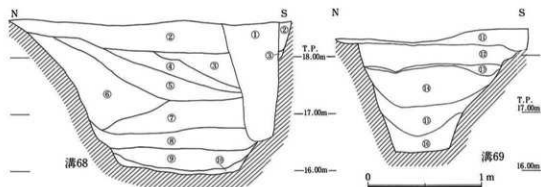


図30 4 A調査区 溝49・61断面図



- ① 試掘坑
- ② 10YR 5/2 灰黄褐色 粗砂混じり中砂
- ③ 10YR 7/6 明黄褐色 粗・中砂 (シルトブロック含む)
- ④ 10Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト (1~3cm大の礫含む)
- ⑤ 7.5Y 5/1 灰色 粗砂混じりシルト (シルトブロック含む)
- ⑥ 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粗砂混じりシルト (シルトブロック含む)
- ⑦ 7.5GY 6/1 緑灰色 シルト混じり細砂
- ⑧ N 6/0 灰色 中・細砂混じりシルト (シルトブロック含む)
- ⑨ 10GY 7/1 明緑灰色 粗・中・細混じりシルト (互層状)
- ⑩ 9G 7/1 明緑灰色 中・細砂混じりシルト
- ⑪ 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粗砂混じりシルト
- ⑫ 5Y 5/2 灰オリーブ色 粗砂混じりシルト (3~5cm大の礫含む)
- ⑬ 10Y 6/1 灰色 中・細砂 (一部シルトの混入あり)
- ⑭ 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト (シルトブロック、1~5cm大の礫含む)
- ⑮ 10YR 6/6 明黄褐色 粗砂混じり中砂
- ⑯ 2.5Y 8/3 淡黄色 粗砂・シルト混じり中砂

図31 4 A調査区 溝68・69断面図

んでいる。

4 A 溝39・51・52 (247・255・256) 溝47に並行するかたちで掘削されている。溝39は上端幅2.5～3.0m、下端幅1.5m、深さ1.2mを数える。長さは北西から南東に向けてはしる部分で8m、北東から南西にのびる部分では13mを測る。東側の壁(傾斜角45～50度)は西側の壁(傾斜角60度)に比べて緩やかに作られている。北端は礫が多量に出土した土坑224に切られており、屈曲点は溝46と切り合い関係を持つ。溝39の埋土も他の溝と同様に黄褐色の砂混じりシルトである。出土遺物の傾向も他の溝と変わらず肥前系などの陶磁器、小礫が多量に含まれている。18世紀前半のものが主体である。

4 A 溝51 (255) 上端幅1.5m、下端幅1.0m、深さ0.2～0.8mを測る。断面形は逆台形である。調査区の中央より北側では遺存状態が悪く僅かに基底層が検出されたに過ぎない。

4 A 溝52 (256) 調査区北端付近で溝50と繋がり、調査区の南端付近で南東に向け屈曲するようである。結果として「Σ」の字状になると思われる。溝50・52の規模は上端幅2.0m、下端幅1.5m、深さ0.2mである。断面形は逆台形を呈する。他の溝に比べて非常に浅いことが特徴的である。埋土および出土遺物は他の溝と同様である。

4 A 溝49・61 (253・258) 調査区の東側で検出された溝49は南北方向にのびている。上端幅3.5m、下端幅2.0m、深さ1.3mを測り、断面形は逆台形である。埋土および出土遺物は他の溝と同様である。

溝61は調査区の東寄りの場所で検出された。北側から南に向けまっすぐのび、調査区の南東隅で西に向けて屈曲する。「J」字状を呈する。規模は上端幅が3.0m、下端幅が1.8～2.0m、深さが1.0mである。この溝の西端部分は2段に掘り込まれ、断面形は逆「凸」の字状を呈する。それ以外の部分は逆台形である。壁は両壁とも同じような傾斜で掘られている。埋土は黄褐色の砂混じりシルトで、瓦、小礫を多く含んでいる。出土遺物には肥前系を主体とする18世紀前半の陶磁器、瓦などがあり、木製品はほとんどみられない。

4 A 溝68・69 (261・262) 溝68は調査区の南東隅に位置する。東西方向に走り、東端は調査区外にの

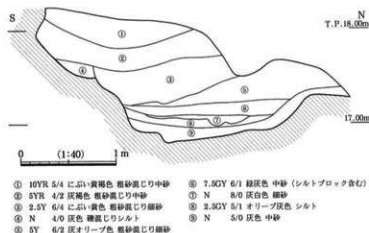
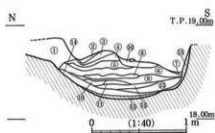


図32 5C調査区 溝13断面図

- ① 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粗砂混じり中砂
- ② 5YR 4/2 灰褐色 粗砂混じり中砂
- ③ 2.5Y 6/4 にぶい黄褐色 粗砂混じり細砂
- ④ N 4/0 灰色 礫混じりシルト
- ⑤ 5Y 6/2 灰オリーブ色 粗砂混じり細砂
- ⑥ 7.0GY 6/1 緑灰色 中砂 (シルトブロック含む)
- ⑦ N 8/0 灰白色 細砂
- ⑧ 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト
- ⑨ N 3/0 灰色 中砂



- ① 10YR 7/8 黄褐色 砂混じりシルト粘土 (4～5層)
- ② N 3/0 暗灰色 シルト (わずかに灰、炭土を含む)
- ③ N 2/0 黒色 炭
- ④ N 3/0 暗灰色 シルト
- ⑤ N 3/0 暗灰色 炭を多く含むシルト
- ⑥ 7.5Y 3/1 オリーブ黄色 粗砂混じりシルト
- ⑦ 2.5Y 7/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト
- ⑧ 2.5Y 6/3 にぶい黄褐色 粗砂混じりシルト
- ⑨ 5YR 5/8 明赤褐色 礫混じりシルト、シルト (炭を含む)
- ⑩ 10YR 6/8 明黄褐色 砂混じり粘土
- ⑪ 5Y 5/3 灰オリーブ色 微砂性土、シルト (炭を含む)
- ⑫ 10YR 4/1 暗灰色 シルト粘土
- ⑬ 5Y 5/1 灰色 砂混じり粘土
- ⑭ 10YR 5/8 黄褐色 粗砂混じりシルト
- ⑮ 10YR 8/4 洗黄褐色 砂質シルト (11層)
- ⑯ 10Y 5/1 灰色 シルト (炭を含む)

図33 5C調査区 土坑55断面図

びる。長さ15m以上、幅5.0m、深さ2.7mを測り、断面は北壁は下部でテラスを有し、南壁の立ち上がりは急である。埋土は最下層が中・細砂及びグライ化したシルト層の堆積である。上層の堆積は礫やシルトブロックを多く含む粗・中砂およびシルト層が北から南へと傾斜する。溝の最下層および下層から出土した遺物は近世陶磁器、瓦、石製硯、砥石、板材、加工痕の見られる竹などである。

溝69は溝68の北側約7mに位置する。溝68とほぼ並行して掘削されており、やはり東端は調査区外へ伸びる。規模は溝68に比べてやや小さく、長さ14m以上、幅3.4m、深さ2.2mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は礫やシルトブロックを含む粗・中・細砂およびシルト層である。遺物は近世陶磁器、瓦、竹材、切断痕のある牛の角があげられる。

4 A 溝70 (263) 調査区の東部を南北方向に走り、南端は調査区外にのびる。長さ17m以上、幅0.6m、深さ0.3mを測る断面箱形を呈する。溝の底から直径30cm、深さ数cmの柱穴が数基検出された。

4 A 溝71 (264) 14トレンチのから延びる平面「J」の字状を呈する溝61の東肩部分で、南北方向にのび南端で西へカーブする。遺物は近世陶磁器、瓦、金属滓などである。

5 C 溝13 (346) 5 C調査区の北東に位置し、屈曲しながら南北にはしる。規模は残存長で26.3m、幅2.4m、深さ0.6mである。

5 C 土坑55 (363) 5 C調査区の西端に位置する。平面形は東西に長い隅丸の方形を呈し、規模は東西3.3m、南北1.8mを測る。埋土は炭または焼土を含むシルトを薄い互層として複数にもつ。「寛永通寶」を出土した。

6 A 土坑165 (439) 6 A調査区南西隅に位置する。南北方向に軸をあわせた長方形の土坑（規模は南北3.7m、東西2.5m）であり、内部にやはり南北方向に軸をもち面を西にもった石列を伴っている。残

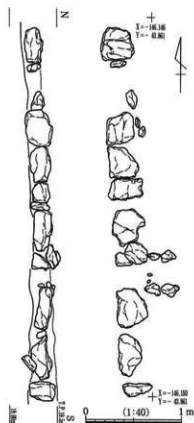


図34 6 A調査区 土坑165内石列平面・立面図

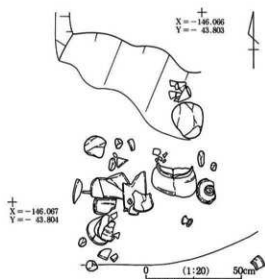


図35 2 C調査区 土坑38平面図

存する石列の長さは4mである。

2C土坑38(147) 2C調査区の北東に位置する。周囲をコンクリートの基礎で削平され、わずかに土坑の中心部のみが残されていた。深さは0.4mである。礫混じりの黒色土から土師器・土瓶・德利・碗などの近世雑器および、瓦・土人形などと共に、「下川福(?)太郎」の墨書をもつ、高台付き土師器鉢が出土した。

2B土坑2(136) 2B調査区中央北よりに位置する。東西方向に長い廃棄土坑としてとりあげたが、基盤層がこの位置を境に南から北へ下降しているため、その地形を利用して設けられた整地層の可能性もある。幅は7.5mで最深部は検出面から0.8mを測る。底部は平坦で最上面には木製品が大量にみられた。なおこの土坑からとして一部、豊臣期と古代の包含層遺物をとりあげており、遺物の掲載はそれを考慮しておこなっている。

2D調査区では北半部から東部際に平面方形および不整形の廃棄土坑が広がり、南半部には北東-南西を軸とする溝と小規模な土坑が散在する。

2D調査区南部の杭列は、検出された長さが、東西41m南北6mで、建物の中心はさらに南へ広がる。杭は約0.5m間隔で打たれ、頭部を欠損してなお4~5m残存しているものもみられた。戦前に建てられた元兵舎の基礎である。

2D溝2(136) 2D調査区の南西部に位置する。北東-南西を軸として、西部で北へ屈曲して調査区外へ延びる。規模は長さ約30.2m、幅は上端が2.5mで斜面はほぼ垂直に立ち上がる。溝の東端も方形に終熄している。埋土は砂礫・粘土などが混濁した状況であり、遺物は瓦破片のほか僅少である。なお、東端部から重圏文軒丸瓦が出土した。

2D土坑13・14(160・161) 2D調査区の北に位置し、北東-西南西を南辺の軸とした方形の落ち込みである。規模は南辺の距離が24.2m、深さは0.1~0.2mを測る。1B調査区の南部で包含層としてとりあげた部分につながる。埋土は礫・砂混じりの混濁した粘土およびシルトであり、18世紀後半以降の陶磁器類が出土している。

3A調査区では西端部で谷町筋へ下がる斜面が、中央部では大形の土坑および地下式貯蔵穴が確認されたが、東部は道路の下で現代の掘乱を受けており、西部には溝と小規模な土坑が散在するのみであった。

3A土坑88(190) 3A調査区南中央に位置する。南北に長い方形の土坑である。規模は南北5.5m、東西2m、深さ1mである。西半部は削平されているが、土坑の底部から廃棄された瓦の集積と樽が検出された。また土坑壁の底部際には、横板組の痕跡が残されていた。

3A土坑100・106(193・194) 3A調査区の中央東よりに位置する不定形な土坑であり、特に土坑100は複数の土坑が重複して掘り広げられて形成されたことが、その形状から推測される。埋土からは近世陶磁器・瓦片が混濁した状態で多量に出土した。3A土坑97・98(191・192)についても同様な検出状況をみせている。

なお調査区西端の崖部斜面からは、東西方向の溝が数条と3A土坑55(183)などの廃棄土坑が確認されており、同時に3層の一部にあたる黒灰色シルト層の斜面全体から多量の遺物が検出されている。

4A調査区 3層上面からは南北方向に1本、東西方向に1本の道路状遺構が確認され、それに伴う柵列跡と側溝が検出された。そのほか、焼土坑や土坑などが確認されている。

道路状遺構になると考えられる部分は4A溝2・3(7・8)、4A溝4・5(9・10)の間で、砂

利や瓦を敷き詰め、堅く叩き締められている。前者（道路1）は幅4m、長さ30m以上で、後者（道路2）は幅6m、長さ70m以上である。道路1上からは轍が検出された。なお、道路1は2回以上の造り替えが確認されている。

道路の側溝と思われる4A溝3・4・5（8・9・10）はそれぞれ幅約0.5m、深さ0.1mである。道路に伴う柵列の柱穴は直径0.3～0.5m、深さ約0.5mを測り、直径約0.1mの木柱痕を残すものがある。また、4A道路2（22）東側柵列の東側にも柵列が一条確認された。長さは60m以上あり、他の柵列よりも柱間の長い柵列であった。また、東西方向にも堅く叩き締められた青灰色土が幅3m、長さ20mにわたって確認された。これも道路状遺構（道路3）と考えられる。道路3にも柵列と側溝が伴う。

道路3と4A溝3・4・5の交点には、幅5～7cmの角材を24～25本並べた簧の子状の痕跡があり、簡単な橋状の施設に対比される。さらに、道路2の中央付近からは焼土坑が検出された。土坑は長さ1.8m、幅0.5～0.75m、深さ0.1～0.2mを測る。土坑内からは石や瓦、鉄製品、鉄片が出土している。また、土坑の周辺からは焼けて堅く締まった面が約4.5m四方にみられる。土坑の南西には炭溜りも確認されている。

溝は南北方向に直線的にのびるもの、逆「く」の字に曲がるもの、斜行するもの、東西方向にはしるものと多彩である。

4A溝10（241） 上端幅1.0m、下端幅0.3m、深さ0.8mを測り、断面形は逆台形を呈する。トレンチの北端中央を北西から南東に向かってはしり、トレンチの中央やや北寄りの位置で屈曲し南西に向かう。トレンチの南端で溝11によって切られている。北西から南東にかけてはしる部分の長さは11m、北東から南西に向かってはしる部分の長さは16mを測る。埋土は黄褐色の砂混じりシルトで瓦、肥前系などの陶磁器、小礫などを含んでいる。陶磁器は18世紀前半の資料が中心である。

トレンチの西端でまともな検出された南北方向にはしる溝4条は幅0.3～0.9m、深さ0.4～0.65mを測り、断面形は縦長長方形を呈する。長さは8～32mを測る。埋土は暗褐色～黄褐色の砂混じりシルトである。近世陶磁器を僅かに含んでいる。

土坑には不定形なものと直径1～1.5m程度の円形を呈するものとがみられる。前者には大きなもので長辺6m以上、短辺4.5m以上の隅丸方形を呈するものがある。この不定形の土坑は埋土が褐色の砂混じりシルトで握り拳～人頭大の礫や陶磁器などを含んでいる。これらの土坑は廃棄土坑と考えられる。特に土坑104からは微細な炭とともに肥前系を中心とした多くの陶磁器が出土した。18世紀の資料が主体である。

後者の土坑は4A土坑143・144・145・154（280～283）などであり、トレンチ中央やや東寄りの位置で20基まともな検出された。これらの土坑は上端直径1～1.5m、下端直径0.4～0.6m、深さ0.5～0.8mを測り、楕円状を呈する。この土坑群はほぼ同心円上に並んでいる。埋土からはほとんど遺物が出土していない。性格は明確にし得なかった。

4A溝60（257） やや南に振るものの東西方向にはしる溝である。東端はトレンチ中央東寄りのところで終結し、西側は調査区北側に向かって屈曲する。上端幅は3.0m、下端幅は1.8m、深さ1.0mを測る。断面形は逆台形である。確認された長さは14.5mである。埋土は上層に地山ブロックを含んだ黄褐色の砂混じりシルトがあり、下層には青灰色粘土および粘土と砂の互層状の堆積がみられた。また、溝東端の部分では埋土中に多量の炭が集中する部分がみられた。

4A溝64（260） 北西から南東に向かってはしる幅の細い溝である。南東側は現代の擾乱によって切

られ確認できなかった。規模は上端幅1.0m、下端幅0.4m、深さ0.5mである。埋土は溝60・61などと同じである。

4 A 土坑264 (292) トレンチの東端中央部に位置する廃棄土坑である。平面精査の段階では攪乱により分断された1基の土坑と考えていたが、掘り進めた結果、長辺1m以上、短辺1.1m、深さ0.5mの土坑と長辺2m以上、短辺1.7m、深さ0.6mの別々の土坑である可能性が高いことがわかった。近世陶磁器、土器、土人形、羽口などが多量に出土した。

4 A 土坑272 (294) トレンチの北東部に位置する。長径1.6m、短径1.3m、深さ0.2mを測る不正形な円形を呈する。土坑内より多量の近世陶磁器とともに貝殻が出土した。

4 A 土坑273 (295) 4 A 土坑272 (294) の北北西約2mに位置し、直径1.4m、深さ0.6mを測り、壁はほぼ直に掘り込まれている。埋土中には炭が含まれており、多量の近世陶磁器が出土した。土坑278は長辺1.4m、短辺1.2m、深さ0.3mの方形を呈す。その南東隅は溝68と接しており、断面観察の結果4 A 溝68 (261) より新しいことを確認した。

4 A 井戸10 (239) 中央部やや北よりに位置し、直径1.9mを測る。上層は近・現代の攪乱による削平を受けていた。底は検出面より5m以上掘り下げたが到達しなかった。また、井戸は木製の井戸枠が使用されている。井戸枠は長さ2～3m、幅30cm、厚さ10cmの板材を桶状に巡らす。埋土内から近世陶磁器が若干出土している。

4 A ビット208 (234) 東半中央部分に位置する。規模は後世の攪乱によって明らかではないが、埋土内より、銭貨が17枚重なった状態で出土した。そのうちの1枚は寛永通寶である。

4 A 溝68 (261) の南辺及び西辺を巡るように深さ10～20cmの掘り込みがある。埋土は褐色中・細砂で底部は一定ではなく凹凸がみられる。断面観察の結果この掘り込みは溝68より古いことが判明した。但し、4・5層の盛土の一部である可能性も指摘される。

なお、4 A 溝69 (262) の北側の4・5層中から、焼土塊、炭、羽口、金属滓が出土した。

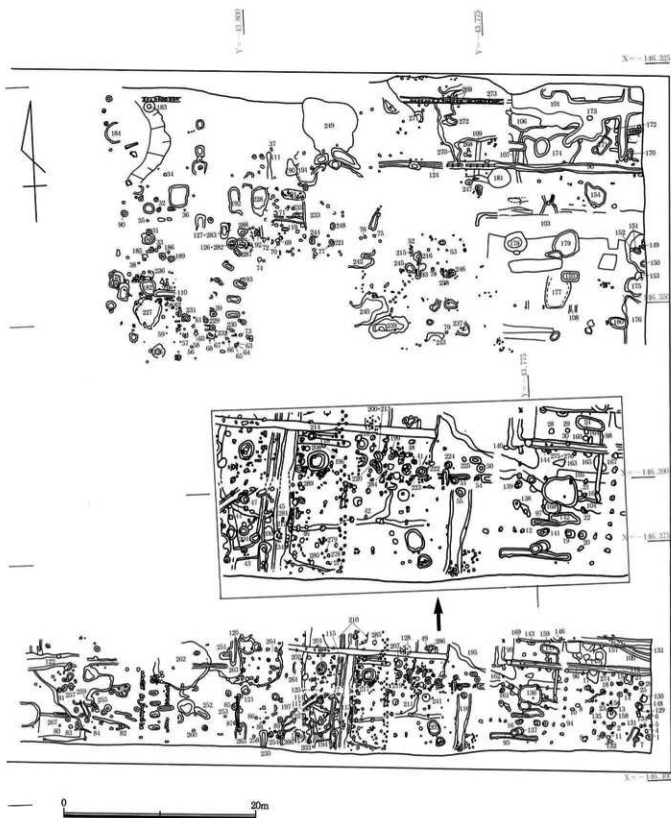


図36 遺構配置図 (5 A 調査区)

表5 遺構掲載番号表(5A調査区) 1

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ	江戸	-146352	-43805	0.05		
1	5Aビット003	江戸	-146396	-43761	0.12	68	5Aビット138	江戸	-146342	-43797	0.27
2	5Aビット004	江戸	-146395	-43765	0.11	70	5Aビット141	江戸	-146342	-43797	0.13
3	5Aビット005	江戸	-146395	-43766	0.05	71	5Aビット144	江戸	-146340	-43797	0.14
4	5Aビット006	江戸	-146395	-43762	0.10	72	5Aビット145	江戸	-146342	-43799	0.11
5	5Aビット007	江戸	-146395	-43761	0.08	73	5Aビット147	江戸	-146352	-43802	0.54
6	5Aビット008	江戸	-146394	-43761	0.12	74	5Aビット155	江戸	-146344	-43800	0.39
7	5Aビット009	江戸	-146396	-43763	0.15	75	5Aビット167	江戸	-146342	-43787	0.17
8	5Aビット010a	江戸	-146392	-43769	0.06	76	5Aビット168	江戸	-146342	-43788	0.18
9	5Aビット010b	江戸	-146396	-43768	0.13	77	5Aビット177	江戸	-146343	-43792	
10	5Aビット011	江戸	-146393	-43769	0.10	78	5Aビット179a	江戸	-146345	-43782	0.07
11	5Aビット012	江戸	-146396	-43766	0.12	79	5Aビット198	江戸	-146352	-43780	0.23
12	5Aビット013	江戸	-146393	-43776	0.10	80	5Aビット245	江戸	-146391	-43823	0.21
13	5Aビット014	江戸	-146393	-43765	0.10	81	5Aビット246	江戸	-146388	-43822	0.39
14	5Aビット015	江戸	-146391	-43764	0.09	82	5Aビット247	江戸	-146392	-43816	0.30
15	5Aビット016	江戸	-146390	-43764	0.10	83	5Aビット248	江戸	-146392	-43819	0.22
16	5Aビット017	江戸	-146394	-43775	0.26	84	5Aビット249	江戸	-146392	-43821	0.60
17	5Aビット018	江戸	-146391	-43767	0.12	85	5Aビット251	江戸	-146391	-43804	0.77
18	5Aビット019	江戸	-146391	-43764	0.20	86	5Aビット252	江戸	-146392	-43802	0.38
19	5Aビット020	江戸	-146394	-43773	0.09	87	5Aビット253	江戸	-146392	-43804	0.16
20	5Aビット022	江戸	-146394	-43772	0.13	88	5Aビット254	江戸	-146392	-43801	0.17
21	5Aビット023	江戸	-146391	-43772	0.12	89	5Aビット255	江戸	-146394	-43799	0.05
22	5Aビット024(ビット27)	江戸	-146392	-43772	0.10	90	5A飯土坑139	江戸	-146339	-43813	0.82
23	5Aビット025	江戸	-146392	-43766	0.06	91	5A瓦溜まり01	江戸	-146337	-43796	
24	5Aビット028(ビット36)	江戸	-146387	-43771	0.14	92	5A瓦溜まり02	江戸	-146341	-43800	
25	5Aビット029	江戸	-146391	-43762	0.11	93	5A瓦溜まり06	江戸	-146345	-43782	
26	5Aビット030	江戸	-146390	-43762	0.03	94	5A建物01	江戸	-146394	-43770	
27	5Aビット031(土坑36)	江戸	-146390	-43763	0.16	125	5A建物02	江戸	-146386	-43795	
28	5Aビット033	江戸	-146387	-43774	0.12	95	5A溝004	江戸	-146395	-43776	0.06
29	5Aビット034	江戸	-146387	-43773	0.11	96	5A溝005	江戸	-146389	-43768	0.09
30	5Aビット035	江戸	-146388	-43773	0.08	97	5A溝007	江戸	-146393	-43775	0.13
31	5Aビット084	江戸	-146341	-43811	0.28	98	5A溝008	江戸	-146389	-43771	0.04
32	5Aビット085	江戸	-146338	-43810	0.11	99	5A溝009(溝29)	江戸	-146387	-43776	0.30
33	5Aビット086	江戸	-146342	-43810	0.44	100	5A溝010	江戸	-146387	-43763	0.10
34	5Aビット089	江戸	-146335	-43809	0.25	101	5A溝011(溝30・113)	江戸	-146330	-43767	0.64
35	5Aビット090	江戸	-146339	-43810	0.17	102	5A溝014	江戸	-146396	-43766	0.31
36	5Aビット092	江戸	-146339	-43806	0.23	103	5A溝020	江戸	-146342	-43766	0.91
37	5Aビット093	江戸	-146332	-43798	0.42	104	5A溝024	江戸	-146392	-43772	0.34
38	5Aビット094	江戸	-146343	-43812	0.59	105	5A溝026	江戸	-146390	-43772	0.21
39	5Aビット097	江戸	-146349	-43805	0.48	106	5A溝031	江戸	-146331	-43768	0.28
40	5Aビット107(未登録)	江戸	-146393	-43796	0.06	107	5A溝032	江戸	-146334	-43772	0.17
41	5Aビット108(土坑218)	江戸	-146389	-43793	0.06	108	5A溝035	江戸	-146350	-43767	0.14
42	5Aビット110	江戸	-146392	-43787	0.01	109	5A溝037	江戸	-146334	-43776	0.06
43	5Aビット111	江戸	-146394	-43795	0.48	110	5A溝059	江戸	-146347	-43810	
44	5Aビット112	江戸	-146391	-43796	0.04	111	5A溝060	江戸	-146334	-43798	
45	5Aビット113	江戸	-146391	-43794	0.24	112	5A溝063	江戸	-146386	-43790	0.12
46	5Aビット114	江戸	-146393	-43792	0.04	113	5A溝064(溝65)	江戸	-146390	-43793	0.13
47	5Aビット116	江戸	-146391	-43796	0.06	114	5A溝066	江戸	-146390	-43796	0.11
48	5Aビット117	江戸	-146388	-43784		115	5A溝067	江戸	-146389	-43793	
49	5Aビット118	江戸	-146386	-43784	0.12	116	5A溝068	江戸	-146394	-43781	0.13
50	5Aビット119	江戸	-146389	-43779	0.13	117	5A溝069	江戸	-146393	-43797	0.30
51	5Aビット120	江戸	-146390	-43787	0.10	118	5A溝070	江戸	-146387	-43789	0.07
52	5Aビット122	江戸	-146343	-43784	0.15	119	5A溝074	江戸	-146340	-43796	0.08
53	5Aビット123	江戸	-146343	-43780	0.11	120	5A溝090	江戸	-146385	-43804	0.20
54	5Aビット124	江戸	-146390	-43779	0.15	121	5A溝094	江戸	-146392	-43804	0.06
55	5Aビット125	江戸	-146390	-43780	0.14	122	5A溝096	江戸	-146385	-43822	0.50
56	5Aビット126	江戸	-146353	-43807	0.12	123	5A溝100	江戸	-146393	-43799	0.20
57	5Aビット127	江戸	-146351	-43808	0.09	124	5A溝114	江戸	-146335	-43780	0.38
58	5Aビット128	江戸	-146351	-43807	0.11	126	5A殿治伊3(伊3)	江戸	-146342	-43802	
59	5Aビット129	江戸	-146351	-43809	0.07	127	5A殿治伊4(伊4)	江戸	-146341	-43803	
60	5Aビット130	江戸	-146351	-43807	0.09	128	5A土溜まり1	江戸	-146386	-43786	
61	5Aビット131	江戸	-146350	-43808	0.14	129	5A土坑007	江戸	-146393	-43762	0.11
62	5Aビット132	江戸	-146348	-43810	0.06	130	5A土坑008	江戸	-146392	-43762	0.15
63	5Aビット133	江戸	-146352	-43802	0.01	131	5A土坑009	江戸	-146395	-43763	0.17
64	5Aビット134	江戸	-146352	-43802	0.02	132	5A土坑010	江戸	-146396	-43766	0.41
65	5Aビット135	江戸	-146353	-43803	0.03	133	5A土坑011	江戸	-146387	-43762	0.06
66	5Aビット136	江戸	-146352	-43803	0.01	134	5A土坑016	江戸	-146395	-43762	0.09
67	5Aビット137	江戸	-146351	-43805	0.05	135	5A土坑017	江戸	-146393	-43767	0.10

表5 遺構掲載番号表(5A調査区) 2

136	5A土坑018	江戸	-146391	-43773	0.06	204	5A土坑195	江戸	-146393	-43796	0.08
137	5A土坑019	江戸	-146395	-43775	0.54	205	5A土坑196	江戸	-146394	-43784	0.23
138	5A土坑020	江戸	-146392	-43776	0.22	206	5A土坑197	江戸	-146393	-43794	0.40
139	5A土坑022	江戸	-146390	-43776	0.13	207	5A土坑199	江戸	-146387	-43787	0.18
140	5A土坑023	江戸	-146390	-43775	0.15	208	5A土坑204	江戸	-146387	-43791	0.38
141	5A土坑024	江戸	-146394	-43775	0.14	209	5A土坑205	江戸	-146387	-43790	0.26
142	5A土坑025	江戸	-146394	-43774	0.06	210	5A土坑207	江戸	-146385	-43793	0.46
143	5A土坑026	江戸	-146385	-43773	0.18	211	5A土坑210	江戸	-146390	-43790	0.14
144	5A土坑028	江戸	-146388	-43774		212	5A土坑211	江戸	-146392	-43793	0.40
145	5A土坑031	江戸	-146389	-43767	0.95	213	5A土坑212	江戸	-146389	-43786	0.05
146	5A土坑032	江戸	-146385	-43770	0.11	214	5A土坑213	江戸	-146386	-43790	
147	5A土坑033	江戸	-146386	-43771	0.56	215	5A土坑214	江戸	-146344	-43784	
148	5A土坑035	江戸	-146393	-43762	0.09	216	5A土坑215	江戸	-146345	-43782	0.51
149	5A土坑039	江戸	-146345	-43769	0.28	217	5A土坑216	江戸	-146389	-43790	0.47
150	5A土坑040	江戸	-146346	-43770	0.33	218	5A土坑217	江戸	-146387	-43786	0.01
151	5A土坑041	江戸	-146345	-43760	0.57	219	5A土坑219	江戸	-146388	-43787	0.01
152	5A土坑042	江戸	-146345	-43761	0.23	220	5A土坑220	江戸	-146389	-43786	0.06
153	5A土坑043	江戸	-146347	-43760	0.06	221	5A土坑221	江戸	-146343	-43792	
154	5A土坑045	江戸	-146339	-43764	0.35	222	5A土坑224	江戸	-146389	-43783	0.27
155	5A土坑048	江戸	-146347	-43767	0.30	223	5A土坑225	江戸	-146389	-43794	0.27
156	5A土坑050	江戸	-146392	-43765	0.33	224	5A土坑226	江戸	-146389	-43781	0.05
157	5A土坑051	江戸	-146396	-43766	0.24	225	5A土坑227	江戸	-146388	-43780	0.13
158	5A土坑052	江戸	-146393	-43765	0.21	226	5A土坑228	江戸	-146353	-43811	0.48
159	5A土坑053	江戸	-146386	-43771	0.15	227	5A土坑229	江戸	-146348	-43812	0.66
160	5A土坑054	江戸	-146387	-43771	0.15	228	5A土坑230	江戸	-146338	-43799	0.46
161	5A土坑057	江戸	-146391	-43775	0.15	229	5A土坑231	江戸	-146350	-43805	0.07
162	5A土坑058	江戸	-146389	-43776	0.22	230	5A土坑232	江戸	-146351	-43803	0.31
163	5A土坑059	江戸	-146389	-43773	0.15	231	5A土坑233	江戸	-146350	-43807	0.08
164	5A土坑060	江戸	-146388	-43771	0.20	232	5A土坑234	江戸	-146352	-43803	0.01
165	5A土坑061	江戸	-146388	-43771	0.20	233	5A土坑235	江戸	-146340	-43794	0.49
166	5A土坑063	江戸	-146391	-43771	0.16	234	5A土坑237	江戸	-146393	-43793	0.02
167	5A土坑064	江戸	-146389	-43771	0.19	235	5A土坑239	江戸	-146339	-43795	0.35
168	5A土坑065	江戸	-146392	-43774	0.30	236	5A土坑243	江戸	-146345	-43811	0.21
169	5A土坑066	江戸	-146385	-43774		237	5A土坑253	江戸	-146352	-43799	0.15
170	5A土坑068	江戸	-146335	-43761	0.41	238	5A土坑254	江戸	-146346	-43780	0.12
171	5A土坑069	江戸	-146334	-43763	0.15	239	5A土坑255	江戸	-146352	-43786	0.64
172	5A土坑070	江戸	-146332	-43763	0.27	240	5A土坑256	江戸	-146349	-43785	0.61
173	5A土坑071	江戸	-146331	-43765	0.16	241	5A土坑261	江戸	-146391	-43784	0.32
174	5A土坑072	江戸	-146334	-43769	0.23	242	5A土坑262 a	江戸	-146344	-43789	0.44
175	5A土坑076	江戸	-146349	-43760	0.35	243	5A土坑262 b	江戸	-146353	-43782	0.61
176	5A土坑077	江戸	-146353	-43761	0.26	244	5A土坑263	江戸	-146342	-43794	0.20
177	5A土坑078	江戸	-146349	-43769	0.34	245	5A土坑264	江戸	-146354	-43784	0.26
178	5A土坑079	江戸	-146343	-43768	0.30	246	5A土坑265	江戸	-146346	-43780	0.17
179	5A土坑080	江戸	-146344	-43767	0.16	247	5A土坑282	江戸	-146338	-43776	0.10
180	5A土坑081	江戸	-146352	-43763	0.27	248	5A土坑295	江戸	-146341	-43792	0.14
181	5A土坑083	江戸	-146346	-43774	0.14	249	5A土坑322	江戸	-146331	-43792	
182	5A土坑136 (土坑169)	江戸	-146346	-43811	0.40	250	5A土坑327	江戸	-146394	-43801	0.80
183	5A土坑138	江戸	-146327	-43810	0.65	251	5A土坑333	江戸	-146385	-43806	0.75
184	5A土坑147	江戸	-146330	-43810	0.76	252	5A土坑337	江戸	-146391	-43806	0.35
185	5A土坑167	江戸	-146343	-43811	0.12	253	5A土坑339	江戸	-146392	-43806	0.21
186	5A土坑168	江戸	-146343	-43810	0.22	254	5A土坑340	江戸	-146394	-43801	0.26
187	5A土坑173	江戸	-146345	-43815	0.51	255	5A土坑342	江戸	-146390	-43819	0.18
188	5A土坑174	江戸	-146341	-43811	0.35	256	5A土坑343	江戸	-146388	-43816	0.58
189	5A土坑176	江戸	-146344	-43809	0.40	257	5A土坑345	江戸	-146388	-43822	0.24
190	5A土坑178	江戸	-146334	-43796		258	5A土坑346	江戸	-146394	-43802	0.08
191	5A土坑179	江戸	-146334	-43794		259	5A土坑347	江戸	-146390	-43819	0.24
192	5A土坑181	江戸	-146338	-43802	0.34	260	5A土坑348	江戸	-146393	-43809	0.12
193	5A土坑182	江戸	-146346	-43801		261	5A土坑350	江戸	-146387	-43796	0.14
194	5A土坑183	江戸	-146394	-43794		262	5A土坑362 (土坑363)	江戸	-146386	-43810	1.29
195	5A土坑184	江戸	-146386	-43779	0.60	263	5A土坑364 (中層)	江戸	-146386	-43804	1.15
196	5A土坑185	江戸	-146395	-43784	0.24	264	5A土坑365 (上層)	江戸	-146386	-43802	0.87
197	5A土坑186	江戸	-146392	-43797		265	5A土坑367	江戸	-146393	-43804	0.29
198	5A土坑187 (土坑188)	江戸	-146394	-43798		266	5A土坑371	江戸	-146394	-43799	
199	5A土坑189	江戸	-146388	-43785	0.39	267	5A土坑373	江戸	-146388	-43815	0.99
200	5A土坑190	江戸	-146388	-43786	0.33	268	5A土坑397	江戸	-146331	-43777	0.73
201	5A土坑192	江戸	-146387	-43795	0.40	269	5A土坑398	江戸	-146329	-43778	0.30
202	5A土坑193	江戸	-146387	-43797	0.04	270	5A土坑399	江戸	-146334	-43783	0.49
203	5A土坑194	江戸	-146394	-43796	0.20	271	5A土坑401	江戸	-146330	-43782	0.30

表5 遺構掲載番号表(5A調査区)3

272	5A土坑424	江戸	-146331	-43779	0.26
273	5A布漕り溝	江戸	-146328	-43779	0.12
274	5A胎衣壺1	江戸	-146388	-43765	
275	5A胎衣壺2	江戸	-146388	-43774	
276	5A胎衣壺3	江戸	-146388	-43774	
277	5A胎衣壺4(土坑200)	江戸	-146395	-43790	0.03
278	5A胎衣壺5(土坑201)	江戸	-146394	-43789	0.03
279	5A胎衣壺6(土坑202)	江戸	-146394	-43789	
280	5A胎衣壺7(土坑203)	江戸	-146395	-43791	0.01
281	5A胎衣壺8(土坑198)	江戸	-146392	-43793	
282	5A ^Ⅱ 03	江戸	-146342	-43802	
283	5A ^Ⅱ 04	江戸	-146341	-43803	
284	5A ^Ⅱ 05	江戸	-146389	-43785	
285	5A ^Ⅱ 06	江戸	-146385	-43789	
286	5A ^Ⅱ 07	江戸	-146386	-43784	
287	5A ^Ⅱ 08	江戸	-146342	-43801	
288	5A ^Ⅱ 09	江戸	-146341	-43801	
289	5A磚列建物	江戸	-146387	-43790	

A-2、5A調査区の遺構

土坑22・23(139・140) 調査区の南東に位置する、共に直径50cm、深さ50cmの平面円形の土坑で、埋土からは多量の瓦が出土した。このうち土坑22は底に木製桶を埋めており、埋土の状況から土坑23とあわせて便所遺構の可能性がある。

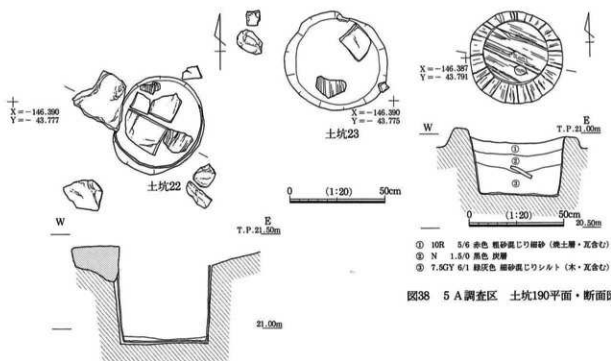


図37 5A調査区 土坑22・23平面・断面図

図38 5A調査区 土坑190平面・断面図

土坑190 (200) 調査区の南中央に位置する。埋桶遺構である。規模は上端の直径が50cm、残存する深さは30cmである。埋土上層に焼土と瓦を含んでる。

礎石建物 調査区の南に位置する。調査区の南東隅では、その北側2/3の範囲で炭混じりの焼土層が広がり、この焼土層を掘り込んで多数の礎石が検出された。礎石群の範囲は、南北7m、東西35m以上で、北に側溝をもつ道路遺構を配する。路面は堅く締まっており、幅2.3m、長さ15m以上を測る。

これらの礎石群から想定される建物は、北の道都に面して東西に連なる長屋構造になるが、その建物が、一連のものか複数の棟から構成されるかは不明である。

建物1 (94) はこれらの礎石群の東部を地区さす。範囲は南北7m、東西15mにおよび、最大で南北8間、東西13間の建物が建つことになる。ただし柱間の距離は南北が1~0.9mではほぼ一定である一方で、東西は1~0.9mと1.6mの2規格がみられ、1.6mの間隔を建物と建物の間とすれば、この礎石群は1~0.9mの柱間をもつ東西5間、南北7間の建物を単位としていた可能性も指摘できる。

なおこれらの礎石群のうち、東の礎石群は炭混じりの焼土層を基盤層としており、それを除去すると、北側へ向かって落ちる幅7.5m以上の段状地形になり、その段を埋める形で炭、焼土、焼け石が多量に出土した。なお特に、段状遺構の斜面部分を中心として焼け石を含む多量の石が廃棄されていた。

建物2 (125) は礎石群の西端に位置する。南北2間以上の礎石の並びが確認できるが、重複して礎石と判別できない礫の集積もみられる。礎石間の距離は南北が約1m、東西は東から1mずつを隔て、最も西の礎石列は約1.5mの間隔をもつ。

炉3 (282) 調査区の北中央に位置する。平面円形の炉で直径約1m、深さ15cmを測る。内部には炭層がみられ、底面には瓦、礫が敷かれていた。

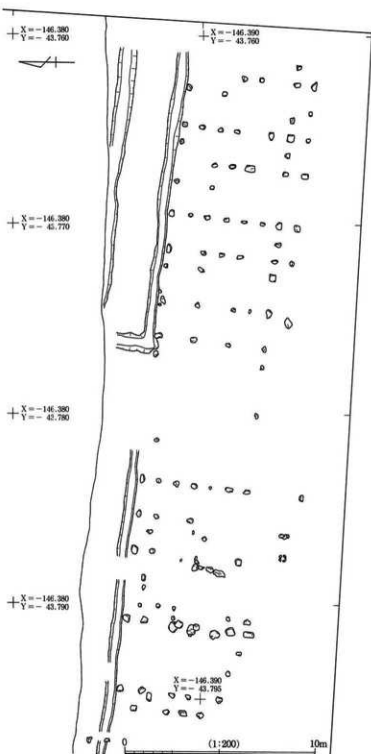


図39 5A調査区 礎石建物平面図

炉 4 (283) 調査区の北中央に位置する。平面不整形長方形（南北0.9m、東西0.5m）を呈する焼土面が存在し、その南寄りの部分に直径45cmの炭溜まりがみられる。この炉は11層を2段に掘り窪め、そこに炭や鉄滓・焼土を含んだシルト粘土を貼り、防湿を施した下部構造の上に築かれている。

両者とも埋土に多くの炭を含み、微細な鉄滓や鍛造剥片がみられることから鍛冶炉と思われる。

炉 5 (284) 調査区の南中央東よりに位置する。長辺が0.4mの隅丸台形を呈する。皿状に窪んだ内部から炭と瓦が出土している。

炉 8 (287) 調査区北中央に位置する。平面長方形を呈し、南北0.8m、東西1.6m、深さ0.2mを測る。火床の部分は確認された範囲のほぼ中央に位置し、南北0.3m、東西1mを測る。

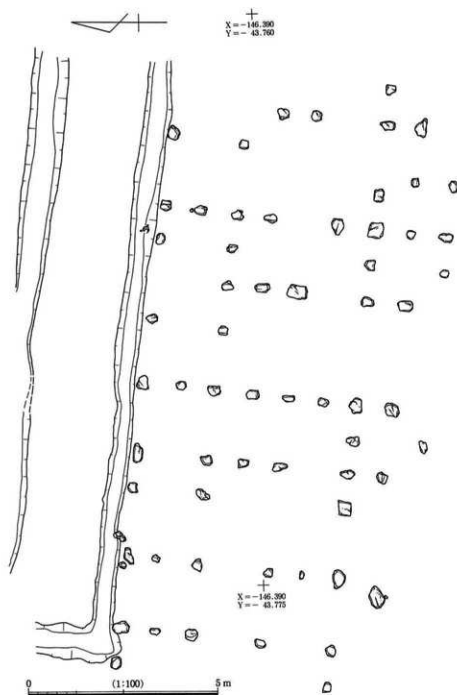


図40 5A調査区 建物1平面図

炉 9 (288) 調査区北中央に位置する。南北0.8m、東西1m、深さ0.3mを測り平面長楕円形を呈する。埋土に多量の炭がみられるが壁、床ともに焼け面が確認できないことから、炉ではなく炭溜まり土坑の可能性もある。両者とも11層を10cmほど掘り窪め、その周囲に粘土を10cm程度貼って炉としている。

胞衣壺 1・2 (274・275) 調査区の南東に位置する。礎石群の東部地区で北の道路遺構沿いにあたる。胞衣壺1は正置で、胞衣壺2は倒置である。共に明確な掘り方は確認されなかった。なお、礎石群の西部地区からも胞衣壺がまとまって出土している（胞衣壺3～8）。

以下詳細図掲載以外の遺構について述べる。

土坑31 (145) は調

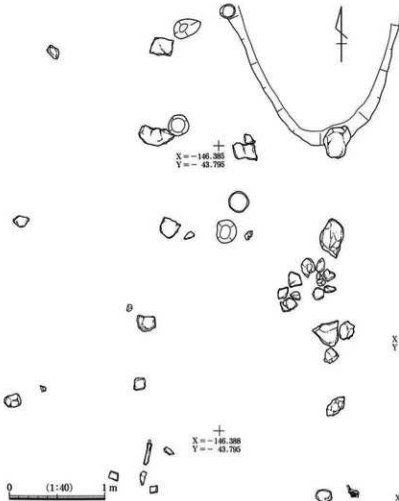


図41 5 A調査区 建物2平面図

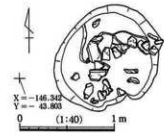


図42 5 A調査区 炉3平面図

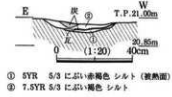
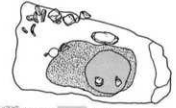
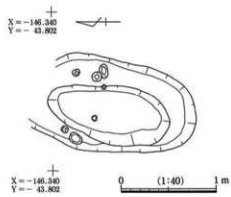


図43 5 A調査区 炉5断面図



- ① N 2/0 黒色 炭層
- ② 2.5YR 5/6 明赤褐色 細砂混じりシルト (焼土層)
- ③ 2.5Y 7/4 浅黄 粘土 (炭・焼土・瓦を含む、粘土を粘っている)
- ④ 10YR 5/6 黄褐色 シルト (焼土層)
- ⑤ N 2/0 黒色 炭層
- ⑥ 10YR 6/8 明黄褐色 細砂混じりシルト (11層)

図44 5 A調査区 炉4平面・断面図

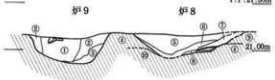
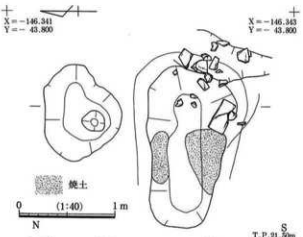


図45 5 A調査区 炉8・9平面・断面図

- ① 7.5YR 7/8 黄褐色 粘土ブロック含む 炭 (N2黒色)
- ② 10YR 3/1 黒褐色 砂混じりシルト (炭を多く含む)
- ③ 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト
- ④ 7.5YR 5/8 明褐色 細砂混じり粘土 (古代の包含層か?)
- ⑤ 7.5YR 6/8 褐色 砂混じり粘土シルト (砂・瓦を含む)
- ⑥ 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト (炭を多く含む)
- ⑦ N 2/0 黒色 シルト (炭を多く含む)
- ⑧ 7.5YR 6/6 褐色 砂混じりシルト粘土
- ⑨ 7.5YR 6/3 に近い黄色 細砂混じりシルト
- ⑩ 5YR 6/8 褐色 シルト粘土 (11層焼山)

査区の南部に位置する。東に接する大阪市立中央体育館地点での調査成果と照らし合わせて、江戸時代後期の粘土取り穴とされる。これより西に続く土坑210 (211)、土坑363 (262)、土坑364 (263)、土坑365 (264) とあわせて、大量の近世陶磁器を出土した。それぞれの土坑の規模は5～10mであるが、調査区の南部ではこれらの土坑が断続的に40m以上続く。なお先述の礎石群は、これらの土坑が埋められた後に、その整地層を基盤層として設けられている。

土坑235 (233) は調査地北半中央に位置し、一辺5m程を測る巨大な粘土取り穴である。埋土から多量の瓦、近世陶磁器が出土した。

土坑254 (238)・土坑264 (245)・土坑265 (246) では礫が多量に廃棄されている。

土坑255 (239)・土坑256 (240) は調査区の北半南端中央に位置する。規模は長軸4mほどの大形のもので、深さは1m近い。埋土に瓦、礫、近世陶磁器を多量に含む。粘土取り穴かと考えられる。

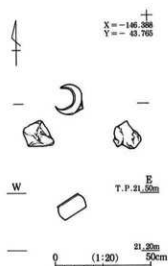


図46 5 A調査区 髷衣壺1平面・立面図

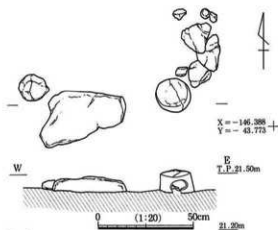


図47 5 A調査区 髷衣壺2平面・立面図

B、遺物

江戸時代以降の遺物には、土器・陶磁器・漆器・木製品・金属製品・石製品・土製品・瓦などがみられる。出土状況は大半は廃棄土坑中であり、セットとしての同時存在は有効性が乏しく、またそれらの用途を復原する手がかりも少ないものとなっている。ただし廃棄土坑の分布には、その供給源が機能していた時の位置を反映する部分もあると考えられ、その点が今後の課題として残される。

ここでは廃棄土坑の中でも比較的一括性の高いと思われる資料を選び、説明を加える。なおこれまでの作業において豊臣期の遺物を優先的に選別してきたため、包含層資料の場合、江戸時代以前の遺物も共に提示していることがある。

a、漆器・土器・陶磁器

① 4 A 溝11

9は肥前系陶器皿である。内底面は釉が掻き取られ、高台は削りだして竹節状を呈する。10は京焼系皿である。全面に施された黄灰色の釉に貫入が著しい。11は黄灰色の薄い釉に細かな貫入がみられ、底部外面にへら描きを有する。13は磁器染付皿であり、釉下に化粧土をはさみ、細かな貫入と青黒いコバルトの発色をみる。高台は露胎となっている。14は肥前系染付皿である。外面の唐草の省略が著しい。

なおこの遺構ではほかに1690年～18世紀前半の有田型紙刷り、中国製赤絵および幕末の肥前系染付がみられる。

② 1 A 土坑 2

17・19は18世紀後半、16は1780～1810年代頃の広東碗並行期の蓋である。20は1780～1810年代頃の肥前、22は18世紀前半～中葉の肥前磁器であり上質で特殊な器形を呈する。25は18世紀後半の肥前、26は1820年代頃で緑絵の具の焼き継ぎがある肥前系端反り碗、27は18世紀後半の蓋付きの身である。腰の張った体部と外反りの高台を特徴とする。29は18世紀前半～中葉の肥前皿、30は18世紀前半～中葉、33は18世紀の白磁、お歯黒用うがい碗、34・35は18世紀中葉～末である。

23・28・31・36は青磁染付である。いずれも18世紀後半で、36は18世紀後半の筒江窯の可能性もある。

21・32は18世紀後半頃の波佐見系染付と白磁碗、37は18世紀後半～19世紀初頭の広東碗の古い時期に並行する肥前系の仏飯器である。

ほかにこの遺構からは18世紀前半の陶胎染付、筒江窯の青磁染付、樋口窯で宝文様を施したもの、底部外面に「奇玉珍元」を記した鉢、昆虫文様、清朝磁器に類似した内外面につながる龍のモチーフを施したものなどがある。時期は18世紀後半～19世紀初頭を中心とする。

③ 1 B 土坑 1

57・58・59・60・61・62は波佐見系の皿である。

15は18世紀前半の肥前、63は18世紀前半、64は1690～1730年代頃の有田で山形の波文に特徴がある。65は18世紀前半の肥前、66は18世紀前半、67には1690年～18世紀前半の古手のコンニャク印判がみられる。底部外面のコンニャク印判は珍しい。68は1690～1730年代頃の肥前、73は17世紀末～18世紀前半の肥前蓋もの磁器、70・75は18世紀前半の肥前陶胎染付、77は1690年～18世紀前半の有田である。

この遺構からは、ほかに吉田窯、南川原窯ノ辻窯などの製品もみられ、時期は17世紀末～18世紀前半までに比定される。

④ 1 B 土坑 2

80は1840～60年代頃であり太い筆で粗いタッチの文様が描かれた染付磁器。

81は18～19世紀初頭の肥前系、84は18世紀前半～中葉の肥前、86は18世紀前半～中葉の肥前、88は1820～60年代頃の端反り碗の蓋、90は18世紀末～19世紀前半、91は19世紀前半であり呉須の発色は江戸後期の特徴である青黒い色を呈する。2重椀取りの「宣徳年製」銘をもちウィローパターンの山水文を描く。92～94は1820年～幕末の肥前系端反り碗、95は19世紀初頭～幕末の肥前、96は19世紀初頭から幕末、97は1820年～幕末の肥前系端反り碗、99は19世紀前半で有田以外の肥前系広東形碗、100・101は19世紀初頭～幕末の肥前系である。

60・79・82・83・89は波佐見系染付磁器である。79は18世紀後半～19世紀初頭、82は18世紀後半。

80・85・98は瀬戸美濃系である。85は18～19世紀初頭で内底面に五弁花を簡略した文様を配する呉須絵陶器。98は19世紀の端反り碗で胎土は瀬戸美濃系だが、焼成は関西系窯の可能性が高い。

なおこの遺構からは、ほかに瀬戸美濃窯で広東碗の流れをくむ帆掛船と18世紀後半の波佐見系の特徴を模倣した製品、焼き継ぎのある有田の色絵碗などがみられ、時期は19世紀で幕末までの頃に比定される。

④ 1 B 土坑 3

102は67と同製品。104は18世紀前半～中葉の肥前、103は19世紀～幕末、105は1780年～幕末で口鏝を施し、いずれも呉須はこの時期に特徴的な青黒色を呈する。

④ 4 A 土坑 226

131は陶器蓋である。外面に重ね焼の痕跡を有する。134は鉄軸の淺瓶である。底部外面に砂目が巡る。135は青緑色釉の施された小瓶である。136は磁器小壺である。高台以外に薄い黄灰色の釉が施されている。137は陶器小壺である。内面と体部上半に薄い灰色釉が施される。139は磁器染付の碗である。高台内面に「大明年製」の銘をもちコバルトの発色は薄青黒を呈する。140は肥前系青磁大皿である。口縁端部はわずかに外反し、内面に片切彫りで草文が描かれている。

④ 4 A 土坑 264

141は京焼系筒形容器である。142は備前窯系の匣鉢である。143は土師器灯明受皿である。油溝は半月状で轆轤を使用しており、底部は糸切りを行う。底部以外は透明釉を施す。144はロクロ成形の土師器皿である。胎土は緻密で白色を呈する。外面に薄い灰緑釉が施され底部外面に墨書がみられる。145は陶器小鉢である。薄い褐色の釉が畳付き以外の全面にみられ、体部外面中位に一条の凸線が巡り、1カ所で程度がみられる。146は肥前系の青磁染付鉢である。見込みには蘇鉄と縁側が描かれ、裏銘は二重角に満福である。147は土師器蓋である。輪花状の鈎を有し、型押しで葵文と桐文の陽文を施す。なおこの遺構からは他に1780～1810年頃の贅付油を入れる瓶、仏飯器、波佐見系、瀬戸美濃系、焼き継ぎなどがみられる。

④ 5 A 調査区土坑 31

148～231・261～263・306・312は5 A 調査区土坑31からの出土である。土坑31は、調査区東南にひろがる大形の土坑であり、形態的には円形または隅丸方形の土坑の連続した状態を示す。層的には豊臣期の遺構面を切り、2枚の焼土層にはさまれた礎石建物群の基盤層を構成する一部にあたる。なお同様な遺構の性格については、隣接する大阪市中央体育館での調査により粘土採掘土坑との指摘がなされている。

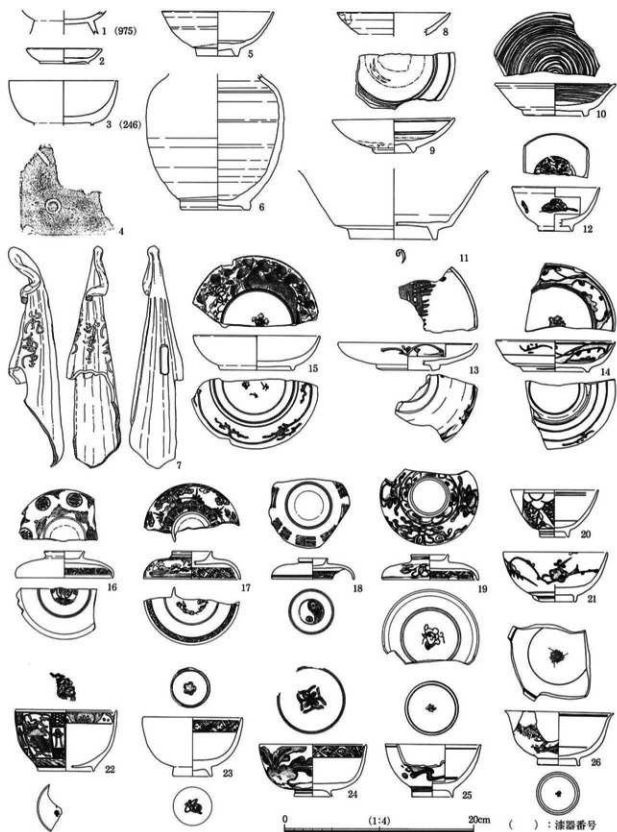


図48 漆器・陶磁器・土器1

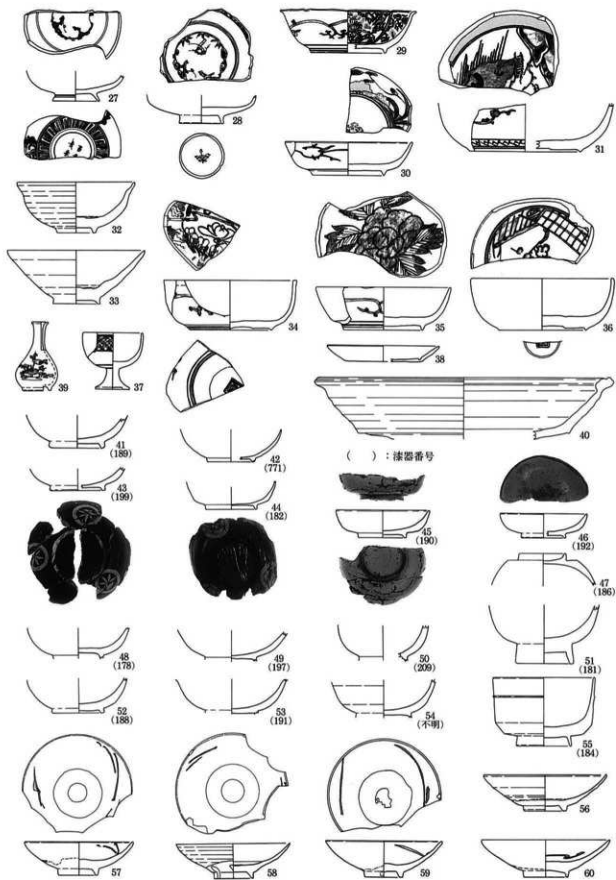


图49 漆器·陶磁器·土器 2

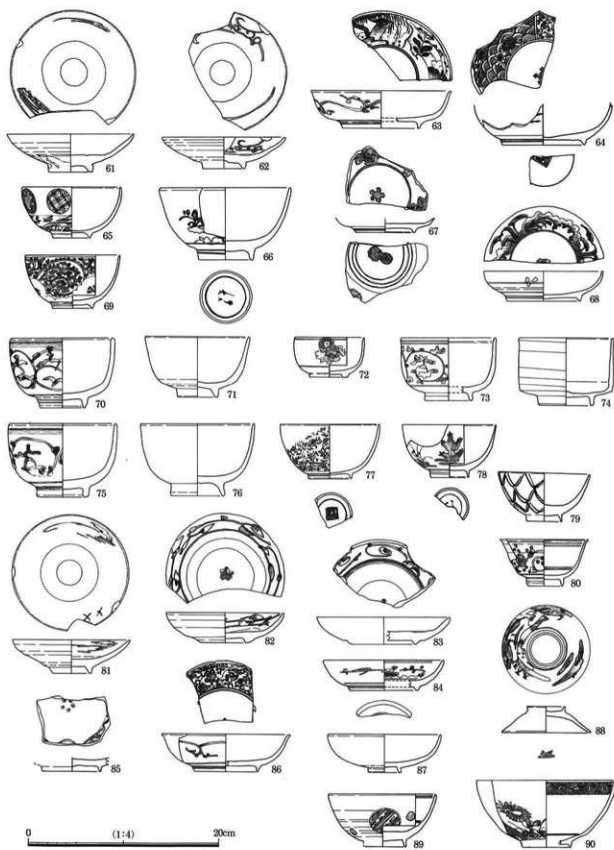


図50 漆器・陶磁器・土器 3

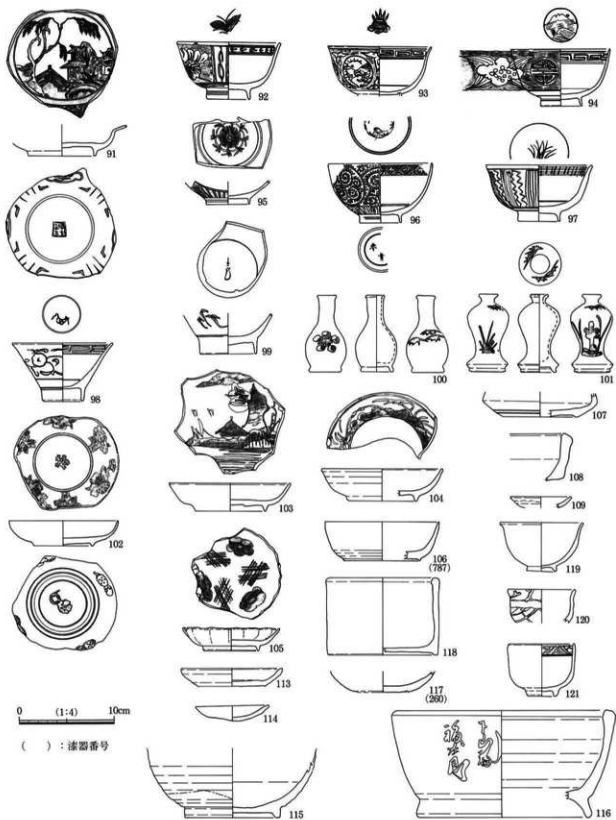


图51 漆器·陶磁器·土器4

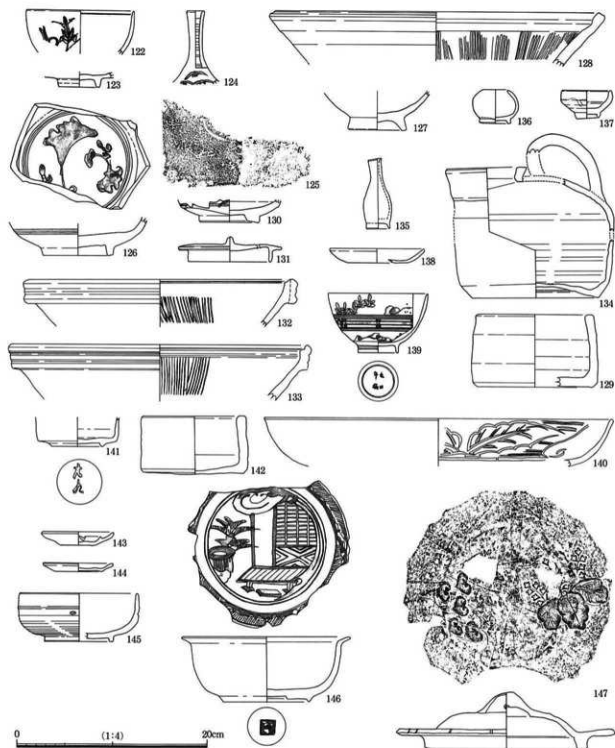


図52 漆器・陶磁器・土器 5

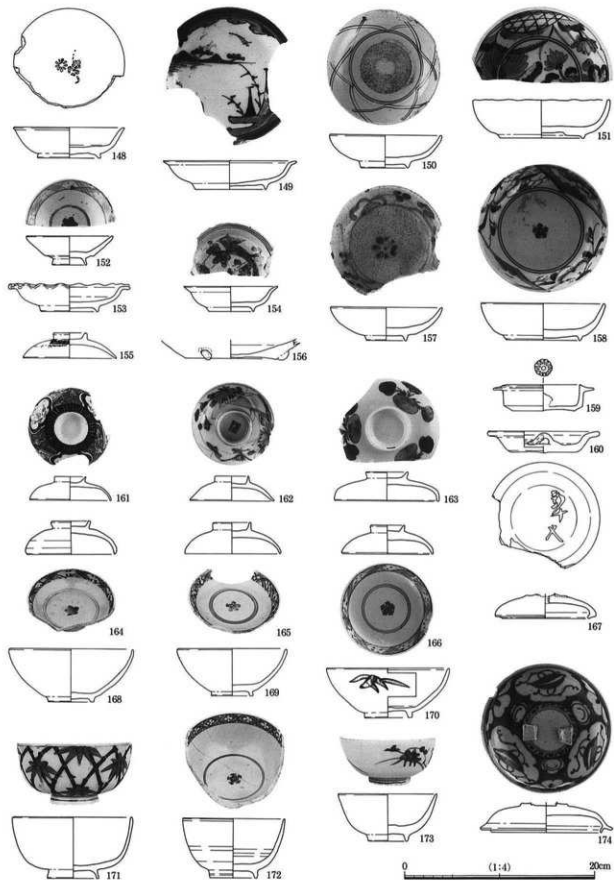


图53 漆器·陶磁器·土器6

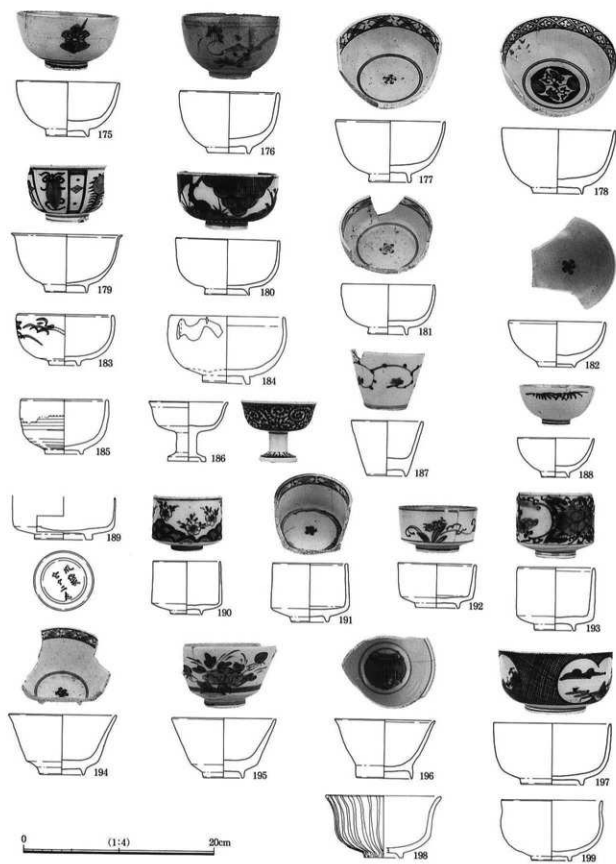


図54 漆器・陶磁器・土器 7

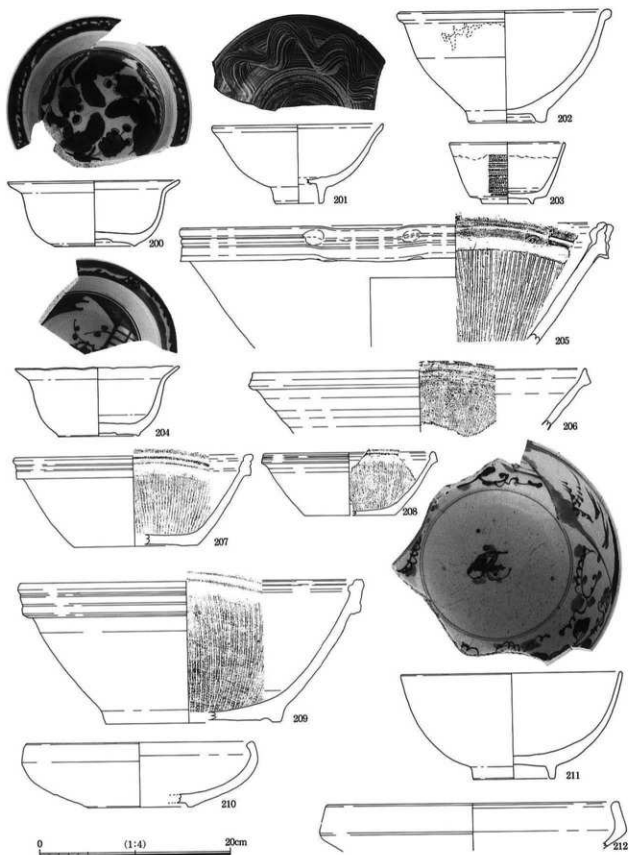


图55 漆器·陶磁器·土器 8

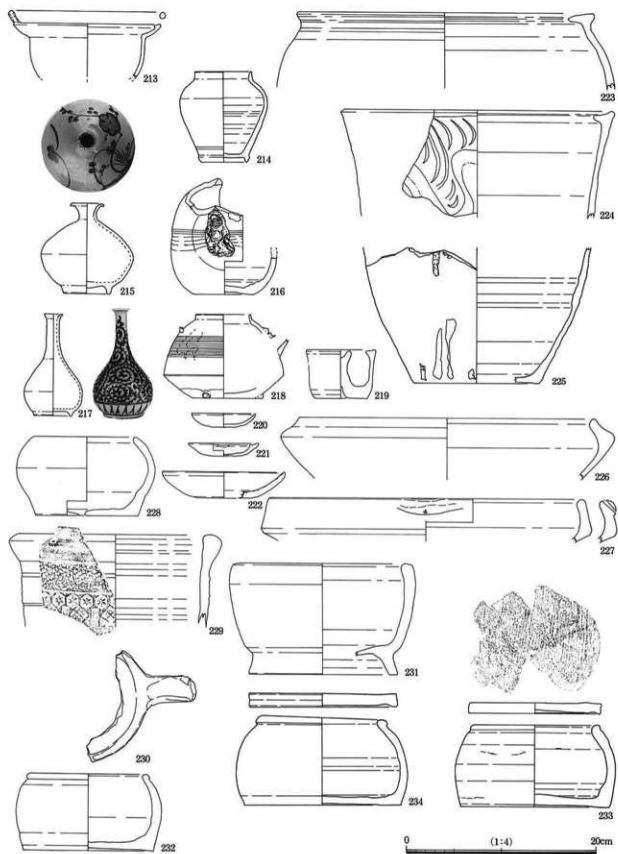


図56 漆器・陶磁器・土器 9

とりあげた遺物は、土器・陶磁器・石製品・金属製品の多岐におよび、その破片数は756を数える。
 149～151・154・157・158・161～163・171・173～176・179・180・182・186～188・190・192・193・
 195～197・211は染付磁器である。161～163・174は蓋でいずれもつまみを持つ。162は薄い青色の釉が
 施され、中国製の可能性がある。161は色絵である。163は内面にも同様の蕉を配する。174は受け部の
 一部を削り取っている。149～151・154・157・158皿である。154・158・151は外面に唐草を描く。157
 は陶胎で文様も粗雑であり、151の口縁端部は平坦に仕上げられている。

171・173・175・176・179・180・182・186～188・190・192・193・195～197・211は杯・碗類である。
 法量は大きく大小に分けられるが、大形はさらに器形と連動して細分することができる。器形はいわゆる
 丸碗形で体部が内彎してそのまま立ち上がるもの（182・188・173・175）、深碗形で体部下半の張る
 もの（171・180・197）と同器形で口縁部の外反するもの（179）、直口形で体部が直線的に外上方への
 びるもの（195・196）、および筒形（190・192・193）に分けられ、190は陶胎染付の特徴的な器形を示
 す。196は外面に唐子を、179は内底面に宝文様を外底面に角文字を、211は外面に唐草文、底部に寿を
 配し、171の内底面は松竹梅である。

148・153・155・156・159・160・168～170・183～185・189・198・199・201～203・205～210・213・
 216・218・223・224・261は陶器類である。155と203はセットであり外面に透明度の高い釉を施し、共
 に口縁部のみ褐色の釉をかける。262は志野釉で外面に方格の文様を施す。263は京焼き系の灰黄色釉で
 ある。159は褐釉、160は志野釉、185は体部下半に複数の段を配し内面と上半は灰釉、下半は鉄釉であ
 る。183・184共に暗灰黄色の釉が施され、鉄および藍で文様が描かれる。183は京焼き系であろう。198
 は志野釉に外面は縦位の鉄とコバルトの線が描かれる。168・169は黄灰色の釉が斑に発色している。

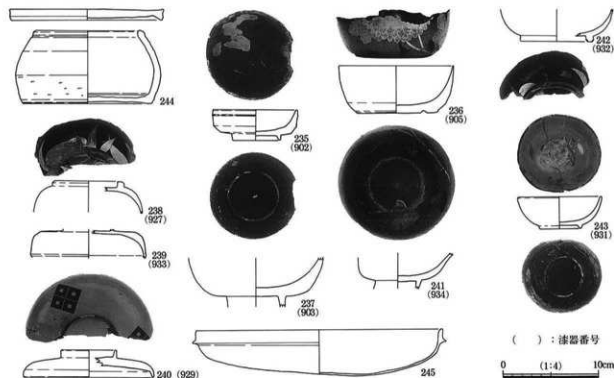


図57 漆器・陶磁器・土器10

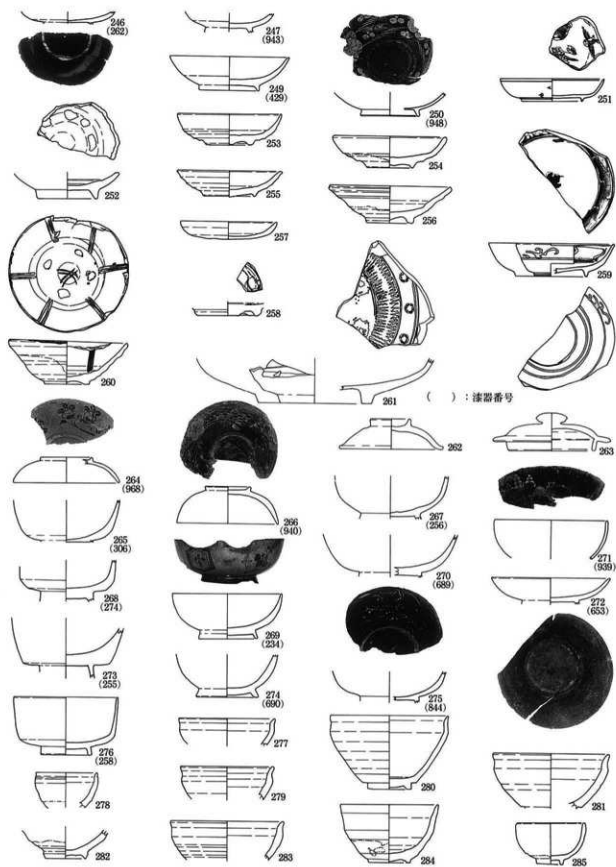


図58 漆器・陶磁器・土器（包含層）11

189は京焼き系で内面に3カ所の目跡がある。148・153・170・199・210・224・306はいずれも灰釉であり、210・224は瀬戸・美濃系の特徴をもつ。202・216・213の胎土は暗赤色で細密であり、202は内面も全面に施釉されている。218・156は鉄釉で218は土瓶形の底部であろう。223は灰褐色の胎土をもち口縁部外面に暗緑色の降灰釉を残す。206は丹波系挿鉢、205・207・208・209は畿内系挿鉢と考える。

212・219～222・226～229・230・231土器類である。219～222はいずれも灯火具であり、褐色の釉が薄く施されている。ロクロ成形である。228は土師器小壺であるが、表面には薄くススが吸着している。212・226・227は焙烙形であるが、226は内外面共に磨きが施されている。229・231は火鉢類であろう。229は瓦質焼成で外面に多様な印文を施す。

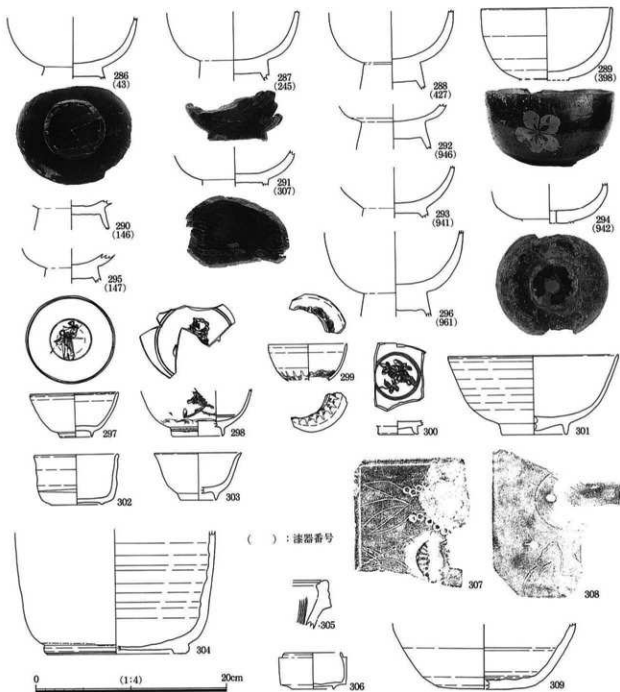


图59 漆器・陶磁器・土器（包含煎）12

b、焼塩壺

焼塩壺は今回の調査対象範囲内で505点を個別登録している。出土状況下における時期区分で見れば、このうち三の丸築造以降で徳川氏による大坂城再築以前とされるものが174点、三の丸築造以前とされるものが6点、それ以外の資料が江戸時代およびそれ以降の時期に属する。

ここでは身と蓋に分けて、主に形態の面から全ての時代資料について分類と個々の説明をおこなう。

①身

粘土板を内型に巻き付けてつくる円筒形（Ⅱ群）（Ⅰ～Ⅹ類）と手捏ね成形により丸みをおびたもの（Ⅰ群）（Ⅰ～Ⅹ類）に大きく分かれる。

このうちⅠ群は大きさが大・中・小の3段階に分けられそれぞれ大がE～G類、中がB～E・H類、小がA類である。

A類は高さが8.2cm以下で、丸みを帯びた底部から直線的な体部が立ち上がり、ややくびれた頸部につながる。頸部先端は外反気味に尖る。

B類は高さが9.2cm以下で、底部際は丸みを帯び、体部は上半が径を減少させるものなど、緩やかなカーブをみせ、丁寧に調整され、明瞭なくびれの頸部につながる。頸部先端は丸く仕上げられている。

C類は高さが9.0cm以下で、頸部のくびれがB類より明瞭ではない。底部外面に圧痕がみられる。

D類は高さが9.0cm以下で、頸部のくびれがさらに明瞭さを欠き、成形はヨコナデではなく粗い指押さえによっている。

E類は高さが9.0cm前後および10.0cm前後であり、頸部の明瞭なくびれを欠き、全体に円筒形を呈する。頸部のくびれの痕跡は頸部内面のヨコナデに残る。

F類は高さが9.5cm以下で、直径が7cmに満たない細身のものである。頸部のくびれは弱く、すぼまった形を呈する。端部は尖る。体部は凹凸が激しく、成形は粗い。

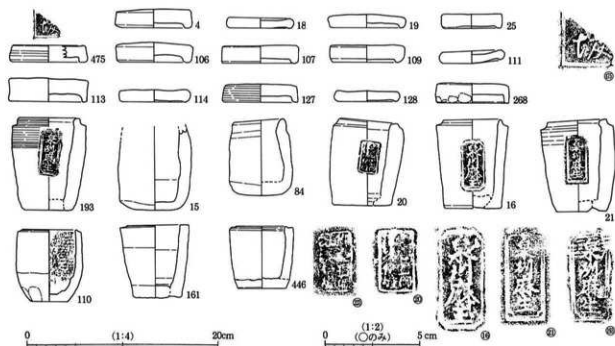


図60 焼塩壺 1

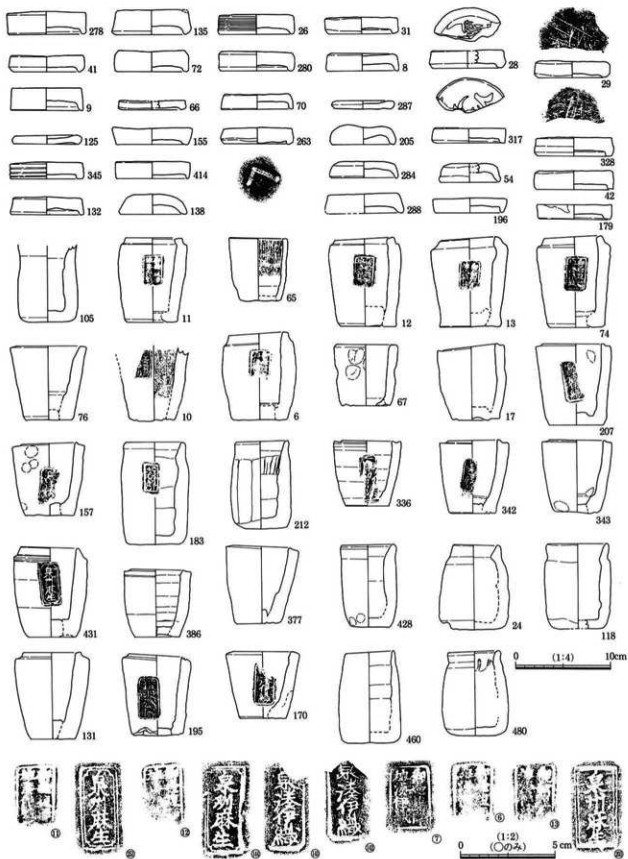


図61 焼塩壺 2

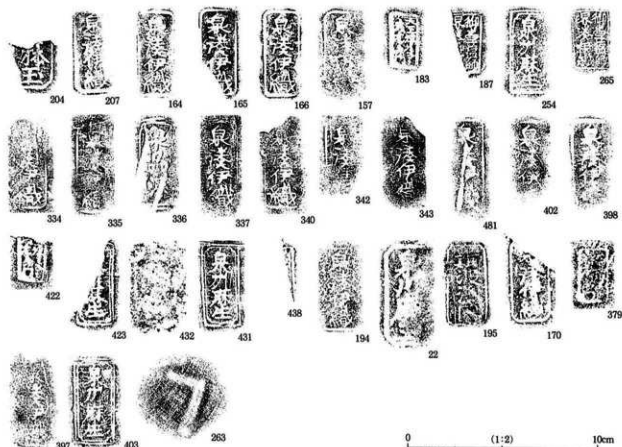


図62 焼塩壺 3

G類は高さが9～10cm程度で、直径が7cm程度のものである。くびれは明瞭さを欠き、胴部との境はなだらかに続く。また端部は丸仕上げられる。

H類は高さが1点を除き8cm代にある。いずれもこれまでの分類に該当しない特徴をもつ。

104はB類に類似するが、B類は一般に口縁部の内側が斜め内方に下降し、断面が三角形状を呈するのに対して、この製品は当該部分が垂直に降下しており、その点で成形が丁寧なものとなっている。

51は器高に対する直径の比率が低く、また器壁も厚い。胴部は上方へ向かい直径を減少させる。口縁部は、胴部上端から段をもって成形され、明瞭なくびれはみられない。

137は平底で底部と胴部の境に丸みをもたない。胴部は中位から斜めに内方へ傾斜しそのまま口縁部につながる。段及びくびれはない。

84はA類に類似するが、頸部のくびれはほとんど見られず、その成形は指押さえによる。

15は胴部中央に焼成前の小穴（球状）をもつ。使用痕跡は不明である。

II群は基本的に口縁部の内端に成形される受け部立ち上がりの形状と規模を分類の指標とした。基本的にI類からM類へ向かって立ち上がりの発達する傾向をみることができる。

I類は高さが7cm前後である。器壁も薄く、立ち上

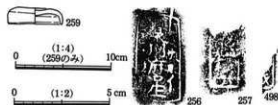


図63 焼塩壺 4

がりは僅かである。胴部の底部際は丸みを帯びて下方へすぼまる。

J類は高さが8cm以下で、口縁部の立ち上がりは僅かである。底部外面に充填粘土がみられる。

K類は高さが8cm程度で、口縁部の立ち上がりは低い明瞭に付けられている。底部の充填粘土は底部外面を広く覆う。

L類は高さが9cm以下で、口縁部内側に、厚さ3mm程度の立ち上がりが設けられる。底部充填粘土の貼り込みは粗く、指押さえによる凹凸が見られる。

M類は立ち上がりの最も発達した形態である。高さが10cm以下、直径8cm以下を測る。口縁部に段をもった明瞭な立ち上がりをもつ。立ち上がりの高さと厚さは、共に5~10mm程である。また胴部が内彎ぎみで立ち上がりも内傾するものもみられる。

N類は高さが7cm代で、口縁部上面が凹線状に成形され、その結果内側が立ち上がりとして突出する。底部外面は丁寧に調整され、充填粘土の痕跡は見にくい。

O類は胴部が下半で緩やかな稜をもって内傾するもので、口縁部は凹線状の調整により、僅かに立ち上がりが認められる。

②蓋

手握ね（I群）と内面に布痕が残る型作り（II群）に分けられ、それぞれ前者がA~C、後者がD~Q類である。

手握ね（I群）は直径が大（A・B）小（C）に分けられ、それぞれA・Bは7cm前後、Cは6cm以下である。またAとBの違いは側面と天井部の境のナデにより、Aはより丁寧なナデが施されている。

型作り（II群）のうち、D~L類は器壁の厚さでD・E類（1cm未満）とそれ以外（1cm以上）に分けられ、F~L類は内面の側面へのカーブが角をもつものともたないもので2分される。またD・F・H・J類は天井部と側面の境が角をもつもので、E・G・I・K類は当該部分が丸く仕上げられたものである。なおH・I類は下面丸みをおびて内傾するものおよび当部位に面取り状の調整を受けたものである。さらにL類はK類と形態を共通にするが、とくに胎土の精良な一群を独立させた。

M類は断面形が逆「ハ」字状を呈するもので、そのほかの特徴はF類と共通する。

N類は断面形が「ハ」字状を呈するもので、内面と側面との境はゆるやかにつながり、下面の外端はH・I類同様の特徴をもつ。

O類は断面形が「ハ」字状を呈するもので、内面と側面との境に角をもち、側面の器壁が厚く、下面が膨らむ特徴をもつ。

P類はJまたはF類の形態で、側面の外面に平行沈線が施されている。

Q類は形態の特徴以外に、墨書・スタンプなどを施された一群である。

R類は胴部が球形などこれまでの分類に該当しない一群である。焼塩壺でない可能性も考慮したい。

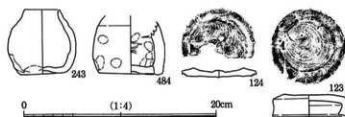


図64 特殊土製品

そのほか特徴的な例を補足する。

蓋では205は上面が丸みを帯び、厚手の皿を逆にして真ん中をへこませたような形態である。8は逆凹字形の断面を呈し上面は平坦である。上面と側面にナデが施され、内面に布目圧痕が見られる。296は8とほ

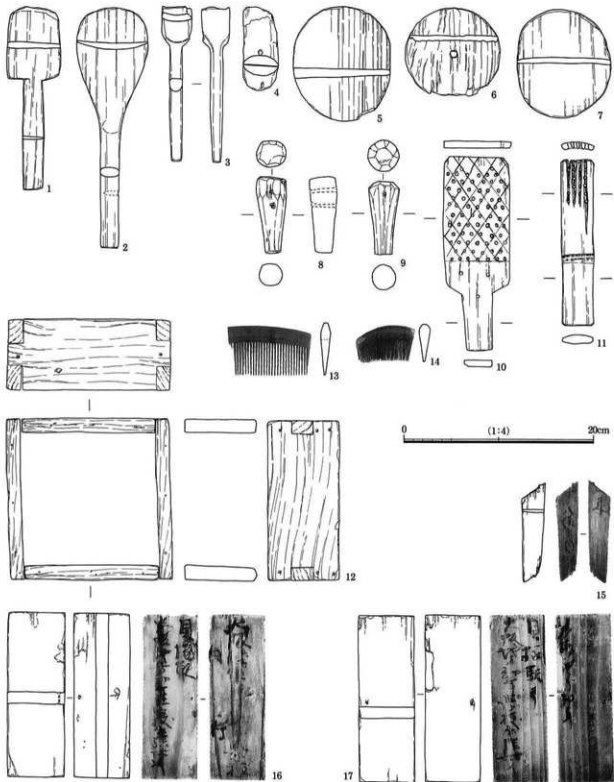


図65 木製品 1

ば同様の形態であるが、皿状部分の深さがやや浅くなっている。125は円盤状で内面に布目圧痕を残す蓋である。上面には指押えの痕跡がはっきりとみられる。155は8と同様な形態であるが、側面がやや内傾している。内面には布目圧痕が見られる。123は逆凹字形に近い断面ではあるが、ロクロ成形の蓋であり、上面には糸切り痕を残す。皿状部分が深く、器壁は他のものより薄い。

身では243は小型で胴部が膨らんだ短頸壺状をしている。器厚は非常に薄い。2は小型で器厚がきわめて厚いコップ形をしている。92は筒形で口縁部がややすぼまる形態の身である。口縁部は指頭とナデで調整されている。12は粘土板1枚による板作りであり、口縁部に蓋受けが作り出されたコップ形をしている。『御壺塩師伊織』のスタンプがみられる。193は12と同様の形態であるが、胴部の一部の仕上げにロクロを用いている。『泉州麻生』のスタンプがみられる。343・157も12と同様の形態であるが、口縁部の蓋受け部分が退化し痕跡的になったものである。やや小型化しているのが分かる。それぞれ『泉湊伊織』のスタンプがみられる。

377は蓋受けの痕跡がわずかにみられる程度である。スタンプはみられない。195は板作りであるが、『難波浄因』のスタンプがみられる。207は『泉湊伊織』のスタンプのある板作りの身である。

c、木製品

江戸時代以降の出土状況に属する資料は63点が個体登録されている。

1～4・18は杓子・匙類であり、4は柄である。1は先端を削りだしその一角が使用により減っている。柄は端部が欠損している。2には「清」または「晴」に似た焼き印がある。3・4・18には漆が施されており、4は断面に分離線がみえる。

5～7は蓋または曲物の底板であり、6の中央には穿孔がみられる。8・9・19・20は栓である。一方の端部が細くなるように多角形に削りだし、頭部近くに穿孔をほどこす。なお19・20には穿孔がみられず、成形も断面が円形の整ったものとなっている。

10・11はブラシ状の製品である。11は竹を素材としている。共に身部分に複数の孔を穿ち、竹櫛などを差し込んでいる。工具であろうが用途は不明である。10には背面に斜格子の模線をもつ。

13・14・21・22は櫛であり、21は合成樹脂、22は身を覆っていた金属部である。

25は竹製品であり、一方の表面に偏って2～4mm間隔の刻みをもつ。

15～17・23は墨書資料である。15は24とともに荷札の可能性が考えられる。それ以外の資料について

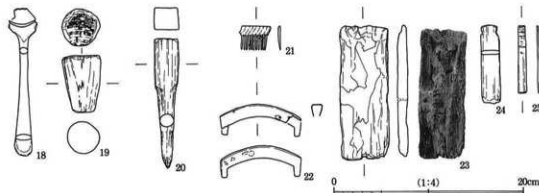


図66 木製品2

は、方形で釘痕をもつ以外製品を特定する要素をもたない。

ｄ、下駄

今回の調査対象範囲内で524点の下駄が個体登録された。出土状況下における時期区分で見れば、このうち三の丸築造以降で徳川氏による大坂城再築以前とされるものが192点、三の丸築造以前とされるものが216点、それ以外の資料が江戸時代およびそれ以降の時期に属する。

ここでは主に形態の面から全ての時代資料について分類と個々の説明をおこなう。

分類は、歯の成型法（A）、前歯の位置と形および前壺との関係（B）、後歯と後壺の関係（C）、歯の形（D）、下駄の平面形（E）を基準とした。

それぞれ歯の成型法（A）は、一木作り（Ⅰ）と組み合わせ作り（Ⅱ）に分けられ、一木作りはさらに前後の歯が独立したもの（1）、前歯が先端につながるもの（2）、後歯が後端につながるもの（3）、両歯共端部につながるもの（4）にわけられる。

裏形とした前歯の位置と形および前壺との関係（B）は、前壺が前歯の外に位置するもの（1）と、前壺が前歯の内側に位置するもの（2）と、前歯を内側にくり抜きその位置に前壺を穿ったもの（3）、前壺が前歯の中に位置するもの（4）、その他（5）に分けられる。なお2～4の前歯は大部分が先端につながるA-I-1であり、（3）のくり抜きの形状には、台形・半円形などがみられる。

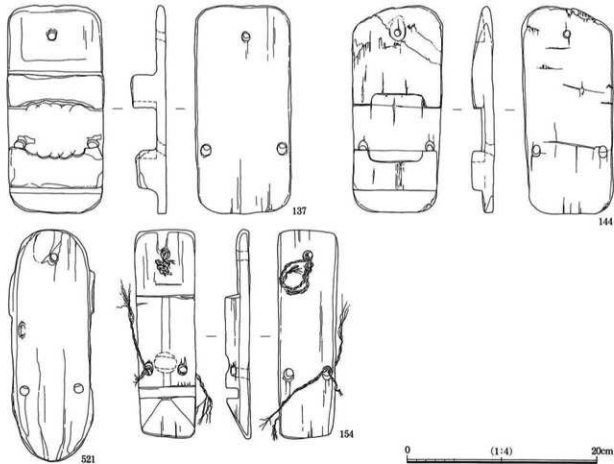


図67 下駄

またその他としては、歯と壺との位置関係は（1）であるが、歯の内側に波型または角型のくり抜きのあるもの、紐穴の部分に四角のくり抜きのあるもの、前壺部分の裏側が半円状に削られているもの、平面形は下駄状であるが歯をもたないもの、などがみられる。

後歯と後壺の関係（C）は後歯に対して後壺が内側のもの（1）と外側のもの（2）に分けられる。歯の形（D）は立面が長方形（1）と台形（2）に分けられる。下駄の平面形（E）は隅をもたない丸形状（小判形を含む）（1）と台形および長方形などの方角の隅をもつもの（2）に分かれる。

なお具体的な分類の対照は観察表を参照されたい。以下特徴的な資料について説明を補足する。

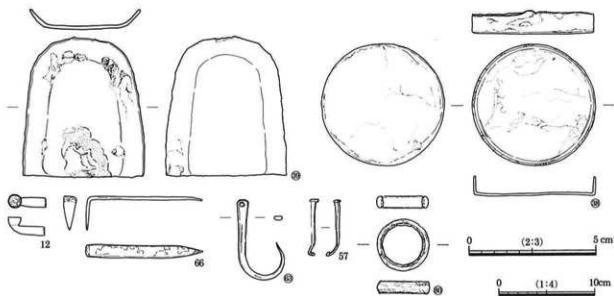


図68 金属製品 1

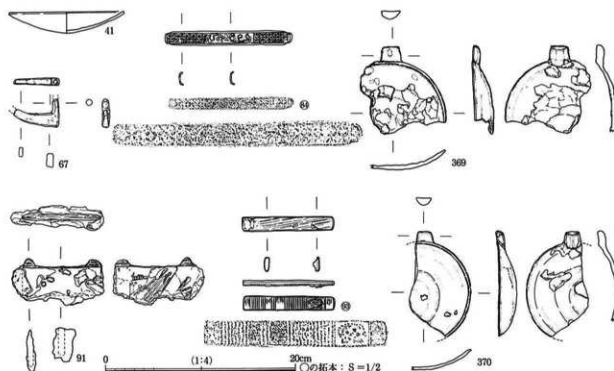


図69 金属製品 2

71は後歯の高さが5.8cmを測る。歯は下方へ広がるバチ形である。前の歯には欠損を修理した釘穴が残る。また歯の付け根には鋸の挽痕が残る。歯の側面及び台の表に黒色漆が残存している。

137の歯は丸刀状の工具でくり抜いて作られた痕跡が側面に波形に残る。類例は12点以上みられる。

391は前歯の残存高2.8cm、後歯の高さ0.7cmを測る。漆が全面に施されている。

389は歯の高さが1.7cmである。台の平面形は隅丸の長方形である。歯の接地面積は $71 \cdot 400$ と比べ倍以上あり、その幅の広い前歯の中央を四角くくり抜いて前壺を設けている。

390は組合せ式の下駄である。台の断面は裏面中央部の平坦面から両端へ向かって傾斜する面をもつ六角形であり中央部2カ所に貫通するほぞ穴がうがたれている。歯の立面形は下方へ広がる台形である。前壺の左側には数条の沈線が見られ、指痕が残る。

400は著しい摩滅により歯の残存高が1.5cmを測る。台の平面形は前端幅8.6cm、後端幅7.3cmの細長い台形をしている。歯は直線的に垂下し、付け根には鋸の挽痕が残る。

e、金属製品

金属12は銅製のキセルの雁首である。

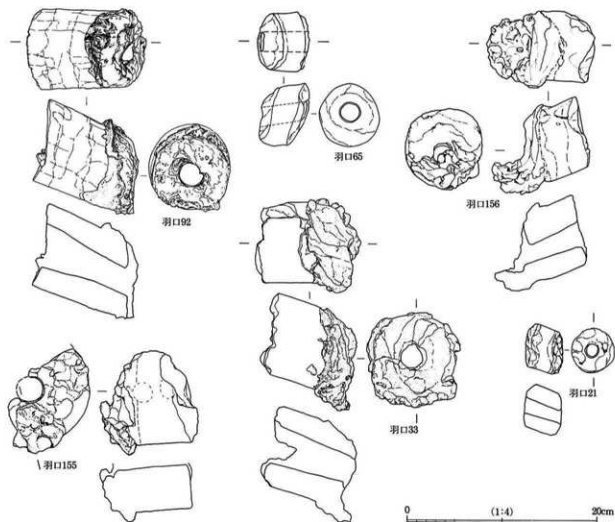


図70 羽口

金属38は平面円形を呈する蓋状の容器である。

金属39は銅製の皿状の容器である。下端を欠いており、現状では平面「U」の字状を呈する。

金属41は鉄製の皿である。口縁端部はシャープに仕上げられており、面取り状になっている。鏝の状態や割れ面の状況から鈎造品と考えられる。

金属57は断面方形を呈し、頭部を四角く作り出す鉄製の釘である。使用により、先端が折れ曲がっている。

金属63は平面「し」の字状を呈する真鍮製の吊り具である。頭部は丸くおさめ、小孔を穿つ。一方、先端部は鋭利に尖らせているが、かえしは持たない。大きさやかえしの無いことから釣り針とは考えにくく、吊り具としておきたい。

金属66は鉄製の留め具である。一端を折り曲げており、両端部は鋭利に尖らせてある。形態から鏝もしくはベグなどの留め具と考えたい。

金属67は平面「L」の字状を呈する鉄製品である。本体部分の断面形は長方形を呈し、先細りになっていく。なお、先端部は折れている。上方に立ち上がる部分は断面不整形を呈する。鍛造品である。鏝などのような性格を考えておきたい。

金属80は鉄製の円環である。円形のもの固定するタガ的なものであろう。

金属84は銅製の飾り金具である。中央に唐草状の文様を、その両側に有軸の木葉文を施す。唐草状の文様は小さな点が施された地文の上にもみられる。なお、木葉文が施された後に両端部近くに釘孔（径0.2cm）を1カ所ずつ穿孔する。

金属91は鉄製の「鏝形」火打ち金である。非常に鏝彫れが著しい。山形を呈する打ち込み部に木質が遺存することから木製の握り部があったことが判る。火打ち金とセットになる火打ち石は当該期の遺構や包含層から多数出土している。それらは緑灰色やベーパーミントグリーン色を呈したチャート様の石材である。

金属93は小柄の柄である。銅製の鈎造品であろう。断面は扁平な蒲鉾形を呈し、平坦になった側には

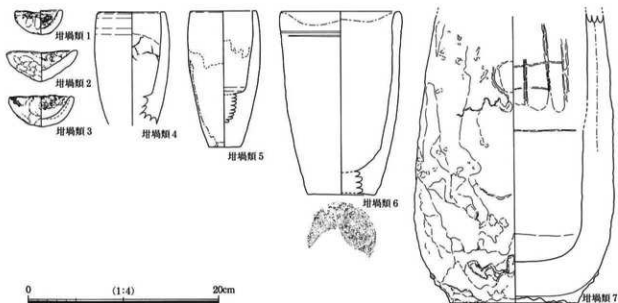


図71 増嶋類

斜方向の研磨痕が見られる。一方、彎曲面側には基部側から1・14・3・9本の幅0.1cmの沈線が刻まれ、さらには長さ1.7cm・幅1.2cmの方形区画内に伏せた龍を陽鈔している。方形区画内には細かな点が多数陽鈔されており、これが地文となっている。

金属369・370は鉄製の柄付き皿である。369・370の両者ともに柄と皿が一体成形である鋳造品。ともに錆による剝落が著しい。皿部は平面正円形を呈し、369は口縁端部を丸く取め、370はやや下方に垂れ

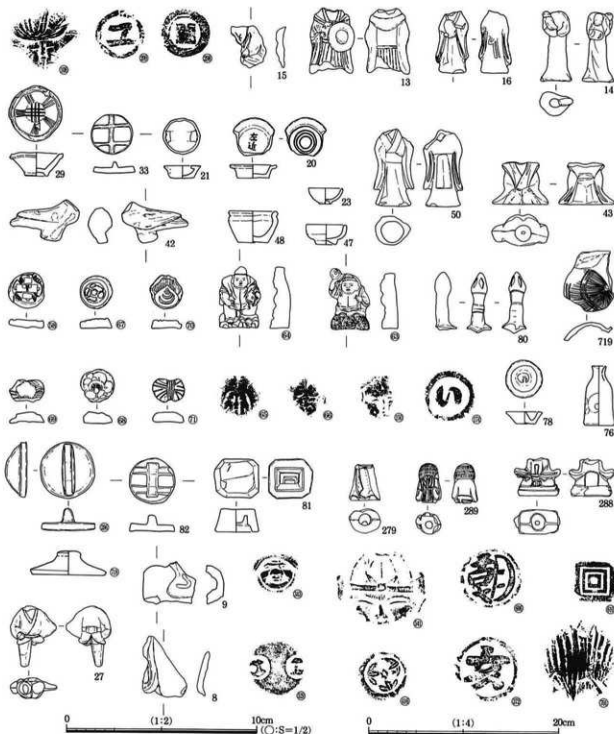


図72 土人形 1

るように尖り気味に位上している。柄は断面蒲鋒形を呈しており、長さは369が1.6cm・370が1.1cmとさほど長いものではない。この部分を持つとすればかろうじて握むことは出来るものの安定が悪い。従って何らかの柄を取り付けて使用したものと想定しておきたい。なお、同種のものが豊臣前・後期からも出土している。

f、羽口

いずれも鍛冶用の羽口であろう。形態は円筒形を呈する。胎土には石英・長石などを多く含み、粗いものを使用。概して器壁は厚く、通風孔径は2cm前後に統一されている。外面には丁寧なナデ調整を施している。

33・92・155・156は炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位である。33の先端にはガラス質になった滓が厚く付着し、先端部下端に垂れ下がる。挿入角度は18度である。92の先端にもガラス質になった滓が付着している。挿入角度は20度である。156は先端部下端には分厚い滓が形成されており、通風孔を塞ぐようになったために使用不能となったものである。挿入角度は24度である。21・65は先端部である。使用による欠落が著しい。なお21は、他のものに比べて細身で通風孔径も1.3cmと小さい。

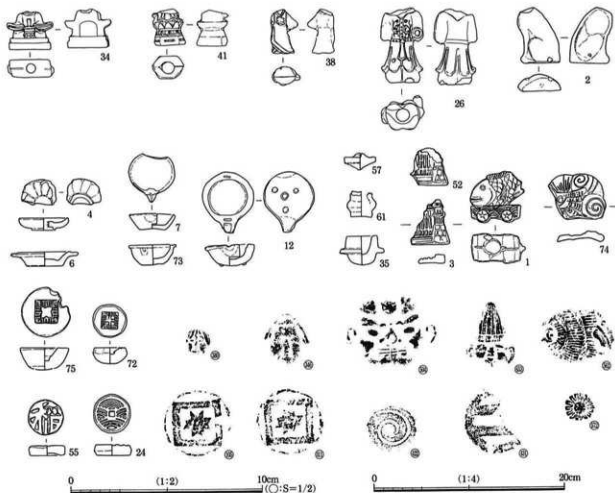


図73 土人形2

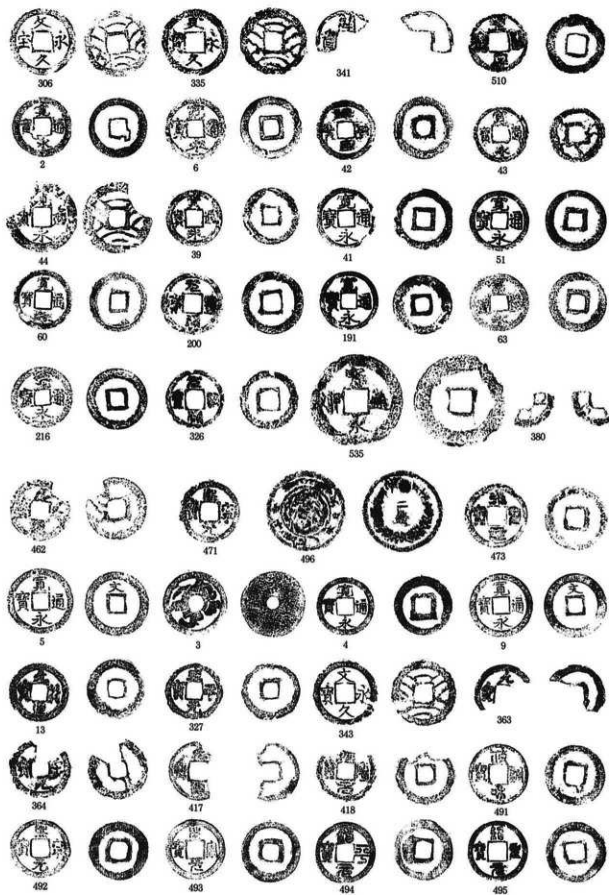


図74 銭1

g、埴塼類

1～3は半球形の土製埴塼、4～7は紡錘形の埴塼である。

1は約3/5の残存である。胎土には砂粒を含み粗い。内面と口縁部にガラス質のslagが付着する。2は底が尖り気味で平面形も歪みがみられる。砂粒が多く内面に薄く赤色化したslagが付く。3も赤色化したガラス質の滓が、とくに口縁部内面に厚く付着している。

4～6は明灰褐色の粗い胎土を有し、5は外面に黄色と赤色の融解したガラスが付着する。内面には金属滓らしきものは認められない。6は未使用品であろう。口縁部の一部が灰色に変色している。

7は砂粒の多い暗灰色の胎土をもつ。外面に厚く赤色ガラスが融着している。内面には分割成形の際の痕跡が残る。

h、土人形・土製品

いわゆる土人形は「人形」、「土面子」、「ミニチュア土器」に分けられる。今回の調査対照範囲からは約700点が個体登録され、犬形の2点と人形の1点を除き全ては江戸時代以降の出土状況下にある。

分類は2段階に分けて行った。第1の分類項目と数は、面(5)、家具(8)、魚(10)、型(9)、建物(16)、食器(108)、神・仏(57)、人物(109)、銭(1)、太鼓(3)、鳥(26)、土面子(33)、灯火具(14)、動物(113)、遊具(3)、鈴(11)であり、その他(30)、人物・動物・食器の組み合わせで、最も多い数を占める。

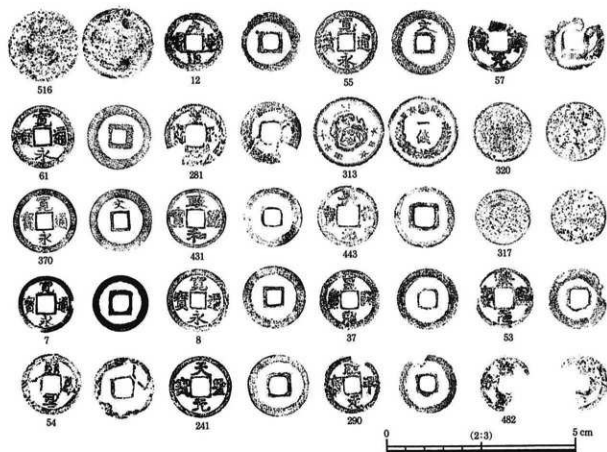


図75 銭2

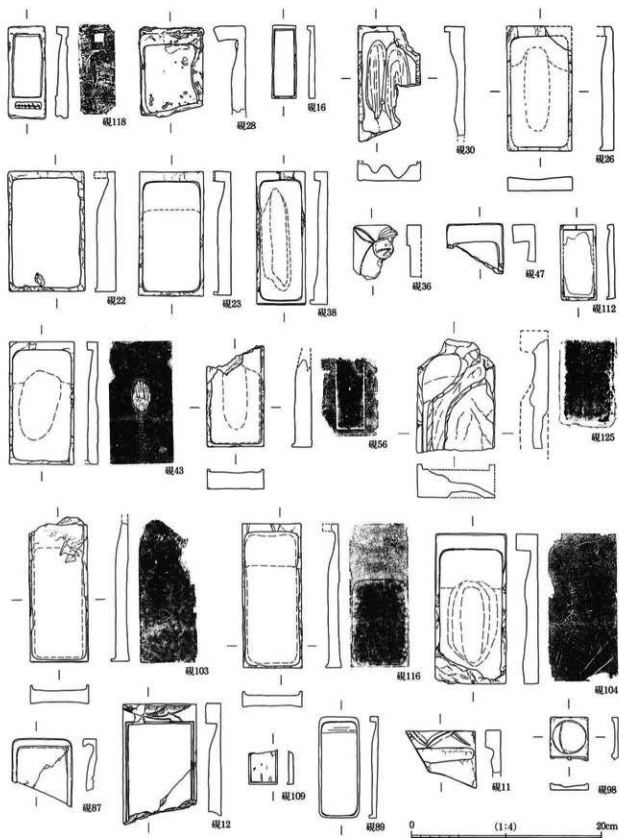


図76 瓦

またこれらの第1分類の細目をみれば、家具では火鉢（1）、花器（2）、風炉（1）、竈（3）がみられ、魚では全てが鯛である。建物では家が6点、城が3点、塔が2点で、他に鳥居と灯台、水車などがある。

食器種類も量も多く、膳（1）、釜および釜蓋（18）、鍋（2）と方口鍋が2点、碗は19点で、このうち白磁碗が6点である。皿も白磁皿が1点、他は菊花の皿が6点、茶釜は2点、壺が11点、鉢が10点、播鉢は15点、甕は2点である。時間幅は長いがこの頃の日常品組み合わせとその普及の程度を知る手がかりにはなる。

神・仏では阿弥陀が2点、大黒が5点、地藏が22、天神が10、布袋が2、福祿寿が2で地藏がとくに多く、次に天神がめだつ。

人物では火消し、花魁、虚無僧（6）、漁夫、子育て、子守、子抱き、子、西行（3）、大尺、茶坊主、

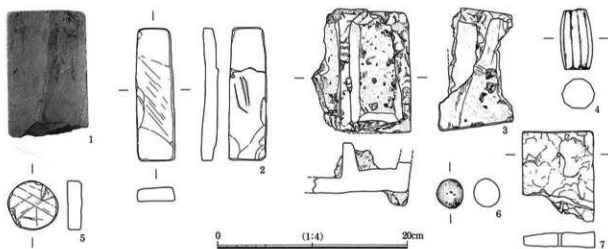


図77 石製品

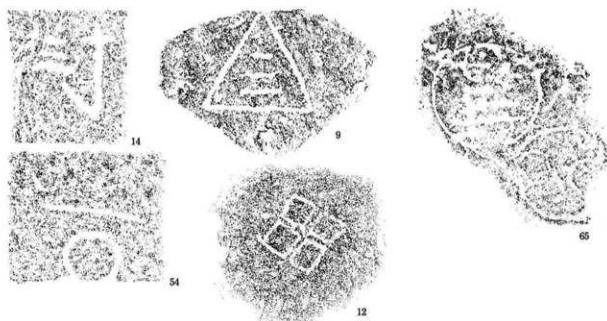


図78 石塔1

奴、福助、力士と多数の女または男姿がみられるが、このうち虚無僧と西行を神・仏の分類に移せば、それ以外の種類はおおむね同様な数でみられることになる。なお細目は不明であるが、子供、男、女の数はそれぞれ14・17・22であり、子守、子抱きなどを含めれば、女の数はさらに増えることになる。

鳥は鶏が3、雀が3、鳩が17で、鳩がとくに多い。

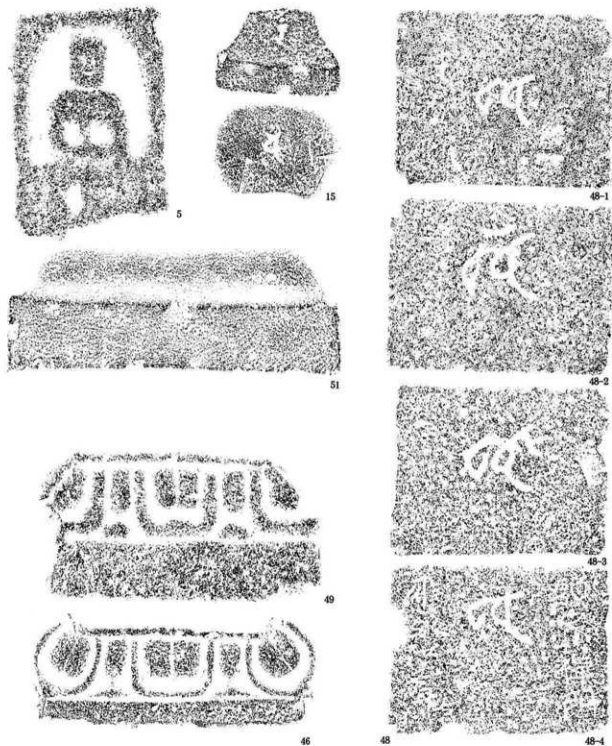


図79 石塔2

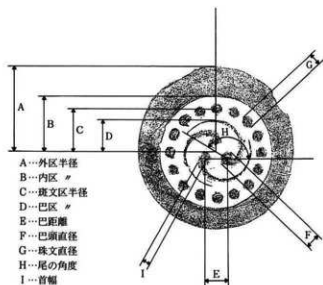


図80 軒丸瓦計測位置図

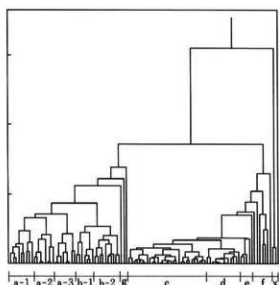


図81 巴文様の数量化によるデンドログラム

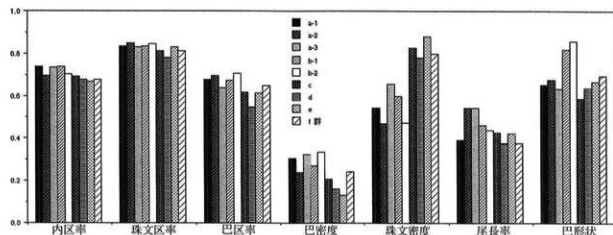


図82 巴文様属性数値の群別比較

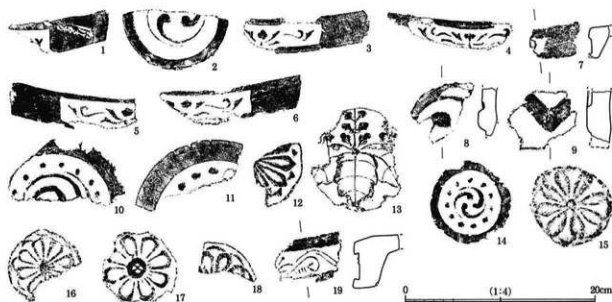


図83 瓦1

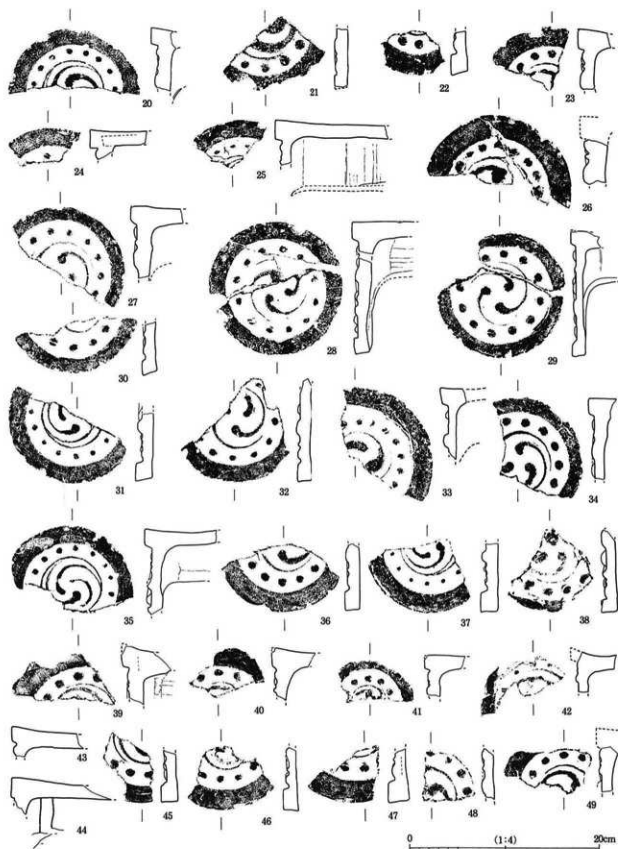


図84 瓦 2

灯火具は灯籠のみであり、建物関係の分類と比べてもとくに多いことが知られる。

動物は馬が19、猿が12、亀が2、牛が26、犬が19、狐が28、兎が1、猫が4、熊が1であり、稲荷社に関わりの深い狐が最も多く、身近でバリエーションの多い馬・牛・犬がそれに次いでいる。

道具は独楽のみである。

なお「土面子」には、俵のり大黒、恵比寿、稲形文、祇園守文、城門などがみられる。

またその他としたものの内容であるが、三足の容器、貝を飾った製品、花卉を飾った製品、袖でんぼ、船、宝珠などがみられる。

従来より土人形は、その推定される性格により、風俗物（日常生活の風俗を子供への土産や贈り物としたもので、なかには遊郭をあつかったものもみられる）、信仰物（天神信仰を代表とする）、説話物、節句物、縁起物などに分けられて整理されてきた。今回おこなった分類は、基礎データとしてこれらの

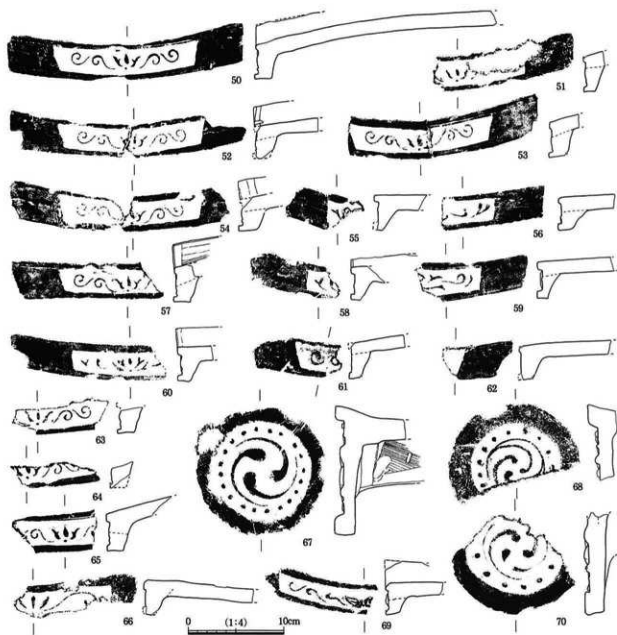


図85 瓦3

意識と無関係におこなったものであるが、たとえば子守立像が盗難よけの説話物、綱車が女兒の初正月に贈る節句物、福助が縁起物などと関係づけられるなど、本来は土人形に求められた性格をふまえて、整理される必要はある。

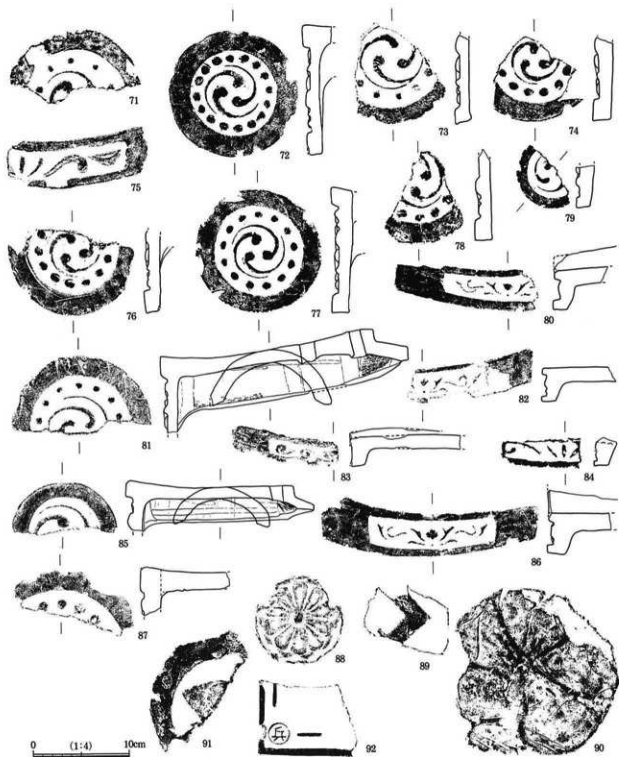


図86 瓦4

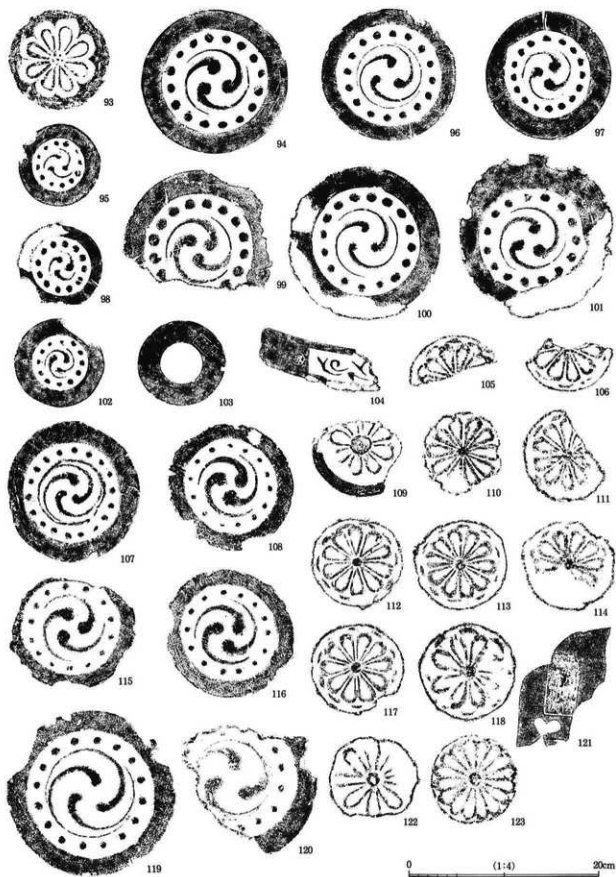


图87 瓦5

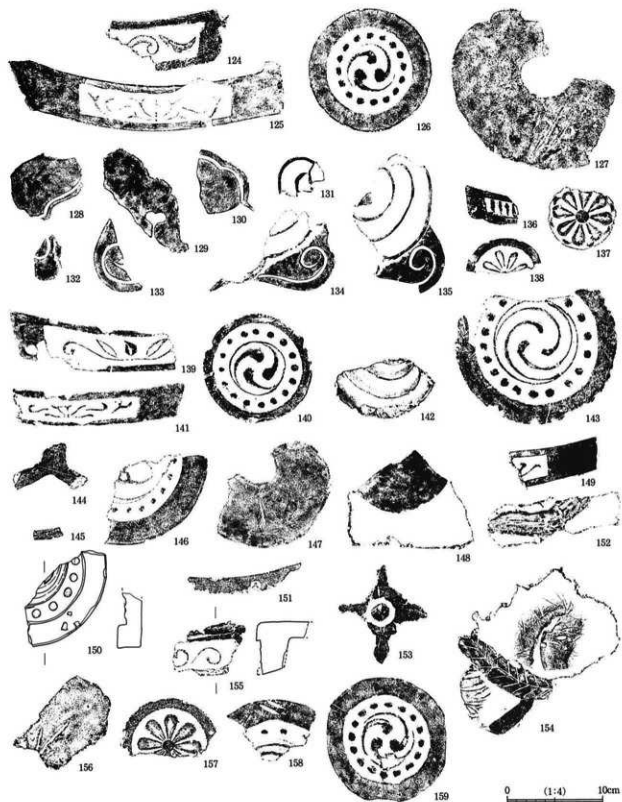


図88 瓦6

i、銭貨

当該期の包含層および遺構出土の銭貨は、14種類以上の216枚以上で、内訳は多い順に、寛永通寶162枚、元豊通寶6枚、文久永寶・熙寧元寶3枚、開元通寶・元祐通寶・政和通寶2枚、嘉祐元寶・皇宋通寶・至和元寶・治平元寶・紹聖元寶・聖宋元寶・咸平元寶1枚であり、ほかに明治以降の銭貨と不明品がみられる。

j、石製品

硯、砥石、暖房具、刻印石、石塔などがみられる。硯については観察表を参照されたい。刻印石はいずれも徳川大坂城再築に際して行われた造成盛土およびそれ以降の包含層からの出土であり、再築に際して不要となった石材と考えられる。またその事実により、徳川大坂城の再築と城下町整備の関係は、少なくともこの地点については、城下町整備が後出することが指摘できる。

各種の石塔もまた同様に現位置を移動しているものであり、礎石などに転用されたか、あるいは包含層からの出土である。

3は勺谷石製の暖房具と考える。脚付の箱形容器で内部に仕切りを設ける。一部に被熱痕がみられる。

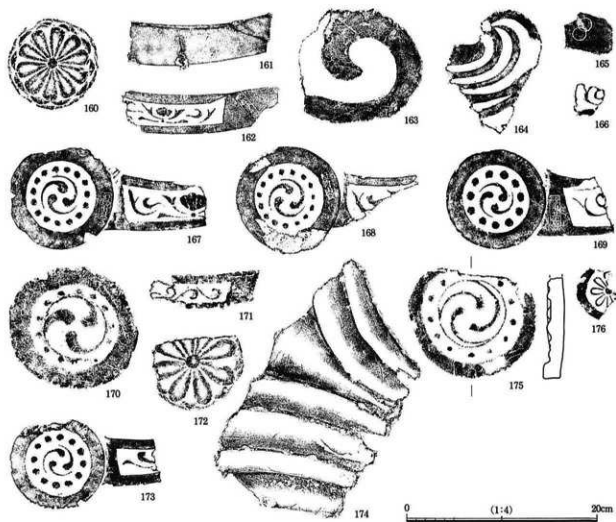


図89 瓦7

4 は用途不明品である。紡錘形を呈しながら外面を多角形に削りだしている。

5 も用途不明の円盤である。成形は比較的整っており、表面に擦痕がみられる。

7 は方形の石板で、表面は凹凸が激しいが、中央に穿孔をもち、形態から温石の可能性がある。

k、瓦

16世紀後半以降の瓦について、大阪では高槻城の資料を対象とした森田氏の整理を代表とするが、1

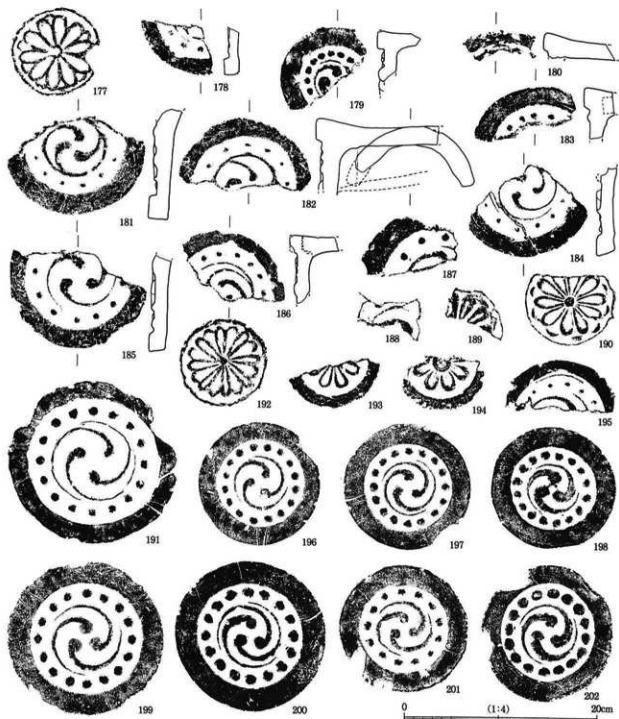


図90 瓦 (包含層) 8

A調査区からも豊臣期以降の軒瓦が502点出土し、同時期の資料として、氏の作業に補強するデータを提供できる状況がある。そこでここでは最初に、出土比率の高い軒丸瓦に絞って、その文様の分類を検討してみたい。

分類は、軒丸瓦の文様がすべて連珠巴文であるため、その文様を構成する要素を整理して数値化し、それらの属性が均等に評価される多変量解析の方法にしたがった。

以下、巴文軒丸瓦の文様を構成する要素は、軒丸瓦の直径、内区の直径、珠文が描く円の直径、巴文が描く円の直径、珠文の直径、珠文の数、巴文の形状、巴文の頭の直径、巴文の回転方向、巴文頭間の距離、巴文の尾の長さおよび圏線の有無などであり、このうち、巴文の尾の長さについては3つの巴文頭の中心点をつなぐ正三角形の1辺を基準とし、その辺と巴文頭の中心と尾の先端をつないだ辺との角度を測定した。すなわち、この角度が大きければ尾は長いことになり、小さければ、尾は短いことになり

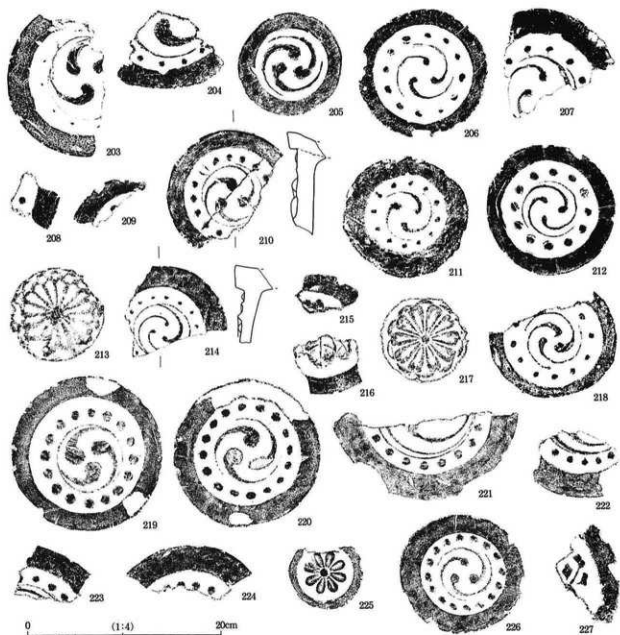


図91 瓦(包含層) 9

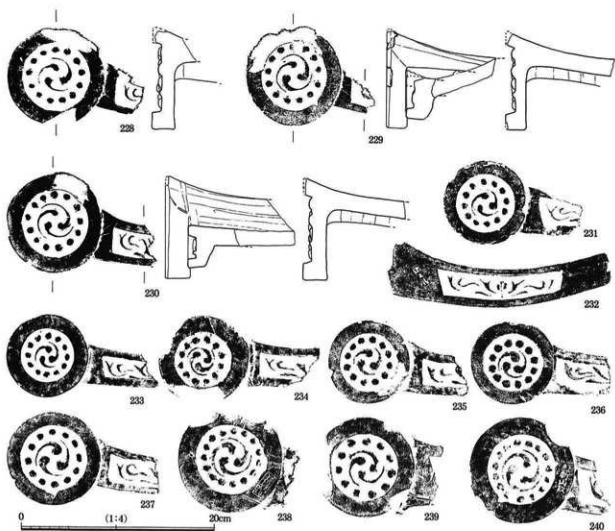


図92 瓦 (包含層) 10

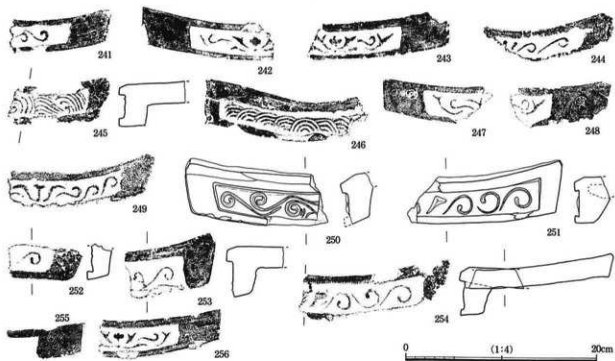


図93 瓦 (包含層) 11

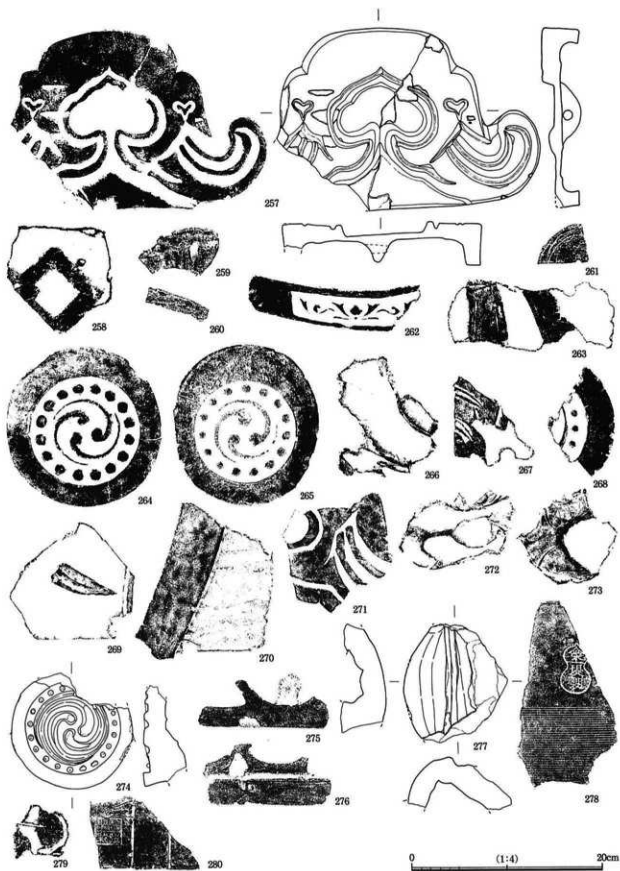


图94 瓦(包含) 12

る。さらに巴形状は、巴頭の直径と首部の幅の比率で表現できるものと考えた。

なおこれらの属性を数値化するに際して作成した項目は次のとおりである。

①内区率 内区径を外区径（丸瓦径）で割ったもので、瓦面全体における瓦周縁の幅の割合、または内区の割合を示す。

②珠文区率 珠文の描かれている円の径を内区径で割ったもので内区に対する比率を示す。

③巴区率 巴で描かれる円の径を内区径で割ったもので、やはり内区に対する比率を示す。

④巴密度 巴文の配置にみられる祖密を数量化したものである。巴頭間の距離と巴頭の直径が関係するものであり、ここでは前者から後者を引いた数値を前者で割った。

⑤珠文密度 珠文で描かれる円の長さのあいだに、どの程度の大きさの珠文がいくつ配されているかの比率である。

⑥くびれ率（巴文の形状） 大きく分けて首部分の有無が手掛かりとなる。形状によりグレードを付ける方法もあるが、ここでは巴頭直径と首幅の比率を算出し、その基準とした。

⑦尾長率 前記計測法により判明した角度を360度で割った数値である。

クラスター分析の結果は、 $a \sim x$ 群に分けられる。

a 群は、尾長率と珠文密度に特徴付けられる。特に尾長率は $a-2 \cdot 3$ 類が卓越しており、ほかの群と比べても区別できる。珠文密度は $1 \cdot 3$ 類が高い数値を示しており、 2 類と区別することが可能である。特徴を整理すれば、縁帯は相対的に狭く、珠文は小さく間隔をおいて配される。一方巴文は大型で、比較的近接して配される。尾は長く、圏線もみられる。

それぞれ $a-1$ 類は三の丸以後47、江戸以後67・175・201に、 $a-2$ 類は三の丸以後317に、 $a-3$ 類は江戸以後96に該当する。

b 群を細分する要素は巴密度と珠文密度であるが、その差はあまり大きくない。珠文密度は 1 類が高く、巴密度は逆である。特徴を整理すれば、縁帯は相対的に狭く、珠文は小さく間隔をおいて配される。一方巴文は大型で首の無い形状を特徴として、比較的近接して配される。尾は長く、圏線もみられる。

$c \cdot d \cdot e$ 群の違いは、クラスター分析による分類グラフのY軸のグレードにあらわれるように、 $a \cdot b$ 群の分類に比べて近似したものになっている。各群は $a \cdot b$ 群内での細分に対比できるものでもある。

それぞれ $b-1$ 類は江戸以後35と三の丸以後93に、 $b-2$ 類は江戸以後32・68、三の丸以後190・225、三の丸以前83に該当する。

d 群は、巴区率・珠文密度・尾長率共に低いものとなっている。すなわち巴文区が小さく珠文もまばらな文様である。なお当群には文様をもつ棧瓦が含まれている。 c 群と e 群の違いは巴密度と巴形状にあらわれており、前者は巴の密度が高くくびれが顕著なもの、後者はその逆である。

それぞれ c 群は江戸以後97・198・199・264に該当し、 d 群は江戸以後の228・229・230に該当し、 e 群は江戸以後の72・99に該当する。

以上より形式的な分類をまとめれば、 b 群は巴形状がくびれをもたないものとして特徴づけられ、圏線が巡る文様も多くみられる。同様に a 群も明確な首部を形成していない形状を基本とするが、くびれ率は b 群より強いものとなっている。これに対して c 群以降の巴文様は明瞭な首部を形成するものとなる。したがって巴形状のみ着目すれば、 b 群は a 群より古い傾向を示し、 c 群以降については、棧瓦をとともなうことから d 群を最も新しいグループに比定することができそうである。

(2) 大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前

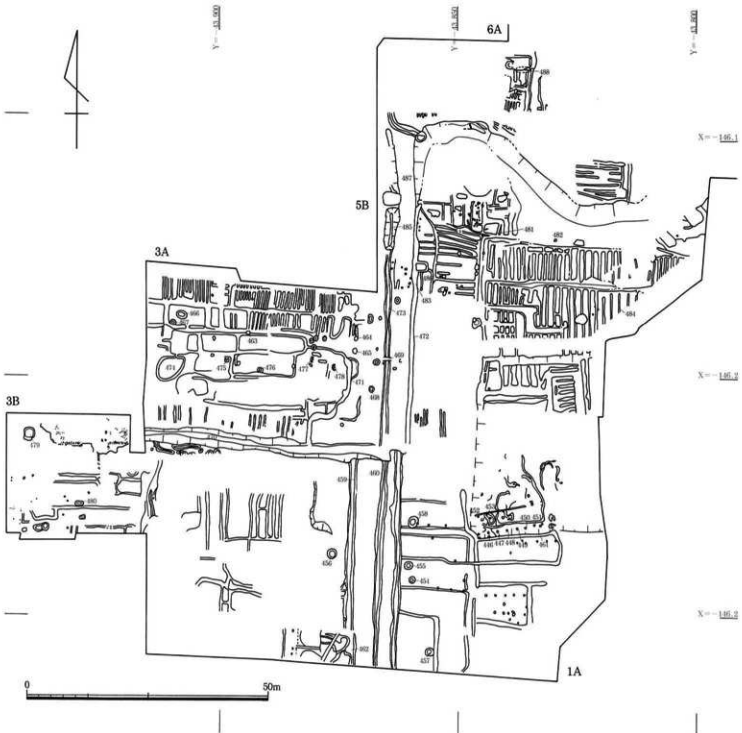


図95 遺構配置図

表6 遺構掲載番号表

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ
446	1Aピット129	畑	-146232	-43844	0.34
447	1Aピット130	畑	-146232	-43841	0.43
448	1Aピット131	畑	-146232	-43840	0.38
449	1Aピット132	畑	-146231	-43838	0.41
450	1Aピット133	畑	-146231	-43836	0.21
451	1Aピット134	畑	-146231	-43834	0.04
452	1Aピット135	畑	-146227	-43846	0.01
453	1Aピット136	畑	-146226	-43844	0.03
454	1A井戸10	畑	-146242	-43859	
455	1A井戸11	畑	-146238	-43861	
456	1A井戸14 (土坑34)	畑	-146237	-43876	
457	1A井戸15 (土坑224)	畑	-146257	-43856	
458	1A井戸23 (土坑316)	畑	-146230	-43859	
459	1A溝08 (土坑187・溝55)	畑	-146235	-43872	0.92
460	1A溝09 (溝30・56)	畑	-146239	-43866	0.69
461	1A溝60	畑	-146233	-43835	0.26
462	1A土坑187周辺	畑	-146256	-43872	0.29
463	3A井戸08	畑	-146191	-43894	
464	3A井戸09	畑	-146195	-43872	
465	3A井戸10	畑	-146192	-43871	
466	3A井戸11 (井戸12・13)	畑	-146187	-43876	
467	3A井戸22 (土坑433)	畑	-146189	-43909	
468	3A井戸32 (土坑482)	畑	-146203	-43868	
469	3A溝	畑	-146196	-43865	
470	3A溝017	畑	-146213	-43900	
471	3A溝046	畑	-146199	-43873	0.41
472	3A溝055	畑	-146188	-43860	0.37
473	3A溝056	畑	-146193	-43865	0.76
474	3A土坑206	畑	-146198	-43910	1.02
475	3A溝22	畑	-146197	-43898	
476	3A溝23 (溝24)	畑	-146199	-43891	
477	3A溝25	畑	-146197	-43880	
478	3A溝26	畑	-146198	-43876	
479	3B井戸11 (井戸25)	畑	-146212	-43939	
480	3B土坑017	畑	-146227	-43929	0.10
481	5B井戸15	畑	-146171	-43845	
482	5B井戸20	畑	-146171	-43830	
483	5B溝002	畑	-146179	-43859	0.20
484	5B溝019	畑	-146185	-43816	0.07
485	5B溝089	畑	-146168	-43864	1.40
486	5B土坑016	畑	-146180	-43857	0.15
487	5B道	畑	-146168	-43861	
488	6A溝75	畑	-146135	-43835	

A、遺構

この時期の特徴は、第1点が調査区の中央を南北に道がはしり、それ以外のほとんどの部分を畑が占めることであり、第2点が地形に起伏の現れるところにある。

第1点の特徴を示す最も顕著な例は3A～5B調査区でみられ、3A調査区では、中央に南北方向の道路遺構、南西部には東西方向の溝17(470)がはしり、それらをはさんだ形で畑がひろがる。

道路遺構は、溝55・56(473・472)を側溝とし、幅4.5mで、確認された長さは33mである。また溝56の中央やや北よりは幅0.8mの間隔で橋材が残されていた。

畑は道路遺構を境に東西に分かれるが、このうち東半部の鋤溝は、一部東西および南北方向の長方形区画で囲まれた中に、それぞれの区画を更に細分する形で配置されている。確認される区画の規模は、長辺15m、短辺7mである。

一方道路遺構西側には、幅5mの単位で溝17から北へ6列の区画がみられ、このうち最南の列と、北から2列が鋤溝状遺構である。なお各列を区切る溝の規模は幅0.8m、深さ0.3mを測る。

鋤溝状遺構は、幅0.2m、深さ0.1m程で、もっとも密集して検出された北端の列の場合、その密度は5mあたり6条となる。いずれも焼土の整地層が耕作土である。

また鋤溝状遺構の見られない中央の3列は、小規模の竈を伴った屋敷地群である。後述する竈(475・477・478)と堅く締まった土間状の部分および周囲を巡る溝などから推定される屋敷地の範囲と規模は、東西7m、南北5m程度を平均的なものとしており、また西端と南の列には大型の円形土坑(474)が配される。

また5B調査区では、谷部の西寄りの部分で幅1m、高さ0.2～0.3mの土手状遺構が南北方向に1本はしり、これを境にして幅0.2m・深さ0.1mの鋤溝状遺構が西側では東西方向に、東側では南北方向に整然と並ぶ。

第2点の特徴は、6A調査区から南へ5B・3A・1A調査区へひろがる景観に顕著に現れる。すなわち6A調査区と5B調査区の北端は、基盤層である11層が、現地表面より浅く、そのため検出される畑も、その深さは現地表面から1m程度に位置にある。しかし、5B調査区の南半以南は、5層が厚く堆積し、その結果この地区の面は6A調査区とは数メートルの段差をもって下位に位置する。この面は基本的に平坦で、これらより西方の地区にも続いており、この地区を南北に縦断する道路遺構も、この地形にしたがって5B調査区の西端で上り坂になっていることが、該当個所の調査で明らかになっている。

一方このような1A・3A調査区を中心とする下の平坦面において、その中でも3A調査区の東端から1A調査区の北東端の部分にあたる1A溝60(461)の北側は、さらに1m未満の比高差で下降し、東西および南北に軸を合わせた方形の区画で3段目の低位面を形成している。なお先に述べた6A調査区からの下降が基本的には自然地形に依っているのに対し、この地形はより人為的なものであったことが、さらに下層の調査によって明らかにされた。

またこれらの畑に伴う小溝の排水のために、3A調査区と1A調査区の境に3A溝17(470)が設けられている。なおこの溝が当然上記の低位面の排水もうけもったものと考えられるが、該当部分が調査区の境界に位置したため、その明確な痕跡を確認するにはいたっていない。

3A竈22(475) 3A調査区の西中央に位置する。南を焚き口とした2連の竈である。残存する高さ

は約5cmで、それぞれ0.3mと0.2mの直径をもつ。残存する部分は粘土のみがみられる。

3A竈23 (476) 3A調査区の西中央で、3A竈22の東約7mに位置する。東に焚き口をもつ単独の竈であり、平面形は1辺約0.5mの方形を呈する。残存高も僅かであり、本来2連のものの一部であったかどうかは不明である。残存する部分は粘土のみがみられる。

3A竈25 (477) 3A調査区の中央で3A竈23の東約10mに位置する。東に焚き口をもつ2連の竈であり、直径は向かって右からそれぞれ0.2mと0.3mである。残存高は約5cmである。残存する部分は粘土のみがみられる。

3A竈26 (478) 3A調査区の中央で3A竈25の東約5mに位置する。規模、構造は3A竈25と同様である。

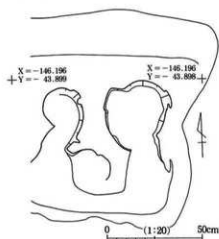


図96 3A調査区 竈22平面図

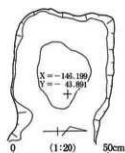


図97 3A調査区
竈23 (24) 平面図

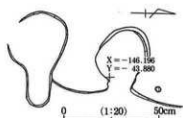


図98 3A調査区 竈25平面図

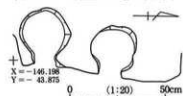


図99 3A調査区 竈26平面図



図100 遺構配置図 (5A調査区を除く)

(3) 三の丸築造以降、大坂夏の陣直前

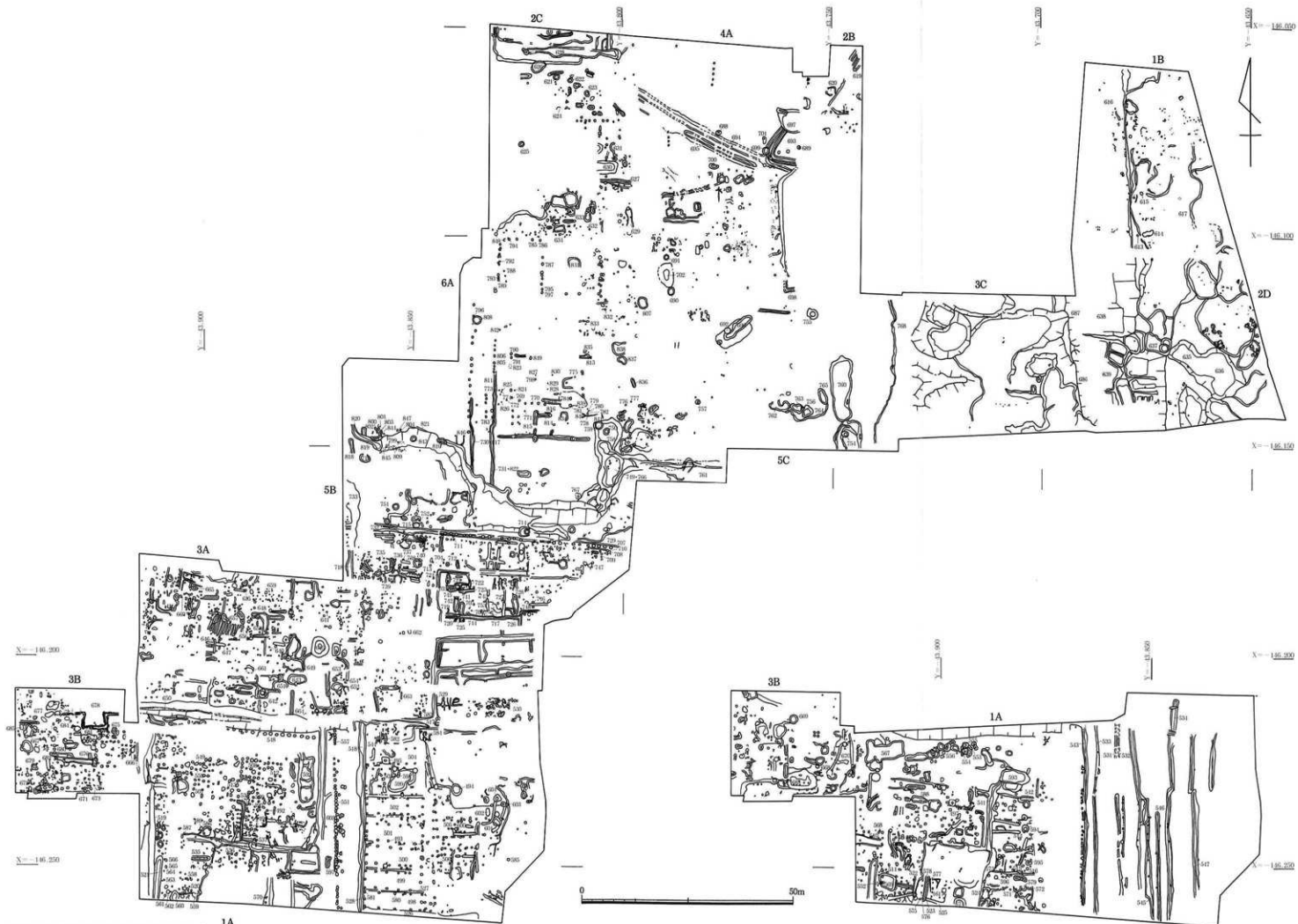


図100 遺構配置図 (5 A調査区を除く)

表7 遺構掲載番号表(5A調査区を除く) 1

番号	遺 構 名	時期	X座標	Y座標	深さ		後期		
489	IAビット017	後期	-146241	-43901.0	30	555 1A土坑064	後期	-146221	-43889 0.36
490	IAビット062	後期	-146235	-43899.0	65	556 1A土坑067	後期	-146221	-43893 0.60
491	IAビット121	後期	-146241	-43893.0	17	557 1A土坑073	後期	-146220	-43899 0.55
492	IAビット124	後期	-146236	-43885.0	28	558 1A土坑104	後期	-146253	-43965 0.09
493	IAビット142	後期	-146244	-43856.0	32	559 1A土坑110	後期	-146256	-43902 0.13
494	IA井戸12	後期	-146232	-43840		560 1A土坑127	後期	-146256	-43907 0.51
495	IA井戸22	後期	-146225	-43857		561 1A土坑129	後期	-146257	-43909 0.51
496	IA屋敷02	後期	-146239	-43886		562 1A土坑131	後期	-146256	-43906 0.23
497	IA屋敷03	後期	-146235	-43890		563 1A土坑135	後期	-146253	-43909 0.33
498	IA建物01	後期	-146258	-43855		564 1A土坑136	後期	-146251	-43909 0.29
499	IA建物02	後期	-146253	-43855		565 1A土坑137	後期	-146249	-43909 0.59
500	IA建物03	後期	-146248	-43855		566 1A土坑138	後期	-146248	-43909 0.67
501	IA建物04	後期	-146241	-43855		567 1A土坑140	後期	-146222	-43906 1.00
502	IA建物05	後期	-146235	-43855		568 1A土坑144	後期	-146240	-43909 0.29
503	IA建物06	後期	-146230	-43855		569 1A土坑178	後期	-146252	-43907 0.40
504	IA建物07	後期	-146223	-43855		570 1A土坑186	後期	-146257	-43885 0.59
505	IA建物08	後期	-146241	-43840		571 1A土坑188周辺	後期	-146254	-43877 0.25
506	IA建物09	後期	-146247	-43840		572 1A土坑189	後期	-146255	-43874 0.56
507	IA建物10	後期	-146231	-43901		573 1A土坑190 (土坑191・199)	後期	-146252	-43889 0.19
508	IA建物11	後期	-146227	-43889		574 1A土坑192	後期	-146257	-43890 0.85
509	IA建物12	後期	-146237	-43888		575 1A土坑193	後期	-146256	-43890 0.90
510	IA建物13	後期	-146245	-43912		576 1A土坑194	後期	-146255	-43890 0.90
511	IA建物14	後期	-146252	-43905		577 1A土坑195	後期	-146253	-43899 0.90
512	IA建物15	後期	-146226	-43884		578 1A土坑196	後期	-146252	-43899 0.90
513	IA建物16	後期	-146232	-43893		579 1A土坑218	後期	-146254	-43875 0.25
514	IA建物17	後期	-146242	-43876		580 1A土坑231	後期	-146256	-43855 0.27
515	IA建物18	後期	-146249	-43875		581 1A土坑234	後期	-146255	-43862 0.28
516	IA建物19	後期	-146249	-43874		582 1A土坑237	後期	-146219	-43867 0.81
1617	IA建物20	後期	-146254	-438955		583 1A土坑238	後期	-146214	-43849 0.13
517	IA溝7	後期	-146215	-43850.0	65	584 1A土坑241	後期	-146218	-43848 0.41
518	IA溝10	後期	-146235	-43862.0	42	585 1A土坑250	後期	-146248	-43828 0.05
519	IA溝11 (溝15)	後期	-146240	-43912.0	52	586 1A土坑278	後期	-146241	-43899 0.45
520	IA溝14 (互親暗渠)	後期	-146256	-43904.0	45	587 1A土坑279	後期	-146242	-43904 0.25
521	IA溝16	後期	-146252	-43910.0	28	588 1A土坑280	後期	-146233	-43901 0.49
522	IA溝17	後期	-146253	-43911.0	25	589 1A土坑288	後期	-146250	-43896 0.08
523	IA溝19	後期	-146254	-43908.0	60	590 1A土坑289	後期	-146240	-43894 0.09
524	IA溝20	後期	-146255	-43888.0	65	591 1A土坑290	後期	-146241	-43898 0.57
525	IA溝21	後期	-146257	-43895.0	10	592 1A土坑293	後期	-146230	-43875 0.39
526	IA溝23	後期	-146290	-43850.0	25	593 1A土坑295	後期	-146228	-43877 0.99
527	IA溝29	後期	-146255	-43855.0	05	594 1A土坑299	後期	-146240	-43875 0.39
528	IA溝31	後期	-146255	-43863.0	49	595 1A土坑300	後期	-146248	-43874 0.49
529	IA溝34	後期	-146212	-43845.0	56	596 1A土坑309	後期	-146251	-43882 0.71
530	IA溝35	後期	-146212	-43828.0	48	597 1A土坑310	後期	-146248	-43871 0.08
531	IA溝36	後期	-146218	-43854.0	08	598 1A土坑319	後期	-146228	-43854 0.21
532	IA溝37	後期	-146237	-43853.0	36	599 1A土坑320	後期	-146230	-43853 0.49
533	IA溝38	後期	-146237	-43859.0	16	600 1A土坑328	後期	-146240	-43837 0.20
534	IA溝40 (溝74)	後期	-146235	-43840.0	40	601 1A土坑329	後期	-146239	-43831 1.07
535	IA溝46	後期	-146248	-43900.0	24	602 1A土坑331 (土坑338)	後期	-146237	-43833 0.86
536	IA溝47	後期	-146244	-43895.0	14	603 1A土坑332	後期	-146235	-43829 0.93
537	IA溝48	後期	-146245	-43886.0	78	604 1A土坑333	後期	-146234	-43831 0.48
538	IA溝49	後期	-146239	-43891.0	06	605 IA土手1	後期	-146235	-43868
539	IA溝52	後期	-146245	-43897.0	55	606 IA道路1	後期	-146246	-43896
540	IA溝53	後期	-146243	-43891.0	24	607 1B井戸1	後期	-146000	-43675
541	IA溝57	後期	-146238	-43883.0	36	608 1B井戸2	後期	-146000	-43672
542	IA溝58	後期	-146232	-43876.0	25	609 1B井戸3	後期	-146081	-43665
543	IA溝61	後期	-146237	-43861.0	41	610 1B井戸4	後期	-146082	-43679
544	IA溝62	後期	-146223	-43860.0	39	611 1B井戸5	後期	-146084	-43671
545	IA溝70	後期	-146238	-43849.0	35	612 1B井戸6	後期	-146077	-43669
546	IA溝73	後期	-146249	-43844.0	14	613 1B土坑4	後期	-146099	-43677 0.04
547	IA溝75	後期	-146242	-43835.0	49	614 1B土坑5	後期	-146099	-43675 0.01
548	IA溝77	後期	-146218	-43855		615 1B土坑6	後期	-146089	-43677 0.44
549	IA溝79	後期	-146228	-43900		616 1B溝1	後期	-146080	-43685
550	IA溝81	後期	-146234	-43878		617 1B溝2	後期	-146095	-43668
551	IA溝84	後期	-146240	-43869		618 2B井戸2	後期	-146075	-43751
552	IA石組7	後期	-146253	-43909		619 2B土坑6	後期	-146059	-43744
553	IA土坑062	後期	-146221	-43888.0	41	620 2B土坑7	後期	-146065	-43750 0.06
554	IA土坑063	後期	-146222	-43890.0	20	621 2C井戸2	後期	-146061	-43816
						622 2C井戸4	後期	-146062	-43812

A-1、5A調査区以外の遺構

1Aと3B調査区で2面、それ以外の調査区で1面確認された。全体の地形は基本的に先の、徳川大坂城築造以前の時期と同様であり、大きく6A調査区を中心とする高位面と1A・3A調査区を中心とする低位面に分かれる。さらに本遺構面の場合、調査区全体の東部地区にあたる1B・2D・3C調査区で堀を中心とする遺構が検出され、3C調査区の西縁を境界としてこの地区もまた6A・2C・4A調査区より標高を下げた低位面であったことがわかった。ただしこの地区の堀以外の遺構は、後述するように5層埋積以前の段階におこなわれた激しい削平により、ほとんど明らかにしえない。また6A調査区を中心とする高位面の遺構は、江戸時代以降の再開発により大半失われている。

その結果、この時期の状況は、厚い5層の埋積で残された、1A・3A調査区を中心とした低位面によって語られることになる。以下、図化された主な遺構を中心に説明をすすめる。

3A井戸2 (642) 3A調査区の溝17に近い調査区南部の中央よりに位置する。検出面で確認された平面形は一辺2.5mの方形であり、一段下って東側に段を持つ隅丸方形の井戸掘方が現れる。掘方の規模は一辺2.3mである。井戸枠は基本的に方形の横板組であるが、上部は北・西面が石組、南・東面が横板組で、最上部は石組となっている。石組は直径20~25cmの自然石を積んだもので、中には石仏を切断して転用したものもみられる。規模は内法で1辺0.6mである。なお検出面から4mで底に達し、底部には直径50cmの桶が据えてあった。

5C井戸2 (755) 5C調査区の北西に位置する。掘り方の平面形は長径3m、短径2mの不整形円形である。井戸の内径は1m、深さは検出面から1.9m以上を測る。井戸枠は下部が縦板組みで上部には瓦と石をめぐらす。

1A溝14 (520) 1A調査区の南西隅位置する瓦組の導水管である。東は0.5m程の比高差をもつ1A土坑110 (559) につながり、西は礫の詰められた1A土坑127 (560) につながる。溝の傾斜はほとんどなかったが、丸瓦の組み方から東から西へ導水したことが考えられる。なお源流にあたる1A土坑110は、直径1mの壁の直立した円形の土坑であり、内部に木製品などの容器の据えられていた可能性が高い。

1A溝15・16 (519・521) 1A調査区の南西隅に位置する、共に軸を南北にもち、南はトレンチ外へ延び溝15の北端は調査区の北部に達する前で終結している。規模は幅1.1m、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形で、埋土は中央部が淡褐色の砂、南部の上層は青灰色の粘土ブロックの集積した5層に類似した土である。なお溝15の南部から宝塔の軸部が出土している。焼け瓦と、丹波・備前・瀬戸・美濃・中国製磁器など多数の遺物を出土した。

溝16は溝15と接しながら後出して流れる。幅1.8m、深さ0.4mである。1A石組7 (552) の排水を受ける。

3A溝17 (470) 3A調査区の南~1A調査区の北に位置する。この場所は、後述するような三の丸築造以前にあった東西方向の開折谷の最上層にあたり、本遺構はその埋積に際してこの位置に残され、設けられた排水用の溝である。本調査区内での最大幅は4.5m、深さは1.5mである。基本的には素掘りの溝であるが、北壁には杭と竹または細枝を組み合わせた土留めが施されており、その痕跡が僅かに残されていた。

埋土は上層が5層であり、最下層に薄い黒色粘土が見られる。また下層より廃棄された瓦が大量に検

出された。

3 B池1 (678) 3 B調査区の北側東寄りで見出された。南に長さ約13m、高さ約2m(最大高)の石垣を持ち、石垣中央部は南に約3m突出する。この突出部分は北から南に向けて緩やかに上っており、石垣の高さも0.75mほどである。池の西端には石垣は築かれておらず、排水用の水路が北西に向かって取りついている。池の東端は調査区外に延びており不明である。

石垣は長さ0.5～1m、幅0.2～0.4mの切り石や角礫を240～250個程使用し構築されている。また、その中には石臼も3個含まれている。石垣は東側が最大5段に、中央部が2～3段、西側が最大4段に積まれている。石垣の基礎は粘質土を基盤にして大形の石を中心に平石で幅厚く構築される。上部になるほど石垣の幅は薄くなる。裏込めには粘土と細砂が使用され、石垣各の段毎に厚く盛られている。粘土は石の間にも充填されている。

使用されている石材は大半が花崗岩であり、安山岩が1個含まれている。花崗岩は生駒産のものが主流を占め、瀬戸内産が1個、六甲山産が4個みられる。これらの石の中には火を受けた痕跡を持つものや切り石でも割れたものが存在する。

池1は豊臣時代後期の早い段階には埋没しその機能を失っていた。埋土には粘土が厚く堆積し、腐食物がかなりみられる。出土遺物は陶磁器、挿鉢、塩壺、下駄、漆器、箸、銭、骨など岐にわたっており、出土量も多い。また、西側石垣の石の間から人間の頭骨頂部が見出されている。

なお、遺構の性格であるが、南側屋敷地の北への拡張に伴う土留めのための石垣を利用して廃棄場所としての機能を持つようになったものと思われる。結果として多量の腐食物の堆積がみられ、池状の遺構として捉えられることから、今回は池1として報告した。

1 A土坑63 (554) 1 A調査区の北西部に位置する。平面形が南北方向に長い楕円を呈し、東端はトレンチ外へのびる。規模は長軸が1.2m、短軸が0.9m、深さは0.2mを測る。埋土には炭化物を含み、唐津碗と下駄が出土した。

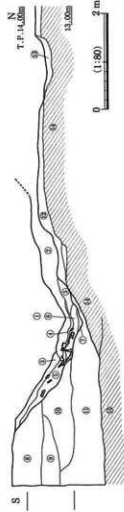
1 A土坑64 (555) 1 A調査区の北西部に位置する。平面形が東西方向に長い長楕円を呈し、規模は長軸が1.5m、短軸が0.95m、深さは0.2mを測る。埋土は上層に炭が堆積し、下層は砂混じりのシルトである。一個体の志野向付が三分して出土した。

そのほかこれらの周辺に土坑群が集中して重複しながら確認された。いずれも隅丸長方形から長楕円を平面形とし、軸は一定しない。規模は大小があるが、およそ長軸1.6m、深さは0.2から0.5mを測るものが多い。埋土は7a層に似た灰褐色の砂混じりシルトであるが、中には炭化物の層を薄い間層とするものもある。

2 C土坑53 (630) 2 C調査区の南東部に位置する。大半が建物の地下部分により削平されており、確認された長さは5m、幅は3m、深さは1.5mである。遺構の平面形は東西に長い方形であり、このうち東壁が垂直に立ち上がり、南北の辺は平行してのびるため、溝の東端部分と考える。

埋土はブロック混じりの褐色シルトと炭化物を多量に含む焼土および炭の互層であり、最上層には、この溝が放棄された際に投棄された割石が2個体落ち込んでいる。炭層は2層が切り合い、中央部分では層厚0.3mの厚い堆積となる。遺物は炭層を中心として土師器、陶磁器、瓦、漆器椀などの木製品がみられ、種子を含む植物遺体も集中して検出された。

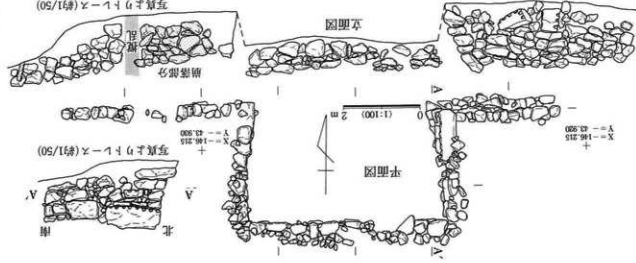
2 C土坑65 (633) 2 C調査区の南中央に位置する。埋土に礫を含む1辺1.8mのほぼ正方形の平面形をもつ。深さは0.25mである。2次堆積である須恵器、土師器のほか、塩壺、漆器椀、備前挿鉢、瀬戸・



- ① 砂質じりプロック (互層)
 ② 10YR 3/1 黒褐色 粘土・プロック
 ③ 10YR 4/1 灰褐色 細砂 (互層含む)
 ④ 10YR 3/1 黒褐色 粘土
 ⑤ ③より細かい細砂
 ⑥ 10YR 3/1 黒褐色 粘土
 ⑦ 10YR 1.7/1 黒色 粘土
 ⑧ 7.5YR 5/6 明褐色 砂質プロック

- ⑨ 10YR 6/8 明褐色 細砂
 ⑩ 5Y 6/1 灰色 細砂-粗砂
 ⑪ 10Y 6/1 灰色 細砂-粗砂
 ⑫ 5Y 3/1 灰色-5Y 4/1 灰色 細砂
 ⑬ 5Y 3/1 オリーブ灰色 粘土・プロック
 ⑭ 5Y 6/2 灰オリーブ色 細砂
 ⑮ 2.5Y 2/1 黒色 粘土

図106 1 A調査区 溝7断面図



- ① 5YR 3/4 暗褐色 粘土
 ② N 5/1 灰色 粘土
 ③ ①+② 混り
 ④ 10B5 6/4 青灰色 粗質土 (粗砂と中粒砂を含む、粘土・プロック)
 ⑤ 5Y 6/4 青灰色 粘土、粗砂・プロック
 ⑥ 10Y 7/1 灰色 シルト質の砂質土
 ⑦ N 3/1 明褐色 砂質土 (粗質に多く含まれている)
 ⑧ 2.6GY 5/1 オリーブ灰色 粘土 (①と⑦の間に存在)
 ⑨ 2.6GY 5/1 オリーブ灰色 粘土 (①を含む)
 ⑩ ①+⑨
 ⑪ 2.6GY 5/1 オリーブ灰色 砂質土
 ⑫ 10Y 5/1 灰色 砂質土
 ⑬ 2.5Y 4/2 暗灰褐色 粘土
 ⑭ 7.5GY 7/1 明褐色 細砂
 ⑮ ⑧+⑭
 ⑯ 5B5 6/1 青灰色 粘土と細砂
 ⑰ 10GY 5/1 暗褐色 粘土
 ⑱ 10GY 5/1 暗褐色 粘土
 ⑲ 10Y 6/1 灰色 粘土
 ⑳ 6GY 6/1 オリーブ灰色 粘土と細砂
 ㉑ 10B5 5/1 青灰色 シルト質じり細砂
 ㉒ 2.6GY 6/1 オリーブ灰色 粘土
 ㉓ 10Y 5/1 灰色 粗質土
 ㉔ 5B5 6/1 青灰色 シルト質じり細砂

図107 3 B調査区 池1平面・立面図

図108 3 B調査区 池1断面図

遺構の北半部は三の丸築造に伴う盛土を基盤層としており、それゆえその構築された時期は当然三の丸築造以降にあたるわけであるが、一方でこの遺構の埋土を基盤層にして、6 a層除去後の遺構面が形成されているため、この遺構の帰属する細部の時期は、大坂夏の陣を遡るそれ以前にあたることになる。

漆器、下駄、陶磁器、焼塩壺、金箔瓦、飾り瓦などが出土している。

1 A 建物 1 ~ 7 (498~504) 1 A 調査区の中央東よりに位置する。いずれも東西に長い 2 × 4 間または 5 間程度の掘立柱建物である。西側の辺は軸をあわせ、南北に連続して建てられている。また個々の建物は柱穴際に平行する溝をもっており、それらの溝は西進して、上層の遺構面でも南北に調査区を縦断する道路遺構の側溝を構成した 1 A 溝 10 (518) につながる。

なおこの溝と一部の柱穴が 6 a 層上面での精査で確認されている。いわゆる雨落ち溝を伴った連続建物であり、その一部は他の建物が廃絶した後も残り、畑の区画または仮屋として利用されていた可能性がある。

各建物の規模と構造は、建物 1 が東西 14.4 m で 4 間と東に 1 間の庇、南北が 3.85 m で 2 間、建物 2 が東西 13.4 m で 5 間、南北が 4.2 m で 2 間、建物 3 が東西 13.3 m で 5 間、南北が 4 m で 2 間、建物 4 が東西 13.3 m で 5 間、南北が 3.7 m で 2 間、建物 5 が東西 13.5 m で北面が 4 間、南面が 5 間、南北が 3.75 m で 2 間、建物 6 が東西 11 m で 5 間、南北が 4.2 m、建物 7 が東西 9.8 m で 5 間、東西が 3.6 m である。

建物 6・7 はその東に 3 段目の低位面をもつため、同一面での平坦部が狭い部分、東西方向に制限が加えられている。1 A 建物 8・9 (505・506) 3 A 調査区の南東にあたり、さきの建物 3~5 の東に位置する。共に東西に長い掘立柱建物で、それぞれの規模と構造は建物 8 が東西 8.6 m で 4 間、南北 3.9 m で 2 間、建物 9 が東西 11.6 m で 6 間、南北 3.7 m で 2 間である。ただし建物 9 の柱穴の配置はこれまでの建物にくらべて整っていない。

なおこれらの建物と重複して南北方向に複数の溝が流れている。これらの溝と建物との先後関係については、1 A 溝 70

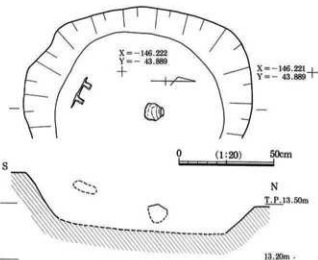


図109 1 A 調査区 土坑63平面・断面図

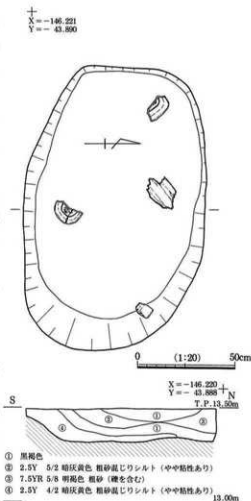


図110 1 A 調査区 土坑64平面・断面図

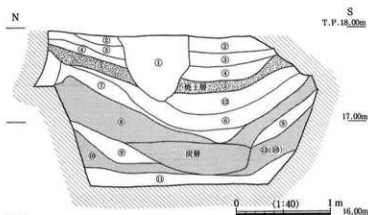
(545) が建物 8・9 を構成する柱穴を切って流れているように観察された点、三の丸を築造して溝だけを走らせたような空間利用が考えにくい点から、概要報告段階では建物群の廃絶後に複数の溝が流れたと考えた。

しかし、これらの遺構検出当初の記録を再検討した結果、5層除去後に見られたのは建物の雨落ち溝と一部一致する溝および一部の建物の柱穴であり、複数の南北溝の多くは6層とした黒色の土壌化された層を除去した後に明確になったことが確認され、特に1A溝70については建物群の廃絶後であったなら

ば不必要な、建物配置と連動した流れを示していることも再確認された。したがって本報告においてはこの所見を重視し、この現象が見せかけでないことを前提として、建物群を溝群の後に位置づけることにしている。

ただし先に述べたの1A溝70が1A建物8・9を構成した可能性のある柱穴に後出する点はこれまでの所見と矛盾するものであり、建物1~7と建物8・9が同時に存在していなかった可能性は残る。いずれにしてもこのような景観は三の丸が築造された1598年から大坂夏の陣のおこなわれた1615年の短期間にうみだされたものであり、その実態については大坂城をとりまく様々な事象を含めて総合的に考える必要がある。今後の課題としたい。

1A建物10~19 (507~516) 1A調



- ① 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質シルト (礫・瓦・炭化物多く含む、割石の層、盛土)
- ② 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト (炭化物・小礫多く含む)
- ③ 10YR 6/4-6/6 に近い黄褐色~明黄褐色 砂質シルト (黄色粘土ブロック・礫含む)
- ④ 10YR 4/4 褐色 シルト (土師器片含む)
- ⑤ 10YR 4/1 褐灰色 シルト (黄土 土師器片 炭化物多く含む)
- ⑥ 10YR 6/1-5/1 褐灰色 シルト (小・中礫多く含む、下位に瓦・炭化物含む)
- ⑦ 10YR 5/6 黄褐色 シルト (礫、瓦含む)
- ⑧ 10YR 2/1 黄色 粘質シルト (黄色シルトが埋め込まれ、下位に木片多く含む、壁に灰色粘土、炭化物を含む)
- ⑨ 5Y 6/1 灰色 シルト
- ⑩ 10YR 2/1 黒色 粘質シルト (有機物が炭化している)
- ⑪ 10Y 6/1 灰色 粘土 (微砂含む、瓦含む)
- ⑫ 10Y 5/4 に近い黄褐色 シルト (黄色粘土ブロック炭化物、瓦、含む)
- ⑬ N 6/0 灰色 粘土 (微砂含む)

図111 2C調査区 土坑53断面図

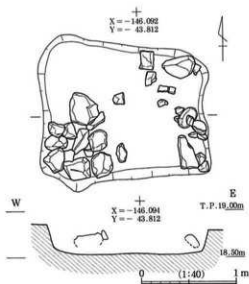


図112 2C調査区 土坑65平面・断面図

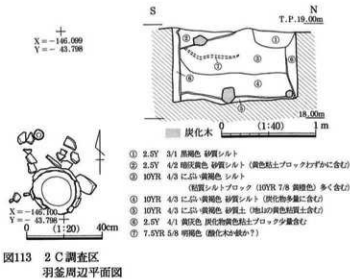
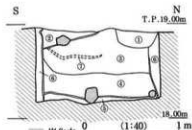


図113 2C調査区 羽釜周辺平面図



- ① 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト
- ② 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト (黄色粘土ブロックわずかに含む)
- ③ 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト (灰質シルトブロック (10YR 7.5 黄褐色) 多く含む)
- ④ 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂質シルト (炭化物多量に含む)
- ⑤ 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂質シルト (地山の黄色粘質土含む)
- ⑥ 2.5Y 4/1 黄灰色 炭化物黄色粘土ブロック少量含む
- ⑦ 7.5YR 5.8 明褐色 (炭化物多量含む?)

図114 2C調査区 土坑67断面図

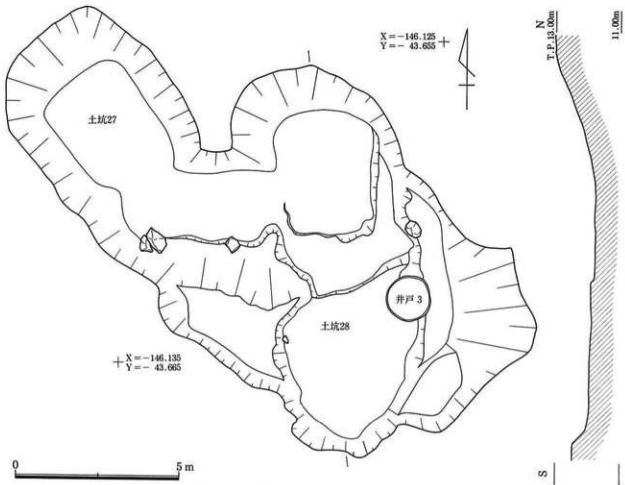


図115 2D調査区 土坑27・28平面・断面図

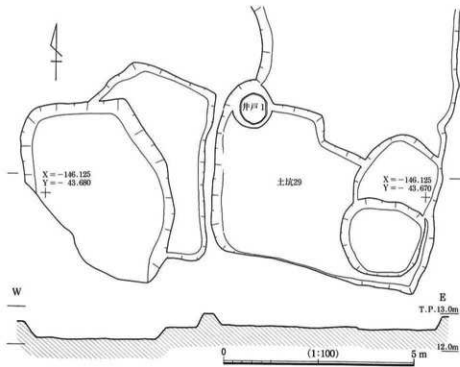
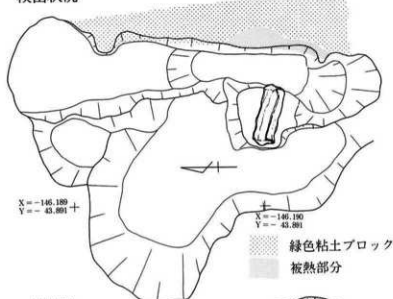


図116 2D調査区 土坑29平面・断面図

査区の西半部に位置する。このうち建物10~12 (507~509) と建物15・16 (512・513) は礎石建物であり、建物13 (510)・14 (511)・17~19 (514~516) は掘立柱建物である。

礎石建物は1 A調査区の北西部で6 a層である焼土層を除去後に、大半は礎石が抜かれ、その据えられた跡として検出された。建物12を中心として、その北側に建物11と15が北面を同じ軸に合わせて東西にならび、建物12の西側に建物10と16がやはり北面をほぼ同じ軸にあわせて東西にならぶ。各々の規模と構造は、建物10が南北3.6mで3間、東西は現状で2.2mを測り2間以上、建物11は南北4.2mで4間、東西4.4mで4間の正方形、建物12は南北9.2mで5間、東西5.2mで、4間以上、建物15は北面に礎石が残っており、東西3.8mで4間、南北4mで4間、建物16は南北5mで4間、東西3.8mで3間である。1 A建物13 (510) は1 A調査区の南西隅に位置する。この地区は調査区の中程から谷に下降するが、この建物はその傾斜面に近い8層上面で検出され、軸は北からやや東へ振る。時期は古代に遡る可能性

検出状況



掘削後

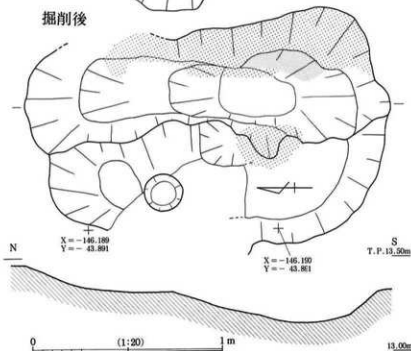


図117 3 A調査区 土坑185平面・断面図

がある。規模と構造は、南北が6.1mで3間以上、東西が4mで2間である。

1 A建物14 (511) は1 A調査区の南西隅で建物13の南東に位置し、後述する1 A石組7に先行する。南面は調査区外にのび、東面は確認されていないため、塀である可能性も残る。現状で南北8.5mで5間、東西5.2mで3間である。柱穴内に柱根を残すものが多い。

1 A建物17~19 (514~516) は調査区南中央に位置する。いずれも8層上面からの検出であり、三の丸築造以前に遡る可能性もある。それぞれの規模と構造は、建物17が南北6m、東西4.6mの2×2間、建物18が南北5.8mで3間以上、東西が3.5mで2間以上、建物19が1間1.2~1.5mである。

1 A柵列1~3 (548~550)

1 A調査区の北西に位置する、柵列1は調査区の北西際を東西に走る3 A溝17 (470) の南肩に設けられたもので、確認された長さは21mにおよぶ。東端は

南北に縦断する道路遺構の西側溝である1 A溝8 (459) でとまり、西端は3 B池におよぶものと推定される。柱間は1.4mである。標列2・3は標列1と平行して、その南西に位置する。建物10・16の北を遮る形で設けられ、それぞれ確認された長さは10.5mと6mである。

1 A標列4 (551) 1 A調査区の中央を南北にはしる。確認された長さは42m以上であり、南は調査区外へのび、北は3 A調査区でその延長の一部と思われる柱穴が確認されている。軸が2列みられるところから、建て替えの可能性もあるが、柱穴の最短距離は0.9mを測る。なお、この位置は標列の廃棄された後、土手状の小起伏を呈し、その北端からは樹痕も検出されている。

5 Bピット列 (711) 5 B調査区のほぼ中央に位置し、高位面を降りた崖際を東西にはしる。調査区内で2列認められ、北側の列は長さ40、柱間が約1.5m、南側の列が長さ40m、柱間が1.7~2mを測る。北側の列は5 B溝98 (732) と切り合っており、本来は南側のピット列と溝98の組み合わせの段階と、北側のピット列だけの段階の2時期を考える必要がある。

3 B建物11 (676) 3 B調査区の中央に位置する。礎石建物であり、東面の一部に礎石列が、南面に礎石抜き取り穴が並び、西面に石列の排水溝がはしる。柱間数は確定できないが、規模は東西11m、南北6mと考えられる。全体に被熱が著しい。残存する礎石の間隔は東面で1mを測り、後述する3 B建物8 (673) と同様に礎石と礎石の間には布掘り状の溝が掘られ、平瓦または丸瓦を2枚平行にたてた壁基礎が設けられている。その痕跡は南面でも確認でき、さらに一部は同様の施設が2列になった構造も推測できる。

建物内の北東隅と南西隅から埋塞遺構が検出された。南西隅は東西4m、南北1mの長方形土坑の一部をさらに2カ所掘りくぼめたもので、備前窯壺の底部が残存していた。北東隅は東西3.5m、南北2.5mの土坑に8個の備前窯壺が置かれ、さらに南東隅に2個分の土坑が掘られ、そのうちの1カ所のみ壺が据えられていた。

1 A屋敷2 (496) 1 A調査区の中央西よりに位置する。6 a層である焼土を除去して検出された。土間と礎石群から構成され、特定の建物を限ることのできない出土状況が示されたため、これらを一括に屋敷2としてとらえた。屋敷2を構成する遺構としては、1 A溝49 (538)

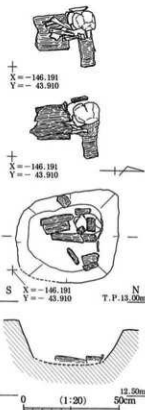


図118 3 A調査区 土坑208平面・断面図

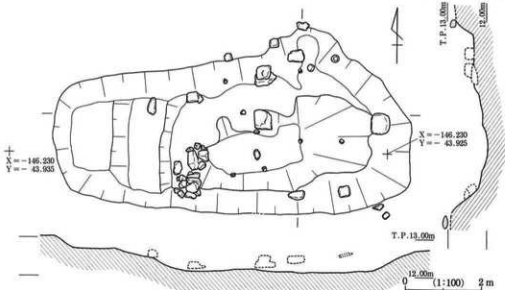


図119 3 B調査区 土坑38平面・断面図

の西側で小規模な礎石列が南北方向を軸に二列並ぶ。礎石は一辺0.3m程であり、その中の一点ある。礎石はさらに西へ延びる可能性があるが、建築物の復原にはいたっていない。なお二列に並ぶ西には折形の墨書も残されていた。礎石の間隔は1mで礎石列の間隔は0.6mで側の礎石列を切る形で1A溝47(536)につながる瓦組の暗渠がみられるため、この面で少なくとも二回以上の建て替えのあったことになる。

1A溝49の東側は、3×6m程の範囲で、締まった黒色シルトによる2面の堆積が認められた。また、その周辺に瓦も多く分布しており、この建物が、瓦屋根と土間をもっていたことを示している。

主な遺物としては、1A溝48(537)から、漆器、羽子板、扇の骨と考えられる加工木、碁石、肥前系陶器碗、中国製染付、瀬戸・美濃窯播鉢などが出土している。

その他に、1Aピット62(490)の付近から頭蓋骨が1点出土した。出土状況は、焼土整地層(6a

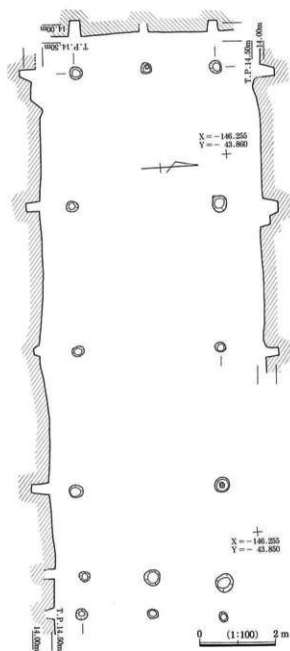


図120 1A調査区 建物1平面・断面図

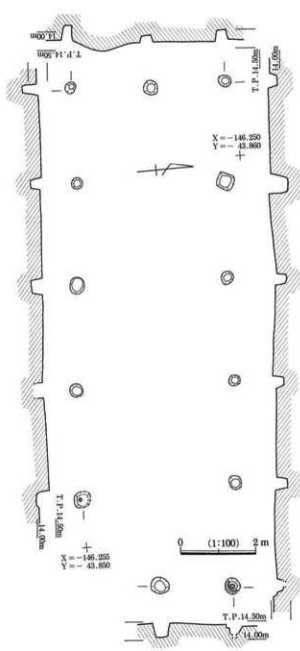


図121 1A調査区 建物2平面・断面図

層)を除去後、土間状の黒色シルトに載る高植物混じりの黒色土を掘削途中であり、頭蓋骨は前頭部左側に打撃痕をもっている。なお下顎骨はみられなかった。

1 A 屋敷 3 (497) 1 A 屋敷 2 の北で、1 A 屋敷 2 の基盤層となった黒色シルトの除去後の検出である。1～2 段の L 形石積みとその周辺から、30 個体を越える栄螺、鮑などの集積が検出されたため、屋敷 3 としてとらえた。遺物は主に石積みの北側から出土し、漆器碗、下駄、多量の箸、瀬戸・美濃窯の志野・織部を含む国産陶磁器と中国磁器などである。

1 A 土坑 288 (589) と溝 52 (539) 1 A 調査区の南西に位置する。溝 52 は、南北方向を軸としており、最大幅 2 m、深さ 0.8 m を測る。この溝は北端が 1 A 調査区と 3 A 調査区の間位置する谷につながり、南端は先述の 1 A 土坑 110 に接する溝とつながり、さらに調査区外へのびる。出土遺物には、瀬戸・美濃窯志野野付、アカニシ、軒平瓦、青磁碗、丹波窯鉢、土師器皿、瓦器皿、下駄、金箔軒平瓦、羽釜、

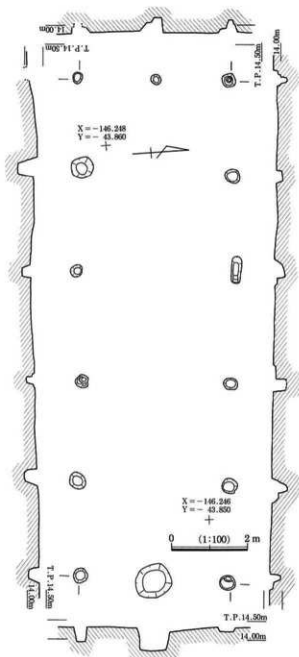


図122 1 A 調査区 建物 3 平面・断面図

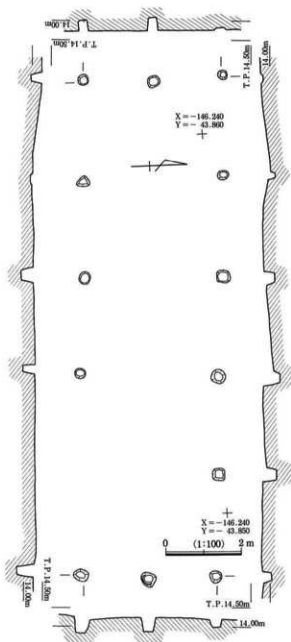


図123 1 A 調査区 建物 4 平面・断面図

瀬戸・美濃窯天目碗、漆器椀、瀬戸・美濃窯丸皿、白磁端反皿、中国製染付、備前窯播鉢・甕、瀬戸・美濃窯志野皿、肥前系陶器壺・胎土目皿、焼塩壺、火鉢、土師器墨書「せいしゅ」皿などが出土しており、少量ではあるが土師器皿の一括廃棄もみられた。

この溝は、谷の存在していた時期に機能している点で、谷の埋積が終了する三の丸完成以前に比定されることは明らかである。しかしこの溝の東側の基盤層がやはり造成盛土によるものであるため（1A溝52から1A溝53（54）の東側までの間は、青白色の細砂を主とする造成盛土を基盤層としており、この地点での11層は、さらに1.3m下に存在する。旧地形においてこの間は幅約13mの堀状の景観を呈する。）この溝の時期を三の丸築造以前の古い段階におくことはできない。この状況の理解としては、三の丸築造が一気に進められたのであるならば、その完成以前の新しい段階（1595年の惣構整備）に位置づけるか、あるいは三の丸築造が段階的におこなわれた場合はその中の一時期に比定されることになる。

なお、溝52出土遺物とした中には、その上層の遺物も含まれている可能性があり、これらをもって瀬戸・美濃窯の編年問題との対比はできない。

1A土坑288と1A土坑289は、溝52の東に約10m隔てて2連配置された瓦組の排水枡である。0.75×0.9

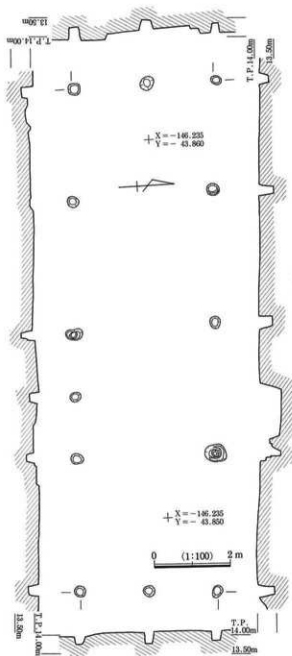


図124 1A調査区 建物5平面・断面図

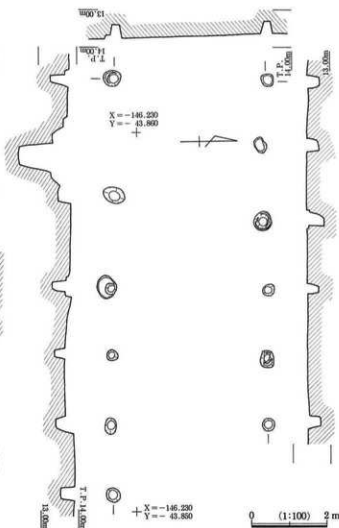


図125 1A調査区 建物6平面・断面図

mの方形の桁形に平瓦を立て、底面も平瓦を敷いている。また橋の西は中央から丸瓦を組んだ地下式の導水管をつなぎ溝52にその先端をだしている。導水管の上は瓦を粗く敷いた道である。

6 Aピット133 (772)・ピット412 (798) 6 A調査の中央南よりに位置する。共に土師器皿の埋納ピットである。ピット133の土師器皿内には土師器片以外に残存固体はみつからなかった。また共に、これらが建物を構成するピットであるかどうかは、他遺構の残存が乏しく確定できていない。

6 A瓦溜まり3 (810) 6 A調査区の南西端に位置する。考察編参照。

1 A石組7 (552) 1 A調査区の南西隅に位置する。1 A溝16につながる礫の集積および丸瓦を組んだ導水施設である。集石の規模は直径1mのほぼ円形で導水部の丸瓦は3組まで残っていた。

4 A建物1・谷1 (693・697) 自然地形を利用し、11層を大きく2～3段にカットして比高差1～2mの段差をもつ。底面には土坑が2基がみられ、壁に沿って幅1m弱、深さ0.1mの浅い溝が巡る。性格は不明であるが、出土遺物には少量の陶磁器と木片などがみられ、建物を配置するための造成遺構と考えた。また、この段状遺構(4 A建物1)の東側から2 B調査区で検出された谷の谷頭がみつきり、肩部分から6～7世紀頃の須恵器、土師器が少量出土した。

2 D堀1・2 (638・639)

2 D堀1は2 D調査区の西部に位置する。1 B調査区で検出された1 B堀1に続くもので、軸はほぼ南北に一致している。トレンチ北壁から約20mの位置で南壁に達し、1 B堀1からの延長距離は約65mである。11層を基盤層としたもので、石垣は確認されなかった。斜面の傾斜は、東面が42度前後、南面

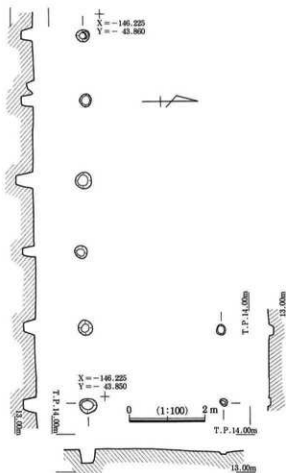


図126 1 A調査区 建物7平面・断面図

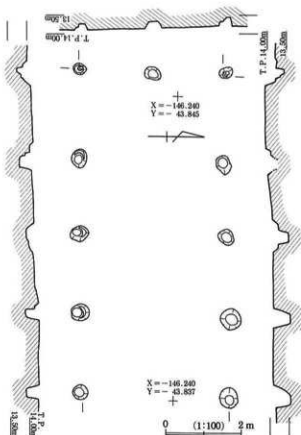


図127 1 A調査区 建物8平面・断面図

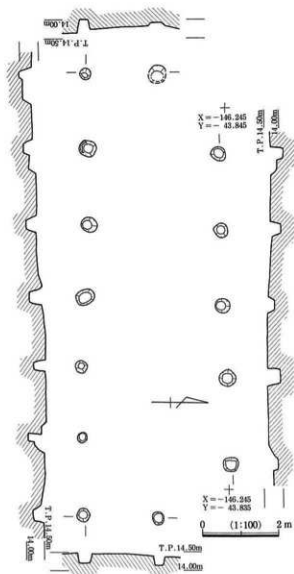


图128 1 A 調査区 建物9 平面・断面図

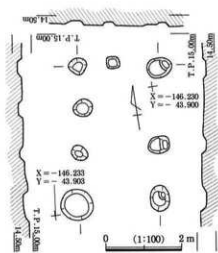


图129 1 A 調査区 建物10 平面・断面図

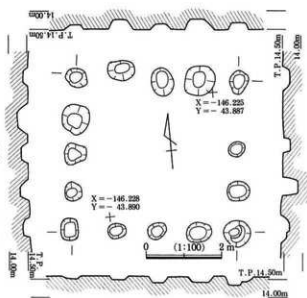


图130 1 A 調査区 建物11 平面・断面図

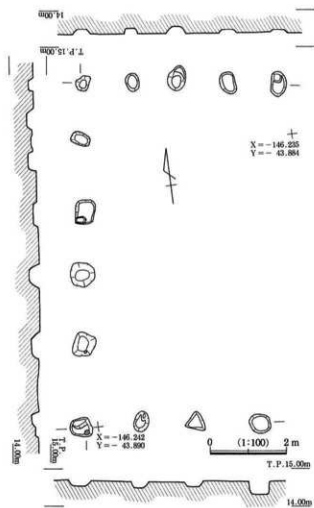


图131 1 A 調査区 建物12 平面・断面図

がほとんど垂直である。比高差は東面の最高位置で4 m、南面で1.8 mを測る。検出された部分での底部は、階段状に北へ下降する状況がみられ、さらに緩やかに西への下降も続いている。また、調査区の西端で壁の立ち上がりは確認されていない。

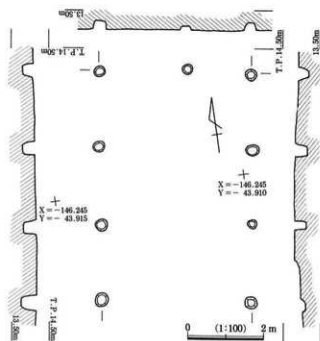


図132 1 A調査区 建物13平面・断面図

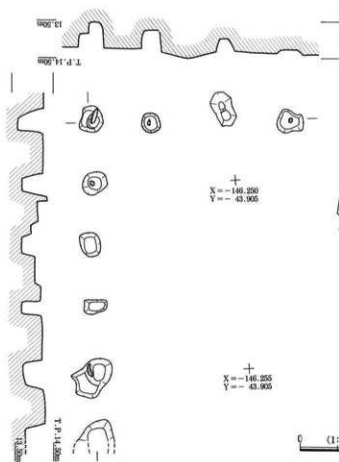


図133 1 A調査区 建物14平面・断面図

埋土は6 b層の下で砂層および緻密な黒色粘土層（7層）と灰色シルト層（8層）に分けられる。6 b層は一時に埋められたものであるが、



図134 1 A調査区 建物15平面・断面図

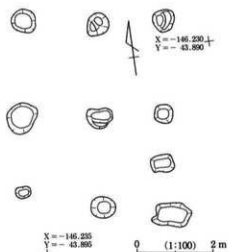


図135 1 A調査区 建物16平面・断面図

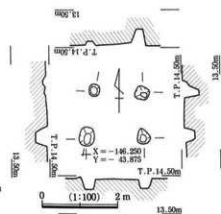


図138 1 A調査区 建物19平面・断面図

7層は上部の層厚が薄いものの斜面全体にみられ、明確ではないが複数の堆積面をもっている。堀が機能していた期間に徐々に堆積した状況を示す。8層は11層を供給源とし、7層に比べて空隙度のある密度の粗い層である。堀1では階段状に下降した下部で確認された。

遺物は北側斜面部の7層上部(砂層)から金箔飾り瓦の一部、南側斜面部の7層から明代染付などが出土している。

2 D堀2は調査区の南西を占める。堀2の東肩は、堀1の東辺から東へ7m移動した位置で南北方向

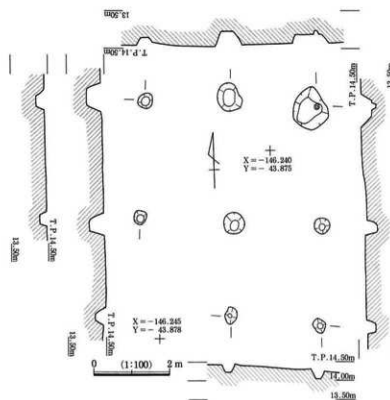


図136 1 A調査区 建物17平面・断面図

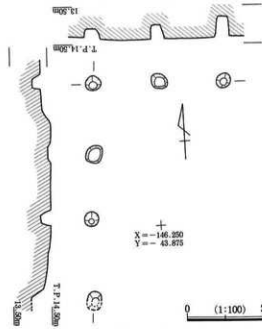


図137 1 A調査区 建物18平面・断面図

に軸を一致している。トレンチ南壁から約20mの位置で北壁に達し、北壁はやや北に振る角度で西へのびる。

11層を基盤層とし、石垣は確認されなかった。斜面の傾斜は、東面が26度前後、北面がほとんど垂直である。比高差は東面の最高位置で2m、南面で0.8mを測る。検出された部分での底部は、複数の障壁がみられ、面積の狭い南東部の区画を除き、それぞれの底部は基本的に平坦なものとなっている。また、トレンチの西南端で壁の立ち上がりを確認しているが、部分的なため、それが堀2の規模を示すものか、障壁の単位であるかどうかは確定できない。

障壁で画された部分は11区画検出された。ただし、障壁の規模により大小の区別が可能で、大区画は23㎡程度、小区画はおおむねそれを細分した形になっている。障壁の規模は多様であり、規模は幅(上端・下端)、比高差が0.94mである。

埋土は6層の下で砂層および緻密な黒色粘土層(7層)と灰色シルト層(8層)に分けられる。6層は一時に埋められたものであるが、7層は上部の層厚が薄いものの斜面全体にみられ、明確ではないが複数の堆積面をもっている。堀が機能していた期間に徐々に堆積した状況を示す。8層は11層を供給源とし、7層に比べて空隙度のある密度の粗い層である。堀2では小区画を構成する障壁の西側部分にのみ確認された。また7層上面は凹凸やオーバーハングのみられる乱れた状態となっていた。

遺物は7層上面から焼塩壺、肥前系陶器皿、漆器碗など、7層中から肥前系陶器碗などが出土し、8層中から木地碗

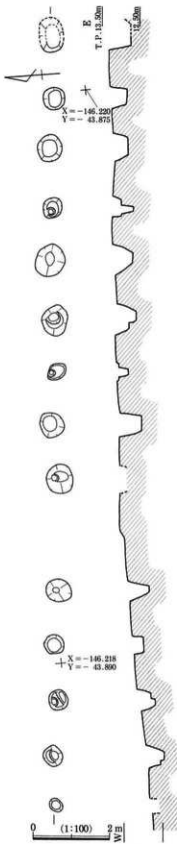


图139 1A調査区
棚列1平面・断面図

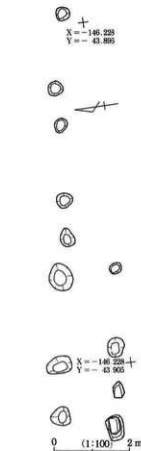


图140 1A調査区 棚列2平面図

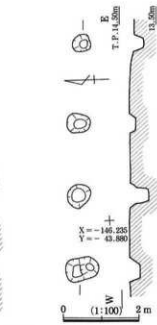


图141 1A調査区 棚列3平面・断面図

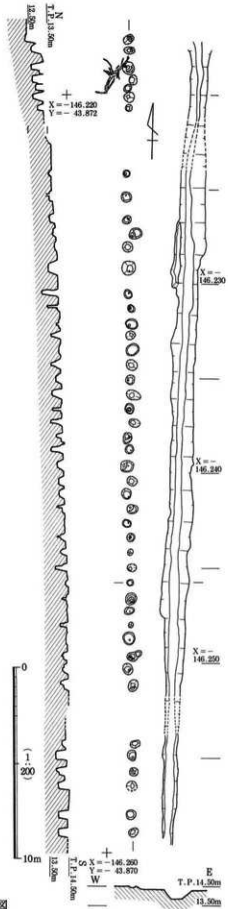


图142 1A調査区 棚列4平面・断面図

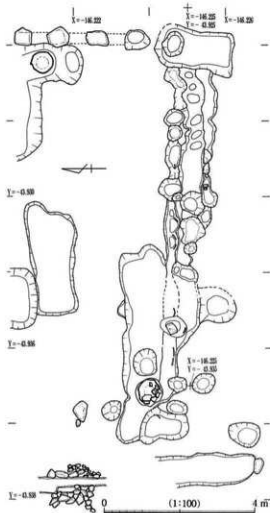


図143 3 B調査区 建物11平面図

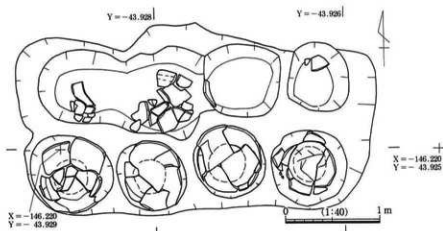


図144 3 B調査区 建物11埋塞平面図

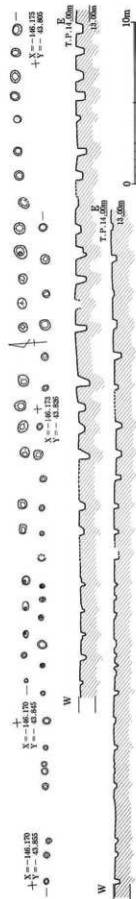


図145 5 B調査区 ビット列平面・断面図

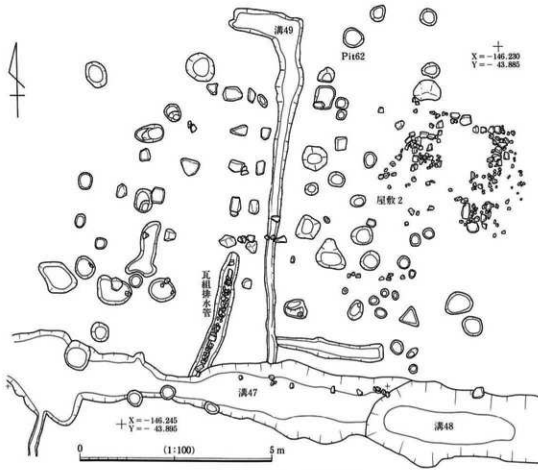


図146 1A調査区 屋敷2 平面図

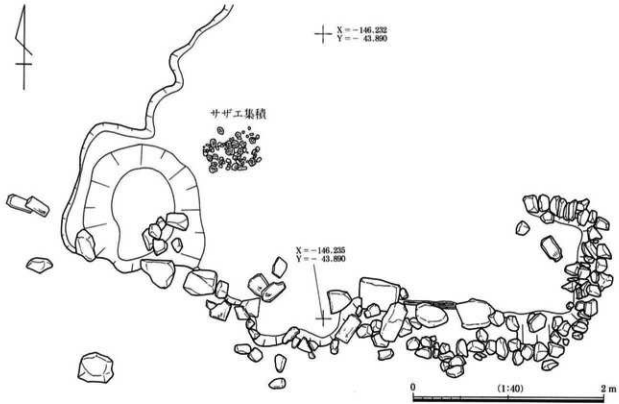


図147 1A調査区 屋敷3 平面図

が出土した。なお、8層除去後に2D井戸4(890)が検出されている。

以下、詳細図未掲載の遺構について調査区毎に説明を加える。

1 A 土坑140(567) 1 A 調査区の北西隅に位置する。6層を掘削後に検出され、約40m²の範囲から数百本にのぼる箸を中心に漆器、中国磁器、国産陶器などが出土した。

1 A 溝21(525) 1 A 調査区の南西に位置する。1 A 溝52につながる東西方向の溝で、導水管と思われる丸瓦が1点、溝の西端で検出された。さきの1 A 土坑288との関係がうかがわれる。

1 A 建物20(1617) 1 A 調査区の南西で1 A 溝21の北に位置する。いずれも小規模なピットで、直径は0.30m程度である。溝19と軸をあわせて4×2間以上の規模が推定できる。

1 A 土坑190~192(573・574) 1 A 調査区の南中央に位置する。南北に連なる土坑である。上層の堆積が連続していたため当初1 A 溝20(524)としていたが、調査の過程で分割され個々の遺構となった。いずれもいわゆる廃棄土坑であり、特に土坑192からは、数百本にのぼる箸を中心に漆器、中国磁器、国産陶器などが出土している。なお瀬戸美濃窯製品では灰釉丸皿を出土しているが、志野はみられない。

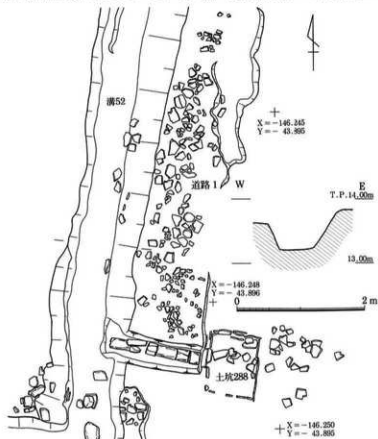


図148 1 A 調査区 土坑288・道路1・溝52平面・断面図

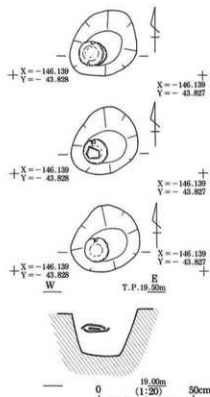


図149 6 A 調査区
ピット133平面・断面図



図150 3 B 調査区 瓦列1平面図

なお土坑190・192の東側は、6 a層上面で幅4.3mの範囲で焼土の堆積がみられ、その下層から土坑218が検出された。1 A土坑218(579)は北半をトレンチ外へ延ばす楕円の土坑であり、下層から下駄と杓が完形で出土した。

1 A土坑219(872) 1 A調査区の南東に位置し、1×1.2mの正円に近い平面形を呈し、馬または牛の腰骨が完形で出土している。

1 A調査区の北東部は1 A溝7(517)が東へ進み、溝34(529)と交差し、その北西隅から木樋を設置した土坑238(583)と南西隅から平石と平瓦で埋桶をはさんだ土坑241(584)が検出されている。

1 A調査区の中央部では、6 a層上面で南北に土手状の高まりをみせたその両脇を走るA溝8・9(459・460)と、その西に位置する1 A土坑293(592)と1 A土坑296(593)から、焼土とあわせて多量の遺物が出土した。土坑293は南北10m、東西5.5mを測る隅丸長方形の大形の廃棄土坑であり、黒色砂混じりシルトを埋土とする。

主な遺物としては、溝8・9から景德鎮窯の海馬文小鉢、瓶子、唐草文小碗、鶯と水文、芙蓉手の皿、「玉堂佳器」銘の碗、ネジ花文の碗、福建・広東系では芙蓉手大皿、赤絵皿、瀬戸・美濃窯では織部向付、志野丸皿、および瓦器插鉢、軒丸瓦、肥前系陶器大皿・碗・向付・壺、焼塩壺、備前窯插鉢、土師器皿、漆器椀などが、土坑293から福建・広東系では唐草文碗、景德鎮窯の銭文、かぎ花文碗、瀬戸・美濃窯志野菊皿・織部向付・灰釉丸皿、瓦器插鉢、土師器鍋、魚住窯甕(13世紀)、肥前系陶器壺・碗・皿、土師器大和型釜、瓦器插鉢・壺、下駄、漆器椀などが、土坑296から景德鎮窯の唐草文碗、瀬戸美濃菊皿、志野、土師器皿、唐津皿、碗、壺、塩壺、漆器椀、備前鉢などが出土した。

1 A調査区の井戸はいずれも縦板材を枠としたもので、直径は井戸9(75)・10(454)が1m、井戸11(455)が1.5m、井戸12(494)が2.3m、井戸23(458)の直径は検出面で2mをはかる。主な出土遺物としては、井戸10から白磁碗、肥前系陶器皿、井戸11から土師器皿、瀬戸窯香炉、備前窯插鉢、中国製染付碗など、井戸12では上層の掘削であるが、土師器皿、備前窯插鉢、瀬戸・美濃窯天目碗などと共に、「扇に月丸紋」軒丸瓦片が出土した。

1 A調査区の東部では、1辺2mほどの隅丸方形を呈する土坑324(882)と土坑318(880)が検出され、土坑318から青磁碗と平瓦が、土坑324から赤色漆を塗った軒丸瓦とともに、底部をわずかに押し上げたいわゆる「へそ皿」の系列にある土

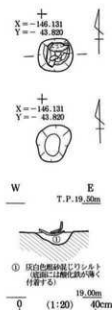


図151 6 A調査区
ピット412平面・断面図

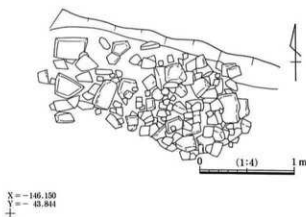


図152 6 A調査区 瓦溜まり3平面図

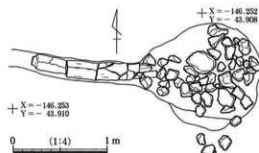


図153 1 A調査区 石組7平面図

師器皿が出土した。またその東北部は、1 A溝70 (545)の東約1.5mを段とし、南は1 A土坑332 (603)付近から緩やかに下降していくが、1 A土坑333 (604)の東部分には、8層に類似した明褐色砂層がみられ、その上面に堆積した炭化材に混じて「扇に月丸紋」軒丸瓦片が出土している。

一方東北部の中央は7 a層の掘り下げにより白色の砂層があらわれ、これを基盤層とした南北方向の溝が3条検出される。なおこの白色砂層から金箔瓦、「扇に月丸紋」瓦などが出土した。

2 B井戸 1 (131) 2 B調査区の北端に位置する。縦板を組み合わせた木枠井戸で、直径は0.7mである。瓦や陶磁器が出土した。

2 B井戸 2 (618) 2 B調査区の北部に位置する。素掘りで検出面での直径は1mを測る。下駄・箸・漆器などの多量の木製品と土器・陶磁器が出土している。

2 B井戸 3・4 (132・133) 2 B調査区の北部に位置する。検出面での直径はそれぞれ3m、0.8mを測るが、遺物は出土していない。

2 B土坑 7 (620) 調査区の北端に位置する。北東～南西を長軸とする不整形の土坑である。規模は長軸2.8m、短軸2mを測る。検出面からの深さは約0.15mで底面はほぼ平坦である。出土遺物には細片が多いが、瓦器碗や土師器釜、瓦などがみられる。

2 C井戸 9 (625) 2 C調査区の西中央に位置する。直径1.2mを測る素掘りの井戸である。埋土は炭層と粘土ブロックなどで、一時に埋められた様子である。遺物は土師器皿・釜、肥前系陶器碗・皿・向付、刷毛の柄、波切車文をもつ木片、漆器椀および多量の動物遺体である。

3 B調査区では建物および建物跡と推定される状況が6カ所で確認された。

3 B建物 7 (672) は調査区の南西隅に位置する。礎石建ちである。南北5間、東西2間以上の構造で規模は南北5.5mである。なお礎石の状況からほとんど同じ位置にあって2時期にわたり建てられたことが知られる。また建物1の東側は、南北が建物1と同じ幅で、東西6mにわたり堅く締まった被熱

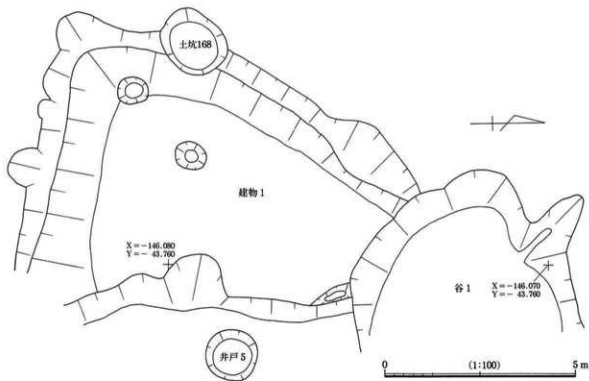


図154 4 A調査区 建物1・谷1平面図

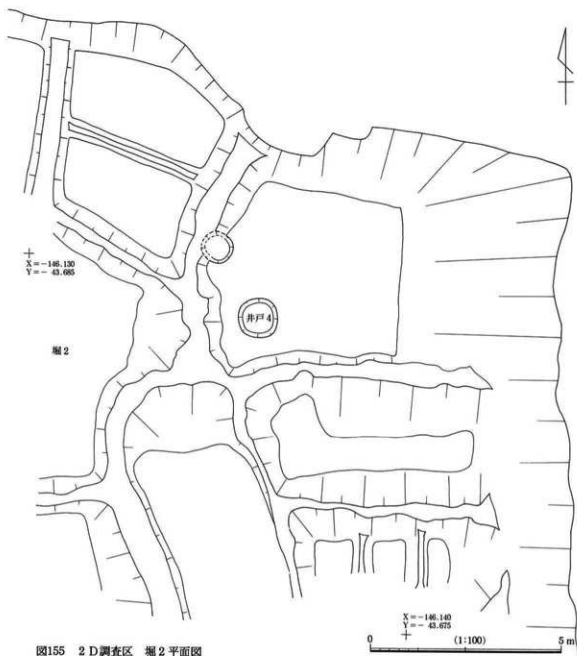


図155 2D調査区 堀2平面図

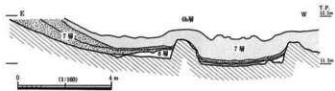


図156 2D調査区 堀2横断面図

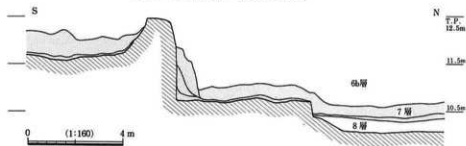


図157 2D調査区 堀1縦断面図

面となっており、さらにこの面を切るかたちで円形の土坑が連続して並んでいる。なお土坑の埋土は大部分が焼土であった。

3 B建物8 (673) は調査区の南端中央に位置する。礎石建ちである。建物の北端のみの検出で、一部削平されながら東西7mの規模が確認できた。残存する礎石の間隔は1mであり、礎石と礎石の間は布掘り状に溝が掘られ、平瓦を2枚平行に建てた壁基礎が設けられている。

3 B建物9 (674) は調査区の東部中央に位置する。礎石建ちである。3間×3間の総柱が推定され、規模は東西3m、南北3mを測る。

3 B建物10 (676) は建物3の北西に位置する。3×3m範囲で礎石抜き取り穴の一部を確認した。

3 B建物12 (677) は焼土の堆積とピットの分布から推定しているものである。

なお建物10と11の間には互組導水管が設けられ、北側の3 B池1につながっている。

4 A段状遺構 (698) 4 A調査区の東側で検出された。長さ21m以上にわたり、比高差1.6mの東へ向かって落ちる段である。遺構の北端は北東に向かって彎曲し調査区外へのびている。北側・西側の壁ともに急な傾斜となっている。埋土は上層に褐色の砂混じりシルト(層厚1.2m)が、中層に青灰色粘質土(層厚0.2m)が、下層には青灰色砂(層厚0.2m)が堆積していた。遺物は竹などの自然遺物や木製品、瓦などが僅かに出土している。この遺構の東側の部分が調査区外へひろがるために、溝(堀?)な

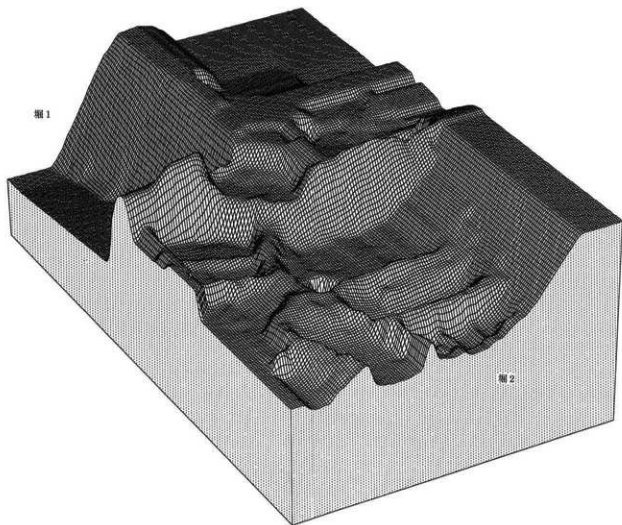


図158 2D調査区 景観復原

のかは判断しがたい。

4 A 井戸 7 (690) 4 A 調査区の西側のほぼ中央で検出された。直径1.7mを測り、素掘りである。検出面から-3.6mで湧水がみられた。井戸埋土の最下層である腐植物を含む黒色シルトから多量の木製品（へら、木刀状のもの、箸など）、瓦が出土した。陶磁器は少なかったが土師器の皿が10数点出土した。これら以外に漆器が少量みつまっている。

4 A 井戸 8 (691) 4 A 調査区の北西隅で検出された。直径1.2mを測り、素掘りである。検出面から-3.5mで湧水があった。出土遺物が非常に少なく所属時期を決定しがたい。

4 A 土坑254 (702) 井戸7・8間で検出された。土坑の北端、西端、東端は現代の攪乱に切られており、検出した形状は小判型を呈している。規模は残存部で南北長4.5m、東西幅3m、深さ0.2~0.3mである。浅い皿状を呈している。埋土は赤褐色の砂混じりシルトで微細な炭を多く含んでいた。出土遺物には多量の鉄滓、土師質の盤、銭貨1点（元豊通寶）がある。出土した鉄滓の総重量は4.1kgである。これらの鉄滓は炭を噛んでおり、碗形滓も数点含まれている。全て鍛冶滓であろう。

4 A 溝72 (696) 4 A 調査区の南に位置する。長さ6.0m以上、幅2.2m、深さ0.6mを測るがその形は不定形である。溝の埋土は灰オリーブ色粘土で基盤層のシルトブロックを含む。埋土内から備前窯の大甕や瓦、土師器の盤などと共に多量の炭、焼土塊、少量の金属滓が出土した。

4 A 井戸11 (692) 調査区の南東に位置する。素掘り規模は直径1.2m、深さ3.8mを測る。埋土は上層には4・5層の整地層と青灰色粘土層が存在し、下層は腐食物を多く含む黒色中・細砂シルトが堆積していた。下層からは箸、下駄、篋、曲物をはじめとする木製品や土師器の盤が多数出土した。また、金属製の架け仏（阿弥陀如来座像）が出土した。規模は高さ6.1cm、台座部分の幅3.9cm、重さ約32gを測る。

6 A 土坑98 (838) 調査区の東中央に位置する。平面形は直径4m程の円形を、断面は挿鉢状を呈する。中位に被熱面をもち、炭および焼土を埋土としていた。豊臣期の遺構である。

6 A 土坑93 (834) 調査区の南中央に位置する。東西7m、南北4mに黒色土が土間状にひろがっており、一部では平瓦が複数敷かれた形での出土も認められた。

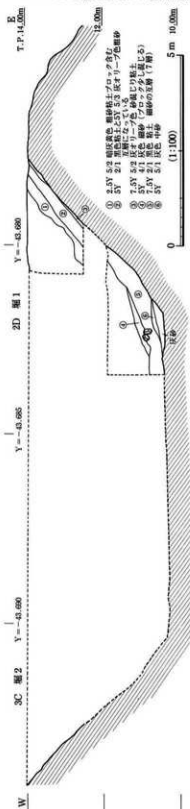


図159 2D調査区 堀1・3C調査区 堀2横断面図

Y=43.30

Y=43.33

X=146.305

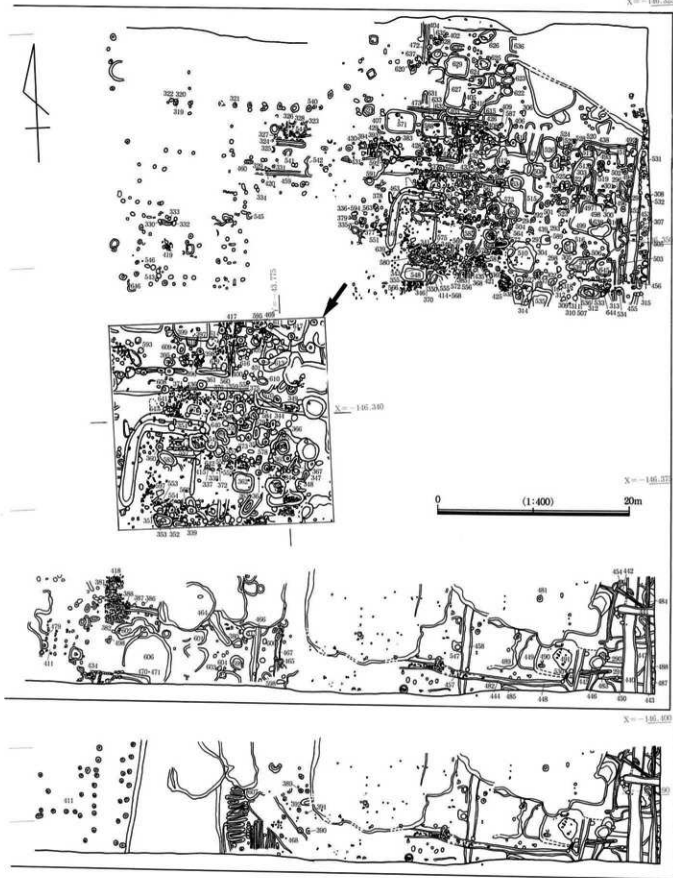


图160 遺構配置図（5A調査区）

表8 遺構掲載番号表(5A調査区)1

番号	遺構名	時期	X座標	Y座標	深さ	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
290	5Aピット037	豊臣	-146394	-43767	0.20	357	5Aピット219	豊臣	-146345	-43779	0.35	358	5Aピット221	豊臣	-146344	-43778	0.35	359	5Aピット222	豊臣	-146342	-43779	0.28	360	5Aピット225	豊臣	-146345	-43786	0.02	361	5Aピット226	豊臣	-146341	-43781	0.33	362	5Aピット227	豊臣	-146347	-43778	0.11	363	5Aピット228	豊臣	-146346	-43777	0.17	364	5Aピット229	豊臣	-146347	-43777	0.17	365	5Aピット230	豊臣	-146346	-43776	0.38	366	5Aピット231	豊臣	-146345	-43775	0.20	367	5Aピット232	豊臣	-146347	-43775	0.32	368	5Aピット233	豊臣	-146352	-43778	0.16	369	5Aピット234	豊臣	-146352	-43776	0.06	370	5Aピット236	豊臣	-146353	-43783	0.03	371	5Aピット237	豊臣	-146342	-43781	0.09	372	5Aピット238	豊臣	-146347	-43780	0.09	373	5Aピット260	豊臣	-146345	-43778	0.10	374	5Aピット261	豊臣	-146344	-43778	0.23	375	5Aピット262	豊臣	-146343	-43778	0.07	376	5Aピット264	豊臣	-146342	-43779	0.09	377	5Aピット265	豊臣	-146347	-43788	0.06	378	5Aピット266	豊臣	-146345	-43787	0.24	379	5Aピット267	豊臣	-146347	-43789	0.19	380	5Aピット268	豊臣	-146389	-43905	0.48	381	5Aピット269	豊臣	-146384	-43818	0.48	382	5Aピット270	豊臣	-146387	-43817	0.10	383	5Aピット271	豊臣	-146338	-43785	0.23	384	5Aピット272	豊臣	-146347	-43776	0.27	385	5Aピット273	豊臣	-146352	-43779	0.17	386	5Aピット274	豊臣	-146385	-43814	0.26	387	5Aピット275	豊臣	-146386	-43815	0.09	388	5Aピット276	豊臣	-146386	-43816	0.13	389	5Aピット278	豊臣	-146388	-43798	0.09	390	5Aピット279	豊臣	-146392	-43799	0.08	391	5Aピット280	豊臣	-146390	-43798	0.08	392	5Aピット281	豊臣	-146390	-43799	0.08	393	5Aピット283	豊臣	-146339	-43786	0.05	394	5Aピット287	豊臣	-146338	-43788	0.01	395	5Aピット288	豊臣	-146339	-43782	0.21	396	5Aピット289	豊臣	-146340	-43781	0.03	397	5Aピット291	豊臣	-146339	-43781	0.30	398	5Aピット293	豊臣	-146340	-43780	0.28	399	5Aピット294	豊臣	-146338	-43782	0.13	400	5Aピット296	豊臣	-146341	-43777	0.14	401	5Aピット297	豊臣	-146341	-43777	0.19	402	5Aピット323	豊臣	-146338	-43780	0.23	403	5Aピット324	豊臣	-146336	-43779	0.60	404	5Aピット325	豊臣	-146338	-43781	0.37	405	5Aピット326	豊臣	-146334	-43777	0.42	406	5Aピット327	豊臣	-146337	-43773	0.46	407	5Aピット328	豊臣	-146336	-43786	0.24	408	5Aピット329	豊臣	-146337	-43776	0.17	409	5Aピット330	豊臣	-146337	-43774	0.53	410	5Aピット331	豊臣	-146335	-43777	0.28	411	5Aピット群	豊臣	-146388	-43820	0.19	412	5A井戸1(土坑323)	豊臣	-146341	-43774	0.64	413	5A井戸2	豊臣	-146389	-43903	0.37	414	5A井戸3(土坑299)	豊臣	-146353	-43786	0.06	415	5A井戸4(土坑300)	豊臣	-146345	-43781	0.15	416	5A井戸5	豊臣	-146348	-43763	0.06	417	5A瓦組専水管理2	豊臣	-146339	-43778	0.28	418	5A瓦敷3	豊臣	-146385	-43817	0.17	419	5A瓦敷まり03(瓦溜まり04)	豊臣	-146346	-43809	0.20	420	5A瓦敷まり05	豊臣	-146341	-43799	0.23	421	5A瓦敷まり07	豊臣	-146351	-43777	0.02	422	5A瓦敷まり08	豊臣	-146343	-43781	0.11	423	5A瓦敷まり09	豊臣	-146343	-43777	0.02	424	5A瓦敷まり10	豊臣	-146343	-43780	0.15

表8 遺構掲載番号表(5A調査区)2

425	5A瓦溜まり11	豊臣	-146354	-43774	493	5A土坑097	豊臣	-146342	-43764	0.21	
426	5A瓦溜まり12	豊臣	-146337	-43776	494	5A土坑098	豊臣	-146344	-43761	0.12	
427	5A瓦溜まり13	豊臣	-146339	-43780	495	5A土坑099	豊臣	-146345	-43762	0.08	
428	5A瓦溜まり14	豊臣	-146339	-43782	496	5A土坑100	豊臣	-146345	-43763		
429	5A瓦溜まり15	豊臣	-146339	-43786	497	5A土坑101	豊臣	-146346	-43765	0.18	
430	5A瓦溜まり16	豊臣	-146339	-43787	498	5A土坑102	豊臣	-146345	-43765	0.14	
431	5A瓦溜まり17	豊臣	-146340	-43788	499	5A土坑103	豊臣	-146348	-43765	0.50	
432	5A瓦溜まり18	豊臣	-146339	-43778	500	5A土坑104	豊臣	-146352	-43767	0.29	
433	5A瓦溜まり19	豊臣	-146340	-43778	501	5A土坑105	豊臣	-146347	-43765	0.13	
434	5A瓦溜まり20	豊臣	-146393	-43820	502	5A土坑106	豊臣	-146342	-43761	0.38	
435	5A瓦列1	豊臣	-146352	-43777	503	5A土坑107	豊臣	-146351	-43762	0.38	
436	5A瓦列2	豊臣	-146342	-43781	504	5A土坑109	豊臣	-146347	-43773	0.30	
437	5A建物10	豊臣	-146343	-43783	505	5A土坑110	豊臣	-146350	-43762	1.04	
438	5A建物11	豊臣	-146343	-43765	506	5A土坑111	豊臣	-146351	-43766	0.27	
439	5A建物12	豊臣	-146350	-43774	507	5A土坑112	豊臣	-146354	-43766	0.03	
440	5A溝021	豊臣	-146390	-43763	1.44	508	5A土坑113	豊臣	-146342	-43771	0.35
441	5A溝022	豊臣	-146388	-43762	0.37	509	5A土坑114	豊臣	-146340	-43771	0.18
442	5A溝023 a	豊臣	-146387	-43763	0.16	510	5A土坑115	豊臣	-146351	-43773	0.31
443	5A溝023 b	豊臣	-146391	-43762	0.34	511	5A土坑116	豊臣	-146350	-43768	0.14
444	5A溝027	豊臣	-146395	-43776	0.12	512	5A土坑117	豊臣	-146344	-43768	0.34
445	5A溝028	豊臣	-146394	-43767	0.02	513	5A土坑118	豊臣	-146343	-43766	0.44
446	5A溝034	豊臣	-146395	-43767	0.11	514	5A土坑119	豊臣	-146341	-43769	0.43
447	5A溝036	豊臣	-146394	-43765	0.17	515	5A土坑120	豊臣	-146344	-43772	0.22
448	5A溝039	豊臣	-146395	-43775	0.12	516	5A土坑121	豊臣	-146350	-43766	0.09
449	5A溝040	豊臣	-146392	-43774	0.12	517	5A土坑122	豊臣	-146340	-43765	0.11
450	5A溝043	豊臣	-146396	-43763	0.03	518	5A土坑123	豊臣	-146345	-43767	0.24
451	5A溝044	豊臣	-146341	-43763	0.12	519	5A土坑124	豊臣	-146343	-43765	1.11
452	5A溝045	豊臣	-146346	-43761	0.14	520	5A土坑125	豊臣	-146340	-43765	0.22
453	5A溝046	豊臣	-146348	-43762	0.07	521	5A土坑126	豊臣	-146344	-43766	0.04
454	5A溝047	豊臣	-146388	-43765	0.08	522	5A土坑127	豊臣	-146344	-43767	0.44
455	5A溝048	豊臣	-146355	-43761	0.32	523	5A土坑128	豊臣	-146346	-43768	0.33
456	5A溝051	豊臣	-146355	-43763		524	5A土坑129	豊臣	-146341	-43768	0.21
457	5A溝072	豊臣	-146394	-43781	0.11	525	5A土坑130	豊臣	-146342	-43768	0.20
458	5A溝073	豊臣	-146391	-43780	0.21	526	5A土坑131	豊臣	-146340	-43769	0.24
459	5A溝076	豊臣	-146340	-43797	0.11	527	5A土坑132	豊臣	-146353	-43771	0.30
460	5A溝077	豊臣	-146340	-43801	0.16	528	5A土坑134	豊臣	-146341	-43768	0.27
461	5A溝082 (溝83)	豊臣	-146344	-43785	0.61	529	5A土坑135	豊臣	-146340	-43767	0.24
462	5A溝098	豊臣	-146343	-43776	0.12	530	5A土坑137	豊臣	-146394	-43769	
463	5A溝099	豊臣	-146344	-43786	0.04	531	5A土坑139 (假土坑138)	豊臣	-146342	-43759	0.30
464	5A溝101	豊臣	-146389	-43806	1.14	532	5A土坑140	豊臣	-146346	-43759	0.20
465	5A溝102	豊臣	-146392	-43800	0.06	533	5A土坑152	豊臣	-146354	-43765	0.01
466	5A溝103	豊臣	-146391	-43803	0.31	534	5A土坑153	豊臣	-146355	-43753	0.30
467	5A溝104	豊臣	-146391	-43800	0.03	535	5A土坑154	豊臣	-146355	-43771	0.76
468	5A溝105	豊臣	-146392	-43802	0.38	536	5A土坑155	豊臣	-146355	-43766	0.05
469	5A溝106	豊臣	-146337	-43776	0.27	537	5A土坑158	豊臣	-146354	-43770	0.40
470	5A溝109	豊臣	-146388	-43816		538	5A土坑159	豊臣	-146354	-43774	0.04
471	5A溝110 (瓦継導水管・石列溝)	豊臣	-146393	-43816	0.08	539	5A土坑160	豊臣	-146353	-43767	
472	5A溝115	豊臣	-146329	-43782	0.25	540	5A土坑180	豊臣	-146335	-43794	0.13
473	5A溝116	豊臣	-146335	-43782	0.15	541	5A土坑240	豊臣	-146339	-43797	0.29
474	5A溝列1	豊臣	-146335	-43779		542	5A土坑244	豊臣	-146341	-43794	0.51
475	5A溝列2	豊臣	-146352	-43776		543	5A土坑246	豊臣	-146351	-43811	0.08
476	5A溝列3	豊臣	-146347	-43761		544	5A土坑249	豊臣	-146347	-43795	0.15
477	5A石列3	豊臣	-146345	-43782		545	5A土坑250	豊臣	-146345	-43801	0.35
478	5A礎石1	豊臣	-146389	-43818		546	5A土坑251	豊臣	-146350	-43812	0.18
479	5A礎石2	豊臣	-146388	-43824		547	5A土坑257	豊臣	-146391	-43781	0.09
480	5A礎石群 b	豊臣	-146389	-43822		548	5A土坑269	豊臣	-146352	-43784	1.37
481	5A土坑027	豊臣	-146387	-43773		549	5A土坑270	豊臣	-146346	-43780	0.17
482	5A土坑074	豊臣	-146396	-43777	0.12	550	5A土坑271	豊臣	-146346	-43780	0.25
483	5A土坑082	豊臣	-146395	-43767	0.09	551	5A土坑272	豊臣	-146348	-43788	0.10
484	5A土坑084	豊臣	-146387	-43761	0.27	552	5A土坑273	豊臣	-146347	-43778	0.04
485	5A土坑085	豊臣	-146396	-43776	0.05	553	5A土坑275	豊臣	-146349	-43784	0.15
486	5A土坑086	豊臣	-146393	-43766	0.24	554	5A土坑276	豊臣	-146350	-43787	0.21
487	5A土坑088	豊臣	-146396	-43761	0.07	555	5A土坑277	豊臣	-146353	-43782	0.42
488	5A土坑090	豊臣	-146394	-43761	0.02	556	5A土坑278	豊臣	-146353	-43778	0.10
489	5A土坑091	豊臣	-146392	-43797	0.21	557	5A土坑279	豊臣	-146345	-43782	0.11
490	5A土坑094	豊臣	-146393	-43772	0.04	558	5A土坑281	豊臣	-146342	-43778	0.06
491	5A土坑095	豊臣	-146393	-43770	0.04	559	5A土坑283	豊臣	-146345	-43779	0.08
492	5A土坑096	豊臣	-146341	-43761	0.55	560	5A土坑284	豊臣	-146343	-43779	0.22

表8 遺構掲載番号表(5A調査区)3

561	5A土坑285	豊臣	-146343	-43778	0.20	629	5A土坑415	豊臣	-146331	-43778	0.35
562	5A土坑286	豊臣	-146349	-43785	0.22	630	5A土坑416	豊臣	-146329	-43778	0.17
563	5A土坑288	豊臣	-146345	-43788	0.14	631	5A土坑417	豊臣	-146336	-43782	0.45
564	5A土坑289	豊臣	-146349	-43774	0.08	632	5A土坑418	豊臣	-146336	-43780	0.07
565	5A土坑292	豊臣	-146345	-43777	0.14	633	5A土坑419	豊臣	-146336	-43781	0.15
566	5A土坑293	豊臣	-146354	-43785	0.17	634	5A土坑421	豊臣	-146343	-43773	0.24
567	5A土坑296	豊臣	-146344	-43778	0.07	635	5A土坑422	豊臣	-146328	-43780	0.06
568	5A土坑299(井戸3)	豊臣	-146352	-43782		636	5A土坑423	豊臣	-146329	-43772	0.13
569	5A土坑300	豊臣	-146350	-43780	0.04	637	5A土坑425	豊臣	-146330	-43781	0.19
570	5A土坑301	豊臣	-146344	-43777	0.07	638	5A土坑426	豊臣	-146348	-43765	0.36
571	5A土坑302	豊臣	-146336	-43785	0.22	639	5A土師皿群1	豊臣	-146348	-43785	
572	5A土坑304	豊臣	-146352	-43778	0.34	640	5A土師皿群2	豊臣	-146343	-43780	
573	5A土坑305	豊臣	-146346	-43775	0.20	641	5A土師皿群3	豊臣	-146343	-43782	
574	5A土坑306	豊臣	-146343	-43781	0.77	642	5A土師皿群4	豊臣	-146346	-43780	
575	5A土坑307	豊臣	-146350	-43782	0.24	643	5A土師皿群5	豊臣	-146343	-43784	
576	5A土坑308	豊臣	-146350	-43775		644	5AⅡ01	豊臣	-146355	-43784	
577	5A土坑310	豊臣	-146347	-43775	0.04	645	5AⅡ02	豊臣	-146354	-43784	
578	5A土坑312	豊臣	-146345	-43777	0.11	646	5AⅡ10	豊臣	-146352	-43814	
579	5A土坑313	豊臣	-146345	-43777	0.16						
580	5A土坑314	豊臣	-146351	-43784	0.12						
581	5A土坑315	豊臣	-146351	-43776							
582	5A土坑316	豊臣	-146346	-43772	0.56						
583	5A土坑317	豊臣	-146346	-43783	0.14						
584	5A土坑318	豊臣	-146345	-43776	0.11						
585	5A土坑319	豊臣	-146348	-43778	0.55						
586	5A土坑320	豊臣	-146349	-43778	0.53						
587	5A土坑321	豊臣	-146336	-43774	0.73						
588	5A土坑324	豊臣	-146337	-43781	0.07						
589	5A土坑352	豊臣	-146347	-43777	0.30						
590	5A土坑353	豊臣	-146344	-43780	0.07						
591	5A土坑354	豊臣	-146341	-43789	0.53						
592	5A土坑355	豊臣	-146340	-43786	0.17						
593	5A土坑356	豊臣	-146339	-43785	0.11						
594	5A土坑357(ピット185)	豊臣	-146346	-43789							
595	5A土坑358	豊臣	-146338	-43777	0.12						
596	5A土坑360	豊臣	-146349	-43785	0.15						
597	5A土坑361	豊臣	-146349	-43784							
598	5A土坑366	豊臣	-146394	-43802	0.18						
599	5A土坑368	豊臣	-146392	-43804	0.33						
600	5A土坑370	豊臣	-146389	-43800	0.12						
601	5A土坑372	豊臣	-146389	-43808	0.27						
602	5A土坑374	豊臣	-146388	-43815	0.46						
603	5A土坑375	豊臣	-146392	-43806	0.06						
604	5A土坑376	豊臣	-146393	-43806	0.02						
605	5A土坑378	豊臣	-146339	-43776	0.18						
606	5A土坑379	豊臣	-146391	-43814	0.65						
607	5A土坑381	豊臣	-146388	-43804	0.35						
608	5A土坑382	豊臣	-146342	-43783	0.11						
609	5A土坑383	豊臣	-146339	-43782	0.50						
610	5A土坑384	豊臣	-146341	-43776	0.37						
611	5A土坑385	豊臣	-146338	-43776	0.55						
612	5A土坑386	豊臣	-146339	-43775	0.08						
613	5A土坑387	豊臣	-146340	-43776	0.44						
614	5A土坑388	豊臣	-146338	-43780	0.38						
615	5A土坑389	豊臣	-146337	-43777	0.58						
616	5A土坑390	豊臣	-146339	-43778	0.01						
617	5A土坑391	豊臣	-146338	-43774	0.22						
618	5A土坑392	豊臣	-146338	-43781	0.37						
619	5A土坑393	豊臣	-146339	-43779	0.35						
620	5A土坑404	豊臣	-146332	-43781	0.43						
621	5A土坑406	豊臣	-146335	-43788	0.27						
622	5A土坑408	豊臣	-146334	-43773	0.45						
623	5A土坑409	豊臣	-146333	-43773	0.32						
624	5A土坑410	豊臣	-146333	-43776	0.35						
625	5A土坑411	豊臣	-146331	-43776	0.32						
626	5A土坑412	豊臣	-146328	-43775	0.31						
627	5A土坑413	豊臣	-146334	-43779	0.39						
628	5A土坑414	豊臣	-146330	-43780	0.47						

A-2、5A調査区の遺構（三の丸築造以前も含む）

この時期の遺構面は最大で3面確認された。しかしいずれの面も断続的であり、また1A～3A調査区で確認されたような著しい盛土もみられないため、どの面が三の丸築造以前で、どの面が以降に比定されるかの、明確な判断はできなかった。そこでここでは、一部については検出層順の解説も加えるが、基本的にはこの時期一括の遺構群として説明をおこない、その詳細については後日の検討を待つことにしたい。

溝21 (440) 調査区の南半東端に位置する。軸を南北とし、幅約1.8m、長さ12.5m、深さ1.3mを測る。断面形はほぼ逆台形を呈し、西側は2段に掘り込まれている。多くの瓦が出土した。

溝45 (452) 調査区の北半東端に位置する。南延長上に溝21が位置する。南北を軸とし、規模は幅1.3m、長さ15m、深さ0.7～0.8mを測る断面逆台形の溝である。溝内には多量の焼けた瓦、焼土が廃棄されており、この瓦の中から特殊な飾り瓦が出土した。

また溝45の東肩の北側部分には石列が付属する。この石列は人頭大の角礫を使

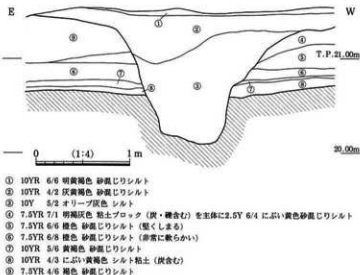


図161 5A調査区 溝21断面図

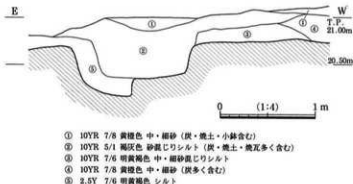


図162 5A調査区 溝45断面図

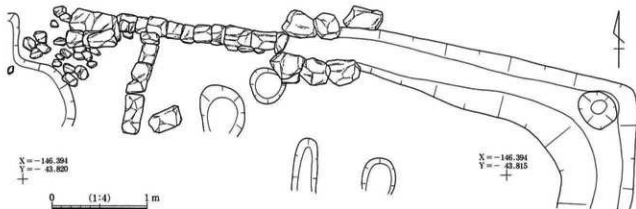


図163 5A調査区 溝110平面図

用し構築されており、2カ所に東へのびる排水溝の石組が取り付けく。堆積の層順では豊臣期でも新しい段階に比定される。

溝110 (471) 調査区の南半西端に位置する。東西方向からやや北に軸を振った溝で、その西部に石

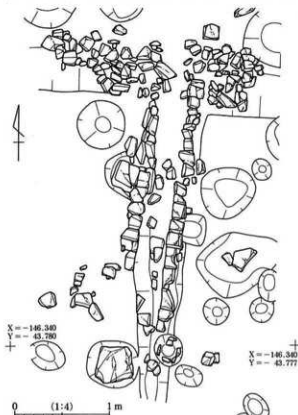


図164 5 A調査区 瓦組導水管2平面図

組の側壁と、さらにその先端に丸瓦で組んだ導水管を伴う。また東端は南へ折れる。規模は全長が6mで、石組部分が1m、瓦組部分が2mである。

瓦組導水管2 (417)・溝106 (469) 調査区の北半東に位置する。南北方向を軸とし、側壁を平瓦で土留めしている。残存する規模は、長さが約3m、幅は0.3mであり、北端で、東西軸の溝106 (469)につながる。溝106は長さ5m、幅0.8m、深さ0.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は砂で、土師器皿を多く含んでいる。堆積の層順では豊臣期でも古い段階に比定される。

土坑94・95 (490・491) 調査区南半の東に位置する。炭、焼土が多量に検出され、とくに炭集中部から羽口、鉄滓、釘などの鉄器生産関連遺物が出土した。鍛冶関連遺構の可能性が考えられる。規模は東西5m、南北3.7mである。また、土坑の東肩部分には焼けた礫が1個置かれており、出土遺物や土坑との関係から考えて金床石かと思われる。

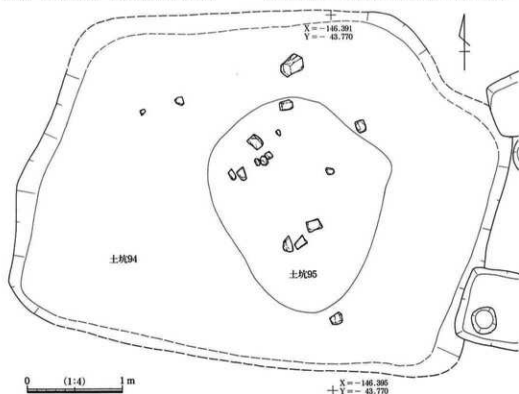
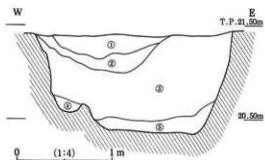


図165 5 A調査区 土坑94・95平面図



- ① 7.5YR 6/8 褐色 細砂混じりシルト
- ② 10YR 5/1 褐色灰 シルト (灰・焼土瓦を含む)
- ③ 5YR 5/2 灰褐色 シルト混じり細砂 (灰・焼土を含む)
- ④ 5YR 5/6 明赤褐色 細砂混じりシルト (灰・焼土瓦を含む)
- ⑤ 10YR 6/4 に近い黄褐色 シルト混じり細砂 (灰・焼土瓦を含む)

図166 5 A調査区 土坑154断面図

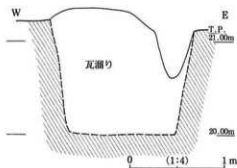
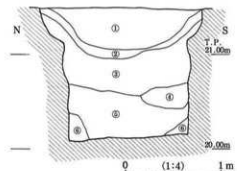
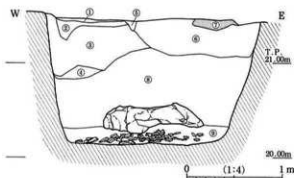
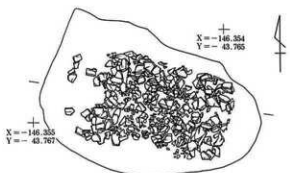


図168 5 A調査区 土坑159断面図



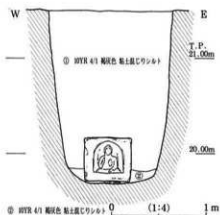
- ① 2.5Y 5/3 黄褐色 細砂混じりシルト (灰・焼土を含む)
- ② 10YR 6/6 明黄褐色 細砂混じりシルト (灰・焼土を含む)
- ③ 2.5Y 6/2 灰褐色 細砂混じりシルト (灰・瓦・土器・2cm大の礫を含む)
- ④ 10YR 6/4 に近い黄褐色 シルト (焼土塊を含む)
- ⑤ N 5/0 灰色 細砂混じりシルト (2cm大の礫・瓦を含む)
- ⑥ 10YR 5/3 に近い黄褐色 シルト混じり細砂

図169 5 A調査区 土坑269断面図



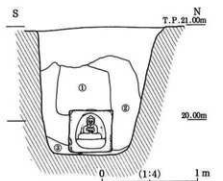
- ① 10YR 5/1 褐色 砂質土 (堅くしまっている)
- ② 7.5YR 6/6 褐色 細砂混じりシルト
- ③ 瓦が充填
- ④ 7.5YR 5/1 褐色 シルト
- ⑤ 10R 5/6 赤色 細砂
- ⑥ 2.5YR 5/4 に近い赤褐色 細砂混じりシルト (瓦と焼土を多く含む)
- ⑦ N 2/0 灰色 灰層
- ⑧ 瓦が充填
- ⑨ 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト

図167 5 A調査区 土坑155平面・断面図



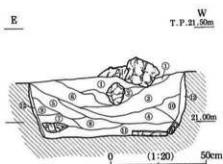
- ① 10YR 4/1 褐色 粘土混じりシルト

図170 5 A調査区 土坑299断面図



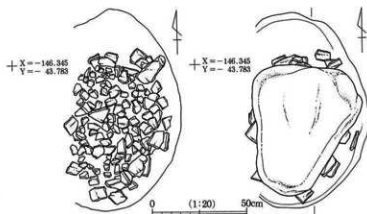
- ① 2.5YR 5/4 粗砂混じり細砂 (粘性あり、灰・瓦・焼土を含む)
- ② 瓦が充満
- ③ 10YR 5/3 中砂混じりシルト (粘性強い、炭混じる)

図171 5 A調査区 土坑316断面図

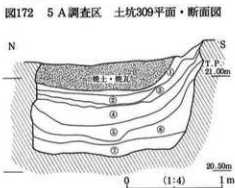


- ① 2.5Y 4/1 黄灰色 粘質シルト (焼土塊 (φ2~3cm) 灰を多く含む)
- ② 2.5Y 6/1 黄灰色 中粒砂混粘質シルト (僅かに灰を含む)
- ③ 5Y 7/4 浅黄色 中粒砂 (堅くしめる)
- ④ 7.5Y 4/2 灰オリーブ色 砂混粘土
- ⑤ 5Y 7/3 浅黄色 中粒砂 (堅くしめる)
- ⑥ 5Y 5/2 灰オリーブ色 細砂とシルトの互層
- ⑦ 2.5Y 5/4 黄褐色 砂混シルト粘土
- ⑧ 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂混粘土 (灰含む)
- ⑨ 5Y 6/3 オリーブ黄色 中・粗砂混シルト
- ⑩ 5Y 6/3 オリーブ黄色 中・粗砂混シルト
- ⑪ 5Y 4/2 灰オリーブ色 粘土 (瓦、骨を含む、水分多く軟らかい)
- ⑫ 2.5Y 3/1 黒褐色 粘質シルト

図173 5 A調査区 土坑393断面図

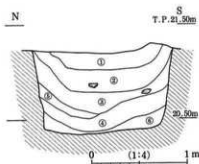


- ① 瓦・焼土・灰が充満
- ② 10YR 6/6 明黄褐色 粗砂混じりシルト (粘性あり)
- ③ 2.5Y 5/3 黄褐色 シルト混じり粗・中砂 (瓦を多く含む)



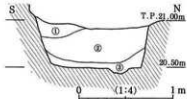
- ① 10YR 6/6 明黄褐色 シルト
- ② 10YR 2/1 黒色 炭混じりシルト
- ③ 10YR 6/8 明黄褐色 粘土
- ④ 10YR 4/6 褐色 シルト混じりあった焼土
- ⑤ 10YR 5/1 褐灰色 炭層 (南側に10YR 5/1 褐灰色粗砂をはさま)
- ⑥ 10YR 5/1 褐灰色 粗砂 (炭層と互層)
- ⑦ 10YR 4/1 褐色 炭混じり粘土

図174 5 A調査区 土坑324断面図



- ① 10YR 6/4 に近い黄褐色 堅くしまった細砂混じりシルト
- ② 10YR 7/8 黄褐色 砂混じりシルト (灰・瓦を含む)
- ③ 2.5Y 4/1 黄褐色 砂混じりシルト (多量の灰・焼土・土塊混・瓦・貝を含む)
- ④ 2.5Y 5/1 黄褐色 粘質シルト (微細な炭粉・焼土・灰を含む)
- ⑤ 2.5Y 6/1 黄灰色～7/1 灰白色 細砂と中粒砂 (灰を含む)
- ⑥ 5Y 7/1 灰白色～7/2 灰白色 細砂・中粒砂・シルトの互層状 (灰・瓦・土塊混を含む一部に炭状のものがみられる)

図175 5 A調査区 土坑404断面図



- ① 10YR 5/6 黄褐色 細砂混じりシルト (粘性あり)
- ② 10YR 4/1 褐色色 中砂混じり細砂 (中や粘質あり)
- ③ 7.5YR 5/6 明褐色 シルト

図176 5 A調査区 土坑423断面図

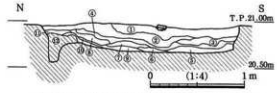


土坑426

+ X = -146.350
Y = -43.765

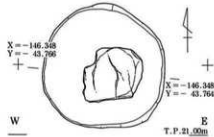


土坑155



- ① 8.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト (灰・黄土塊・炭を含む)
- ② 10YR 6/8 明黄褐色 砂混じりシルト (灰・黄土塊を含む)
- ③ 10YR 6/3 にぶい黄褐色 シルト (炭を含む)
- ④ 10YR 3/3 黒褐色 灰・炭を含む
- ⑤ 10YR 5/2 灰褐色 シルト (炭を含む)
- ⑥ 10YR 7/8 黄褐色 粘質シルト
- ⑦ 7.5YR 3/1 黒褐色 砂混じりシルト (細かい炭を多く含む)
- ⑧ 10YR 6/8 明黄褐色 砂混じりシルト (中や粘質あり)
- ⑨ 10YR 6/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト (細かい炭を含む)
- ⑩ 10YR 7/6 明黄褐色 砂混じり粘質シルト
- ⑪ 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粘質シルト
- ⑫ 10YR 6/8 明黄褐色 粘質土 (11層)

図177 5 A調査区 土坑415断面図



X = -146.348
Y = -43.766

X = -146.348
Y = -43.764

T.P. 21.00m



土坑316



土坑159

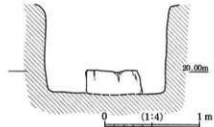


図178 5 A調査区 土坑426平面・断面図



土坑309

+ X = -146.350
Y = -43.760



土坑299

図179 5 A調査区 建物12平面図

土坑154 (535)は調査区の北半東より南端に位置する。南北幅2m、東西幅2mの不定形土坑で深さは1.1mを測る。埋土には灰、焼土、炭を含み、瓦、豊臣期の陶磁器などが出土している。

土坑155 (536) 調査区の北半南東に位置する。平面形は長軸2.3m、短軸1.4mの長楕円形を呈し、深さは1.4mを測る。検出面から1.2mの深さまでは瓦と焼土が充満しており、その下から縦0.9m、横0.7m、厚さ0.3mの平石が検出された。また石の下には安定を保つため平瓦が敷かれた状態で見つかっている。石の上部に堆積していた瓦の中から「桐」紋の家紋瓦や飾り瓦、一石五輪塔などが出土している。

土坑159 (538) 調査区の北半中央東に位置する。平面形は直径1.5m、深さ1.5mの大型の土坑である。瓦が充満しており、土坑155と類似した状況である。飾り瓦が出土している。底面に花崗岩の切り石を据えている。石の大きさは幅54cm、奥行54cm、高さ42cmを測り、ほぼ立方体を呈する。石の四側面には東西南北を意味する梵字「𑖀」・「𑖁」・「𑖂」・「𑖃」が刻まれている。

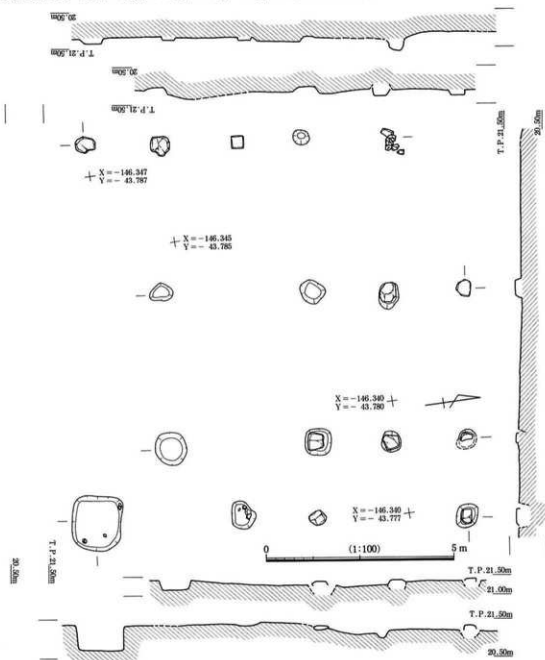


図180 5A調査区 建物10平面・断面図

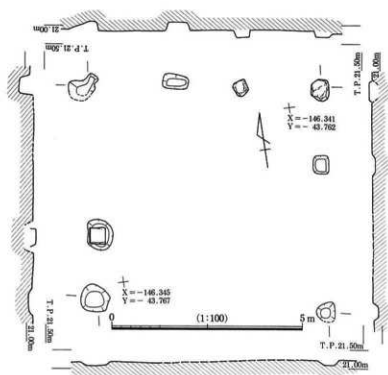


図181 5A調査区 建物11平面・断面図

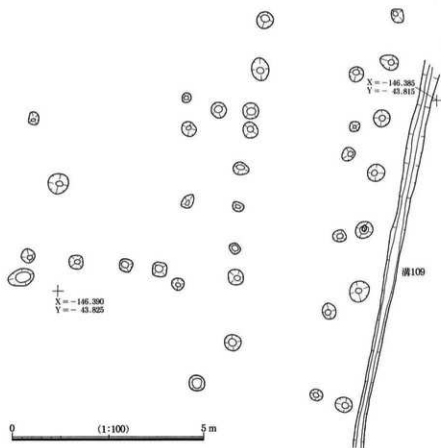


図182 5A調査区 ピット群・溝109平面図

土坑269 (548) 調査区の北半中央南部分に位置する。平面方形を呈し、2段に掘り込まれている。規模は東西2.3m、南北1.6m、深さ1.4mである。埋土には焼土・炭・礫・瓦などを多量に含んでいた。

土坑299 (568) 調査区の北半中央東に位置する。規模は直径1.3m、深さ1.8mを測る。底面には花崗岩の切り石を据えている。石の大きさは幅48cm、奥行48cm、高さ46cmの立方体を呈する。石の上面中央には直径6cm、深さ7cmの軸受けの小穴が穿たれている。また、四側面には仏が1体ずつ刻まれている土坑316

(582) 調査区の北半東に位置する。規模は直径1.5m、深さ1.3mを測る。底面には花崗岩の切り石を据えている。

石の大きさは幅、奥行、高さとも45cmを測り、立方体を呈する。石の上面中央には直径7cm、高さ3cmの突起が作りだされている。四側面には仏が1体ずつ刻まれている。

土坑309 (415) 調査区の北半中央に位置する。規模が直径1.3m、深さ1.5mの土坑である。底面に平石が据えられている。石の下には安定を保つために瓦や粗砂を入れている。石の大きさは最大幅58cm、奥行68cm、厚さ12cmを測る。

土坑393 (619) 調査

区の北半北東に位置する。平面方形を呈する。規模は東西0.8m、南北1m、深さ35cmを測る。壁際には厚さ3～5cmの板材の痕跡が残る。底面から8cmの厚さで水分を多く含んだ粘質シルトがみられ、これに瓦、骨を含む。

土坑324 (588)・土坑404 (620)・土坑415 (629)・土坑423 (636) 調査区北半の北中央に位置する。土坑324は東西2.5m、南北1.8mを、土坑404は1辺1mほどを、土坑415は1辺2mほどを測る、土坑423は南北1.3mで東西は東が削平されているため0.5m以上を測る方形の土坑である。また土坑415は上部が削平され、とくに浅いものとなっている。

この地区では近接してこれら同様な形状と規模の遺構（ほかに土坑302・413）が集中して形成されており、これらはいずれも埋土に炭、灰、焼土を多量に含み、土師器皿を包含することを特徴としている。土坑426 (638) 調査区北半の北東に位置する。規模は直径1.3m、深さ1.3mを測る。内部には検出面から約1.1mの深さまで瓦・炭・焼土が充填されており、土坑底面中央に長辺60cm、短辺50cm、厚さ20～30cmの花崗岩が置かれ、また石の下には安定を保つため平瓦が敷かれている。

建物12 (439) 調査区の北半東部に位置する。実際に建物になるかどうかは不明である。土坑155・土坑159 (瓦溜まり11)・土坑299・土坑426・土坑316・土坑309から構成され、個々の土坑の説明はさきに述べたとおりである。土坑間の距離は、南北が西から7.4、7.5、6.9m、東西は南面が西から8、9m、北面が西から8、8.5mである。いずれも土坑の底に平石または石塔の一部を据え（その下部には瓦片を詰めている）、埋土上層は全て焼けた瓦である。その状況からは、焼け瓦が入る前は空間であり、少なくとも土砂などで埋まっていた可能性の少ないことがうかがわれる。また焼け瓦の埋没状況には、顕著な、とくに縦方向への層離面は無く、そのため、焼け瓦の一部が柱掘り方の埋め戻し土であり、柱の抜き取り痕にその一部と、あらたな焼け瓦が埋没したとも考えにくいものとなっている。

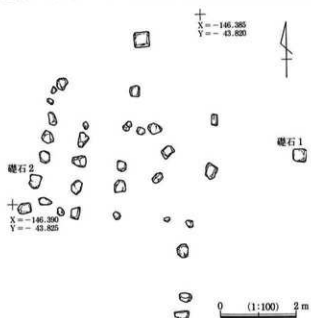


図183 5A調査区 礎石群平面図



図184 5A調査区 土師器皿群平面図

いものとなっている。

建物10 (437) 調査区の北半東部に位置する。東西、南北共に10mまで復原できる礎石建物である。ただし、南北軸が柱間約2mの5間であるのに対し、東西軸は柱間が、西から4・4・2mの3間となっている。東に縁をもつ建物の一部かもしれない。

建物11 (438) 調査区の北

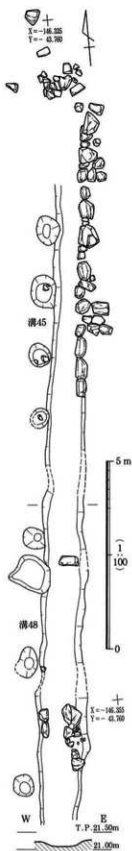


图185 5 A調査区 溝45・
溝48・礎石平面・断面図

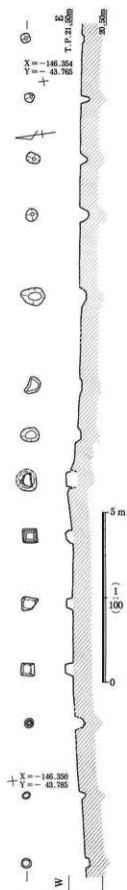


图186 5 A調査区
溝46平面・断面図

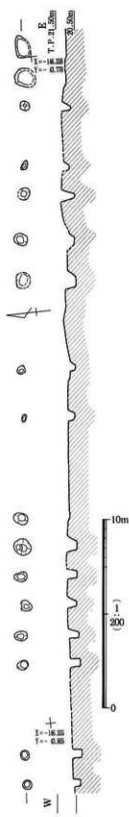


图187 5 A調査区
溝47平面・断面図

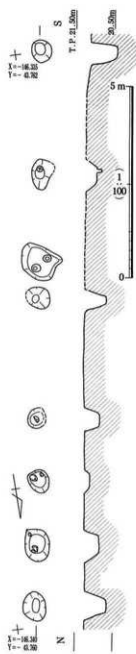


图188 5 A調査区
溝48平面・断面図

半東部に位置する。東西、南北共に6mまで復元できる3×3間の礎石建物である。柱間の距離は約2mである。

ピット群 (411)・溝109 (470) 調査区の南半で西端に位置する。南北軸からやや東へ角度を振る形で2条から一部3条にならぶピット列と、その東で3間程度の小屋の復元される可能性の高いピット群から構成される。なお溝109はこれらのピット群の東に位置する。豊臣期あるいはそれ以前の時期の可能性がある。

礎石群 (480) 調査区の南半で西端に位置する。いずれも小規模な礎石であるが、南北4間、東西4間程度には復元できる。柱間の距離は、東西1、南北0.7mである。堆積の層順からは豊臣期でも古い段階に比定される可能性がある。

土師器皿群 1～5 (639～643) 調査区の北半東に位置し、基盤層上面での出土である。土師器皿は大半のものが正置で出土しており、重なった状態も認められることから一定範囲内に複数枚重ねて廃棄したものと考えられる。土師器皿には丹塗、漆塗のものがあり、口縁部に油煙が付着するものもみられる。また、土師器皿群の分布域には炭化物がかなり集中して検出されているが皿には二次焼成を受けた痕跡は認められない。

溝48 (455) 調査区北半の東端に位置し、幅1.2m、深さ0.3mを測る。溝45につながる溝で、その東岸には人頭大の角礫が配されている。瓦、焼土が廃棄されている。

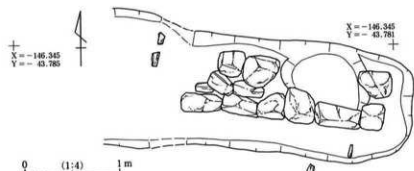


図189 5A調査区 石列3平面図

櫛列 いずれも調査区北半の北部または東部に位置する。石塔を転用した礎石を伴うものと、掘立柱式のもの2種類がみられ、礎石をともなう場合は、柱間が1.6～1.7m、掘立柱式の場合約1.5mを測る。なおそれぞれ建物10の周囲を囲む関係にあっている。

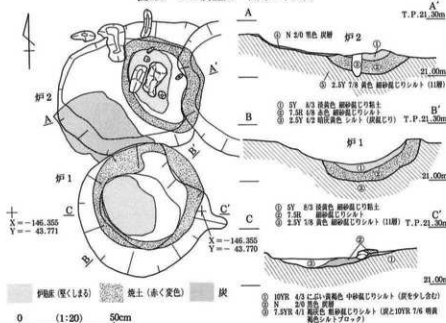


図190 5A調査区 炉1・2平面・断面図

石列3 (477) 調査区の北半東に位置する。規模は長さ30～50cm、幅20cm、厚さ20cmほどで、角礫および石仏や宝塔の転用材を東西方向に6個並べている。また、石列の北側には礎石群がみられ建物の存在が確認できるが、この礎石は中央部やや西寄りにもまとまっ

ており、石列3を南の辺として、この地区に複数の建物があったことが復元できる。なお、検出順において豊臣期でも新しい段階に比定され、建物10は、この石列と重複している可能性がある。

炉1・2 (644・645) 調査区の北半東南に位置する。二つの炉は切り合っており、炉1が新しく、炉2が古い。炉1は直径0.7m、深さ8cmの浅い皿状を呈し、床面は堅く焼締まっている。

炉2は直径0.65m、深さ20cmを測る。床面東側部分が堅く焼締まっている。炉2の床面には直径5cm前後、深さ10cm前後の小穴が数個みられる。両者とも炉内から鉄滓や粒状滓、鍛造剥片が検出されていることから鍛冶炉の可能性が高い。

瓦敷3 (418) 調査区の南半西に位置する。豊臣期の新しい段階の包含層を除去する過程で、東西2.5m、南北5mの範囲で検出された。平瓦を中心として、西にやや傾斜して敷き詰めた状態で残っていた。出土状況からはこの瓦敷きが地表に露出して機能していたような痕跡は見られず、豊臣期のある時期における、造成過程でおこなわれた工法の一つかもしれない。

以下詳細図の無い遺構について説明を加える。

溝36 (447) 調査区の南半東部に位置する。土坑94 (490) などに切られているが溝40 (449) に接続すると思われる、最大幅3.5m、長さ15m、深さ0.2mを測る。

溝39 (448) 調査区の南半南端に位置する。東西方向を軸として、規模は幅1m、長さ7.5m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝36と溝39からは金箔瓦が出土している。

溝83 (461) 調査区北半の東部に位置し、東西を軸として、その西端で南に折れる。規模は幅1.2m、深さ0.6mを測る。検出した長さは東西方向に4m、南北方向に6mである。断面形は逆台形である。溝内部には焼土、瓦が多量に廃棄されていた。

溝98 (462) 調査区北半北東隅に位置する。北西から南東にはしる。幅0.6m、長さ3.3mを測る。東端には一辺20cm前後の角礫が集中している。性格は不明である。

土坑91 (489) 調査区南半の東に位置する。規模は南北約5m、東西3.5m以上の平面方形を呈する浅い土坑である。埋土は黄褐色の砂質土で多くの瓦を含んでいる。溝40につながる可能性がある。

土坑239 (235) 調査区の北半東に位置する。平面方形を呈し、南側は溝74 (119) に切られる。規模は東西0.9m、南北0.3m、深さ0.4mを測る。西壁際に板材の痕跡が残る。埋土は炭を多く含む黄褐色シルトでこれには土師器皿が多量に含まれている。



図191 5A調査区 瓦敷3平面図

B、遺物

三の丸築造以降の遺物は、今回の調査対象範囲の全ての地点から出土している。その種類は多彩で、土器・陶磁器は言うに及ばず、木製品、金属製品、石製品など量的にも豊富である。ただし帰属する実年代を詳細に見れば、1629年に徳川氏が大坂城を再築する以前で大坂夏の陣集結後の時期（いわゆる畑の時代）と、1598年に三の丸が築造されて以降、大坂夏の陣までの期間の大きく2時期に分けられ、さらに後者の期間にも、関ヶ原の戦い、大坂冬の陣など大坂城をとりまく社会情勢に変化を与えた要素は含まれており、それを裏付けるかのように、1A調査区などではこの時期に複数の生活面のあったことが明らかになっている。

しかしながら一般的にみて、豊臣期最後の生活面である大坂夏の陣によって焼亡した面とそれ以外の生活面との識別は困難な場合が多く（その間に明確な層をはさんでいる場合が少ないこと。部分的な場合の多いこと）、結果的には、この時期に複数の生活面があったとしても、最終的に大坂夏の陣で廃棄された遺物によって、この時期の様相が代表されるものとなっている。

なお今回の報告で言えば、1A溝52内の資料は、限りなく三の丸築造時期に近い時期の遺物を含むはずであり、堆積関係によって1A屋敷2に先行する1A屋敷3も同様に古い段階の資料をしめすことになる。ただし連続して拡大している都市遺跡において、いずれの資料についても、その中に三の丸築造以前の時期の資料も含んでいることは自然であり、その点もこの時期の資料の検討を複雑なものにしていく要素となっている。

a、漆器・土器・陶磁器

① 4A井戸2

13～15は肥前系陶器皿である。13の体部は高台脇から緩やかなカーブをもって立ち上がり、口縁部は斜め上方に開く。口縁部は輪花状を呈する。体部外面下半には回転ヘラケズリを施し、体部外面上半～内面には回転ナデ調整を施す。体部内面及び外面下半まで灰白色の釉が施される。14は高台脇から腰部にかけて緩やかに立ち上がり、体部中央で屈曲し口縁部は外へ開く。高台及び体部外面下半の大部分が露胎となる。釉はオリーブ色を呈する。15の釉はオリーブ灰色を呈する。

16は肥前系陶器の向付である。底部際にくびれ部をもち、体部は輪花状に整形されている。底部外面は露胎である。透明釉が施され、部分的に白濁を呈する。口縁端部が黒色で彩られ、外面には草文を配する。

17は備前窯甕である。口縁部外面にはナデによる3段の凹線がみられる。

18は備前窯播鉢である。口縁部の断面は丸みをもった方形を呈する。口縁部内面に段を有し、内面には二条の凹線が巡る。卸目は幅2mmの7本単位である。

19は大和型の土師器釜である。球形の胴部と外折する口縁部から構成され、端部は短く上方へつまみ上げられる。内外面共にナデ調整を施し色調は淡黄橙色を呈する。外面下半には煤が付着する。

② 4A井戸7

21～24は土師器の皿である。

21・22はロクロ成形の皿であり、底部外面に糸切り痕を残す。強い回転ナデにより体部外面は中位

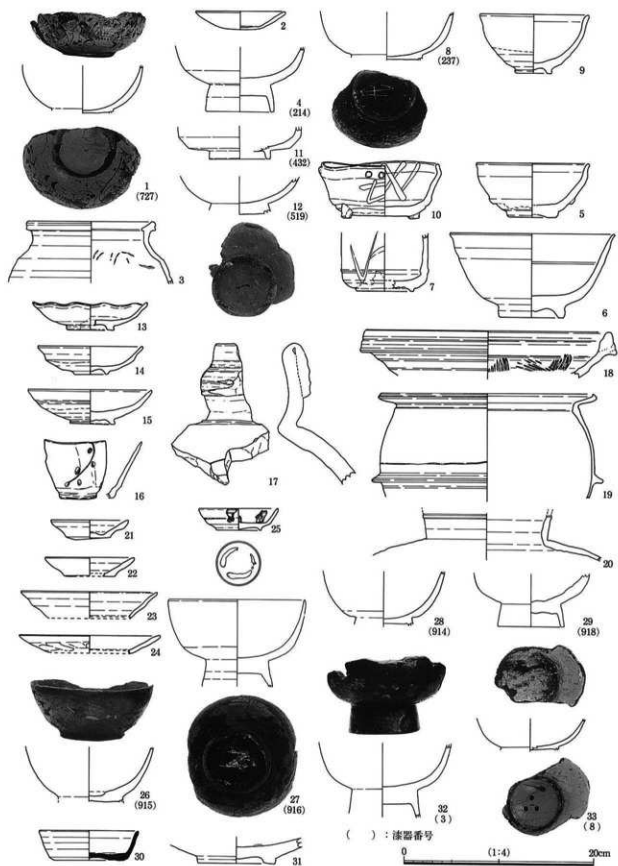


図192 漆器・陶磁器・土器 1

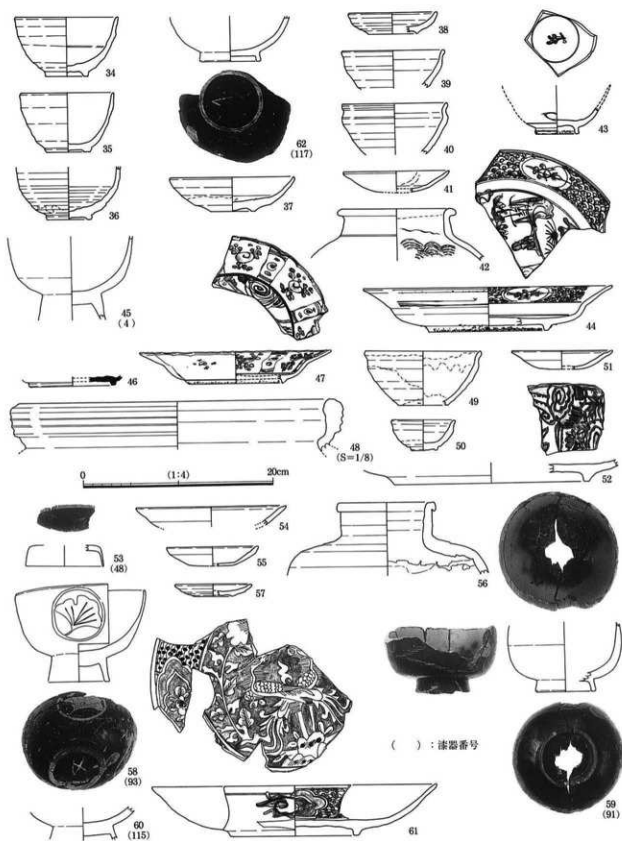


图193 漆器·陶磁器·土器 2

で屈曲し、端部は尖り気味に仕上げられる。21は口縁部に油煙が付着している。23・24は手捏ね成形の京都型皿である。体部は直線的に外上方へ開き口縁端部につまみ上げの痕跡をわずかに残す。内面と体部上半が横ナデ、下半は指押えが施されている。

25は鉄釉の瀬戸・美濃窯皿である。底裏には輪トチンの痕が残る。

③ 1 A 溝52

61は中国製染付磁器皿である。内底面に鳳凰文を配し、体部には花文を飾る。胎土は粗く部分的に褐色を呈する。釉は厚くコバルトの発色も暗い。

63～68・70～73は瀬戸・美濃窯製品である。63～65は灰釉丸皿である。全面施釉で64は淡い緑色を呈するガラス質の釉が内底面に厚く溜まる。また底部外面には輪トチンがみえる。66～68は小天目碗である。66は外面の体部下半が鉄化粧である。70～73は天目碗である。70と71の体部下半には鉄化粧が施され、とくに71のそれは厚い。71は大窯2期に遡る可能性がある。70は鉄釉、71は鉄と鉛の交錯した状況、73は鉛釉である。

69は土師器釜形土器である。胎土は精良で砂粒はほとんど見られない。淡い明褐色の焼き上がりで、外面の上半にうすく炭素の吸着が認められる。底部外面はヘラ削りであり、使用痕跡は不明である。

74～80は土師器皿である。口縁端部のつまみあげを顕著に残すものと、その省略が進み、体部外面へのナデもほとんど失われているものの2つの特徴をしめす。74は口縁部のナデ調整が失われ、端部のつまみ上げもみられないが、その他の特徴はいわゆるへそ皿と共通しており、その系列の末端に位置づけられる可能性がある。80は最も京都の特徴に忠実、75は次に京都の特徴をもつが在地、その他はいずれも在地系の京都型皿である。

④ 3 B 池 1

106・108・116・119は鐏鉢である。108は瓦質焼成によるもので内面に横方向の磨きが施されている。平らな底部から直線的な体部が立ち上がり、口縁部はやや内側に寄る形で丸みをもって仕上げられている。106は備前窯、116は瀬戸・美濃窯、119は丹波窯である。口縁部内面に浅い段が、端面には浅い凹線がみられる。

99・104は瀬戸・美濃窯製品である。104の天目碗は褐色の強い鉛釉が施され、露胎部には鉄化粧がない。99は灰釉皿である。口縁部を外反させ底部際と高台を露胎としている。釉は暗黄緑色を呈する。

101・105は肥前系陶器である。105は片口の鉢であり暗灰褐色を呈する器壁に丸紋が描かれている。

114は備前窯、110は肥前系陶器壺である外面全体と胴部内面に灰緑色の釉が施されている。

111～113・115は土師器皿である。

111は底部が突出したいわゆるへそ皿形態を呈する。112は直径の小さな底部から体部が屈曲気味にのびるもので、内面のナデ調整により底部際に凹線状の痕跡が残る。共に外面のナデは口縁端部のみである。

113・115は広い底部と短い体部から構成される。115の体部は断面が紡錘形を呈し、口縁部内面が外折する形で仕上げられている。また口縁端部にはつまみ上げの痕跡がみられる。なお共に口縁部外面のナデは体部中位まで施されている。

100は瀬戸・美濃窯志野の向付、102は瀬戸・美濃窯黄瀬戸の向付である。

109は大和型土師器土釜、107は土師器焙烙である。

なおこの遺構からは、他に金属製品としては鉄鍋の体部と底部（金属186・187）が、木製品として、

漆器碗各種、漆塗箸、漆塗曲物、漆塗蓋、人面、刷毛、下駄各種（歯を釘で補修したもの、組下駄、先端に歯を釘で付けたもの、足形の残る漆下駄、1分割3.08cmで10目盛り記された尺（木製品123）、造作などの記号を残した材（木製品109）、および墨書を記した資料も多数出土している。

⑤ 1 A 土坑296

165は瀬戸・美濃窯灰釉皿である。胎土は緻密で釉調は暗い緑色を呈する。碁箱底であり、底部外面以外は釉が施されている。166は瀬戸・美濃窯灰釉皿である。口縁部内面の2箇所に青緑の釉が溜まる。そのほかの釉は黄瀬戸釉に似る。体部下半はヘラケズリによって稜を削りだしている。

169は中国製染付磁器碗である。底部内面に「尚」、体部外面に「信」「忠」「弟」ともう1字を描く。釉は厚く。コバルトの発色はにぶい。

172は瀬戸・美濃窯胎釉の天目碗である。体部下半は鉄化粧をほどこす。

180は肥前系陶器杯である。高台とその周辺以外を淡灰色の釉で覆う。高台は三日月高台で薄く低い。

⑥ 2 C 土坑53

下層の炭層を中心として土器・陶磁器類・木製品・瓦などが30コンテナ程度出土した。

186・190は陶器皿であり、186は肥前系、190は瀬戸・美濃窯の製品である。共に胎土は緻密であり、186は褐色、190は灰色の胎土に黄褐色の釉が施される。186は緑色の灰釉である。

187は肥前系陶器杯である。胎土は褐色を呈し、緑色の灰釉が施される。

188は瀬戸・美濃窯小碗である。胎土はやや粗く灰色を呈し、灰白色の釉が施される。志野。

191・194は肥前系陶器碗である。191は紫黒色の釉が施され、194には厚い緑色の灰釉が施される。

192は肥前系陶器香炉である。高台は半月形に削られる。胎土は緻密で淡灰色を呈し、釉は底部を除く外面に施される。色調は濃い緑色である。

193は丹波窯の盤である。高台が付き歪みにより、復原では底部がやや突出する。胎土は細密で色調は暗褐色を呈し、暗赤灰色の降灰釉が残る。

195は備前窯播鉢である。播り目は6～8本を単位として縦方向と斜め方向に施され、内面の一部に黒色の残滓？が付着している。

196は瀬戸・美濃窯黄瀬戸向付である。淡褐色の緻密な胎土で、薄い黄色釉が施される。

197・198・199は土師器皿である。199は口縁端部に煤が付着する。口縁部外面のナデは、197が端部のみであるほかは約1cmの幅をもつ。

201は肥前系陶器鉢である。胎土は灰褐色で釉は灰緑色の灰釉である。内底面の一部に釉が届いていない。

202は肥前系陶器壺である。釉は外面と内面の肩部裏側までおよぶ。色調は紫灰色に発色し、内面には同心円文の当て具痕が残る。胎土は緻密である。

203は信楽窯の水指であり、長石の噴出が著しい。

204・205は土師器壺である。共に外面に平行条線の叩きが施されている。204は肩部であり、叩きは右下がりに施され、頸部はナデ消している。

206は土師器大和型釜である。強く外折した後内折して端部をつくりだす口縁部を特徴とする。胎土は精良で色調は明褐色である。

⑦ 4 A 土坑168

219・221・223・224は肥前系陶器である。

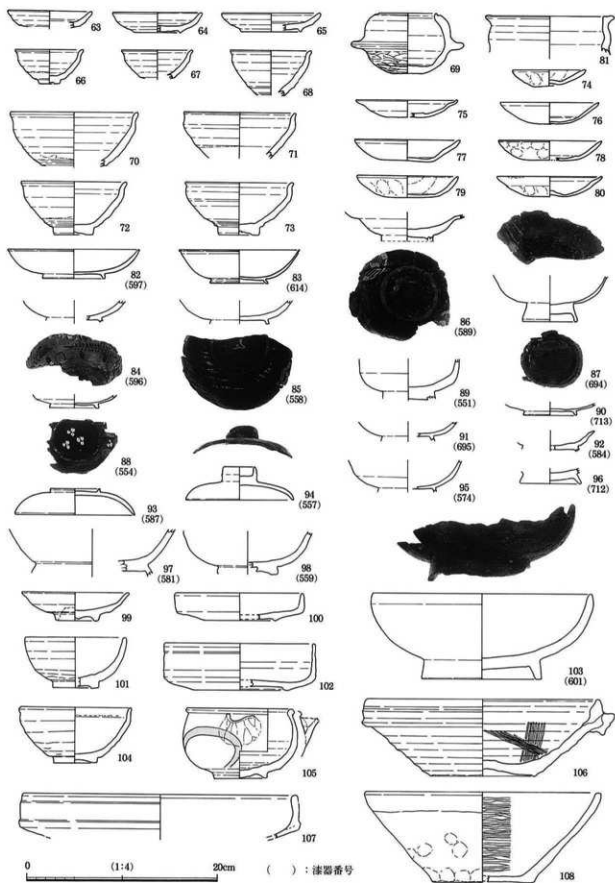


図194 漆器・陶磁器・土器 3

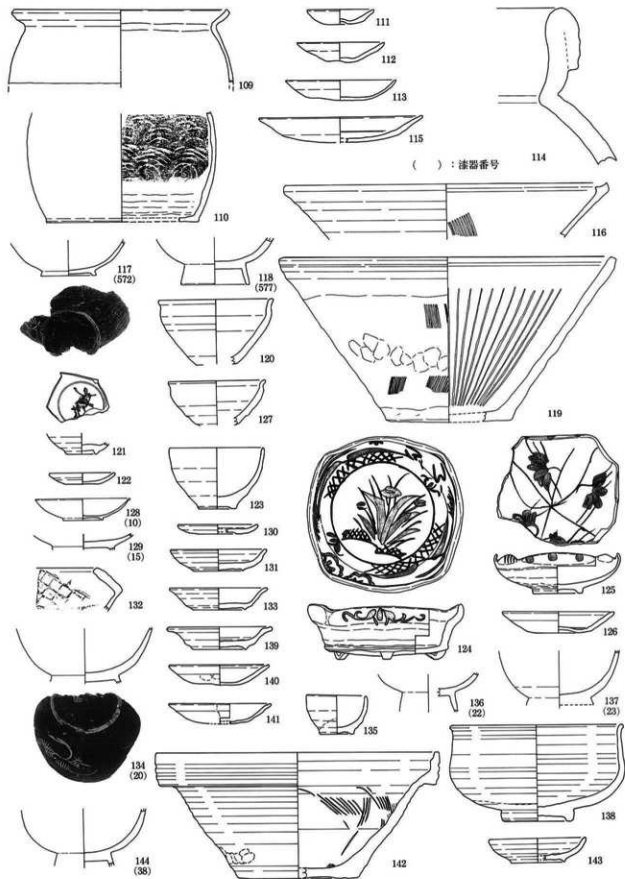


图195 漆器·陶磁器·土器4

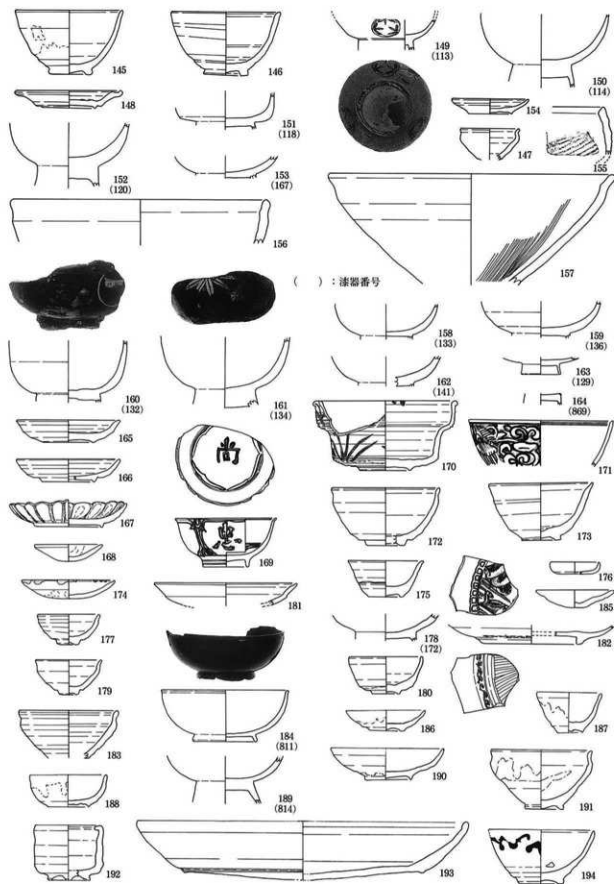


図196 漆器・陶磁器・土器 5

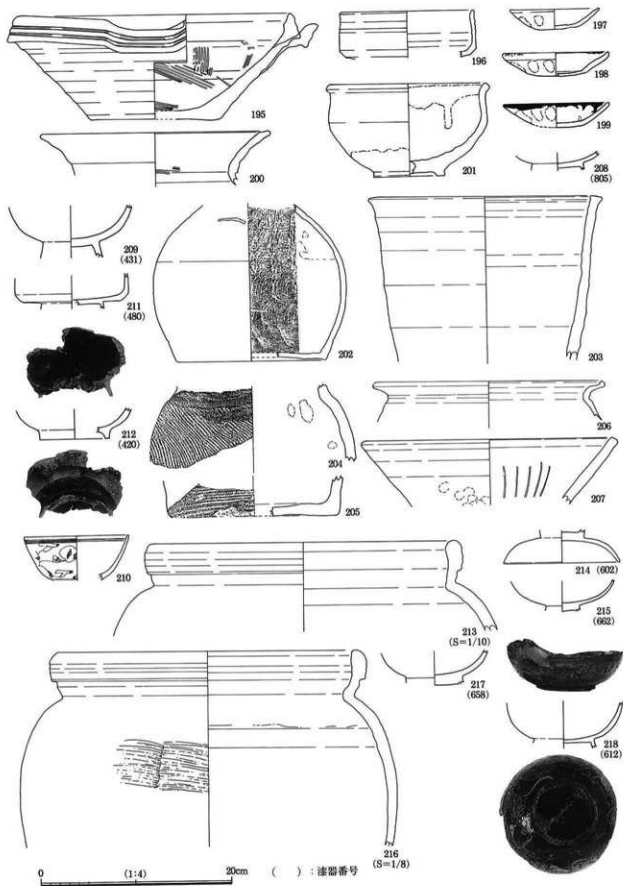


图197 漆器·陶磁器·土器6

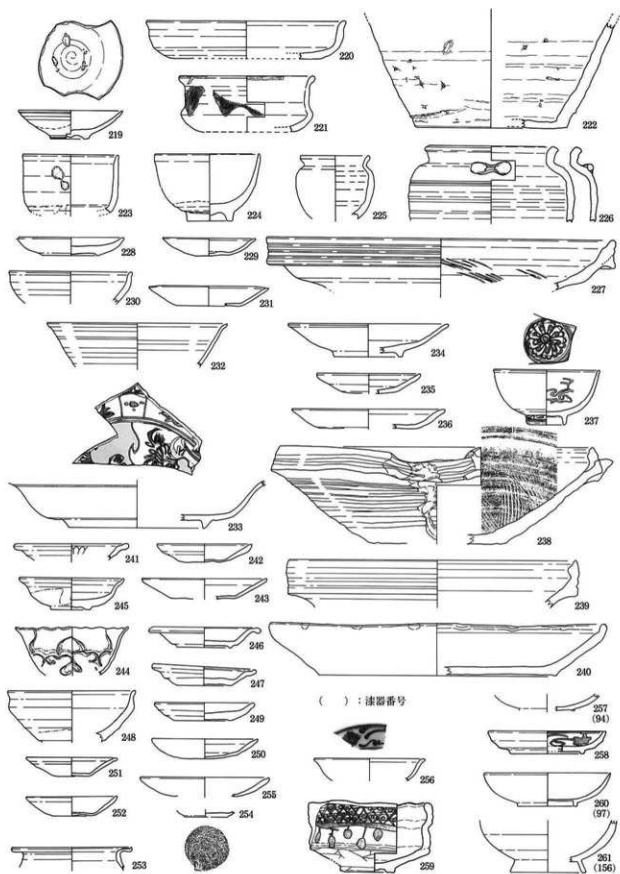


図198 漆器・陶磁器・土器 7

219は胎土目の皿であり一部に貫入のみられる灰色の釉が施されている。221は灰黄緑色の釉に鉄で文様を描いた向付である。223は鉄釉の筒型向付である。224は三日月高台で暗灰緑色釉が施されている。

225～227は備前窯製品である。225は小壺であり、内面に赤色顔料が付着している。226はいわゆる種壺形を呈し形骸化した耳が3カ所に付く。被熱の痕跡がみられる。227は搦鉢である。内面の段が鈍いのと対象的に外面の下端の突出が目立っている。

220は陶器皿形である。被熱が著しいため、全面施釉の痕跡は認められるものの、釉調は不明で、胎

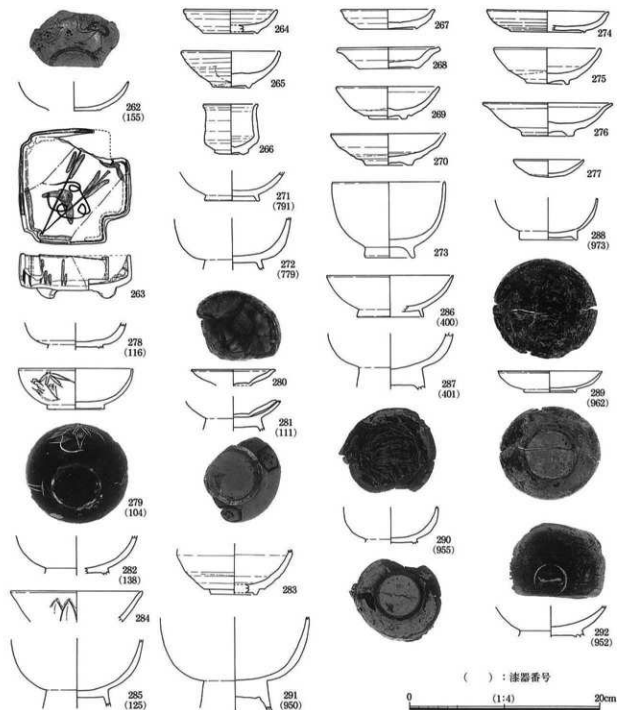


図199 漆器・陶磁器・土器 8

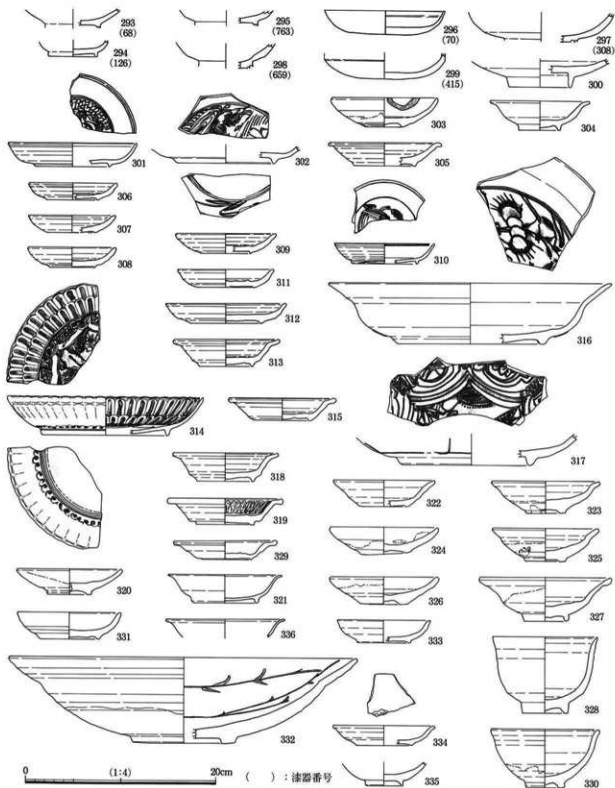


図200 漆器・陶磁器・土器(包含層) 9

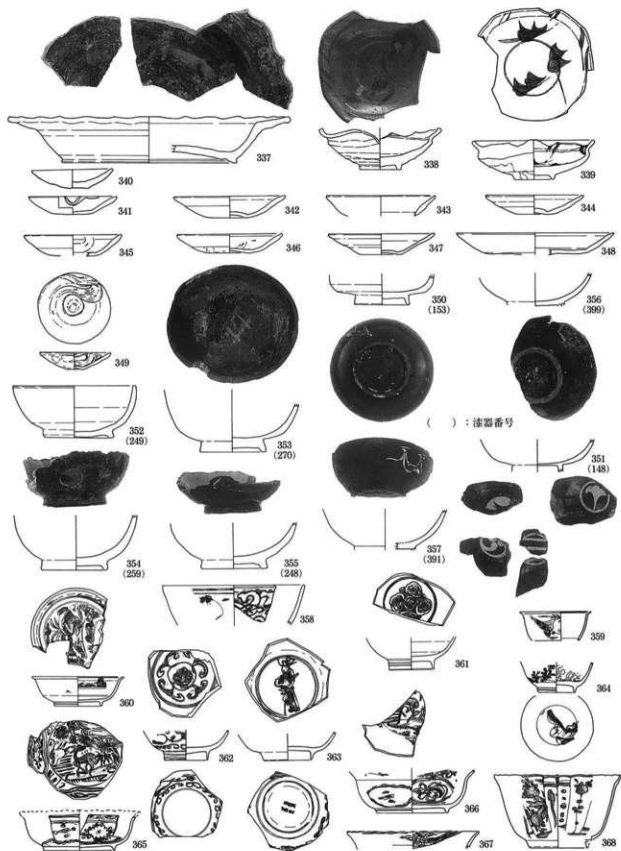


图201 漆器·陶磁器·土器(包含層) 10

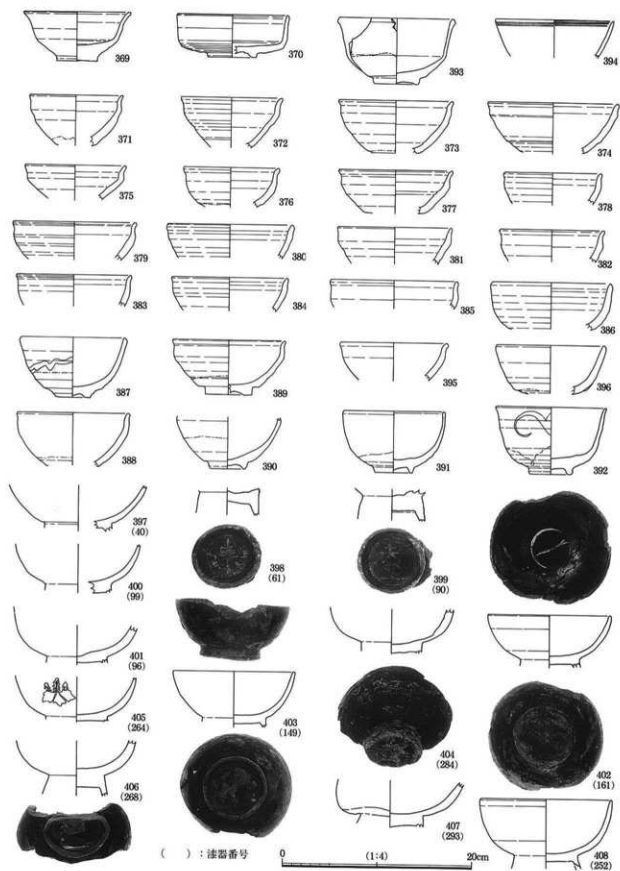


图202 漆器・陶磁器・土器（包含層）11

土も酸化により土師質化している。

㊦ 5 A 土坑302

228・230は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿と天目碗である。229・231は土師器皿で、229の口縁部にはつまみあげが施され、231の外面のナデは体部上半におよぶ。

232は白磁碗で体部外面の凹凸が著しい。233は中国製染付皿で高台内面に粗い砂を多く付着させている。

㊦ 5 A 土坑324

234は白磁皿で内面と高台に重ね焼きの痕跡が残る。

235・236は土師器皿である。235の口縁端部は内傾しており、外面には端部のみナデ調整が施される。236は端部のつまみあげは無いがナデは外面の体部上半にみえる。

237は中国製染付磁器碗で内面は型押しである。238は備前窯の製品である。

㊦ 5 A 土坑404

241・246は瀬戸・美濃窯灰釉皿、242・243は土師器皿で243には灯芯の痕跡が残る。共に外面のナデ

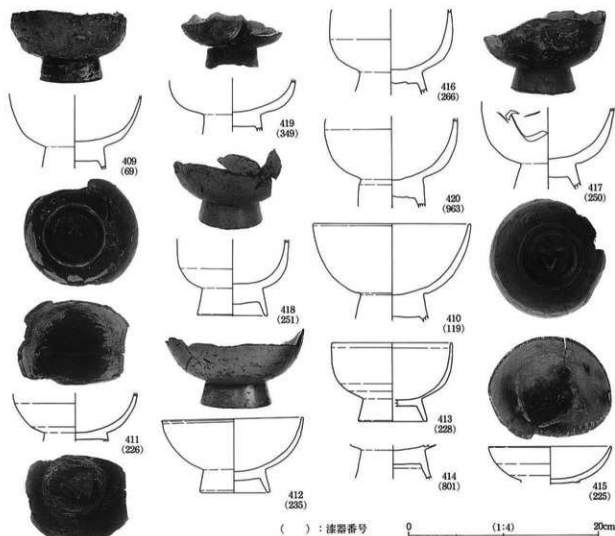


図203 漆器・陶磁器・土器(包含層) 12

は口縁部際にみられる。244は白磁碗である。

① 5 A 土坑408

245は肥前系陶器皿であり、暗緑色の灰釉が施される。

② 5 A 土坑413

247～249は瀬戸・美濃窯灰釉皿と天目碗であり、249は全面施釉、247は底部内面中央部のみ無釉となっている。

250～252・254は土師器皿であり、254はロクロ成形である。いずれも口縁端部のつまみ上げは無く、外面のナデも端部のみとなっている。253は大和形土師器釜である。255は土師器灯明皿であり、摩滅が著しいが端部につまみあげの痕跡が残る。

③ 1 A 屋敷3

263は瀬戸・美濃窯織部向付である。凸形の平面形の2隅に緑釉をほどこし、その中間部分に鉄絵で草花文?を描いている。内面3カ所にトチンを残す。

264は瀬戸・美濃窯灰釉丸皿である。底部内面に輪トチンを残し、ガラス質の透明釉が全面に施されている。

266は肥前系陶器坏である。口縁部に向かって僅かに径を縮小させる筒形を呈し、口縁部は外折して丸みをもって仕上げられている。胎土は橙色で釉は薄い灰白色である。完形。

④ 2 D 堀1

276・274・277は堀1埋土の6 b 層出土である。276は唐津系陶器皿である。白濁色の釉が施され、砂

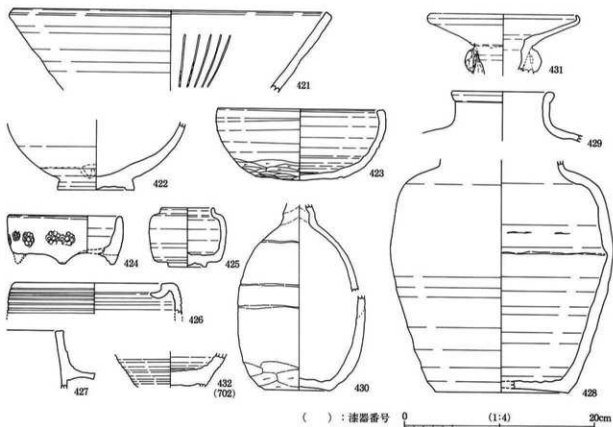


図204 漆器・陶磁器・土器（包含層）13

目積みの目跡が内面に3箇所残る。274は瀬戸・美濃窯志野丸皿である。長石軸が厚く施され、全面施釉である。275は肥前系陶器皿で軸は深灰緑を呈し、底部内面の周縁に段をもつ。

277は土師器皿であり、外面のなで調整は口縁端部のみに施されている。

⑨包含層ほか

中国製染付磁器は福建・広東系または漳州窯系と呼ばれる一群と景德鎮窯系の製品に分けられ、前者は316・468・471・501・511であり、碗には、唐草文および動物、植物文がみえる。

皿には芙蓉手、鳳凰文などがみられ、634~640はいわゆる呉須赤絵であり、被熱が著しい。

一方景德鎮窯系の製品では(314・360~363・365・366・368・608~629)、314は型押し輪花皿、361は銭文、363は唐人物、608は海馬文、610は竹に虎、611はねじ花、616は外面に折れ枝で内面に山水の雲を配した皿、617と618は、碁笥底で外面に瑠璃釉を施した製品、619は宝文様、620は「玉堂佳器」銘がみられる。

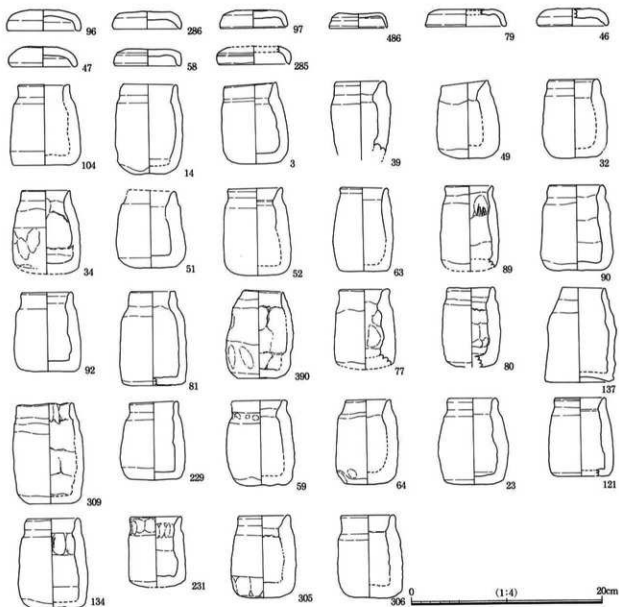


図205 焼塩壺

336は中国製の白磁燂反皿である。

337は華南三彩の盤である。底部外面を含めた全面に黄緑～明緑色の釉が薄く施されている。胎土はやや砂質系であるが精良で、断面が黄灰色を呈するものの還元焰により焼成されており、緑釉の剝離面からみえる器壁は灰色を呈する。内面に線描きとスタンプで草花文が描かれている。高台は削り出しによる。

341は土師器皿で口縁部に煤が付着している。また一部を注口状に成形し、とくに煤の付着が著しい。

347・348は土師器皿で共に灯芯の跡が残る。348の口縁部内面には平坦面が形成される。349はへそ皿の最末期であろう。

369は白磁坏である。胎土は灰色で、釉も灰色を呈し、平高台の部分を除く全面に粗く施される。

428は信楽窯または肥前系陶器壺である。外面は灰色の釉が厚く覆い、内面には長石の噴出が散見できる。釉調は肥前系陶器の灰釉に似るが、内面の叩きは見られず、一方信楽窯製品で器壁を透さないほどの釉色も寡聞にして知らない。

453・500は青磁碗である。いずれも底部内面に印花を施す。

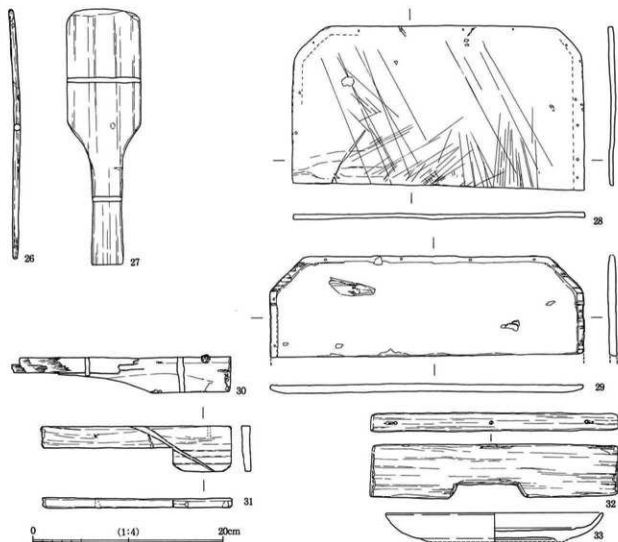


図206 木製品1

495・496は瀬戸・美濃窯織部鉄釉水滴である。兎と思われる動物を模しており、頭部と尾部に織部を、胴部に鉛釉を施している。

521は壺である。緑灰色の厚い釉の下に唐草紋様が彫り込まれている。

516は香炉である。比較的粗い胎土で灰色の釉が不均一に内外面全体を覆う。また畳付き部には砂が付着している。

なお、622・265はいわゆる饅頭心の系列にある碗で、623・624は基筒底の皿、626は十字花文系の皿である。

586・587は肥前系陶器播鉢である。口縁部外面に鉄釉が施される。播り目の単位は8条みえる。

590は肥前系陶器壺と考える。外面に薄い灰色釉がのこり、内面に当て具痕はみられない。色調は褐色である。

591は肥前系または朝鮮系陶器壺である。外面には濃い緑色の釉が施され、内面には当て具痕が残る。

642は白磁の水滴である。頭部を欠損するため断定はできないが、牛などの動物を模したものである。

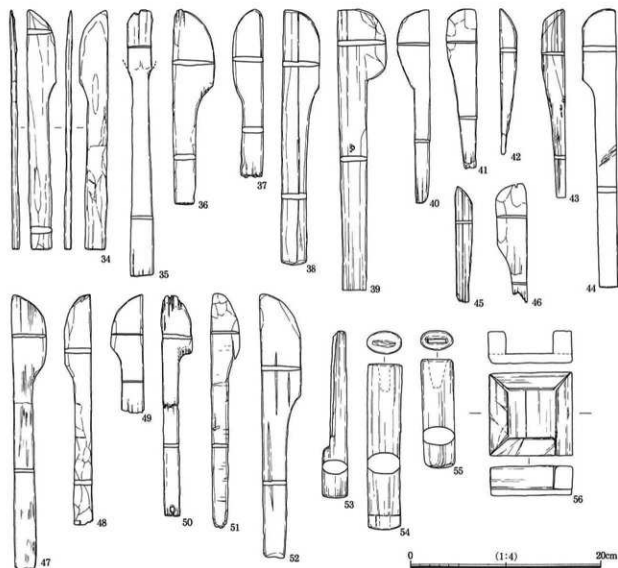


図207 木製品2

また627~629は中国製染付磁器で瓶子形の製品である。

667は備前窯盤である。基筒底で体部外面はヘラ削りによって成形している。内面はナデにより、口縁部以外の体部内面には漆が附着している。

668は黒色土器A類坏である。いわゆる河内の胎土をもち、内面に細かな磨きが施される。低い高台をもち、10世紀中頃に比定される。

670は瀬戸・美濃窯鉄釉茶入れと考える。糸切りの残る底部から紡錘形の体部が立ち上がる。体部下半から底部外面には鉄化粧が施される。内面も全面施釉である。また体部外面には輪花状に6条の分割沈線が描かれる。

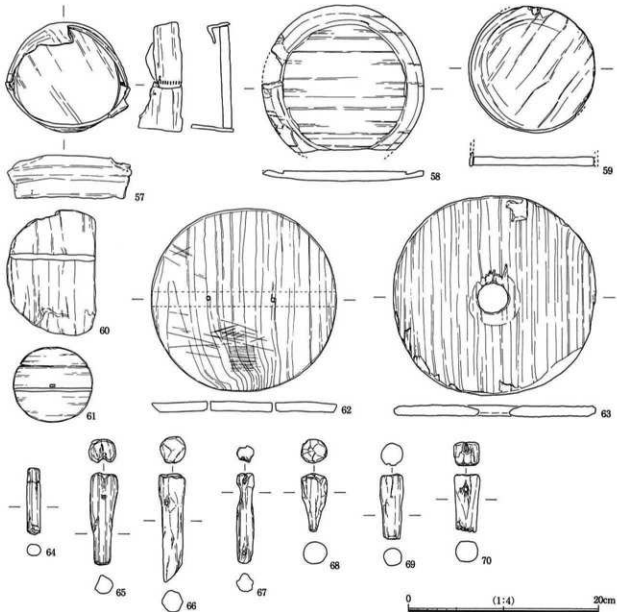


図208 木製品3

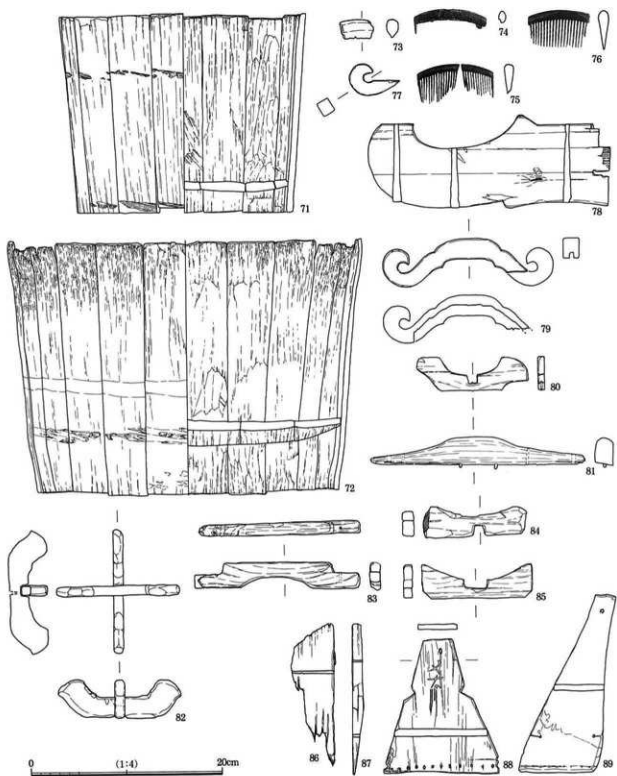


图209 木製品4

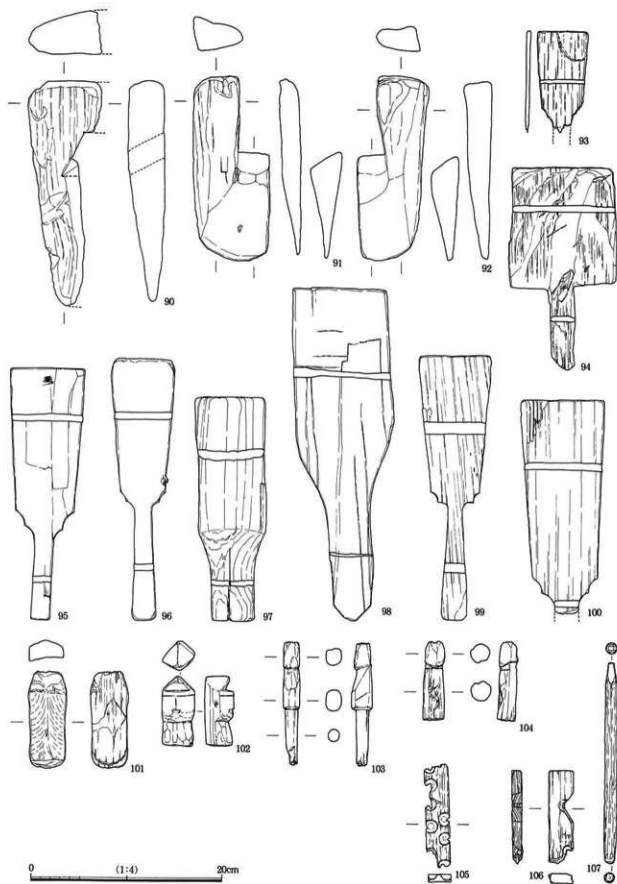


図210 木製品5

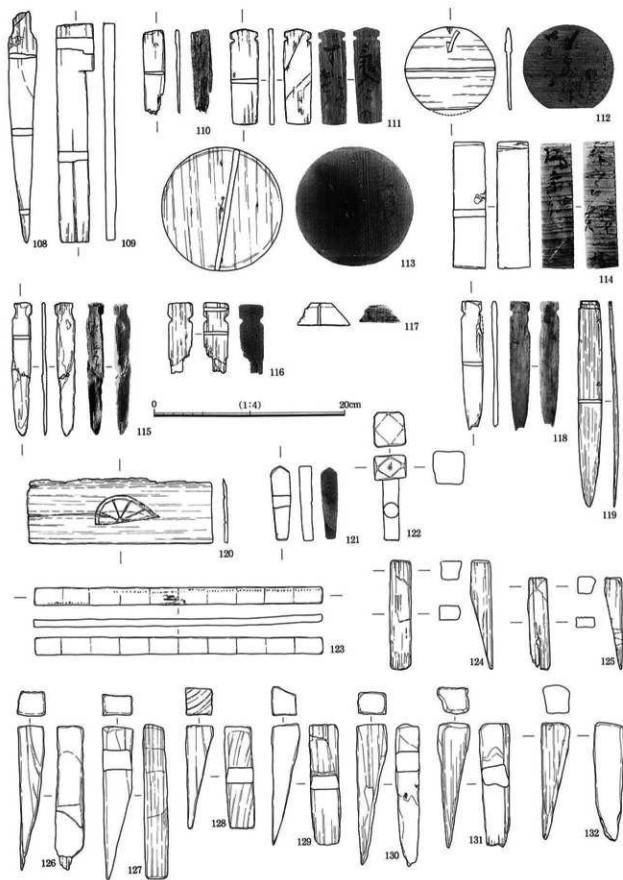


图211 木製品 6

b、木製品

種類は羽子板、発火具、曲物（蓋）、柿経、櫛、鋏、刷毛、杓子、人形、栓、膳、灯火具、縄、篋、榎、箆などおよび、荷札をはじめとする各種墨書資料である。

26は箸、27・35杓子である。26は漆製品であり、色調は黒色を呈する。また両端ともに漆は剝離している。27は身の先端に両面からの削りと使用によると思われるつぶれがみられる。杓子の可能性が高い。35は身の両側が欠損している。

28・29は縁の付く膳であり、29は外面に黒色漆が、内面に褐色の漆が残る。また28は表面に多数の沈線がみられる。縁は共に木または竹釘により接合されている。

30～32は膳の脚である。30・31は端部を欠損する。30は上面に釘による錆が残り、31・32にはその孔が観察できる。

33は漆器の大皿である。黒色漆を施し、内面に赤色漆で文様を描いている。また内面の一部と高台内に焼けた痕跡がみられる。

34・36～52は篋である。基本的には両面から削りだし、さらに先端を尖らせて、その部分での作業を意図したものと、側面のみ削りだしで、先端を利用した用途の考えられないものの2種類がみられる。

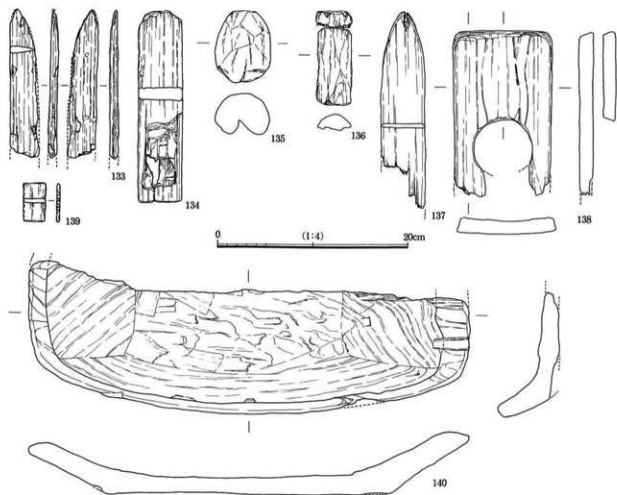


図212 木製品 7

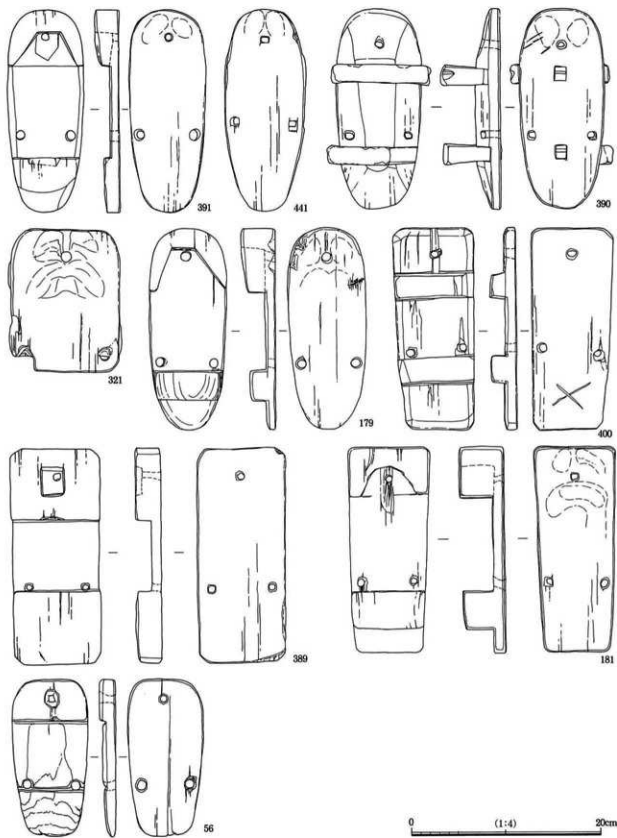


图213 下駄

40は断面がほとんど長方形に近く、刃部の削りだしは少ない。41は側面より先端に面を持ち刃部を丁寧な作り出している。42は磨耗が著しい。43は側面の削りだしがほとんどみられず、斜めにカットした先端に刃部を作り出している。44は刃部を顕著に作り出しておらず、断面は方形を呈する。ただし先端の彎曲部には磨減がみられる。45は顕著な刃部はみられないが磨耗は激しい。46は側面と先端を共に刃部として削りだす。49は著しく薄く、刃部は側面のみである。52は側面にも刃部をつくっているが、先端が多くの使用痕跡を残す。

53～55は柄であり、いずれも木製の刀身の痕跡を残す。

56は釘で接合された方形の組み物であるが、性格は不明である。

57～63は曲物および蓋類である。58は漆製品であり、裏面の段部分を除き黒色漆が施されている。59・60は底板、61・62は蓋板と考える。59は底の表面に薄く漆が残っており、また外周との接合に用いた木製または竹釘が一部残る。61は中心部に樹皮を下降したつまみの一部が残る。63は中心部に直径3cmの孔をもっており、さらにその周辺が磨耗している。

64は人形と考える。一端の近くには切り込みによるくびれをもち、さらにその直下に未通道の小孔を穿つ。

65～70は栓と考える。71・72は桶であり、72は図化されていないが、タガは共に2段である。なお底板の位置は現位置を保っていない。

77～79は家具または建築部材の一部と考えられ、77と79は接合して完成品になる。漆製品である。

80は蓋の把手、83は組み合わせ式の台または脚と考えられ、80・82・84・85は組み合わせ式の灯明台である。

86～89は篋および刷毛であり、86・87共に漆が付着して86は柄が87は身のほとんどを欠損している。

88は薄い漆が表面に塗られており、柄部分に線刻の文字が描かれ、身の先端近くには連続する小孔に平行して糸で締めた痕跡がのこる。共に1枚板を割って刷毛先を挟み込んでいる。89は身の大半に漆が付着している。刷毛先の固定は基本的に糸綴じて一部に補強の木または竹釘が用いられている。また身の中位にも同様な目的で使用された小孔がみられる。

90～92は縦に二分割された鎌先状の木製品である。

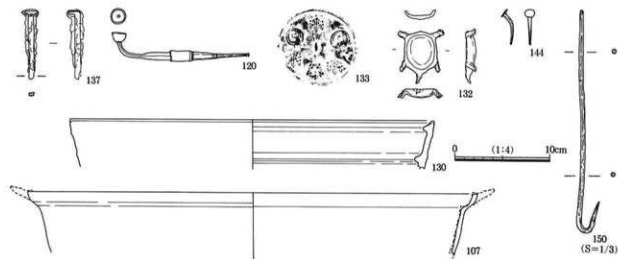


図214 金属製品 1

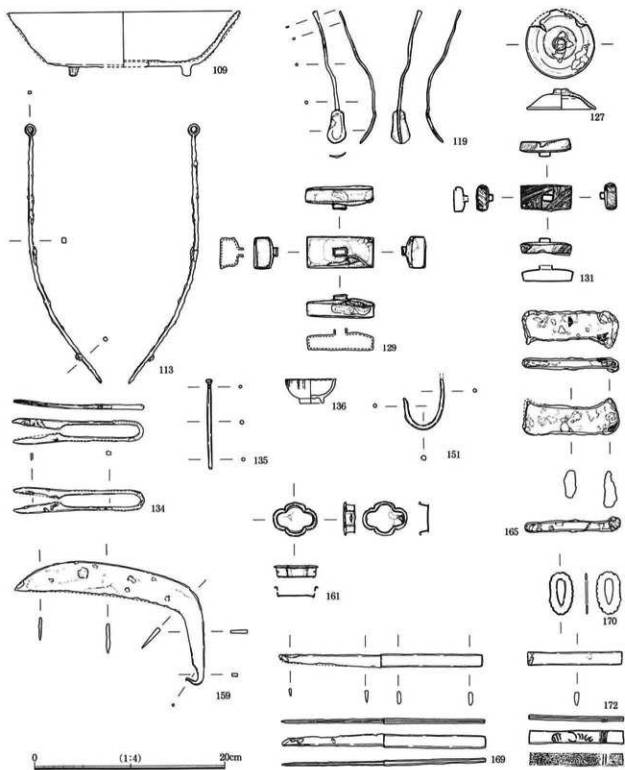


图215 金属制品 2

93～100は羽子板または羽子板状木製品である。93は柄を欠損している。身の両側下端に2段の列りこみをおこなう。また身の先端の一方が削られている。94の身は正方形に近い形を呈している。断面は左右の端部が共通せず、一方のみ丸みが強い。95は身の先端に墨書を残す。下端から柄にかけて2段の列りこみをおこなう。96は細身の形態を呈する。柄は端部にむかってわずかに幅を広げる。

97は身幅のとくに広い形態を呈する。断面はわずかに彎曲し、柄部分はさらに厚みを減じている。手桶の柄部分の可能性はある。

98は長方形の身から直線的に斜めに柄につながる。断面は柄にむかって薄くなる。

99は身の下端に2段の列りこみをもつ。柄は端部に向かって幅広くなり端部は丸みを持って成形される。100も同様であるが柄を欠損する。表面に打痕をみせる。

106・105は火鑽白、107は火鑽杵である。白は焦げ痕の残る直径1.0cm、深さ0.9cm程の穴が1cm以下の間隔でみられる。杵は先端が断面四角形に削りだされ、下端には焦げ痕が残る。軸の最大径は1.2cmである。

108・119は荷札形、109は切り込みをもった木製品である。

122は漆塗り木製品である。円筒部分は木地のままであるが、立方体の部分は菱形面が黒色漆、それ以外の面が赤色漆である。また中央に貫通孔をもつ。性格は不明である。

123は3.1cmを単位とする全長30.25cmで横線により10等分され、さらに列点により10に細分される。

124～132は楔状木製品である。規模はほぼ共通し、かならず1面が斜めに切り落とされている。

133は片刃の刀形である。背は断面形が丸みを帯びて仕上げられている。

134は一部に方形の袂りをもつもの、135は毬状、136は人形状、137は卒塔婆の下端に似る形態を示す。

138は断面が弧を描き、樽の一部である可能性も考えられる。

140は大形の鉢状木製品である。高台は無く、白木で隅丸方形を呈し浅く広がった断面をもつ。

c、金属製品

金属107・130は鉄鍋である。107は受け口状になっており、底部に向け緩やかなカーブを描く。130は口縁部から底部に向け真直ぐすばまり、内面に2条の突帯を巡らせる。

金属109は鉄製の鉢である。内面は酸化土砂の付着、外面は剝落が著しく遺存状況は良くない。底部には多角柱状の足がつき、その位置関係から3足あったものと考えられる。

金属113は金箸である。全体的に錆跡が著しい。錆の状況から鍛造品と考えられる。円環を呈する頭部と断面方形を呈する本体部からなる。頭部は本体の頭部側を約4cmほど鍛打し、やや薄い板状にしたものを円形に曲げて作り出している。

金属119は銅製の匙である。全体的に捻れが著しい。匙部分は僅かな括れがあり、先端部は丸く収められる。深さはそれ程無く僅かに彎曲している程度である。柄部分は頭部から1/4が扁平に、残りが丸く作られている。柄が丸くなり始める付近に5条の細線を刻んでいる。

金属120は真鍮製の煙管である。羅字がみられず吸い口に直接雁首を挿入した形で出土した。

金属127は銅製の蓋である。口縁部に大きな欠損部が認められ、その影響によってひび割れ、ひずみが生じている。また、摘み部には酸化土砂の付着が著しく形状がはっきりしない。内面には炭化物状の黒色付着物がほぼ全面に見られる。

金属129・131は鋼製の水滴である。129は上面から側面にかけて大きな凹みがみられる。底板以外の部分は注水部も含めて1枚の薄い鋼板を折り曲げて製作されている。出水部は内面側から穿孔している。131も129と同様な製作方法が取られているが注水部は別作りとなっており、後から本体に接合している。131の本体部には長軸に対して平行・直行・斜方向の3パターンの研磨が施され研ぎ分けによる文様効果を得ようとしたものと思われる。

金属132は亀形青銅製品である。甲羅を蓋とした容器の身にあたる。頭部を欠損し、身内部には腐食した植物遺体が付着する。

金属134は鉄である。刃こぼれが著しい。両面の刃部の付け根付近にそれぞれ「大」「道?」といった文字が細い線で印刻されている。

金属135は鋼製の簪であろう。頭部は円盤状を呈し、本体部分は断面円形を呈する棒状である。頭部直下に4条の非常に浅い沈線が走る。

金属136は鋼製の小椀である。口縁端部に28箇所以上の刻み目を入れ、それから垂下するように体部外面に沈線状の細線を施す。但し、緑青などの影響によって外面が荒れていることもあり明確な本数は確認できない。紅皿のようなものであろうか。

金属137は鉄製の釘である。断面方形を呈し、頭部を「L」字状に曲げて作る。先端部は欠損している。

金属144は鋼製の釘である。頭部から1cmのところで屈曲する。頭部は丸く作られている。

金属150・151は吊り具である。150は鉤状部分の先端を鋭く仕上げている。151は鋼製の鋳造品であろう。鉤状の先端は丸く収められる。

金属159は鎌である。刃部は緩やかに内彎する。柄の末端は鉤状になっている。また、柄には目釘孔が存在しないことから木製の柄に挟み込み、紐などで固定して使用したものと考えられる。

金属161は鋼製品である。平面花菱形を呈する。長軸方向の左右両側に目釘孔状の小孔(孔径0.2cm)が穿たれている。長軸方向の側面下端に作り出された2箇所ツメで底板を挟み込んで製作されている。性格は明確ではないが襖などの引き手であろうか。

金属165は「鎧形」の火打ち金である。全体的に錆が著しい。一方の打ち込み部を欠損している。

金属169は銅柄付き小柄である。刃部の欠損著しい。柄は1側面を平坦に、他面をやや丸みを持たせて作成される。

金属170は鋼製の切羽である。周囲は輪花状に作られる。

金属172は鋼製の小柄の柄である。1側面の基部側には2本の幅0.2cmの突線が陽鋳され、中央部には弧状を呈するものや短突線が陽鋳される。後者の模様は明瞭ではない。

金属176は鋼製の懸け仏である。両手を体部前面右肩下の位置で組む。印の形は不明。脇腹や左膝あたりで衣類の襷状のものが細い線で陰刻される。顔は目が細い線で陰刻され、鼻は三角形に僅かに隆起する。口は表現されていない。蓮華座は仏から見て右側部分が剝落する。蓮弁は2条の細い線で陰刻されており、5弁あったものと推定される。また、蓮華座の下端には2条の細い線が走っている。なお、仏腹部の表面には取り付け用の突起(幅0.2・長さ0.6・高さ0.9cm)が作り出されている。

金属177(銭537)は慶長丁銀である。表面に大黒像と「寶常是」の極印がうたれ、半分以上が切り遣いされている。また周縁部にも切り遣いの痕跡がみられる。現存で長さ3.9cm、幅3.9cm、厚さ3mmを測る。

室町時代末期以降、関西では灰吹銀が用いられていたが、品位がまちまちで取引に不便なため、徳川氏が慶長6年(1601)に「常是」をうった丁銀に統一した。丁銀は初期には切り遣いされていたが、元

和期以降は切り違いされなくなった。元の形はなまこ形で、量目は一定でなく30~50匁くらいある。慶長丁銀は銀の純成分が80%で、最も純度の高いものとされる。

金属371は碗形滓である。

金属372は鉄製の柄付き皿である。柄と皿が一体成形された鋳造品。皿部分は平面正円形を呈し、内面の口縁部直下に幅0.2cmの浅い沈線が1条巡る。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられている。また、底部外面には幅0.2cm・高さ0.2cmの高台状の突線が1条巡る。柄部分には酸化土砂や炭化物の付着が著しく、形態が判然としない。他の類例から考えると断面は蒲鉾形を呈し、長さ2cm弱のものが想定される。

d、羽口

羽口には1・10・93などのように器壁の厚い一群と87のように薄い一群がある。また、形態的にも基部から先端部にかけて真っ直ぐ伸びる円柱状を呈する1・93と先端部から基部にかけて「ハ」の字状に開く10・87の2種がある。概して前者のほうが通風孔径が1cmほど大きい傾向が窺える。1・10・93の胎土には長石・石英などを多く含み。粗いものが使われ、87は長石・石英が含まれるが、精良なものが使用される。

羽口1は炉内に突出した部分でガラス質になった滓が付着する。先端下部には滓の剥がれた痕跡が観察でき、上部には炉壁材とそれに付着するガラス質滓が立ち上がる。外面は丁寧なナデ調整が施される。通風孔径が3.5cmと大きく、鍛冶用の羽口と思われる。挿入角度は15度である。

羽口10は炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位である。先端ほぼ全面にガラス質状の滓が付着し、下端には分厚い碗形滓が形成される。この滓が通風孔を塞ぐことになり廃棄されたものである。外面は丁寧なナデ調整が施される。鍛冶用の羽口であろう。挿入角度は11度である。

羽口76は先端部の破片である。ガラス質状の付着が観察できる。通風孔径の大きさから鋳造用かと考えられる。

羽口87は小型の羽口で先端にガラス質になった滓が薄く付着する。外面は強いナデ調整が施され、面取り状になっている。鍛冶用の羽口であろう。

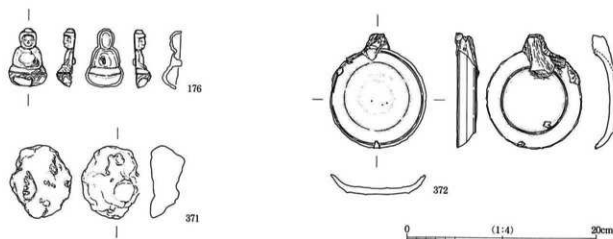


図216 金属製品3

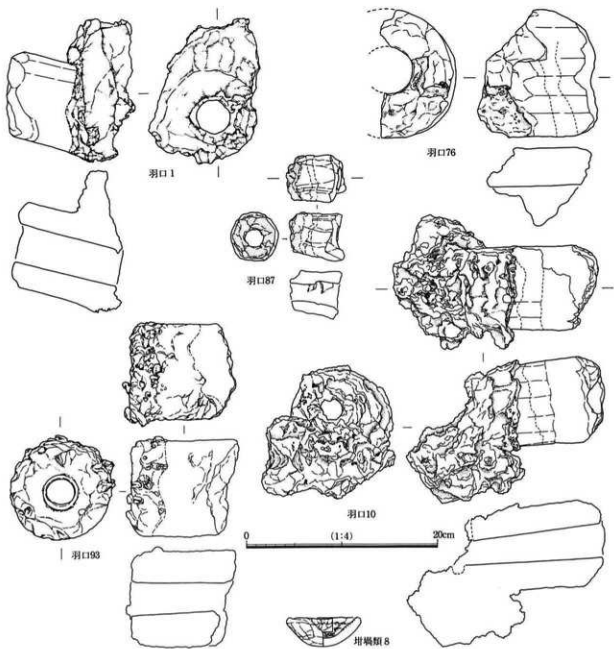


图217 羽口・埴輪類

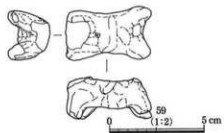


图218 土人形

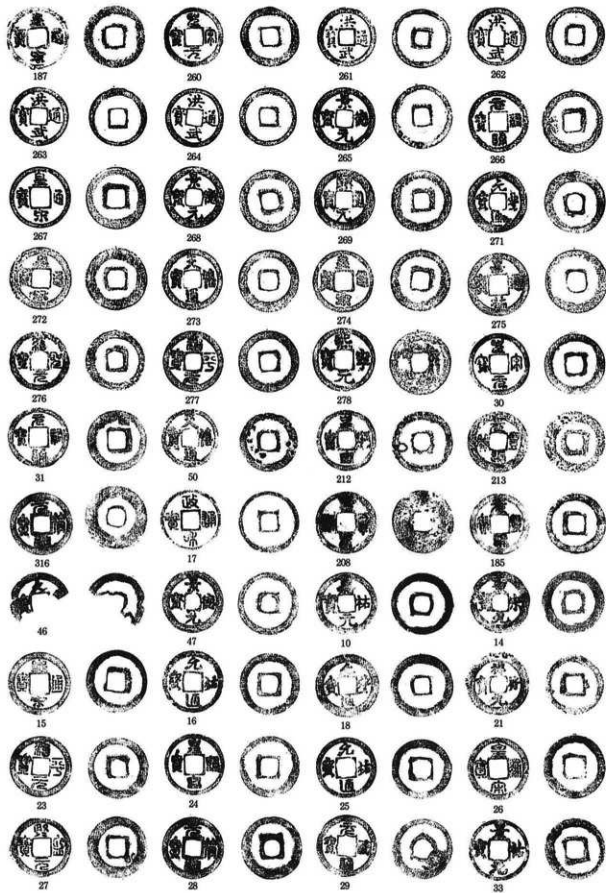


图219 銭1

羽口93は炉壁に据えられた部分から炉内に突出した先端部にかけての部位である。先端にはガラス質状の滓が付着する。76・93共に外面には丁寧なナデ調整が施される。通風孔の大きさから鋳造用かと考えられる。

e、埴埴類

埴埴類8は2 B井戸2出土である。手捏ねにより半球形の断面をつくりだしている。内面にガラス化した滓が部分的に付着している。酸化色は褐色である。口縁部的一端に幅1.2cmの注口をつくりだし、その部分が融解金属と滓で埋まっている。

f、土人形

土人形56は手捏ねによる四足獣である。胎土は細密で色調は灰褐色を呈する。頭部を欠損しているが、類例により犬の可能性が高い。

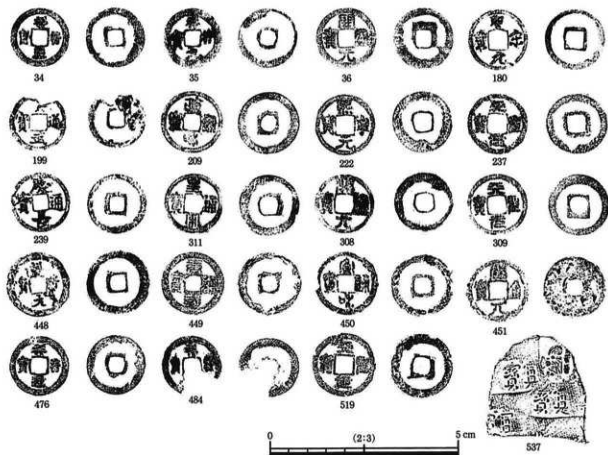


図220 銭2